

聖徳大学博士（日本文化）学位請求論文

現代日本漢語の漢字音

A Study on Modern Japanese *Kanji-on* (漢字音)

館野 由香理

2016

目 次

第1章 現代日本漢語の漢字音

第1節	中国語中古音と日本漢字音	1
	(1) 日本漢字音の特徴	1
	(2) 中国語の中古音	3
	(3) 日本漢字音の重層性	6
第2節	現代日本漢語の漢字音	14
	(1) 現代日本語の漢語	14
	(2) 現代日本漢語の漢字音	14
	(3) 日本漢字音の重層性と混合状態	15
	(4) 漢語の音と漢字の音	17
第3節	現代日本漢字音研究の意義	19
	(1) 日本漢字音研究略史	19
	(2) 現代日本漢字音研究の意義	22

第2章 研究の方法と対象

第1節	研究の視点と方法	25
第2節	研究の対象とする字種の範囲	27
	(1) 調査と考察の範囲	27
	(2) 常用漢字表と表外漢字字体表	27
第3節	調査資料	30
第4節	調査資料の漢語と漢字音	32
	(1) 現代漢和辞典の漢語	32
	(2) 現代漢和辞典の漢字音	32

第3章 唇内入声音の促音化について

第1節	中国語中古音における入声韻尾	37
第2節	唇内入声音に関する従来の指摘（先行研究）	39
第3節	現代日本漢語における唇内入声音の実態	40
	（1）調査の対象と範囲	40
	（2）調査結果	40
第4節	唇内入声音の促音化の条件	42
	（1）韻類との関連	42
	（2）後接する無声子音との関連	43
	（3）前接の主母音との関連	46
第5節	唇内入声音の字音と語音	48
	（1）慣用音としての「ーツ・ーツ」	48
	（2）例外的な字音	51
第6節	まとめ	53

第4章 ハ行子音の半濁音化について

第1節	現代漢語におけるハ行子音の半濁音化	55
第2節	半濁音化に関する従来の指摘（先行研究）	57
第3節	現代漢語における半濁音化	58
	（1）調査の対象と範囲	58
	（2）調査結果	59
第4節	半濁音化の条件	62
	（1）入声音に続くハ行子音	62
	（2）鼻音に続くハ行子音	65
	（3）助数詞	66
	（4）反例語	70
第5節	まとめ	76

第5章 〈慣用音〉について

第1節 〈慣用音〉研究の目的	78
第2節 漢和辞典における慣用音の調査および その結果の概要	80
2. 1 調査の対象と範囲および調査方法	80
2. 2 調査結果	80
第3節 〈慣用音〉と認めるべき理由と範囲	83
3. 1 慣用音とは見なしがたいもの	83
3. 1. 1 漢語の音の一部と認めるべきもの	83
① 促音「ーッ」形のもの	83
② 促音「ーッ」形以外のもの	89
3. 1. 2 呉音と見なすべきもの	91
3. 1. 3 漢音と見なすべきもの	102
3. 1. 4 呉音または漢音とすべきもの (呉音・漢音が同形の場合)	110
3. 2 慣用音と認める必要のあるもの	116
3. 2. 1 音的な特徴による分類	116
①声母に関して、原音との対応が認められないもの	
a) 中古音の清音が濁音になるもの	117
b) 中古音の濁音が清音になるもの	135
c) その他	140
②韻腹に関して、原音との対応が認められないもの	
a) 中古音の重母音を短音とするもの	141
b) 中古音の単母音を長音とするもの	143
c) その他	147
③韻尾に関して、原音との対応が見られないもの	
a) 唇内入声音[-p]を「ーッ」とするもの	148
b) その他	152

3. 2. 2 「慣用音」を生じる理由による分類	154
①声符の類推にもとづくもの	154
②個別的な理由が考えられるもの	
a) 入声音の促音化を反映したもの	177
b) 和語における濁音の表現価値によるもの	178
c) 他字の音が‘移転’されたもの	178
d) ‘合成音’と解されるもの	180
e) その他	181
③最初から、韻書の音と異なる音を生じたと考えられるもの	183
④連濁の影響と考えられるもの	188
⑤理由が不明なもの（原音に理由がある場合）	191
第4節 〈慣用音〉に認められる日本漢字音の特質	195
総括	200
参考文献・資料	204
資料篇	209
第3章	
表(3) 無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字	(1)
表(4) 無声子音が後接して促音化する唇内入声字	(7)
表(5) 無声子音が後接して促音化する場合と 促音化しない場合とが共にある唇内入声字	(9)
第4章	
唇内鼻音＋ハ行子音	(15)
舌内鼻音＋ハ行子音	(18)
喉内鼻音＋ハ行子音	(28)
唇内入声音＋ハ行子音	(37)
舌内入声音＋ハ行子音	(39)
喉内入声音＋ハ行子音	(43)
第5章	
表(1)～(4)に掲げた漢字	(48)

第1章 現代日本漢語の漢字音

第1節 中国語中古音と日本漢字音

(1) 日本漢字音の特徴

「文字」は、以下の3つのタイプに分類することができる¹⁾。

「単語文字 (表語文字)」…漢字のように、一字が一語を表す文字。

「音節文字」…仮名のように、一字が一音節を表す文字。

「音素文字」…アルファベットのように、一字が一音素を表す文字。

このうち、単語文字である漢字については、「形」「音」「義」ということをいう。「形」は字形、「音」は字音、「義」は字義である。「漢字音」というのは、すなわち、そのような漢字の「音」のことである。

中国の漢字音は、日本や朝鮮のほか、ベトナムなど周辺の言語に借用された。それらは、「日本漢字音」「朝鮮漢字音」「越南漢字音」と称される。

中国語音は、日本語音の構造・体系の影響を受けて日本漢字音になった。

音節構造の影響とは、次の如くである。

中国語の音節構造は IMVF/T (後述) で示される。一方、日本語の音節の多くは ka 「か」、kja 「きゃ」のように C(j)V で示される。中国語の構造がこの日本語の構造に組みかえられると、原則的に

IMVF/T → (C(j)V)n

のようになる²⁾。例えば、

	中国語		日本語
花	hua(平声)	→	ka
笑	siɛu(去声)	→	sjou
光	kuaŋ(平声)	→	kou

である³⁾。

音韻体系の影響とは、次の如くである。

頭子音 (声母) に関しては、例えば中国語中古音の「歯音」は大変複雑で、「歯頭音」と「正歯音」の区別がある。「正歯音」には、さらに「正歯音二等」と「正歯音三等」の区別がある。音価はそれぞれ、

歯頭音	ts	ts'	dz	s	z
正歯音二等	tʂ	tʂ'	dʂ	ʂ	ʐ
正歯音三等	tɕ	tɕ'	dʒ	ɕ	ʒ

のように示される。これらには、摩擦音・破擦音・そり舌音・硬口蓋音が含まれる。こ

のように、中国語中古音の「歯音」は種類が多く大変複雑であるが、日本語ではそれらが一切区別されず、すべて「サ・ザ行音」で受け入れられた。日本語の過去のサ・ザ行音の音価は不明であるが、現代はすべてサ・ザ行音(s,ʃ,z,ʒ)で写される。

例)		中古音		日本漢字音
歯頭音	「最」	tsuai	→	(呉音) sai (漢音) sai
	「参」	ts'ʌm	→	(呉音) sam(san) (漢音) sam(san)
	「在」	dzʌi	→	(呉音) zai (漢音) sai
	「三」	sam	→	(呉音) sam(san) (漢音) sam(san)
	「謝」	zia	→	(呉音) zja (漢音) sja
正歯音二等	「齋」	tʃei	→	(呉音) sai (漢音) sai
正歯音三等	「制」	tɕei	→	(呉音) sei (漢音) sei

韻母に関しては、中国語の MVF が日本語の (j)V のような構造を基本とする形に変化する。例えば、蟹摂の 1 等と 2 等には重韻が認められ、平山(1967)の推定に従えば、その中古音は、

- 1 等 -ʌi (台), -ai (泰)
- 2 等 -ei (皆), -ai (夬), -ai (佳)

※韻目は平声を欠く場合を除いて、平声で代表。合口を省く。

のように推定されるが、これらは次のように写される。

例)	中古音	日本漢字音
「解」	kai, ɰai	→ (呉音) ge (漢音) kai
「外」	ɰuai	→ (呉音) ge (漢音) gai

日本漢字音では、漢音は中古音と同様に -ai で写されるのに対し、呉音は -e のように単母音化するものが見られる。

中国語の入声音 -p, -t, -k は、日本語では開音節化する。

例)	中古音	日本漢字音 (呉音・漢音)
「答」	tʌp	→ tafu(to:)
「吉」	kiət	→ kiti, kitu
「国」	kuək	→ koku

声調 (Tone) に関しては、伝承過程ではそれが保存されようとしたが、現代の日本語では全く失われている。中古音の「東」(平声=低平調)が、現代東京方言の「東方トウホウ」では○● (●は高い拍を示す。以下同) となり、「東西トウザイ」では●○となる

ように、また「送」（去声＝上昇調）が同じく「送迎ソウゲイ」では○●となり、「送付ソウフ」では●○となるように、各漢字に固有の声調は現在全く痕跡をとどめていない。

（２）中国語の中古音

日本漢字音のうち、「呉音」「漢音」（後述）はいずれも中国語の中古音が変化したものである。その中古音は、一般に次のような時代区分に依っている⁴⁾。

太古漢語	殷～西周	BC15c～BC10c
上古漢語	東周～春秋戦国～秦～漢～三国	BC7c～AD4c
中古漢語	六朝末～隋～唐	AD6c～AD10c
中世漢語	宋～元～明	AD11c～AD16c
近代漢語	清～現代	AD17c～AD21c

言うまでもなく、中国語の中古音とは中古漢語の音である。中国語の音韻史で中古音が重視されるのは、次のような理由に依る。

- 1) 切韻系の韻書やそれにもとづく韻図をもとに、音韻体系の再構に一応の成功をみている。
- 2) 中古漢語の音は、日本語をはじめとして朝鮮語や越南語など諸言語に借用され、そのような外国字音が貴重な歴史的資料となって音価の推定に用いられている。

中古音の音節構造は、一般に次のような式で示される。

IMVF/T

I:	Initial consonant	(頭子音)
M:	Medial vowel	(介母)
V:	principal Vowel	(主母音)
F:	Final	(韻尾)
T:	Tone	(声調)

例)	I	M	V	F	T
笑	s	i	ε	u	去声
年	n		e	n	平声
八	p		a	t	入声

構造的には、現代の中国語も中古音と同じである。

次に、中古音の音韻体系については、以下のように略述できる。

頭子音(I)を『韻鏡』(唐末以後に成立)について見ると、『韻鏡』はまず調音点から
唇音, 舌音, 牙音, 齒音, 喉音
の五音に、

半舌音, 半齒音

を加えた七音に分類し、この七音はさらにその下位を

清(無声無氣音)

次清(無声有氣音)

濁(有声音)

清濁(鼻音・流音・半母音)

に分けている。ただし、『切韻』と韻図には時代的なズレがある。例えば、いわゆる三十六字母には、

重唇音「幫・滂・並・明」

軽唇音「非・敷・奉・微」

の区別があるが、『切韻』の時代にはこの区別がない。『切韻』の時代の体系は、表(1)のように示される。

表(1)

半 齒	半 舌	喉			齒			牙			舌			唇								
清 濁	清 濁	清 濁	清 濁	清 濁	次 濁	清 濁	清 濁	次 濁	清 濁	清 濁	次 濁	清 濁	清 濁	次 濁	清 濁	清 濁	等 位					
	来 l	匣 h	曉 h	影 ?	心 s	從 dz	清 ts'	精 ts	疑 ŋ	溪 k'	見 k	泥 n	定 d	透 t'	端 t	明 m	並 b	滂 p'	幫 p	1 等		
	来 l	匣 h	曉 h	影 ?	俟 z	生 ɣ	崇 dz	初 tɕ'	莊 tɕ	疑 ŋ	溪 k'	見 k	娘 ŋ	澄 d	徹 t'	知 t	明 m	並 b	滂 p'	幫 p	2 等	
日 ɲ	来 l	匣 h	曉 h	影 ?	常 z	書 ɕ	船 dz	昌 tɕ'	章 tɕ	疑 ŋ	群 g	溪 k'	見 k	娘 ŋ	澄 d	徹 t'	知 t	明 m	並 b	滂 p'	幫 p	3 等
	来 l	羊 j	匣 h	曉 h	邪 z	心 s	從 dz	清 ts'	精 ts	疑 ŋ	群 g	溪 k'	見 k	泥 n	定 d	透 t'	端 t	明 m	並 b	滂 p'	幫 p	4 等

※推定音は平山(1967)に依る。

韻部(MVF)にも、原本『切韻』(601)の韻目と『広韻』(1008)の韻目の間にはズレがある。『切韻』の韻目は193韻であるのに対し、『広韻』の韻目は206韻である。従って、『広韻』の韻目は『切韻』の韻目そのままではない。『広韻』の206韻の体系は、表(2)

のように示される。

表(2)

等 攝	1等	2等	3等	4等	転開 次合
通	東 ɔuŋ		東 iəuŋ		1 開
	冬 oŋ		鍾 ioŋ		2 開合
江		江 auŋ			3 開合
止			支 iě	支 iě	4 開合
			支 iuě	支 iuě	5 合
			脂 í	脂 i	6 開
			脂 iui	脂 iui	7 合
			之 iəɪ		8 開
			微 iəi		9 開
遇			魚 iə		11 開
	模 o		虞 iuu		12 開合
蟹	哈 ɿ	皆 ɿi 夬 ai	祭 iəi	齊 ei	13 開
	灰 uɿ	皆 uɿi 夬 uai	祭 iuei	齊 uei	14 合
	泰 ai	佳 ai		祭 iəi	15 開
	泰 uai	佳 uai		祭 iuei	16 合
			廢 iɿ		9 開
			廢 iuɿ		10 合
臻	痕 ən		臻真 iěŋ	真 iěŋ	17 開
	魂 uən		真 iuěŋ	諄 iuěŋ	18 合
			欣 iəŋ		19 開
			文 iuěŋ		20 合
山		山 ɐn	元 iɐn	仙 iɐn	21 開
		山 uɐn	元 iuɐn	仙 iuɐn	22 合
	寒 an	刪 an	仙 iɛn	先 en	23 開
	桓 uan	刪 uan	仙 iuɛn	先 uen	24 合

效	豪 au	肴 au	宵 ieu	蕭 eu	25 開
				宵 ieu	26 合
果	歌 a				27 合
	戈 ua		戈 iua		28 合
仮		麻 a	麻 ia		29 開
		麻 ua			30 合
宕	唐 aŋ		陽 iaŋ		31 開
	唐 uaŋ		陽 iuaŋ		32 合
梗		庚 aŋ	庚 iaŋ	清 iɛŋ	33 開
		庚 uaŋ	庚 iuaŋ	清 iuɛŋ	34 合
		耕 ɛŋ		青 eŋ	35 開
		耕 uɛŋ		青 ueŋ	36 合
流	侯 əu		尤 iəu	幽 iəu 幽 iəu(唇音 4 等)	37 開
深			侵 iɛm	侵 iɛm	38 合
咸	覃 ɒm	咸 ɐm	鹽 iɛm	添 em	39 開
	談 am	銜 am	嚴 iam	鹽 iɛm	40 合
			凡 iam		41 合
曾	登 əŋ		蒸 iəŋ		42 開
	登 uəŋ		職 iuəŋ		43 合

※推定音は、平山(1967)に依る。

(3) 日本漢字音の重層性

日本漢字音は、幾度にもわたって伝えられた中国語音が日本語化し、蓄積されたもので、重層性を示している。朝鮮漢字音や越南漢字音の場合は、新しく中国語原音が伝わると元の(古い)音はほとんどが新しい音に置きかえられてしまったので、日本漢字音のような重層性は認められない。

日本漢字音の重層性とは、「呉音」「漢音」「唐(宋)音」のような層が区別できる状態をいう。このうち、主層は中国語中古音が変化した「呉音」と「漢音」である。以下、主層を中心に各層の概略を記す。

古音

日本漢字音の古層は呉音であるが、呉音は最古層ではない。推古期(6c 末~7c 初)の遺文などで古代の人名や地名を表すのに用いられた古い万葉仮名には、中古音から説明できない使い方の痕跡がある。それらは、呉音・漢音以前の古い音にもとづいた用法とみなされる。

例) 「宜」: 古音 ga (中古音 ŋiě)
「移」: 古音 ya (中古音 jiě)

このほか、「うま (馬)」や「うめ (梅)」などという語が漢語に由来する語であるとすれば、これらも最古層に属する可能性がある。

呉音

「漢音」は唐代に伝わった規範的な中国語音 (読書音) が変化したもので、当初は「正音」として重んじられたのに対し、「呉音」は「漢音」の母体となった中国語音が伝来する前から日本で使用されていた古い音が、唐代の音の伝来に伴い「呉音」として一括されたものであって、すでに日本語化が著しかったので、「和音」と称された。

呉音の母体は、六朝末期(5~7c 頃)に揚子江下流の呉方言とされる。根拠は多くないが、音的特徴について見ると、頭子音「清・濁」の区別に関して、呉音では中国原音の濁音の特徴が比較的良好に保存された点が注目されている。この点は、現代の呉方言とも一致する。

呉音は仏典の読誦音として広く用いられた。新しく漢音が伝わり、仏家にも漢音の使用が推奨されたが、仏典を呉音で読む伝統そのものは失われなかったため、現代でも仏教語には呉音がよく使用されている。

呉音は、それ自体が混質的である。蟹撰について、林(1982)は次のように述べている⁵⁾。

-e のような単母音化——「礙^ゲ」「解^ゲ」「世^セ」「偈^ゲ」「計^ケ」「弟^テ」など——は、「暴^ボ」「後^ゴ」など効撰や流撰にも認められる現象で、日本語自体が母音と母音との結合を嫌っていた時代の名残りであろうという。そうであるとすれば、-e,-ai,-ei 三つの型の中で、これが最も古い層ということになる。(中略) 呉音系字音の蟹撰 (開口) には、およそ次の三層が区別できよう。

	呉音			漢音
	古い層	主層	新しい層	
I	-e	-ai	(-ai)	-ai
II	-e	-ai	(-ai)	-ai
III	-e	-ei	(-ei)	-ei / -ai
IV	-e	-ai	-ei	-ei

以上のように、林(1982)はIVの呉音には-e,-ai,-eiの3パターンがあることを指摘している。

実際に蟹撮の字を見ると、

等	韻目			例字	中古音	日本漢字音			
	平	上	去			呉音	漢音		
I	哈(灰)	海(賄)	代(隊)	開	k'ai	kai	kai		
			泰(泰)	外	ŋuai	gwe(ge)	guwai(gai)		
II	皆(皆)	駭(駭)	怪(怪)	皆	kuei	kai	kai		
			佳(佳)	蟹(蟹)	卦(卦)	解	kai	ge	kai
			夬(夬)	敗	pai	hai	hai		
III _甲			祭(祭)	制	tɕiei	sei	sei		
III _乙			祭(祭)	偈	giei	ge	kei		
			癡(癡)	肺	p'iɿ	hai	hai		
IV	齊(齊)	薺(一)	霽(霽)	弟	dei	de, dai	tei		

※推定音は平山(1967)に従う。韻目の括弧内は合口を示す。

のようになる。

以上のように、「呉音」自体が複層的であるため、この字音は「呉音系」と称されることがある。

次に、これまでに指摘されている呉音の特徴についてその主なものを挙げる⁶⁾。

[声母] に関して

①中古音の濁紐字(全濁・清濁)が濁音で写される傾向が強い。

例)	中古音		日本漢字音
「弟」:	dei	→	(呉音) de,dai (漢音) tei
「道」:	dau	→	(呉音) dau(do:) (漢音) tau(to:)

②中古音の鼻音声母 m^- , n^- が鼻音の m^- (マ行)、 n^- (ナ行) で写される。

例)	中古音		日本漢字音
	「米」:	mei	→ (呉音) mai (漢音) bei
	「内」:	$nu\lambda i$	→ (呉音) nai (漢音) dai

〔韻母〕 に関して

①前述した蟹摂のほか、流摂にも単母音化するものが存在する。

例)	中古音		日本漢字音
	「口」:	$k'əu$	→ (呉音) ku (漢音) kou
	「頭」:	$dəu$	→ (呉音) zu (漢音) tou

②山摂の元韻- $i(u)\lambda n$ および月韻- $i(u)\lambda t$ には、 $-o$ になるものが多く見られる。

例)	中古音		日本漢字音
	「言」:	$\eta i\lambda n$	→ (呉音) gon (漢音) gen
	「越」:	$fiu\lambda t$	→ (呉音) $woti, wotu$ (漢音) $wetu$

③止摂微韻 (尾韻、未韻も含む) の開口には、 $-e$ になるものが存在する。

例)	中古音		日本漢字音
	「衣」:	$?i\ddot{a}i$	→ (呉音) e (漢音) i
	「気」:	$k'i\ddot{a}i$	→ (呉音) ke (漢音) ki

また、止摂之韻には、 $-o$ になるものが存在する。

例)	中古音		日本漢字音
	「期」:	$gi\ddot{a}i$	→ (呉音) go (漢音) ki

④梗摂は、一般に- $(j)au$ になる。

例)	中古音		日本漢字音
	「明」:	$mi\epsilon\eta$	→ (呉音) $mjau(mjou)$ (漢音) mei
	「京」:	$ki\epsilon\eta$	→ (呉音) $kjau(kjou)$ (漢音) kei

⑤深摂では、 $-om, -op$ になるものが存在する。

例)	中古音		日本漢字音
	「金」:	$ki\ddot{e}m$	→ (呉音) $kom(kon)$ (漢音) $kim(kin)$
	「品」:	$p'i\ddot{e}m$	→ (呉音) $hom(hon)$ (漢音) $him(hin)$

韻尾の特徴に関しては、三内入声音-p,-t,-kのうち、舌内入声音-tに呉音の特徴が現れる。すなわち、漢音では-tu（-ツ）で写されるのが原則であるのに対し、呉音では-歴史的に-ti（-チ）が優勢である⁷⁾。

例)	中古音		日本漢字音
	「別」: bɿet	→	(呉音) beti,betu (漢音) betu
	「吉」: kiēt	→	(呉音) kiti, kitu (漢音) kitu

漢音

中国では、隋・唐の時代(7~10c 頃)になると、文化の中心である長安の音の影響のもとで、その特徴を反映した変化が発生した。日本には、この長安音の特徴を反映した読書音が伝えられた。これが漢音の母体とされる。「和音」と称された呉音に対し、漢音は「正音」と称され重視された。林(1982)などに依ると⁸⁾、

延暦十一年(792)には、次のような勅によって明経道の学生に「漢音」の習得を命じ、

明経之徒不可習呉音、発声誦読既致訛謬、熟習漢音。(『日本紀略』卷九上)

また、翌十二年(793)には、

自今以後、年分度者非習漢音勿令得度。(『類聚国史』仏道部)

として僧侶にもその学習を義務づけている。

とされる。この漢音は、一般に漢籍や一部の仏典の読書音として使用されたため、呉音に代わって広く用いられるようになった。しかし、当時日本ではすでに呉音が定着しており、新しく伝わった漢音は、呉音を一掃することができず、呉音と共存する形で定着していった。

以下、これまでに指摘されている漢音の特徴について、主な点を呉音の特徴と比較しながら挙げる⁹⁾。

[声母] に関して

①中国では、唐代に入ると西北方言の影響で全濁字の無声化が進行したために、呉音に認められた濁音の有聲的特徴が失われた。

例)	中古音		日本漢字音
	「弟」: dei	→	(呉音) de,dai (漢音) tei
	「大」: dai	→	(呉音) dai (漢音) tai

②中国では、唐代に入ると西北方言の影響で非鼻音化が進行したために、鼻音声母のうち明母（微母）・泥母・娘母・日母では、呉音に認められた鼻音的な特徴が失われた。但し、鼻音韻尾をもつ字には、非鼻音化せず鼻音を保存しているものがある。

例)	中古音		日本漢字音
	「米」: mei	→	(呉音) mai (漢音) bei
	「人」: niēn	→	(呉音) nin (漢音) jin
	「明」: mian	→	(呉音) mjau(mjou) (漢音) mei

〔韻母〕に関して

①呉音では主母音の特徴が-e で示される止撮微韻（尾韻、未韻も含む）の開口は、漢音ではすべて-i に写される。

例)	中古音		日本漢字音
	「衣」: ʔiəi	→	(呉音) e (漢音) i
	「気」: k'iəi	→	(呉音) ke (漢音) ki

②梗撮は、呉音で一般に-(j)au で写されるが、漢音では一部を除いて-ei のように写される。

例)	中古音		日本漢字音
	「明」: miɛŋ	→	(呉音) mjau(mjou) (漢音) mei
	「京」: kiɛŋ	→	(呉音) kjau(kjou) (漢音) kei

③深撮では、呉音で-om,-op で写されるものが存在するが、漢音ではすべて-im,-ip で写される。

例)	中古音		日本漢字音
	「金」: kiēm	→	(呉音) kom(kon) (漢音) kim(kin)
	「品」: p'iēm	→	(呉音) hom(hon) (漢音) him(hin)

韻尾の特徴に関しては、呉音で説明したように、三内入声音-p,-t,-kのうち、舌内入声音-tに呉音・漢音の違いが現れる。すなわち、呉音では-ti（一チ）が優勢であったのに対し、漢音では-tu（一ツ）で写される。

例)	中古音		日本漢字音
	「別」: biət	→	(呉音) beti,betu (漢音) betu
	「吉」: kiēt	→	(呉音) kiti, kitu (漢音) kitu

唐音（宋音）

日本では894年に遣唐使が廃止されたことにより、日本と中国との間に公の交流は断たれたが、その後も僧侶や商人の往来によって、様々なかたちで新しい中国語音が伝えられた。中国の唐末から清代にかけて伝えられた音は、一括して「唐音」あるいは「宋音」と称される。唐音は、長期にわたり複数の地域から伝えられているため、大変複雑である。

この唐音について、肥爪(2005)は以下のように指摘している⁹⁾。

多岐にわたる唐音系字音の中核をなすのは、

(1)鎌倉時代以降、臨済宗・曹洞宗において仏典読誦などに用いられた音

(2)江戸時代、黄檗宗や曹洞宗祇園寺派において仏典読誦などに用いられた音、長崎通事（訳官）や漢学者が学んだ音

の二群の音である。両者の呼称は専門の研究者の間でも一致を見ておらず、…（中略）…

本稿では簡明を旨とし、(1)を中世唐音、(2)を近世唐音と呼んでおく。

肥爪(2005)が指摘している(1)の鎌倉時代の禅宗に用いられた音は、主に南宋末～明初の浙江地方の音を反映したものであり、(2)の江戸時代の黄檗宗に用いられた音は、明末～清初の杭州音や南京官話を母体に行っていると考えられている。

以下、これまでに指摘されている(1)中世唐音の主な特徴をいくつか挙げる¹⁰⁾。

〔声母〕に関して

①舌上音（知母・徹母・澄母）は、サ行で写される。

例)	中古音		日本漢字音（唐音）
	「茶」： ɕa	→	sa
	「珍」： tʃɛn	→	shin

②疑母は、ガ行のほかに、ア行・ヤ行・ワ行・ナ行でも現れる。

例)	中古音		日本漢字音（唐音）
	「外」： ŋuai	→	ui
	「岸」： ŋan	→	nan

〔韻母〕に関して

①止摂に、主母音を-u で写すものが存在する。

例)	中古音		日本漢字音 (唐音)
	「子」: tsiəi	→	su
	「斯」: siě	→	su

②喉内鼻音-ŋ には、-n (ーン) で写されるものが多数存在する。

例)	中古音		日本漢字音 (唐音)
	「行」: fiaŋ	→	an
	「経」: keŋ	→	kin

日本漢字音の主層は、呉音と漢音であって、唐音はごく一部の語に残るにすぎない。そのうち、現在の常用語にも存在する「行燈アンドン」「蒲団フトン」「椅子イス」「饅頭マンヂウ(マンジュウ)」などは禅宗などで使われていた唐音の語で、これらは中世唐音であると理解されている。

華音

江戸時代、長崎ではオランダや中国との交流が盛んであったため、江戸幕府には「長崎通事」(「オランダ通詞」「唐通事」とも)と称され通訳の仕事を行う役人が存在した。主にこの通事らによって伝えられた音は「華音」と呼ばれている。

そのような近世の中国語音は、当時の韻学でも重要視された。例えば、文雄の『磨光韻鏡』(1744)や太田全斎の『漢吳音図』(1815序)には、華音が用いられており、林(1989)は文雄の『磨光韻鏡』について¹¹⁾、

中国・日本の諸文献を慎重に吟味し、新来の中国語音を検討することによって、韻図としての『韻鏡』の組織と性格を明らかにするとともに、日本漢字音の系統と体系を『韻鏡』の図中にとらえようとしたのが、『磨光韻鏡』を中心とする文雄の字音研究である。

のように述べており、また太田全斎の『漢吳音図』については¹²⁾、

煩雑な反切門法を離れて『韻鏡』の組織を直接の手段とし、複雑な字音を統一的に説明しようとした点は当時としては画期的で、その意味ではやはり近世における字音研究の一つの頂点を示すものと言ってもよい。後世への影響にもきわめて重大なものがあった。

のように述べている。

第2節 現代日本漢語の漢字音

(1) 現代日本語の漢語

現代の日本語において、漢語は日本語の一部である。国立国語研究所(1964)によれば、日本語（雑誌の用語）における漢語は、異なり語数では47.5%（和語36.7%、外来語・混種語15.8%）、延べ語数では41.3%（和語53.9%、外来語・混種語4.8%）である。これによれば、現代日本語において漢語は異なり語数で約半数を占めている¹³⁾。

また、『新選国語辞典第八版』小学館(2002)の見出し語73,181語について見ると、漢語は35,928語(49.1%)、和語は24,708語(33.8%)、外来語は6,415語(8.8%)、混種語は6,130語(8.4%)で、こちらも漢語が約半数を占めており、漢語は現代の日本語に溶け込んでいる。

試みに『朝日新聞』2009年4月7日（朝刊）23面の一部を見ても、このことが首肯できる。

※下線 は漢語、 は和語を示す。

現在では、日本語ほど難解な書き方をする言語はほかに例がない。難解さの最たるものは漢字の用法である。多くは漢字を生んだ中国語とそれを借りた日本語との違いに起因するが、原因の一つは紛れもなく日本人の心情にある。

日本人は漢字の表現力を愛し、大切にしてきた。それは「言葉に表す」「姿を現す」「書物を著す」のような、同訓字の使い方によく表れている。

ここに用いられる異なり語数（助詞・助動詞を除く）を見ると、次の表(3)の通りである。

表(3)

	異なり語数	延べ語数
漢語	42.5%(17語)	45.8%(22語)
和語	57.5%(23語)	54.2%(26語)

漢語は異なり語数では42.5%、延べ語数では45.8%であり、和語の比率がやや高いが、漢語は約半数を占めており、これまでの調査結果と矛盾しない。

以上のように、現代の日本語において、漢語は極めて重要な言語材である。

(2) 現代日本漢語の漢字音

現在使用されている日本漢字音は、中国語音の日本字音化に、日本語音の変化が重なった結果である。この日本語音の変化による影響の著しい例を以下にいくつか掲げる。

①唇音の声母 p-,p'-(b-)は、両唇摩擦音 Φ-になり、やがて現代のハ行 h-へと変化した。

例)	中古音		日本漢字音 (呉音・漢音)
	「本」:	puən	→ pon > Φon > hon
	「北」:	pək	→ poku > Φoku > hoku

②唇音の歯音はサ・ザ行に写された。奈良時代のサ・ザ行音は ts-(tʃ-),dz-(dʒ-)であったと推定されるが¹⁴⁾、現代はすべて s-(ʃ-),z-(ʒ-)になっている。

例)	中古音		日本漢字音 (呉音・漢音)
	「最」:	tsuai	→ tsai > sai
	「支」:	teĩ	→ tʃi > ʃi

③原音の(M)VF が連母音(-au,-eu など)で写される音は、日本語の音韻変化により長音化または拗長音化した。

例)	中古音		日本漢字音 (呉音・漢音)
	「高」:	kau	→ kau > kō: > ko:
	「鳥」:	teu	→ teu > tjo:

④鼻音韻尾-ŋ をもつ字は、日本語に起こった非鼻音化と母音化の影響で-Vū のように変化したと考えられており、その後長音化した。

例)	中古音		日本漢字音 (呉音・漢音)
	「当」:	taŋ	→ taū > tō: > to:
	「登」:	teŋ	→ teū > to:

(3) 日本漢字音の重層性と混合状態

日本漢字音の主層は呉音と漢音である。既述(本章 第1節)のように、呉音の母体となった音は、5~6世紀頃、仏典の読誦音などとして伝わり、それにもとづく音、すなわち日本の呉音は一般言語材としても用いられるようになった。従って、仏教語や古い漢語には、呉音で読まれるものが多い。

例) 呉音系漢語…「有無ウム」「久遠クオン」「華嚴ケゴン」「解脱ゲダツ」
「外道ゲドウ」「極楽ゴクラク」「成就ジョウジュ」
「明神ミョウジン」「無常ムジョウ」「明日ミョウニチ」など

一方、漢音の母体となった音は、7～10世紀にかけて漢籍や一部仏典の読み方として伝わり、それにもとづく音、すなわち日本の漢音は一般言語材として広く用いられるようになった。但し、すでに呉音が定着していたため、漢音は呉音と共存する形で定着していった。明治期に作られた新漢語（「経済ケイザイ」「文明ブンメイ」など）には、この漢音が用いられている。

例) 漢音系漢語…「陰暦インレキ」「成功セイコウ」「人文ジンブン」
「発行ハッコウ」「万物バンブツ」「平日ヘイジツ」
「明白メイハク」「流行リュウコウ」など

呉音と漢音の区別は歴史的に文献の読み方などを支えとして保たれたが、今日一般にはその識別が困難になっている。識別が困難になった状態は、混種語の発生にも窺える。

例) 混合漢語（呉音＋漢音）…「下品ゲヒン」「今月コンゲツ」「凶工ズコウ」
「無人ムジン」「徐行ジョコウ」など
（漢音＋呉音）…「眼力ガンリキ」「期末キマツ」「言語ゲンゴ」
「直入チョクニュウ」「武道ブドウ」など

以下のような両読語の存在は、

- ①呉音と漢音の混合状態を示している。
- ②重層性の名残を反映していると思なすことができる。

この二面的な見方を可能にする。

例) 両音漢語…「強力」：(呉) キョウリョク (漢) ゴウリキ
「男女」：(呉) ナンニョ (漢) ダンジョ
「末期」：(呉) マツゴ (漢) マツキ
「利益」：(呉) リヤク (漢) リエキ など

以上のように、現代日本で用いられている漢語は、呉音と漢音が混然としているが、これらの漢語を一語ずつ精査すると、複数の層に区別することができ、重層性が浮かびあがってくる。

付言すれば、混合状態を超えて和語との区別さえも失われていると思なされる例があり、これは字音語の和語化ともいえる。

例) 湯桶読み…「相席あいセキ」「手本てホン」「黒幕くろマク」など
重箱読み…「碁石ゴいし」「台所ダイどころ」「本屋ホンや」など

(4) 漢語の音と漢字の音

漢字の音（字音）とは、その字に認められている固有の音で、いわばその漢字が持っている音的価値といえる。漢字は「形・音・義」から成るとされるが、その中の「音」に相当する。しかし、字音は実際には漢語の音（語音）として用いられる。例えば、「人ジン（漢音）」「生セイ（漢音）」はそれぞれ漢字の音である。これを組み合わせた漢語「人生」の音「ジンセイ」が語音である。「例レイ」「線セン」「面メン」などのように、たとえ単字として用いられる場合でも、それは語として用いられているのである。

字音と語音は一致することが多いが、「十ジュウ」と「階カイ」を組み合わせた漢語から「十階ジツカイ」になるように、字音と語音は一致しないこともある。その中の注目すべきものを、以下に掲げる。

- ①入声音・**p, t, k** は、呉音・漢音問わず、日本漢字音では「一ウ(一フ)」「一チ」「一ツ」「一キ」「一ク」になるが、これに無声子音 **p(h), t, s, k** が後接すると、漢語の音ではそれが促音化する。

例) 「執シュウ(シフ)」 + 「刀トウ」 → 「執刀シットウ」
「出シュツ」 + 「頭トウ」 → 「出頭シュットウ」
「直チョク」 + 「角カク」 → 「直角チョツカク」

但し、唇内入声音には例外が多い。例えば、「執」には「執着シュウチャク」「執心シュウシン」などのように、無声子音が後接しても促音化しない漢語も存在する。

- ②ハ行子音 **h**（現代音）は、入声音・**p, t** や鼻音・**m, n** に後接すると、漢語の音ではそれが半濁音化する¹⁵⁾。

例) 「絶ゼツ」 + 「品ヒン」 → 「絶品ゼツピン」
「審シム」 + 「判ハン」 → 「審判シンパン」
「散サン」 + 「髪ハツ」 → 「散髪サンパツ」

- ③無声子音 **p(h), t, s, k** は、鼻音・**m, n, ŋ** に後接すると、漢語の音ではそれが濁音化する。

例) 「金コン」 + 「色シキ」 → 「金色コンジキ」
「人ニン」 + 「間ケン」 → 「人間ニンゲン」
「評ヒョウ」 + 「判ハン」 → 「評判ヒョウバン」

但し、「民政ミンセイ」や「東方トウホウ」などのように、鼻音に無声子音が後接しても濁音化しない漢語も存在する。

このような字音と語音の差異は、歴史的にも存在すると考えられるが、事実上、歴史的資料は字音資料に偏っており、その差異を詳細に把握することは困難である。本研究の課題のひとつはこの点、すなわち字音と語音の差異とその理由を明らかにすることである。

第3節 現代日本漢字音研究の意義

(1) 日本漢字音研究略史

漢字の音に対する日本人の原初的関心は、専らそれを正確に知り、そして習得することにあつた。『篆隸万象名義』(8c)、『新撰字鏡』(9c~10c 初)、『類聚名義抄』(11c 末)のような古字書や、『新訳華嚴経音義私記』(8c 末)、『金剛頂経一字頂輪王儀軌音義』(9c 初)、『四分律音義』(9~10c)のような初期の音義類が、正統な中国音を伝える『玉篇』『切韻』、『新訳華嚴経音義(慧苑)』『一切経音義(玄応)』などの反切を載せるのは、原音に接する機会のほとんどなかった日本人が、そこに漢字の音の規範を求めたことを示している。しかし、漢字の音が日本語の音に融和した結果として、それを仮名で表すことができるようになると、字書や音義における字音の注はおのずから仮名によるものが主流になる。その過程では、正統な反切と仮名の字音注が両記されたり、仮名レベルの字音が反切の形式で注されたりしたものが現れた。その実態は『類聚名義抄』、『金光明最勝王経音義』(11c)、などに窺われる。

一方、漢字の音に対する学識は仏家の韻学の中で深化、発達した。安然『悉曇藏』(9c 末)からは平安時代初期の韻学に融合した漢字の音韻学が、『悉曇要訣』(12c 初)をはじめとする明覚の著述からは平安時代末期の韻学とそこに位置づけられた漢字音韻学が知られる。また、九条家本『法華経音』(平安時代末)に見られる独特の字音分類、明覚『反音作法』(11c 末)における「仮名返し」(仮名による反切解釈法)などからは、日本化した漢字音韻学の一面が覗知される。

13世紀になって『韻鏡』が伝来すると、その原理を解明し、あるいはまた、それにもとづいて中国語音、日本の漢字音を解釈しようとする方向が生まれ、発展した。信範(1223~1295頃)以後、広く『韻鏡』の‘研究書’と呼ぶべきものは多いが、その中で特記されるのが文雄(1700~1763)の『磨光韻鏡』(1744)およびこれに関連する書と、太田全齋(1759~1829)の『漢呉音図』(1815序)およびこれに関連する書である。

『磨光韻鏡』は、日本・中国の諸文献を博読し、新来の華音を照合することによって、韻図としての『韻鏡』の原理と性格を明らかにするとともに、日本漢字音の系統と体系を自ら‘補正’した韻図によって捉えようとしたものの、一方の『漢呉音図』は、『韻鏡』のような韻図はそれ自体が字音の規範を示しているわけだから、難解な反切門法によるまでもなく、これによって字音とその仮名表記を正すことができるという考え方から、さまざまな‘音徴’を韻図に位置づけ、複雑な日本漢字音の実態を統一的に解釈しようとしたもので、実証性に欠けることから独断的演繹に陥ってはいるものの、ともに当時としては一頭地を抜いている。

韻図による日本漢字音の解釈は、また、呉音・漢音等の差異を体系的に把握する方向

にも発展した。呉音・漢音・華音の別を論じ、『韻鏡』に即して問題となる字音を説いたのが文雄『三音正譌』(1752)である。

漢字音に関する本居宣長(1730~1801)の著作は少ないが、それらはいずれも注目すべき意味を有している。まず、『字音仮字用格』(1776)には、字音の仮名遣いを確立しようとした最初の試みとしての歴史的価値が認められる。『漢字三音考』(1785)は、自らの言語観・音韻観を示した上で、日本漢字音の成立・伝承・特質等の問題を論じ、さらに中国語の音韻について述べることによって日本漢字音の歴史的背景を解き明かしている点に優れた見識が窺われる。『地名字音転用例』(1800)は、字音をそれで表された形態との関係を、地名という現実の生きた事例を通して解明しようとした点に特異な価値が認められる。

日本漢字音研究の精緻化は、**B.Karlgren**をはじめとする羅常培、王力、陸志韋、周法高、周祖謨、董同龢、河野六郎、頼惟勤、三根谷徹、藤堂明保、平山久雄、坂井健一、大島正二等々、中国内外の研究者による中国語中古音再構の進展を俟たなければならなかったが、そこに至るまでの研究からは次のようなものを挙げることができる。

大矢 透『周代古音考及韻徴』(1914)

『韻鏡考』(1924)

『隋唐音図』(1932)

大島正健『韻鏡音韻考』(1912)

『支那古韻史』(1929)

『漢音呉音の研究』(1931) など

満田新造「「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣は正しからず」(1920)

「字音に於ける M 尾 N 尾の発見に就いて」(1926)

「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就いて

——朝鮮に於ける字音伝来の経路」(1926) など

山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(1940)

飯田利行『日本に残存せる支那古韻の研究』(1941)

『日本に残存せる中国近世音の研究』(1955)

有坂秀世は日本語の音韻史に画期的功績を残したが、研究の前提とした中国語音韻史、日本漢字音についても、次々と重要な事実を明らかにした。没後刊行された『上代音韻攷』(1962)は、その中核をなす「奈良朝時代に於ける国語の音韻組織について」の「総論」に「漢字音(古代支那語の音韻組織)」を置き、主要事項を重点的に解説するとともに新見を提示している。『国語音韻史の研究(増補新版)』(1957)に収められた「カールグレン氏の拗音説を評す」は、所謂「重紐」を説いて、唇・牙・喉音の中古漢語におけ

る拗音的要素に口蓋的介母と非口蓋的介母の区別が存在したことを証した名論で、朝鮮漢字音などとともに日本呉音が論拠の一つとなっている。「帽子」等の仮名遣について「メイ（明）ネイ（寧）の類は果たして漢音ならざるか」その他の日本漢字音に関連した論考も、旧来の常識を書き換えた。

「朝鮮漢字音の研究」（1968）および一連の中国音韻学関連論文によって漢字音研究を革新した河野六郎の日本漢字音に関する論考には「朝鮮漢字音と日本呉音」（1978）がある。これによって、日本呉音の重要な一面が闡明された。

日本漢字音が成立する過程で問題となる介母・韻尾の構造的変化については、林史典に呉音系字音を中心とした「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（1980）、「中古漢語の介母と日本呉音」（1983）等の論がある。

日本漢字音の歴史的研究は、仏典・漢籍の訓点資料・音読資料、それを背景とする古字書・音義類の発掘・調査によって飛躍的に進展した。築島裕の『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（1963）、『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』（1967）、『平安時代新論』（1969）等、小林芳規の『平安鎌倉時代の於ける漢籍訓読の国語史的研究』（1967）等の訓点資料研究は日本漢字音に関する多くの歴史的事実を明らかにしている。

仏典・漢籍等の字音資料を博搜・精査し、「呉音論」「漢音論」および「付論」として歴史的事象を詳しく論じたのは沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（1982）である。沼本には、他に『日本漢字音の歴史』（1986）、『日本漢字音の歴史的研究』（1997）などがある。

日本漢字音の層別研究には、次のようなものがある。

小倉 肇『日本呉音の研究』全4冊(1995)

『続・日本呉音の研究』全6冊(2014)

佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（2009）

湯沢質幸『唐音の研究』（1987）

このうち、小倉(1995,2014)は、法華経・大般若経・華嚴経・金光明最勝王経等の音義および『類聚名義抄』等、呉音系字音資料の音注を集めて照合し、索引を付した膨大な資料篇を基に、詳細な検討を加えたもの、佐々木(2009)は、蒙求・孔雀経音義・群書治要・本朝文粹などの漢音系字音資料に分析と考察を加え、声母・韻母・声調にわたって資料ごとの漢音的特徴を明らかにしたもの、湯沢(1987)は、中世・近世の唐音資料によって中世唐音の特色および近世韻学における唐音の位置づけを明らかにしたものである。

その他には、『日本漢字音の研究』（1986）を始めとする高松政雄の研究、近時は肥爪周二などの研究が上げられる。

(2) 現代日本漢字音研究の意義

これまでの研究成果は日本漢字音の詳細を明らかにしたが、そこにはまた、次のような事実のあることも見逃されてはならない。

まず、過去の研究は著しく歴史的研究に偏っている点に注意する必要がある。これは、研究の関心が、基本的には次のようなところにあったことに起因している。

- ① 中国語の原音はどのように変形され、あるいは変形されることなく日本語に取り入れられたのか。その結果として、日本漢字音は中国語原音との間にどのような対応関係が生じたのか。
- ② 日本漢字音は、歴史的にどう変化し、あるいは変化することなく現在に至っているのか。

このような点の解明は、歴史資料の調査と分析にもとづくほかない。そこで、仏典・漢籍の訓点資料における字音注、同典籍の音読資料、それらを背景とする古典書・音義が研究の主な対象となった。その結果は自明であって、日本漢字音の研究を

- ① 特定の社会集団に伝承され来たった「(歴史的) 伝承字音」の研究
 - ② 仏典・漢籍等特定文献の「読誦音・読書音」研究
- へ偏重させた。

このことは、

- ① 日本漢字音の歴史的研究が、一般言語材として用いられてきた漢語の音および漢字の音を遠ざけてきたこと。
- ② 字音資料として研究の対象としてきたものが、主に単字の音として認められた音であったために、漢語の音として用いられる場合に生じる現実の現象が説明され尽くされていないこと。
- ③ 現代の漢字音の詳細が視界に入っていないこと。

を意味している。

既述のように(第1章、第2節「現代日本漢語の漢字音」の「(1) 現代日本語の漢語」)、現代日本語において漢語はたいへん大きな比率を占め、きわめて重要な役割を果たしている。それにもかかわらず、そのような漢語を担う現代漢字音は等閑に付されたままで、歴史的研究もまた一般言語材としての現代漢字音をよく説明していない。

筆者が着眼するのはこのような点であって、本研究では、上述の視点から現代漢字音の実態と現代漢語におけるその動態の一面を捉える。その上で、現代漢字音と歴史的現象との関連を明らかにする。

〈注〉

- 1) 林史典(2005)『朝倉日本語講座②文字・書記』「第1章 日本語の文字と書記」p.4に依る。
- 2) モーラ音素は、C(j)V相当に見なすことにする。
- 3) 中古音の推定音は、平山久雄(1967)に依る。以下同じ。
- 4) 中国語音韻史の時代区分は、藤堂明保(1985)『新訂 中国語概論』p.256に依る。
- 5) 林史典(1982)『日本語の世界4 日本の漢字(第五章 日本の漢字音)』中央公論社。
- 6) 林史典(1982)『日本語の世界4 日本の漢字(第五章 日本の漢字音)』中央公論社参照。
- 7) 林史典(1980)「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』122 pp.55-69に依ると、舌内入声音の呉音は、主母音がuになる場合は「ーツ」、それ以外は「ーチ」となったが、その後「ーチ」のほとんどは「ーツ」に変化した事実が確認されている。
- 8) 林史典(1982)『日本語の世界4 日本の漢字(第五章 日本の漢字音)』中央公論社 pp.425-426。
- 9) 肥爪周二(2005)『朝倉日本語講座②文字・書記(第8章 漢字音と日本語c.唐音系字音)』朝倉書店 pp.201。
- 10) 肥爪周二(2005)『朝倉日本語講座②文字・書記(第8章 漢字音と日本語c.唐音系字音)』朝倉書店 pp.200-212参照。
- 11) 林史典(1981)『磨光韻鏡』(解説) 勉誠社文庫 90参照、
林史典(1989)『漢字講座第2巻 漢字研究の歩み(近世の漢字研究 4字音に関する研究)』明治書院 p.71。
- 12) 林史典(1979)『漢呉音図』(解説) 勉誠社文庫 57 p.266。
- 13) 国立国語研究所報告 25『現代雑誌九十種用字用語』(1964)参照。
- 14) 林史典(2001)「九世紀日本語の子音音価——日本語音韻史における文献学的考察の意味と方法」『国語と国文学』929 東京大学国語国文学会参照。
林史典(2011)「〈四つ仮名〉の区別は何故〈江戸時代初期〉に失われたか——日本語舌音の通時論——」『言語変化の分析と理論』おうふう参照。
- 15) ハ行子音は、喉内入声音-kと喉内鼻音-ŋに後接しても半濁音化しない。

【引用文献】

朝日新聞 2009年4月7日(朝刊) 23面

国立国語研究所報告 25(1964)『現代雑誌九十種用字用語』

藤堂明保(1985)『新訂 中国語概論』大修館書店

林 史典(1979)『漢呉音図』(解説) 勉誠社文庫

〃 (1980)「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」

『国語学』122 pp.55-69

- ” (1981) 『磨光韻鏡』(解説) 勉誠社文庫
 - ” (1982) 『日本語の世界 4 日本の漢字 (第五章 日本の漢字音)』 中央公論社
 - ” (1989) 『漢字講座第 2 卷 漢字研究の歩み(近世の漢字音 4 字音に関する研究)』
明治書院
 - ” (2001) 「九世紀日本語の子音音価——日本語音韻史における文献学的考察の意
味と方法」『国語と国文学』 929 東京大学国語国文学会
 - ” (2005) 『朝倉日本語講座②文字・書記 (第 1 章 日本の文字と書記)』 朝倉書店
- 肥爪周二(2005) 『朝倉日本語講座②文字・書記
(第 8 章 漢字音と日本語 c.唐音系字音)』 朝倉書店
- 平山久雄(1967) 『中国文化叢書①言語 (中古漢語の音韻)』 大修館書店

第2章 研究の方法と対象

第1節 研究の視点と方法

前章第3節(2)の認識と視点に立って現代日本漢字音の実相を明らかにするために、本研究では、次の2点に重点を置いた考究を行う。

① 漢語音と漢字音の相関性

漢字音は漢語の音（漢語音）として用いられるから、漢語音は漢字音の実現であると同時に、漢字音は漢語音から帰納されるという関係にある。それにもかかわらず、歴史的研究は両者の関係を詳密に記述できない。

唇内入声音の日本漢字音化を例にとれば、無声子音が続く場合に促音化が発生するという事実は自明であるが、そのような現象がどのような漢語においてどのように発現されているのかは詳細にできない。歴史的資料が字音資料に偏り、また、研究の関心自体も漢字音に比して漢語音には相対的に深くないからであると考えられる。

しかし、現代は、一般言語材として用いられる漢語の分析を通じて漢語音と漢字音との関係を闡明できる。その結果は、歴史事実についても推測を可能にし、また現代漢字音に歴史的解釈を与えることにもなるであろう。

本研究では、こうした角度から、唇内入声音の促音化のほか、ハ行子音の半濁音化を取り上げる。

② 日本漢字音に認められる特異事象

日本漢字音には、しばしば、その原音たる中国語中古音から説明できない音形が認められる。例えば、娘母、語・御韻の「女」は呉音「ニョ」、漢音「ジョ」となるのが原則であるが「女房ニョウボウ」では「ニョウ」の形になる。喻母、尤韻の「由」は呉音「ユ」、漢音「イウ(ユウ)」となるのが原則であるが「由緒ユイショ」では「ユイ」の形を示す。

そのような慣用を持つ音形は、それが慣用に基づくとしか説明できないところから、そのまま「慣用音」の名で呼ばれているが、そこには日本漢字音において発生した特異な事実として、日本漢字音の性格の一面が窺われると見ることができる。

慣用音は、勿論、歴史的にも存在するが、実態は明確でない。歴史的資料は規範的な音を伝えるからである。

このような見方から、本研究は現代日本漢字音について慣用音とされるものを集めて解釈を加え、それを通じて日本漢字音の持つ性格の一面を明らかにする。

以上の考究は、次のような対象と範囲について行う。まず、調査と分析の対象字種を現代の常用的漢字およそ 3,000 字に限定する。それが用いられる漢語の範囲は、現代漢和辞典に採録されているものとする。この対象と範囲は、現代日本漢字音および漢語音の実態を捉えるのに不足しないと考えられる。

次節以下に、対象・範囲の具体を述べる。

第2節 研究の対象とする字種の範囲

(1) 調査と考察の範囲

本研究の対象は、現代日本漢語の漢字音である。従って、今日使用されているすべての漢語が考察すべき範囲であるが、現実問題として、すべての漢語を調査するのは困難である。本考察の範囲は、限定せざるを得ない。そのためには、まず調査対象となる漢語に用いられる漢字の字種を選定する必要がある。

これについては、既存の漢字表を用いることにする。基本にするのは、「常用漢字表」である。この表に掲げられている漢字は、2,136字である。新聞や雑誌などで使用されている漢字を見ると、この表に掲げられていない漢字も数多く用いられていることが認められるので、「表外漢字字体表」で補足し、合計 2,967字を本研究の対象字種とする。

この「常用漢字表」と「表外漢字字体表」に掲げられている字種は、いずれも社会で広く流通している書籍・雑誌等のデータを調査した出現頻度に基づいて選定されたもので、通常の文書等で用いられるほとんどの漢字をカバーしていると思なされる。その漢字が使われている漢語を調査すれば、今日用いられている漢語のほとんどをカバーできると推測されるので、これらの漢字表を利用することは、本研究の目的に矛盾しない。

(2) 常用漢字表と表外漢字字体表

次に、上記の「常用漢字表」と「表外漢字字体表」について述べる。

常用漢字表

現行の「常用漢字表」は、2010年に改定されたものである。

これまでの漢字政策を振り返ると、漢字表の最初は「当用漢字表」(1946)である。この「当用漢字表」は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で使用する漢字を“制限”し、国民のだれもが読んで理解できることを目的として制定された。

その後、約30年後に改められた「常用漢字表」(1981)は、使用する漢字の“目安”として制定され、「当用漢字表」で定められた使用する漢字の制限が緩和された。

この「常用漢字表」もまた、約30年間使用されたが、情報機器の発達によって、漢字の使用量は著しく増加し、「使用漢字の目安」の見直しが必要となったため、2010年に改定された。

字数(字種の数)に着目すると、「当用漢字表」では1,850字が選定された。旧「常用漢字表」(1981)では、この「当用漢字表」の1,850字に95字追加した1,945字が選定され、新「常用漢字表」(2010)では、この1,945字から196字追加し、5字削除した2,136字が選定された。改定されるごとに、字数が増加している。

字種は、一般社会においてよく使われている漢字（＝出現頻度数の高い漢字）を選定する必要がある。コンピュータの発達により、2010年の改定の際には、大規模な調査が行われた。

「新常用漢字表」の基礎資料となったこの調査は、2004年～2006年に出版最大手の凸版印刷から出版された書籍・雑誌等の組版データに基づく『漢字出現頻度数調査(3)』である。

調査漢字の総数は、約50,000,000字。これに、朝日新聞・読売新聞の紙面データ2ヶ月分と、ウェブサイト調査の抽出データを加え、選定作業が行われた。詳細については、表(1)の通りである。

表(1) 「常用漢字表 I 基本的な考え方 3字種・音訓の選定について」より抜粋

	対象総漢字数	調査対象としたデータ
A 漢字出現頻度数調査(3)※1	49,072,315	書籍 860 冊分の凸版組版データ
B 上記 A の第 2 部調査	3,290,795	A のうち教科書分の抽出データ
C 漢字出現頻度数調査(新聞)※2	3,674,613	朝日新聞 2 ヶ月分の紙面データ
D 漢字出現頻度数調査(新聞)※2	3,428,829	読売新聞 2 ヶ月分の紙面データ
E 漢字出現頻度数調査(ウェブサイト)※3	1,390,997,102	ウェブサイト調査の抽出データ

※1 A の調査対象総文字数は「169,050,703」。また、B とは別に、第 3 部として月刊誌 4 誌の抽出調査も実施している。これらの組版データは、いずれも平成 16 年、17 年、18 年に凸版印刷が作成したものである。

※2 C、D は、いずれも平成 18 年 10 月 1 日～11 月 30 日までの朝刊・夕刊の最終版を調査したデータである。

※3 調査全体の漢字数は「3,128,388,952」。このうち、「電子掲示板サイトにおける投稿本文」のデータを除いたもの。

以上のように、新「常用漢字表」は、「当用漢字表」や旧「常用漢字表」では不可能であった大規模な調査に基づいており、従って、より正確に一般社会における使用漢字の範囲をとらえていると認められる。

ちなみに、字種の決定については、パブリックコメントが 2 度行われている。

なお、「常用漢字表」には音訓が付されているが、本研究では「常用漢字表」に掲げられている漢字を使った漢語を調査範囲にすることから、表に記されている漢字の音にはこだわらない。

「常用漢字表」に掲げられている漢字は 2,136 字であるが、テレビや新聞などではこのほかの漢字も多数使用されている。従って、本調査では「常用漢字表」を「表外漢字字体表」で補う。

表外漢字字体表

「表外漢字字体表」(2000年)は、一般の社会生活において、「常用漢字表」に載せられていない漢字(以下、「表外字」と記す)を使用する場合の「字体選択のよりどころ」を示すために作成されたものである。

この「表外」とは、1981年に制定された「常用漢字表」に掲げられている漢字以外の漢字を指す。

「表外漢字字体表」は、「常用漢字表」と同様、出現頻度数に基づいて作成されている。具体的には、

第1回 凸版印刷・大日本印刷・共同印刷による『漢字出現頻度数調査』

平成9年、文化庁

調査対象漢字総数(三社合計) 37,509,482字

第2回 凸版印刷・読売新聞による『漢字出現頻度数調査(2)』

平成12年、文化庁

調査対象漢字総数 凸版印刷 33,301,934字 読売新聞 25,310,226字

である。

この二表によって、現在使用されている漢語のほぼすべてに用いられる漢字をカバーできる。

第3節 調査資料

字種の範囲を選定したので、次はその字種が用いられた漢語について、調査対象を限定する。

対象とする漢字が、どのような漢語においてどのような音として用いられているのか。これについては、現代の漢語を反映していると考えられる漢和辞典を用いる。

調査対象とする漢和辞典は、次のような基準から以下の三種を選ぶ。

- ①現在広く用いられていること
- ②本調査の内容として信頼性があること
- ③編者の方針、記載内容が偏らないこと

『角川新字源（改訂版）』（以下『角川新字源』）

出版社：角川学芸出版

出版年：1968年初版，1994年改訂版初版，2008年改訂版四十六版

編者：小川環樹・西田太一郎・赤塚忠

収録字数：約 10,000 字

熟語数：約 60,000 余語

字音については、凡例(p.6)において、

「常用漢字表」に掲げられた音以外の音は、わが国で従来ひろく使用されている慣用音または漢音を第一にし、以下、呉音・唐音などの順に必要な音を掲げている。用いられない音は確知できても省略。

のように記されている。このほか、巻末の付録(p.1188)では、

漢音と呉音はそれぞれ独自の音体系を有し、そのだいたいの原則は知られている。だから中国の韻書、たとえば「広韻」または「集韻」の反切がわかれば、それによって漢音および呉音で何とよむかを決定することは困難ではない。その大略は大島正健「漢音呉音の研究」(昭和6年刊)と、大矢透「隋唐音図」(昭和7年刊)によって知られるが、有坂秀世「国語音韻史の研究」(昭和32年。増補版)により修正されるべきである。この辞典に注記する漢呉音は、おもに大矢氏によるが、僅少の修正を加えた。

のように記されている。

『新選漢和辞典（第七版）』（以下『新選漢和辞典』）

出版社：小学館

出版年：1963年初版，1966年改訂新版，2003年第七版

編者：小林信明

収録字数：約 12,780 字

熟語数：約 64,000 語

字音については、「この辞書の使い方」(p.8)において、

「字音」は、わが国に伝来して国語化した漢字の音。呉音、漢音、唐音などのほか、わが国で慣用的に使われている慣用音がある。

のように記されているだけで、これ以外の言及はない。

『学研新漢和大字典』

出版社：学習研究社

出版年：1978年『学研漢和大字典』初版，2005年『学研新漢和大字典』初版

編者：藤堂明保・加納喜光

収録字数：約 19,700 字

熟語数：約 110,000 語

字音については、凡例(p.6)において、

字音は、呉音・漢音・唐宋音・慣用音の区別をして、まず現代仮名遣いで示し、歴史的仮名遣いを（ ）の中に示した。そのさい、国語資料に未見の音であっても『広韻』と『韻鏡』によって同音字から、呉音・漢音を推定して示した。

のように記されている。

字音について見ると、『角川新字源』では、用いられない音は確知できても省略し、一方、『学研新漢和大字典』では、国語資料に未見の音であっても『広韻』と『韻鏡』によって同音字から、呉音・漢音を推定して示す、といったように、辞典によって字音の認め方が異なる。

第4節 調査資料の漢語と漢字音

(1) 現代漢和辞典の漢語

現代漢和辞典の漢語に関しては、本研究の調査対象とした漢和辞典について見ると、
収録語数： 約 60,000 (『角川新字源』) ～110,000 語 (『学研新漢和大字典』)、
収録字数： 約 10,000 (『角川新字源』) ～20,000 字 (『学研新漢和大字典』)
である。これらはいずれも中規模な辞書で、一般に広く使用されているものである。
これらの漢和辞典のうち、『学研新漢和大字典』に収録されている漢語を見ると、

例) 「水」

「水運スイウン」「水干スイカン」「水鏡スイキョウ」「水虞スイグ」
「水源スイゲン」「水交スイコウ」「水晶スイショウ」「水上スイジョウ」
「水草スイソウ」「水滴スイテキ」「水瀧スイタク」「水漏スイロウ」…

のような漢語が収録されている。これらの漢語は、

現代の漢語として日常的に使用されているもの…「水滴スイテキ」など
日常的にはほとんど使用されない(日本の)古漢語…「水干スイカン」など
中国の古典にしか現れないと考えられる漢語 …「水瀧スイタク」(吐魯番文書) など

のように分類できる。

このように見ると、現代の漢和辞典に収録されている漢語のすべてが「現代漢語」とは言いきれない。また、各辞書が立項の必要性を認めなかった“易しい漢語”や“特殊な漢語”は収録語には含まれないが、これらの漢和辞典に収録されている漢語は、主要な現代漢語を概ねカバーしていると考えられるので、現代漢語の調査にこれらの漢和辞典を使用することは、本研究の目的に矛盾しない。

なお、「就活シュウカツ」「歴女レキジョ」などの新漢語も、本調査で使用する漢和辞典には収録されていないが、これらは調査対象に含めないことにする。

(2) 現代漢和辞典の漢字音

現代漢和辞典の漢字音に関しては、すべての辞書に「呉音」「漢音」「唐(宋)音」「慣用音」の類別がなされている。例えば、「茶」の項を見ると、

例) 「茶」

『角川新字源』	呉音「ダ」	漢音「サ・タ」	唐音「サ」	慣用音「チャ」
『新選漢和辞典』	呉音「ダ」	漢音「タ」	唐音「サ」	慣用音「チャ」
『学研新漢和大字典』	呉音「ジャ(チャ)」	漢音「タ」	唐音「サ」	慣用音「チャ」

のように、本調査で使用する三種すべての辞書に字音の類別がされている。

ところが、字音の類別について詳しく見ると、辞書によって呉音に認めている音を漢音に認めたり、逆に漢音に認めている音を呉音に認めたりとまちまちである。例えば、「空」の項を見ると、

例) 「空」

『角川新字源』 呉音「ク」 漢音「コウ」 慣用音「クウ」

『新選漢和辞典』 呉音「クウ」 漢音「コウ」

『学研新漢和大字典』 呉音「クウ」 漢音「コウ」

のように、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』で呉音に認めている「クウ」は、『角川新字源』では慣用音に認めている。このように、字音の認め方は、辞書によって異なる場合が少なくない。

さらに、この「空」のように、日本漢語としての使用が認められる音（「クウ」）や、日本漢語としての使用例がなく、韻書や韻図から導き出されたと認められる音（「コウ」）、「供ク」「公ク」などからの類推によるものと考えられる音（「ク」）が混在している。

『角川新字源』に収録されている「空」の漢語は、

「空間クウカン」「空虚クウキョ」「空言クウゲン」「空疎クウソ」

「空洞クウドウ」「空白クウハク」「真空シンクウ」「天空テンクウ」…

のように、すべてが「クウ」で読まれる。「ク」「コウ」で読まれる例は見出せない。このように、漢和辞典に掲げられている字音は、実際に使用された例がなくても、韻書や韻図から導かれた音が記されている。

次に、漢語の音と漢字の音について言えば、漢字の音は、実際は漢語の音として使用される。従って、漢字の音と漢語の音は一致するはずであるが、漢和辞典に掲げられている字音を見ると、必ずしもそうではない。以下に3つの例を挙げる。

①促音化する字については、「ーッ」形を認めるものと認めないものが存在する。

・三辞書ともに「ーッ」形を認める漢字の例

「合」…「合唱ガッシュョウ」「合体ガツタイ」など

『角川新字源』 呉音「ゴウ(ゴフ)」 漢音「コウ(カフ)」

慣用音「カッ・ガッ・ゴウ(ガフ)」

『新選漢和辞典』 呉音「ゴウ(ガフ)」 漢音「コウ(カフ)」 慣用音「カッ・ガッ」

『学研新漢和大字典』 呉音「ゴウ(ゴフ)・コウ(コフ)」 漢音「コウ(カフ)」

慣用音「カッ・ガッ・ゴウ(ガフ)」

- ・三辞書ともに「ーッ」形を認めない漢字の例

「国」…「国会コッカイ」「国家コッカ」など

『角川新字源』 呉音「コク」漢音「コク」

『新選漢和辞典』 呉音「コク」漢音「コク」

『学研新漢和大字典』 呉音「コク」漢音「コク」

「合」「国」どちらにも促音化した漢語がある。にもかかわらず、三辞書ともに「合」にのみ「ーッ」形を認めており、「国」には「ーッ」形を認めていない。

- ②半濁音化する字の字音は、パ行音で示されず、ハ行音のままである。

例)「発」…「出発シュッパツ」「反発ハンパツ」など

『角川新字源』 呉音「ホチ」漢音「ハツ」慣用音「ホツ」

『新選漢和辞典』 呉音「ホチ」漢音「ハツ」慣用音「ホツ」

『学研新漢和大字典』 呉音「ホツ・ホチ・ハチ」漢音「ハツ」

- ③連濁によって濁音化する字の字音には、それを慣用音とするものと、清音のまま濁音を掲げないものがある。

- ・慣用音とする漢字の例

「宮」…「神宮ジングウ」「遷宮セングウ」など

『角川新字源』 呉音「ク」漢音「キユウ」慣用音「グウ・クウ」

『新選漢和辞典』 呉音「ク」漢音「キユウ(キウ)」慣用音「グウ」

『学研新漢和大字典』 呉音「ク・クウ」漢音「キユウ」慣用音「グウ」

- ・清音のまま濁音を掲げない漢字の例

「北」…「南北ナンボク」など

『角川新字源』 呉音「ホク・ハイ」漢音「ホク・ハイ」

『新選漢和辞典』 呉音「ホク・ハイ」漢音「ホク・ハイ」

『学研新漢和大字典』 呉音「ホク」漢音「ホク」

以上①～③で示したように、本調査で使用する三種すべての辞書から、現代の漢和辞典に掲げられている字音には、漢語の音が反映されていないということが指摘できる。

①については、漢和辞典が字音に「ーッ」形を認めるものと認めないものを入声字別に見ると、調査に使用した漢和辞典が「ーッ」形を認める字は、「合」のように唇内入声字に限られる。舌内入声字と喉内入声字に「ーッ」形を認める辞書は、少なくとも調査に用いた漢和辞典からは見出せない。

例) **唇内入声音**

「合」…「合併ガッペイ」「合体ガッタイ」など

『角川新字源』呉音「ゴウ(ゴフ)」漢音「ゴウ(ガフ)」「コウ(カフ)」

慣用音「カッ・ガッ」

舌内入声音

「出」…「出発シュッパツ」「出産シュッサン」など

『角川新字源』呉音「スイ」漢音「シュツ」「スイ」

喉内入声音

「国」…「国会コッカイ」「国家コッカ」など

『角川新字源』呉音「コク」漢音「コク」

ちなみに、この舌内入声音と喉内入声音の促音化には規則性がある。

例) **舌内入声音**

「出」…「出発シュッパツ」「出典シュッテン」「出産シュッサン」など

→無声子音が後接すると、すべて促音化する

喉内入声音

「国」…「国宝コクホウ」「国体コクタイ」「国産コクサン」

「国会コッカイ」「国家コッカ」など

→喉内入声音と同じ無声子音 **k** が後接する場合に限り促音化する

一方、唇内入声音の促音化には規則性が見出せない。

例) **唇内入声音**

「立」…「立派リッパ」「立体リッタイ」など

→無声子音が後接すると、すべて促音化する

「習」…「習得シュウトク」「習慣シュウカン」など

→無声子音が後接しても、すべて促音化しない

「合」…「合併ガッペイ」「合体ガッタイ」「合格ゴウカク」など

→無声子音が後接すると、促音化する場合としない場合がある

辞書が認める「ーッ」形の有無については、唇内入声音に見られる促音化の不規則性に原因がある可能性がある。但し、すべての唇内入声字に「ーッ」形が認められているわけではない。「入」のように、促音化する漢語があっても漢和辞典では「ーッ」形を認めていない字も存在する。

例) 「入」…「入唐ニットウ」「入声ニッショウ」など

『角川新字源』 呉音「ニユウ(ニフ)」 漢音「ジュウ(ジフ)」 慣用音「ジュ」

この唇内入声音の促音化の問題については、第3章で取り上げる。

②については、「出発シュッパツ」「反発ハンパツ」などのように、入声音や鼻音にハ行子音が後接すると、そのハ行子音はパ行子音(p音)となる。これが「半濁音化」と言われるものであるが、ハ行子音は入声音・鼻音に後接すれば必ず半濁音化というわけではない。

例) 入声音+ハ行子音	唇内入声音・p	「執筆シッピツ」「合併ガッペイ」
	舌内入声音・t	「吉報キッポウ」「絶品ゼッピン」
	喉内入声音・k	「国宝コクホウ」「宿泊シュクハク」
鼻音+ハ行子音	唇内鼻音・m	「審判シンパン」「音符オンブ」
	舌内鼻音・n	「乾杯カンパイ」「伝票デンピョウ」
	喉内鼻音・ŋ	「公平コウヘイ」「豊富ホウフ」

例のように、唇内入声音・舌内入声音および唇内鼻音・舌内鼻音に続くハ行子音は半濁音化するが、喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音は半濁音化しない。

この半濁音化の条件については、第4章で取り上げる。

③については、調査に用いた漢和辞典では、連濁によって濁音化した字の音は「慣用音」に認めている。連濁する字のほかにも、辞書が認めている慣用音には以下のような字がある。

例) 例字	中古音	呉音	漢音	慣用音	
漁	ŋio	ゴ	ギョ	リョウ	漁師リョウシ

「漁」は中古音から呉音「ゴ」、漢音「ギョ」になる。「漁」には呉音「ゴ」で読まれる漢語が見出せないが、「漁業ギョギョウ」のように漢音「ギョ」で読まれるものは存在する。このほか、「漁師リョウシ」の「リョウ」のように、中古音から導き出すことはできない音は、慣用音とされる。

この慣用音については、第5章で取り上げる。

第3章 唇内入声音の促音化について

第1節 中国語中古音における入声韻尾

日本の漢字は中国から伝えられたものであり、漢字とともに当時使われていた漢字の音(字音)も伝えられた。しかし、中国語の音節構造はIMVF/Tで示されるのに対して、日本語はCVのような単純な開音節構造であるため、鼻音韻尾-m,-n,-ŋや入声韻尾-p,-t,-kのように子音韻尾をもつ中国語原音を日本語に受け入れる際、それをどのように写すかというのは大きな問題のひとつとなった。入声韻尾に関しては、舌内入声音-tや喉内入声音-kは狭母音(i,u)をつけて開音節化させ、

舌内入声音-t	一イチ	吉キチ	発ハツ	筆ヒツ	…	一チ・一ツ
喉内入声音-k	色シキ	石セキ	国コク	読ドク	…	一キ・一ク

のように写された。

しかし、唇内入声音-pは単純ではない。具体的には、

- | | | | |
|----|------------|-------------|-----------|
| 1) | 協キョウ(ケフ) | 獵リョウ(レフ) | 一ウ(一フ) |
| 2) | 湿シツ | 接セツ | 一ツ |
| 3) | 雜ゾウ(ザフ)・ザツ | 執シュウ(シフ)・シツ | 一ウ(一フ)・一ツ |

のように写される。1)のように語尾が「一ウ(一フ)」となるもの、2)のように「一ツ」となるもの、さらに3)のように「一ウ(一フ)」と「一ツ」の2通りあるものの3パターンの写され方が存在する。語尾を「一ウ(一フ)」のように狭母音-uをつけて開音節化させるのは、舌内入声音や喉内入声音と同じであるが、「一ツ」は特殊である。これは促音が変化したものだとされる。

入声音-p,-t,-kの促音化に関していえば、舌内入声音-tは、

出：出発シュツパツ 出典シュツテン 出産シュツサン 出家シュツケ …

のように、日本語の無声子音 p(h),t,s,k のどれが後接しても例外なく促音化し、喉内入声音-kは、

国：国宝コクホウ 国体コクタイ 国産コクサン // 国会コクカイ …

のように、喉内入声音と同じ無声子音 k が後接する場合に限り促音化するといったように、舌内入声音と喉内入声音の促音化には規則性が認められる。それに対して、唇内入声音-pの場合は、

立：立派リッパ 立体リッタイ 立春リッシュン 立憲リッケン …

のように、無声子音が後接して促音化する唇内入声音も存在するが、

習：習癖シュウヘキ 習得シュウトク 習作シュウサク 習慣シュウカン …

のように、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声音、さらに、

合：合併ガッペイ 合体ガッタイ 合奏ガッソウ

合法ゴウホウ 合沓ゴウトウ 合成ゴウセイ 合格ゴウカク …

のように、無声子音が後接して促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声音も存在し、唇内入声音の促音化の現れ方は複雑といえる。

本研究では、現代漢語における唇内入声音の促音化について分析し、それをもとに歴史的事態についても推測する。合わせて、字音（漢字の音）と語音（漢語の音）の関係を明らかにしたい。

第2節 唇内入声音に関する従来の指摘（先行研究）

唇内入声音の写され方について、小松(1956)は、

中古音において *implosive* の *-p* を末音に持っていた、いわゆる唇内入声音は、現行通用字音において

甲[ko:]・臘[ro:]・乏[bo:]・合[go:]

業[gjo:]・涉[fo:]・泣[kju:]・入[nju:]

のように表わされ、…中略…

一部には「接」「摂」「湿」「蟄」「颯」「拉」のように、舌内入声に合流して、唇内入声のおもかげを全く留めぬ文字や、立、雑、執のように、ある特定の語結合に、わずかにその痕跡を留めるに過ぎぬものがあり、また、本来の字音は長音化した韻尾を持っていても、或る特別の場合に促音化して読む

(法) 法度 法相宗 法体 法被

の如き字もかなりあって、甚だ複雑である。

と指摘している。さらに、林(1982)は「唇内入声音の現れ方はそれほど単純ではない」と唇内入声音の写され方の複雑さを指摘したうえで、

唇内入声字の多くは、平安時代に固有の日本語の第二音節以下で起った $\Phi u > u$ の変化を反映して、

$-p > -p^u > -\Phi u > -u$

のような変化をたどり、その結果「一ウ」と書かれるようになって、韻尾 *-u* および *-ŋ* を持つ諸字との識別を失ったが、あとに無声の子音が続く場合には促音化を起しやすかったために、そのような結合頻度の高い一部の唇内入声字は、鎌倉時代以後、促音や舌内入声と同じ「ツ」の仮名で表わされることが多くなり、結局その字の字音として「一ツ」のかたちの方が一般化してしまったのである。

と結論をしている。「あとに無声の子音が続く場合には促音化を起しやすかった」という点において、現代漢語ではどの程度の唇内入声音が促音化を起しているのか、まずはその実態を明らかにしたい。

第3節 現代日本漢語における唇内入声音の実態

(1) 調査の対象と範囲

唇内入声音の促音化の調査・分析には、現代の漢語として一定の頻度数がある漢字を選ぶことにする。具体的には、「常用漢字表」の 2,136 字と「表外漢字字体表」(1,022 字から常用漢字と重複する 196 字を除いた 826 字)に載せられている合計 2,967 字を調査の範囲とし、このうち『広韻』に収録されている唇内入声音 77 字の中から、無声子音が後接する漢語のある唇内入声字を対象とする¹⁾。漢語の調査に使用するの以下の漢和辞典である。

『角川新字源(改訂版)』角川学芸出版(1994) 小川環樹ほか編

『新選漢和辞典(第七版)』小学館(2003) 小林信明編

『学研新漢和大字典』学習研究社(2005) 藤堂明保・加納喜光編

(2) 調査結果

上記の漢和辞典に収録されている唇内入声音 77 字について、無声子音が後接した場合、促音化するかないかについて調査した。結果は表(1)のとおりである²⁾。

表(1) 無声子音が後接する唇内入声字

区分	字数	割合	漢字(唇内入声字)
① 促音化しない唇内入声字	50 字	74.6%	厭鴨凹押汲及吸泣急級給怯俠脇頰 協峽挟狭脅業蛤閤劫葺輯拾習襲汁 澁妾摺涉壘挿帖喋貼牒諜沓搭答踏 乏葉笠粒獵
② 促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声字	11 字	16.4%	恰甲合雜執集塔入納法拉
③ 促音化する唇内入声字	6 字	9.0%	圧湿十接摂立
④ 漢語がない唇内入声字	10 字	—	扱蓋笈莢鈇廿睫囁囁捻

無声子音が後接すると規則的に促音化する唇内入声字は、③のように僅か 9.0% (6 字) で全体の一割にも満たない。それに対して、①のように無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字 (74.6%・50 字) や、②のように促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声字 (16.4%・11 字) のほうが圧倒的に多いことが分かる。たしかに有声子音が後接して促音化する唇内入声字は存在しないので、その限りでは「あとに無声子音

が続く場合には促音化を起しやすい」という従来の解釈は誤りではないが、無声子音が後接する唇内入声字が無条件に促音化するわけではない以上、促音化する条件が問題となる。では、表(1)①②③の合計 67 字には、促音化する場合と促音化しない場合とで、どのような条件の違いがあるのか、まずは韻類から検討したい。

第4節 唇内入声音の促音化の条件

(1) 韻類との関連

唇内入声音の促音化の条件について、韻目別に分類すると、表(2)のようになる。

表(2) 韻目別に分類した唇内入声字

摂	韻目 ³⁾	等	促音化しない唇内入声字	促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声字	促音化する唇内入声字
深	緝[iəp]	Ⅲ甲	葺輯拾習襲汁笠粒	執集入	湿十立
	緝[iəp]	Ⅲ乙	汲及吸泣急級給渋	—	—
咸	合[əp]	I	蛤閤沓答踏	合雜納拉	—
	盍[ap]	I	搭	塔	—
	洽[æp]	II	凹峽狹插	恰	—
	狎[ap]	II	鴨押	甲	压
	葉[iäp]	Ⅲ甲	厭妾摺涉葉狎	—	接撰
	業[iäp]	Ⅲ乙	怯脇脅業劫	—	—
	乏[iʷʌp]	Ⅲ乙	乏	法	—
	帖[ep]	IV	俠頰協挾疊帖貼喋牒諫	—	—

表(2)を見ると、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字は、唇内入声音が属する深摂・咸摂のすべての韻目に存在している。一方、促音化する唇内入声字は、緝(甲)・狎・葉(甲)韻に限られている。この3つの韻目の主母音に着目するとə, a, äのように非奥舌的(前舌・中舌)であることが分かるが、前舌・中舌的であることが促音化する条件にはならない。なぜなら、緝(甲)・狎・葉(甲)韻には促音化しない唇内入声字も存在するからである。

促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字は、緝(甲)・合・盍・洽・狎・乏(乙)韻に存在する。勿論、促音化する場合としない場合とがあるこれらの諸字から、促音化に関する条件は導き出すことができない。

緝(乙)・業(乙)・帖韻には、促音化する唇内入声字が存在しないばかりか、促音化したりしなかったりする唇内入声字も存在せず、すべての唇内入声字が促音化しない。この3韻の主母音に関しても、促音化する唇内入声字が属する韻や促音化したりしなかったりする唇内入声字が属する韻と異なる特徴的事実は認められない。

特に緝韻においては、Ⅲ等甲類は、促音化しない唇内入声字のほかにも促音化する唇内入声字や促音化したりしなかったりする唇内入声字が存在するのに対し、Ⅲ等乙類は、

全ての唇内入声字が促音化しない。同じ韻目でも促音化したりしなかったりする。

以上のことから、唇内入声音が促音化するしないに関しては、韻目の差が認められない。韻類との関係は認められないので、次は漢字ごとに検討する。

(2) 後接する無声子音との関連

検討するにあたっては、先にあげた3種の漢和辞典に収録されている全ての漢語を考察の範囲とする。

表の縦列には、字音の第1字目を五十音順に配列(括弧内には歴史的仮名遣いを示す)し、横列には、後接する日本語の無声子音 p(h),t,s,k を配列する。

最初に、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字を掲げる。

該当する全50字について、すべての漢語を示すのはスペースが許さないなので、各字音につき漢字は1字を挙げるにとどめ、漢語も1例のみ示す(資料篇にて50字すべて掲げる)。例えば、字音「キュウ(キフ)」には「汲・及・吸・泣・急・級・給・脅」があるが、ここでは「給」だけを示し、「給」の漢語(後接の子音sの場合)には、「給食・給水・給足」があるが、ここでは「給食」のみ示すこととする。

表(3) 無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
オウ (アフ)	押	押班オウハン		押収オウシュウ 他2	押券オウケン 他2
キュウ (キフ)	給	給費キュウヒ 他2		給食キュウシヨク 他2	給金キュウキン 他4
キョウ (ケフ)	協	協比キョウヒ 他2	協調キョウチョウ 他2	協賛キョウサン 他6	協会キョウカイ 他4
ギョウ (ゲフ)	業		業地ギョウチ	業績ギョウセキ	
コウ (コフ)	閣				閣下コウカ 他1
ゴウ (ゴフ)	業	業報ゴウホウ 他1		業障ゴウショウ	業火ゴウカ 他3

シュウ (シフ)	習	習癖シュウヘキ 他 1	習得シュウトク 他 1	習性シュウセイ 他 7	習慣シュウカン 他 2
ジュウ (ジフ)	渋		渋滞ジュウタイ		
ショウ (セフ)	妾	妾婦ショウフ 他 1	妾宅ショウタク	妾出ショウシュツ	
ジョウ (デフ)	疊	疊峰ジョウホウ	疊重ジョウチョウ 他 1	疊嶂ジョウショウ 他 2	疊句ジョウク 他 3
ソウ (サフ)	挿			挿釵ソウサイ	挿花ソウカ 他 1
チョウ (テフ)	諜	諜報チョウホウ	諜知チョウチ 他 1	諜者チョウシャ	諜記チョウキ 他 1
トウ (タフ)	踏	踏破トウハ 他 2	踏踏トウトウ	踏襲トウシュウ 他 4	踏歌トウカ 他 2
ボウ (バフ)	乏		乏頓ボウトン		乏匱ボウキ
ヨウ (エフ)	厭	厭伏ヨウフク	厭翟ヨウテキ 他 1		
リュウ (リフ)	粒			粒子リュウシ 他 1	
リョウ (レフ)	獵	獵夫リョウフ		獵師リョウシ 他 2	獵奇リョウキ 他 7

※下線部は 2 つ以上読み方がある唇内入声字を示す。

表(3)の唇内入声音は、無声子音 p(h),t,s,k 全てにわたってその前では促音化しないので、後接子音に関する促音化の条件については、特記すべき点を見出せない。

ちなみに、各字に何種類の無声子音が後接するかについて見ると、「渋」のように特定の無声子音しか後接しない漢字もあれば、「乏」や「獵」のように 2 種類 3 種類の無声子音が後接する漢字、「習」のように 4 種類全ての無声子音が後接する漢字もある。無声子音の後接の仕方には違いがあるが、全体としてみると、特定の無声子音しか後接しないために促音化が起きないといった事実は見出せない。

以上のことから、表(1)①の 50 字は後接の子音如何にかかわらず、促音化はしないことが確認できる。

次に、無声子音が後接したために規則的に促音化している唇内入声字について検討する。

該当する漢字 6 字はすべて掲げるが、漢語は 1 例のみを示すにとどめる。

表(4) 無声子音が後接して促音化する唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
アツ	圧	圧迫アツパク 他 2	圧倒アツトウ	圧勝アツショウ 他 8	圧巻アツカン
シツ	湿	湿布シツプ	湿地シツチ	湿疹シツシン 他 1	湿気シツケ 他 1
ジュウ (ジフ)	十 ⁴⁾	十方ジツポウ 他 1	十哲ジツテツ 他 2	十秋ジツシュウ 他 4	十戒ジツカイ 他 2
セツ	接	接吻セツブン 他 1	接待セツタイ 他 2	接戦セツセン 他 5	接客セツキヤク 他 4
	摂		摂津セツツ 他 1	摂取セツシュ 他 3	摂関セツカン 他 2
リツ	立	立派リツパ 他 5	立体リツタイ 他 5	立春リツシュン 他 9	立憲リツケン 他 3

これらの 6 字のうち、「圧・湿・接・摂・立」の字音は「ーツ」となるのに対し、「十」には「ーツ」の形(「ジツ」)が字音として認められていない。現に『学研新漢和大字典』を見ると、呉音には「ジュウ(ジフ)」、漢音には「シュウ(シフ)」が挙げられているのに対して、「ーツ」に相当するものは慣用音として認められている「ジツ」だけである。ちなみに語例には「十哲(ジツテツ)」「十戒(ジツカイ)」などが取られている。「十 ジュウ(ジフ)」は数詞として独立した用法を持っており、おそらくそれが字音として定着していたために、実際には「ジツ」のような促音化した形があるのに、「ジツ」という字音に昇格できなかったものと考えられる。なお、一般に通用している漢語には「十回(ジツカイ・ジュツカイ)」「十周(ジツシュウ・ジュツシュウ)」「十分(ジツブン・ジュツブン)⁵⁾」のように「ジツ」のほかに「ジュツ」となる語形も存在する。これは「ジュウ(ジフ)」形の影響によるものと考えられる。

表(4)の 6 字のうち、「摂」を除く「圧・湿・十・接・立」は、後接する無声子音 p(h),t,s,k すべてに漢語が存在し、どのような子音が後接しても促音化する。「摂」は t,s,k が後接

する場合のみ漢語が存在する。主母音の特徴に着目すると、「湿・十・立」が*-i-*、「接・撰」が*-e-*、「圧」が*-a-*である。

表(3)の促音化しない唇内入声字にさかのぼって見ると、促音化しない字の主母音は奥舌の非広母音*-o-*、*-u-*であり、それ以外の*-i-*、*-e-*、*-a-*は含まれないことが分かる。促音化するかどうかについては、促音化を生じる直前の母音が関係しているかもしれない。

(3) 前接の主母音との関連

表(3)と表(4)に掲げた唇内入声字の主母音についてまとめたものが図(1)である。

図(1) 現代漢語における促音化する字と促音化しない字の主母音

i …	湿十立	}	促音化する
e …	接撰		
a …	圧		
o …	押妾闇など	}	促音化しない
u …	給習粒など		

図(1)は、唇内入声音が促音化する場合としない場合の条件が、前接の主母音にあることを示している。しかし、これは現代仮名遣いでのみ認められる条件であり、歴史的仮名遣いで見ると事情が異なる。

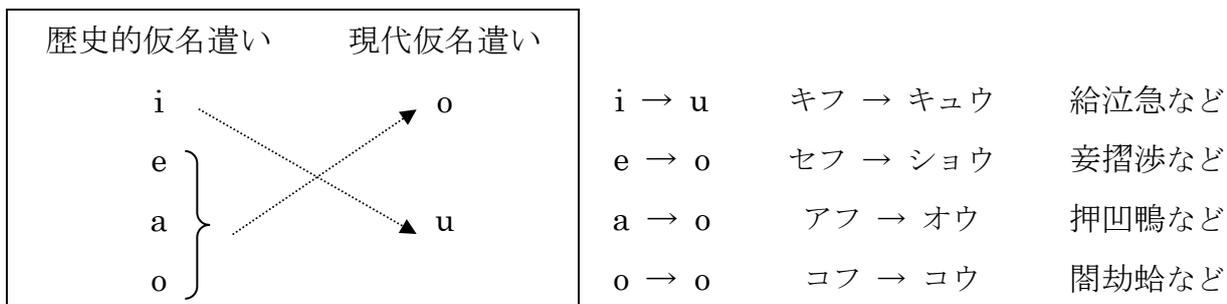
まず、図(2)のように促音化する唇内入声字の主母音が*-i-*、*-e-*、*-a-*である場合には、現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとで違いが見られない。すなわち、主母音が*-i-*、*-e-*、*-a-*である場合には、現代仮名遣いでも歴史的仮名遣いでも促音化する。

図(2) 促音化する唇内入声字の主母音

歴史的仮名遣い		現代仮名遣い			
i	→	i	i → i	リフ → リツ	立
e	→	e	e → e	セフ → セツ	接撰
a	→	a	a → a	アフ → アツ	圧

それに対し、促音化しない唇内入声字の主母音は、図(3)のように現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとで違いが見られる。すなわち、現代仮名遣いでは奥舌の非広母音*-o-*、*-u-*であるが、歴史的仮名遣いには*-o-*のほか*-i-*、*-e-*、*-a-*も認められる。

図(3) 促音化しない唇内入声字の主母音



「→」で示したように、唇内入声字は促音化しない場合、歴史的仮名遣いの-iは現代仮名遣いで-uとなり、同じく-e,-a,-oは-oとなる。主母音-uは歴史的仮名遣いには存在しないが、これは唇内入声字には中国語の母音を-uで写しとるものが存在しなかったためである。

現代仮名遣いの-uは-iΦuが拗音化によってju:となった結果である。

図(2)(3)から次のことが分かる。歴史的仮名遣いで主母音-e,-aをもつ唇内入声字について見ると、促音化する場合は、現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとの違いが見られないのに対し、促音化しない場合は、歴史的仮名遣いの-e,-aが-oに変化している。このo化は、中国語音の日本字音化に、日本語音の変化が重なって、

-ep > -epu > -eΦu > -eu > -o:

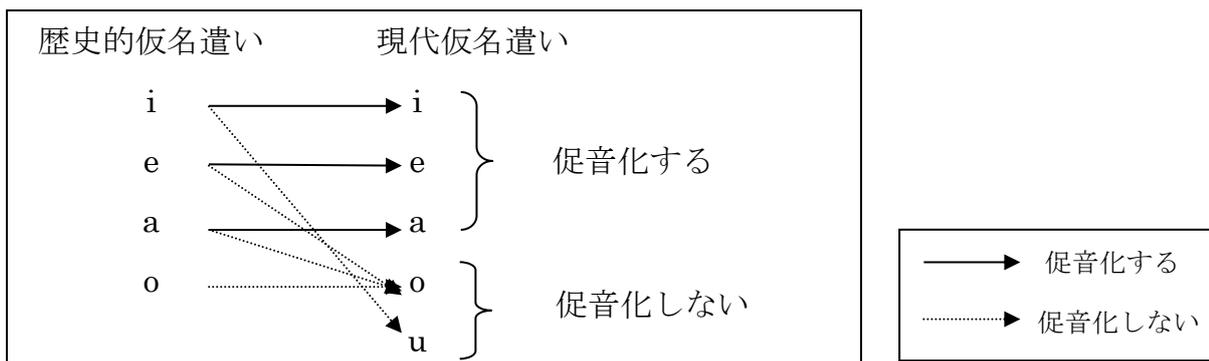
-ap > -apu > -aΦu > -au > -ɔ: > -o:

のような変化を遂げた結果だから、現代仮名遣いの-e,-aは、促音化によって元の母音が保存されたと考えるべきである。

なお、歴史的仮名遣いの主母音-oは、現代仮名遣いでもそのままである。

主母音は促音化の条件にはならないが、促音化する唇内入声字は元の主母音を保存し、促音化しない唇内入声字は拗音化や長音化に伴う母音変化を起こしたために、現代漢語では、図(4)のように促音化と主母音との間に相関性が生じている。

図(4) 促音化する字と促音化しない字の主母音



第5節 唇内入声音の字音と語音

(1) 慣用音としての「ーツ・ーツ」

最後に、無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字を掲げる。

該当する漢字 11 字はすべて掲げるが、漢語は表(3)(4)と同じように 1 例のみを示すにとどめる。

表(5) 無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字
(上段：促音化しない漢語，下段：促音化する漢語)

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
コウ (カフ)	恰				<u>恰好</u> コウコウ 他 1
		恰幅カッフク			<u>恰好</u> カッコウ
	甲	甲兵コウヘイ 他 1	甲宅コウタク 他 2	<u>甲子</u> コウシ 他 4	甲殻コウカク 他 6
			甲冑カッチュウ	<u>甲子</u> カッシ	
ゴウ (ゴフ)	合	合法ゴウホウ 他 7	合沓ゴウトウ 他 3	合成ゴウセイ 他 11	合格ゴウカク 他 15
		合併ガッペイ 他 4	合体ガッタイ 他 2	合奏ガッソウ 他 10	
ゾウ (ザフ)	雑	<u>雑兵</u> ゾウヒョウ		雑炊ゾウスイ 他 2	雑巾ゾウキン 他 1
		雑筆ザッピツ 他 7	雑多ザッタ 他 6	雑草ザッソウ 他 25	雑貨ザッカ 他 12
シュウ (シフ)	集	集配シュウハイ 他 1	<u>集注</u> シュウチュウ 他 5	集成シュウセイ 他 4	<u>集解</u> シュウカイ 他 9
			<u>集注</u> シツチュウ 他 1		<u>集解</u> シツカイ
シュウ (シフ) シツ	執	執縛シツフツ	執着シュウチャク	執心シュウシン	
		執筆シツピツ 他 2	執刀シツトウ 他 2	執策シツサク 他 3	執権シツケン 他 2

トウ (タフ)	塔		<u>塔頭トウトウ</u>	塔勢トウセイ	
			<u>塔頭タッチュウ</u>		
ニュウ (ニフ) ジュ	入	入府ニュウフ 他 2	入党ニュウトウ 他 6	入手ニュウシュ 他 13	入閣ニュウカク 他 14
			<u>入唐ニットウ</u>	<u>入声ニッショウ</u>	入魂 ジツコン/ジュツコン
ノウ (ナフ) ナッ	納	納付ノウフ 他 4	納徴ノウチョウ	納采ノウサイ 他 2	納期ノウキ 他 13
			納豆ナットウ 他 1	納所ナッショ	
ハウ (ハフ) (ホフ) ハッ ホッ	法	法服ハウフク 他 2	法廷ハウテイ 他 10	法則ハウソク 他 13	<u>法界ハウカイ</u> 他 13
		法被ハッピ	法度ハット 他 3	法相ホッソウ 他 5	法華ホッケ/ホケ 他 2
ロウ (ラフ) ラ ラッ	拉		拉丁ラテン 他 1	<u>拉薩ラサ</u> 他 2	拉朽ロウキュウ 他 1
			<u>拉致ラッチ</u>	<u>拉薩ラッサ</u>	

※下線部は読み方が促音化する場合と促音化しない場合が共にある漢語を示す⁶⁾。

表(5)について、無声子音が後接して促音化する場合の主母音を見ると、図(5)のようになる。

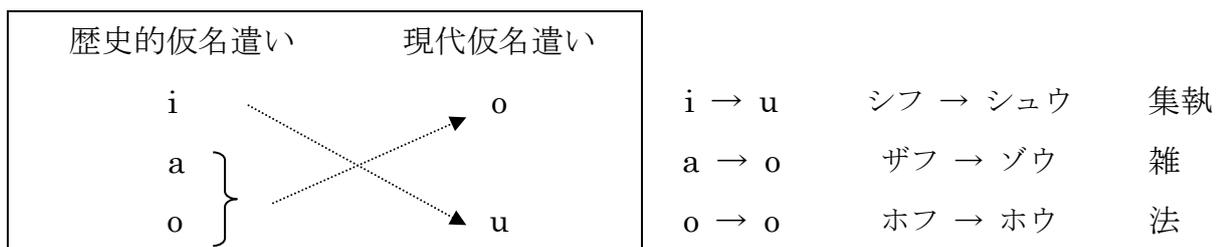
図(5) 表(5)より促音化する場合の主母音

歴史的仮名遣い	現代仮名遣い			
i	→	i	i → i	シフ → シツ 集執
a	→	a	a → a	ザフ → ザツ 雑
(o	→	o)	(o → o	ホフ → ホッ 法)

歴史的仮名遣いで主母音*-i-*、*-a-*をもつ唇内入声字が促音化する場合には、現代仮名遣いでも*-i-*、*-a-*となり、元の主母音を保存している。「法」のような、歴史的仮名遣いで主母音*-o-*をもつ唇内入声字も存在するが、こちらも促音化する場合には、元の主母音*-o-*を保存している。

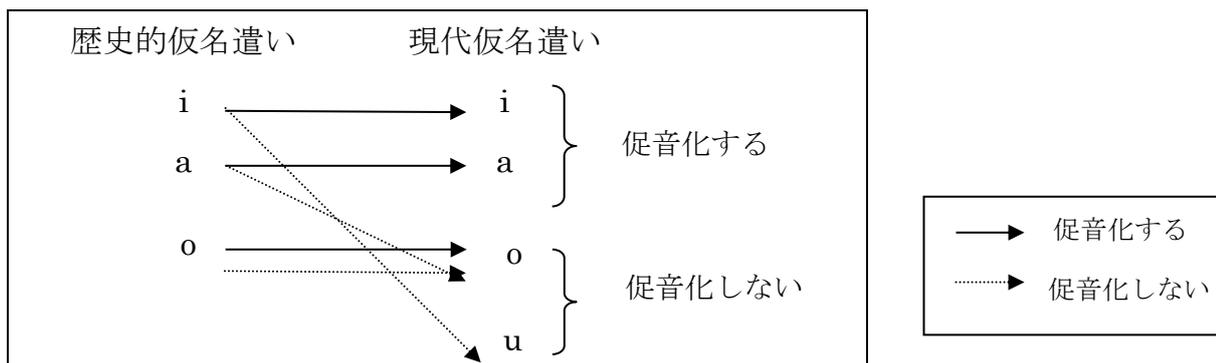
次に、無声子音が後接しても促音化しない場合の主母音を見ると、図(6)のようになる。

図(6) 表(5)より促音化しない場合の主母音



歴史的仮名遣いで主母音*i*をもつ唇内入声字が促音化しない場合には、現代仮名遣いでは*u*となり、歴史的仮名遣いで主母音*a*、*o*をもつ唇内入声字が促音化しない場合には、現代仮名遣いでは*o*となっている。図(5)(6)をまとめると、図(7)のようになり、無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字でも、図(4)の原則と矛盾しない。

図(7) 表(5)に掲げた唇内入声字の主母音



以上、唇内入声音の促音化の条件を、前接母音との関係において眺めたが、これに関連して本研究が調査に用いた漢和辞典には注意すべき点がある。

表(5)の11字のうち、漢和辞典に「ーツ」の形が字音として認められているのは「雑(ザツ)、執(シツ)、拉(ラツ)」の3字のみ、「十(ジュウ・ジツ)」と同じように慣用音として「ーツ」のような促音の形が認められているのは「合(カッ・ガッ)、納(ナッ)、法(ハッ・ホッ)」の3字のみである⁷⁾。ほかの「恰・甲・集・塔・入」の5字にも「恰好(カッコウ)」「塔頭(タッチュウ)」のように漢語の音として実際に「ーツ」の形があるのに、これらの唇内入声字には「ーツ」さえ認められていない。

唇内入声字の促音化についていえば、漢和辞典の字音は漢語の音をそのまま反映しているとはいえない。すなわち、ある字については「ーツ」、ある字については「ーッ」、ある字については促音化する漢語があっても「ーツ」「ーッ」のどちらも認めていない。

この 11 字を 1 字ごとに見ると、字によって促音化する程度が違うことが明らかである。「甲・集・入・納」は促音化する漢語はごく僅かで、促音化しない漢語のほうが圧倒的に多い。一方、「雑・執」の 2 字は促音化しない漢語より促音化する漢語のほうが圧倒的に多い。なお、「合」は促音化する漢語と促音化しない漢語が拮抗している。

ちなみに、促音化する漢語が多い「雑・執」の 2 字は、漢和辞典では「雑(ザツ)、執(シツ)」のように字音として「ーツ」の形が認められている。促音化しない漢語が多い「納・法」や、促音化する漢語と促音化しない漢語が拮抗する「合」に字音として「ーツ」の形が認められているのは、「納豆(ナットウ)」「法華(ホツケ)」「合奏(ガッソウ)」のように、促音化する漢語が日常でよく使われる唇内入声字だからであろう⁸⁾。一方、「集・塔」など、「集解(シツカイ)」「塔頭(タツチュウ)」のように促音化する漢語があっても、それが日常あまり使用されない唇内入声字は、「ーツ」だけでなく「ーッ」も認められていない。

量的には上述の通りであるが、出現位置について見ると、漢和辞典が字音として「ーツ」の形を認める場合は、漢語の末尾に「ーツ」の音があらわれる漢字であることが注目される。例えば、「ーツ」が字音として認められている「雑・執」には、「混雑(コンザツ)」「確執(カクシツ)」(『角川新字源(改訂版)』より抜粋) というように、「ーツ」となる漢語が存在する。しかし、「ーツ」が字音として認められている「納・法・合」と、「ーツ」「ーッ」のどちらも字音として認められていない「集・塔」においては、末尾が「ーツ」となる漢語は、少なくとも漢和辞典からは窺うことができない。

(2) 例外的な字音

最後に、表(5)で掲げた唇内入声字のうち、例外的なものについて検討する。

まず、「合」の字音について、漢和辞典ではその歴史的仮名遣いの示し方として「ガフ(-a-)」としたり「ゴフ(-o-)」としたりしている。例えば、『角川新字源(改訂版)』と『学研新漢和大事典』では「ゴフ」は呉音、「ガフ」は慣用音として認めており、『新選漢和辞典(第七版)』では「ゴフ」は字音として認めておらず、「ガフ」を漢音として認めている。中古音との関係で言えば、「合」は『広韻』では、「答(タフ)」「沓(タフ)」…と同じく、歴史的仮名遣いで主母音-a-を持つ唇内入声字と同じ韻目に収録されている。『韻鏡』では、「雑(ザフ)」「納(ナフ)」…と同じく、こちらも歴史的仮名遣いで主母音-a-を持つ字と同じ「外転第三十九開」に収録されており、これは「合」が本来開口的な音であったことを示唆している。漢和辞典における「ゴフ(-o-)」は日本漢字音の慣用であり、「合」は元の母音「ガフ(-a-)」を保存して「合併(ガッペイ)」「合体(ガッタイ)」のように促音

化したと考えられ、唇内入声字が促音化する場合の原則と矛盾しない。

「法」は、漢和辞典には「ホフ(-o-)」が呉音、「ハフ(-a-)」が漢音、それから促音の形「ホッ(-o-)」「ハッ(-a-)」が慣用音として認められている。原則として、歴史的仮名遣いで主母音-o-を持つ唇内入声字は促音化しないが、「法」の場合は、「法被(ハッピ)」「法度(ハット)」のように、「ハフ(-a-)」には促音の形「ハッ(-a-)」があったために、それに誘引されて「ホッ(-o-)」が生まれたと考えられる。

図(8) 「法」が促音化する場合の主母音

歴史的仮名遣い	現代漢語	
a	→	a
o	→	o

a → a 法被, 法度
o → o 法相, 法華など

「拉」には、漢音として「ロウ(ラフ)」が掲げられており、このほか唐音として「ラ」、慣用音として「ラツ」も掲げられている。「Lhasa」→「拉薩(ラサ)」、「Latin」→「拉丁(ラテン)」のように、音訳として用いる際は、「拉(ラ)」となっている。漢和辞典に収録されている促音化する漢語は「拉致(ラッチ)」「拉薩(ラッサ)」の2つで、いずれも「拉致(ラチ)」「拉薩(ラサ)」のように促音化しない漢語も存在する。これも促音化する場合には元の母音が保存されるという原則と矛盾しない。

第6節 まとめ

唇内入声音が「ㄣ」になるのは、無声子音が続いたために促音化が起こり、それが字音として定着したためだと考えられている。しかし、唇内入声音に無声子音が続いても規則的に促音化が起きるわけではない。現代漢語に用いられる頻度が高い約 3,000 字の調査では、唇内入声字（77 字）のうち、無声子音の前で促音化する唇内入声字は僅か 9.0%（6 字）で、全体の一割にも満たない。それに対して、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字（50 字）や、促音化したりしなかったりする唇内入声字（11 字）のほうが、全体の 91.0%となり圧倒的に多い。もちろん、唇内入声音が促音化する場合は無声子音が後接する場合に限られるから、その限りではこれまでの解釈に誤りはないが、唇内入声音は無声子音の前で規則的に促音化するわけではない以上、促音化する条件が問題になる。

それについては、現代漢語に限って見ると、原音の韻類および後接子音との関連は認められないが、一方、促音化を生じる直前の母音との関連は認められた。すなわち、促音化する唇内入声音の主母音は前舌・中舌的な*-i-*、*-e-*、*-a-*であるのに対して、促音化しない唇内入声音の主母音は奥舌の非広母音*-o-*、*-u-*である。

しかし、歴史的仮名遣いに反映された字音では実態が異なっており、唇内入声音が特定の母音の後で促音化するという事実は認められない。従って、現代漢語における唇内入声音と主母音との相関性は、促音化によって元の母音が保存された結果であると考えられる。

結局、唇内入声音が促音化する音韻論的条件は、明確にすることができない。唇内入声音に無声子音が続く場合に、促音化するか否かは各漢字の個別的要因によると結論せざるを得ない。唇内入声音が無声子音の前で促音化するか否かには任意性があり、何らかの理由で促音化した漢語あるいは漢語群が、ほかの漢語にも促音化をうながしてきたのではないかと推測される。ただし、ほかの漢語を促音化させた元となる漢語を特定することは難しい。

なお、検証の過程を通じて、辞書の字音の性格、特に辞書の字音と漢語の音との関係も明らかになった。「立」のように「ㄣ」が慣用化しているものには「ㄣ」が字音として認められており、「納」のように慣用化していないものでも促音化した漢語に日常語としての用例（「納豆」など）があるものには「ㄣ」が認められているが、「塔」のように促音化した漢語があっても日常語としての用例が乏しいもの（「塔頭」など）には「ㄣ」さえ無視されている。出現位置について見ると、漢和辞典が字音として「ㄣ」の形を認める場合は、漢語の末尾に「ㄣ」の音があらわれる漢字（「混雑」など）であることが注目される。

〈注〉

- 1) 唇内入声音に有声子音が後接する場合、促音化する例は見られないため、本研究では調査の対象外とする。
- 2) 調査で使用了『角川新字源』には、表(1)のほかに「亜・頁・炸・内・汎」の5字が唇内入声字として収録されているが、『広韻』には載せられていないため、調査の対象外とする。
- 3) 各韻の推定音は有坂・河野の説に従う。
緝・葉・業・乏韻の[i]と[i]の下部には[ɿ]、盍韻の[a]の上部には[ʌ]が付される。
- 4) 「十」においては、「十三・十七・十八・十九」のように数詞として用いる場合は促音化しないが、これについては本研究では調査の対象外とする。
- 5) 「時間」として使用する場合、このように読まれる。形容動詞・副詞として使用する場合は「十分(ジュウブン)」と読まれる。
- 6) 促音化する読みと促音化しない読みが共にある漢語には、新旧の差や、意味の違いが認められるものがある。
- 7) 但し『新選漢和辞典(第七版)』には、このほか「甲」も慣用音として「カッ」が認められている。
- 8) 但し「恰好(カッコウ)」は日常よく使うが「ーッ」が認められないのは、あまり漢字が意識されず、口語として「カッコウ」「カッコいい」のようにカタカナが認識されているためだと思われる。

【引用文献】

- 小松英雄(1956)「日本字音における唇内入声音の促音化と舌内入声音への合流過程 一中
世博士家訓点資料からの跡付け一」『国語学』25 国語学会
- 林 史典(1982)『日本語の世界 4 日本の漢字 (第五章 日本の漢字音)』中央公論社

第4章 ハ行子音の半濁音化について

第1節 現代漢語におけるハ行子音の半濁音化

日本語に特有の「清」「濁」という対立概念は、「無声」「有声」と相関する。しかし、清＝無声、濁＝有声ではない。清音＝unmarked、濁音＝marked という関係にあり、清・濁の対立が成り立つのは t,d のような無声・有声の区別をもつ子音に限られる。濁とされるのは、無声・有声の対立をもつ子音体系のうちの有声音だけである。従って、ア行・ナ行・マ行・ラ行など、母音音節や鼻音にはじまる音節あるいは r 行音などは、有声であるにもかかわらず、清音とされる。

これらのうち、ハ行子音については特別な状況がある。現在、ハ行子音は清音＝/h/、濁音＝/b/であるが、歴史的には

$$\begin{array}{l} \text{清音} \quad p > \Phi > h \\ \text{濁音} \quad b \quad \rightarrow \quad b \end{array}$$

とされる。/h/は/p/が変化したものであり、/b/は変化せず古い形がそのまま現在にも保存されている。

では、現在の p (パ行子音) はどう解釈されるべきであろうか。日本語は、「澄んだ音 (清音) ⇔ 濁った音 (濁音)」という捉え方をしており、そのような対立において、無声子音の p は「澄んだ音」に含められることが予想されるにもかかわらず、「半濁音」という「濁った音」のカテゴリーに含められている。これは濁音が「バ」のように付加記号「゛」で表されるのと同様に、半濁音は「パ」のように付加記号「゜」で表されることと関係があるように思われる。すなわち、パ行子音が「濁」のカテゴリーに入れられるのは、この音に濁った印象があるからではなく、濁音と同じような付加記号が用いられることが、半濁音というグループに位置づけされている理由であろう。

次に、日本語におけるパ行音のあらわれ方を見ておきたい。特徴的に見られるのはオノマトペである。例えば、

パラパラ ⇔ バラバラ、ペラペラ ⇔ ベラベラ、ポリポリ ⇔ ボリポリ

のように、パ行音と対になり一定の表現的効果が認められる。

オノマトペを除く和語では、

ひっぱり (引っ張る)、しょっぱい (塩っぱい)、さっぴく (差っ引く)

のように、促音の後にあらわれる。

いわゆる外来語の場合は、

ポイント (point)、 スプリング (spring)、 キャップ (cap)

のように、p 音を写す場合にあらわれる。

一方、漢語の場合は「発表ハッピーウ」「散歩サンポ」などのように、入声音や鼻音の後にハ行子音が続くとパ行子音 (p 音) となる。これが「半濁音化」と言われるものである。ちなみに、現代の日本漢字音には「パ」ではじまるものは存在しない。中国原音には存在したが、日本漢字音では日本語化する過程で $p > \Phi > h$ となったからである。

漢語について詳しく見ると、

入声音＋ハ行子音	唇内入声音-p	圧迫アッ <u>パ</u> ク
	舌内入声音-t	絶品ゼッ <u>ピ</u> ン
	喉内入声音-k	告白コク <u>ハ</u> ク
鼻音＋ハ行子音	唇内鼻音-m	金髪キン <u>パ</u> ツ
	舌内鼻音-n	先鋒セン <u>ポ</u> ウ
	喉内鼻音-ŋ	明白メイ <u>ハ</u> ク

のように、唇内入声音・舌内入声音および唇内鼻音・舌内鼻音にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化するが、喉内入声音と喉内鼻音にハ行子音が続く場合には規則的に半濁音化しない。ただし、喉内入声音に続く場合には「北方ホッポウ」のような例外も存在する。

さらに助数詞では、半濁音化するか否かには規則性がみられず複雑である。例えば「本ホン」の場合は、

一本イッポン、二本ニホン、三本サンボン、四本ヨンホン・シホン、
五本ゴホン、六本ロッポン・ロクホン、七本シチホン、
八本ハッポン・ハチホン、九本キュウホン、十本ジッポン

のように、舌内入声音-t である「一」「七」「八」に「本」が続く場合は半濁音化することが予想されるが、「七」に続く場合は原則に反して半濁音化せず、「八」に続いた場合は半濁音化するものと半濁音化しないものが併存する。喉内入声音-k である「六」に続くハ行子音は半濁音化しないことが期待されるにもかかわらず半濁音化した形を有する。唇内鼻音-m である「三」は半濁音化せず濁音化する。

以上は概略であるが、現代漢語における詳細については、これまでに記述・解釈されていない。そこで本研究では、現代漢語における半濁音化の実態について調査し、それをもとに半濁音化の条件について分析する。

第2節 半濁音化に関する従来の指摘（先行研究）

半濁音化について、小松(1981)は、

「人品」「折半」「分配」「突風」……のように、現代語では鼻音や入声音のあとに続く漢字音形態素が、[p]の形をとってあらわれる。和語型の場合と異なり、漢字音には濁音に始まるものが豊富にあるので、下位要素が濁っていても、本来の濁音なのか連濁によるものなのかが明らかでない。したがって、「やま=どり」の「=どり」を「とり」に還元して理解するようなことも難しい。カ行・サ行・タ行については、これがどうにもならないが、ハ行の場合には[Φ]と[b]とのほかに、もっぱら和語の擬声語・擬態語に用いられる[p]を余分に持っていたので、これをそのために転用することが可能であった。すなわち、和語型なら連濁でバ行音になるところを、漢語型でパ行音にしておけば、本来の濁音と明瞭に区別できるので、そのもとになった清音の形態素への還元が確実になるのである。

と指摘している。さらに、ハ行子音 h- とパ行子音 p- との関係については、

ある時期に、ハ行子音の[p]がすべて[Φ]に移行したのではなく、[p]が[Φ]と[p]とに分裂したのである。機能上の要請として破裂音の状態を維持する必要のあった擬態語・擬声語のそれを[p]のままに残して[Φ]に移行したといったもよう。一方、バ行音にもそれが[b]であり続けなければならない機能上の要請があった。そこで、残された[p]が、部分的ながらバ行との間に清濁関係を保持し、たがいに支えあって両唇破裂音のままに今日まで存続したということになる。

と指摘している。これ以外に本研究のテーマに直接関係する研究は見出し難い。従って、この小松(1981)説を踏まえて半濁音化の条件を考えてみることにする。まずは現代漢語の実態を明らかにしたい。

第3節 現代漢語における半濁音化

(1) 調査の対象と範囲

半濁音化の調査・分析には、現代の漢語として一定の頻度数がある漢字を選ぶことにする。具体的には、「常用漢字表」の2,136字と「表外漢字字体表」(1,022字から常用漢字と重複する196字を除いた826字)に載せられている合計2,967字を調査の範囲とする。この2,967字のうち、ハ行子音で始まる漢字は257字ある。その中から、漢語の下字にハ行子音がくる漢語の例がある203字を調査の対象とする¹⁾。漢語の調査に使用するの以下の漢和辞典である²⁾。

『角川新字源(改訂版)』角川学芸出版(1994) 小川環樹ほか編

『新選漢和辞典(第七版)』小学館(2003) 小林信明編

『学研新漢和大字典』学習研究社(2005) 藤堂明保・加納喜光編

(2) 調査結果

上記の漢和辞典に収録されている漢字 203 字について調査し、それを前接の韻尾ごとに分けて示した。結果については表(1)～(2)に掲げる。なお、すべての漢語を示すのはスペースが許さないので、各韻尾につき 10 語のみ示すにとどめる。助数詞については「発ハツ」と「本ホン」のみ示す。

まず、入声音に続くハ行子音の漢語について見ていく。

表(1) 入声音に続くハ行子音の漢語

唇内入声音・p+ハ行子音	舌内入声音・t+ハ行子音	喉内入声音・k+ハ行子音
執筆シッピツ	吉報キツポウ	国宝コクホウ
湿布シッブ	密封ミツプウ	速報ソクホウ
立腹リップク	出費シュッピ	告白コクハク
接吻セツペン	突破トツパ	続編ゾクヘン
圧迫アツパク	脱皮ダツピ	爆発バクハツ
法被ハツピ	潔癖ケツペキ	宿泊シュクハク
合併ガツペイ	発表ハツピョウ	幕府バクフ
雑費ザツピ	鉄壁テツペキ	激変ゲキヘン
急迫キュウハク	切符キツブ	直筆ジキヒツ
脅迫キョウハク	絶品ゼツピン	黙秘モクヒ
十発ジツパツ・ジュツパツ	一発イツパツ	六発ロツパツ・ロクハツ
	七発シチハツ	
	八発ハツパツ・ハチハツ	
十本ジツポン・ジュツポン	一本イツポン	六本ロツポン・ロクホン
	七本シチホン	
	八本ハツポン・ハチホン	

表(1)より、唇内入声音・p にハ行子音が続く場合は、「急迫キュウハク」「脅迫キョウハク」のような-u 型の唇内入声音を除いて、

「執筆シッピツ」「湿布シッブ」「立腹リップク」「接吻セツペン」

「圧迫アツパク」「法被ハツピ」…

のように、原則的に半濁音化する。

舌内入声音-t にハ行子音が続く場合は、

「吉報キツポウ」「密封ミツプウ」「出費シュツピ」「突破トツパ」
 「脱皮ダツピ」「潔癖ケツペキ」…

のように、唇内入声音-p にハ行子音が続く場合と同様、原則的に半濁音化する。

一方、喉内入声音-k にハ行子音が続く場合は、

「国宝コクホウ」「速報ソクホウ」「告白コクハク」「続編ゾクヘン」
 「爆発バクハツ」「宿泊シュクハク」…

のように、原則的に半濁音化しない。

入声音に続くハ行子音の漢語を見ると、唇内入声音-p と舌内入声音-t に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対して、喉内入声音-k に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない³⁾。

次に、鼻音に続くハ行子音の漢語について見ていく。

表(2) 鼻音に続くハ行子音の漢語

唇内鼻音-m+ハ行子音	舌内鼻音-n+ハ行子音	喉内鼻音-ŋ+ハ行子音
音符オンブ	散髪サンパツ	公平コウヘイ
心配シンパイ	神秘シンピ	往復オウフク
審判シンパン	隠蔽インペイ	豊富ホウフ
妊婦ニンブ	先輩センパイ	政府セイフ
金髪キンパツ	民法ミンポウ	商品ショウヒン
潜伏センブク	山腹サンブク	明白メイハク
添付テンプ	断片ダンペン	強風キョウフウ
岩壁ガンペキ	腕白ワンパク	方法ホウホウ
品評ヒンピョウ	乾杯カンパイ	情報ジョウホウ
店舗テンポ	伝票デンピョウ	蒸発ジョウハツ
三発サンパツ	/	/
三本サンボン		

表(2)より、唇内鼻音-m にハ行子音が続く場合は、

「音符オンブ」「心配シンパイ」「審判シンパン」「妊婦ニンブ」
 「金髪キンパツ」「潜伏センブク」…

のように、原則的に半濁音化する。

舌内鼻音・**n** にハ行子音が続く場合は、

「散髪サンパツ」「神秘シンピ」「隠蔽インペイ」「先輩センパイ」

「民法ミンポウ」「山腹サンブク」…

のように、唇内鼻音・**m** にハ行子音が続く場合と同様、原則的に半濁音化する。

一方、喉内鼻音・**ŋ** にハ行子音が続く場合は、

「公平コウヘイ」「往復オウフク」「豊富ホウフ」「政府セイフ」

「商品ショウヒン」「明白メイハク」…

のように、原則的に半濁音化しない。

鼻音に続くハ行子音の漢語を見ると、唇内鼻音・**m** と舌内鼻音・**n** に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対し、喉内鼻音・**ŋ** に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない。

助数詞について見ると、唇内入声音・**p** である「十」にハ行子音の助数詞が続く場合は「十発ジッパツ」「十本ジッポン」のように原則通り半濁音化する。舌内入声音・**t** にハ行子音の助数詞が続く場合を見ると、「一」は「一発イッパツ」「一本イッポン」のように原則通り半濁音化するが、「七」は「七発シチハツ」「七本シチホン」のように原則に反して半濁音化せず、「八」は「八発ハッパツ・ハチハツ」「八本ハッポン・ハチホン」のように半濁音化するものと半濁音化しないものとが併存する。喉内入声音・**k** である「六」に続くハ行子音は半濁音化しないことが予想されるが、「六発ロツパツ・ロクハツ」「六本ロツポン・ロクホン」のように助数詞に限って半濁音化する形を有する。唇内鼻音・**m** である「三」にハ行子音が続く場合は「三発サンパツ」のように半濁音化するものと「三本サンボン」のように濁音化するものとが併存する。ハ行にはじまる助数詞は、原則に反する例が多く見られ、複雑である。

以上、調査結果をまとめると、唇内入声音・舌内入声音および唇内鼻音・舌内鼻音に続くハ行子音は原則的に半濁音化するのに対し、喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音は原則的に半濁音化しない。但し、助数詞にはこの原則が認められず複雑である。喉内音に限って半濁音化しない理由、それから助数詞については検討する必要がある。

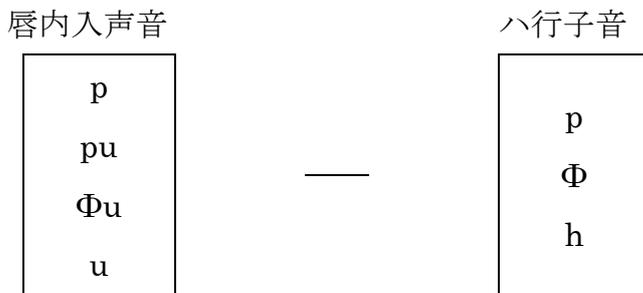
このほか、反規則的に半濁音化する漢語（「北方ホッポウ」など）や、半濁音化しない漢語（「溢浮イツフ」など）、濁音化する漢語（「煎餅センベイ」など）についても検討したい。

第4節 半濁音化の条件

(1) 入声音に続くハ行子音

第3節(2)で述べたように、唇内入声音・pと舌内入声音・tにハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化するのに対し、喉内入声音・kにハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化しない。その理由を検討する。

まず、唇内入声音・pにハ行子音が続く場合、以下のような組み合わせが考えられる。



なお、p,pu,Φu,uに関していえば、 $p > pu > \Phi u > u$ のような歴史的関係がある。

ちなみに、唇内入声音に関していえば、 $p-p(\Phi)$ のような同じ無声の唇音が接続する場合は、必ず促音化する。

例)	執筆シッピツ	sip	—	pitsu
	接吻セツペン	sep	—	pun
	圧迫アツパク	ap	—	paku

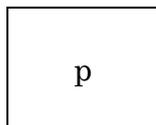
$p-p(\Phi)$ のような関係は、半濁音化するための条件であり、同時に促音化するための条件でもある。従って、半濁音化と促音化は一体となった関係であるといえる。現に、母音化した唇内入声音に続くハ行子音は、原則として半濁音化・促音化のどちらも起こさない。

例)	急迫キュウハク	kju	—	haku
	脅迫キョウハク	kjou	—	haku

これは、前接する唇内入声音が母音化したことにより、 $p-p(\Phi)$ のような関係を保つことができなくなり、前接音の支えがなくなった後続音 $p(\Phi)$ 音が固有語と並行して非唇音化を起こした結果であると考えられる。

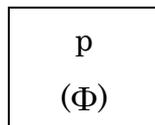
従って、唇内入声音に続くハ行子音が半濁音化するのは唇音が連続する $p-p(\Phi)$ のような関係、すなわち唇内入声音の p とハ行子音の $p(\Phi)$ が結合して唇音性が保存された結果だと考えるのが妥当であるから、半濁音と直前の子音との関係は、

唇内入声音



—

ハ行子音

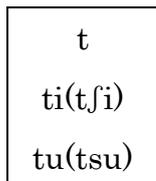


(法被 hap - pi)

のように、開音節化ないし母音化していない唇内入声音 p と、p>Φ>h のような変化をまぬがれた p (もしくは p 音になることができる Φ) との組み合わせ以外、考え難い。

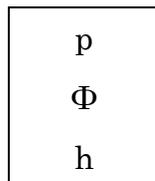
次に、舌内入声音-t にハ行子音が続く場合は、以下のような組み合わせが考えられる。

舌内入声音



—

ハ行子音



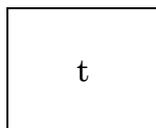
なお、t,ti,tu に関していえば、t>ti>tʃi , t>tu>tsu のような歴史的関係がある。

このうち、舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化するためには、唇内入声音-p に続くハ行子音が半濁音である場合と同じ条件、すなわち、

$x - p(\Phi) \quad x = p$, もしくは p になることができる子音

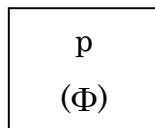
であることが予想される。開音節化した ti や tu にハ行子音が続いた場合、開音節化ないし母音化した唇内入声音の場合と同様に、後続音 p(Φ)音は固有語(日本語)に起きた非唇音化の影響を受けて ti-h, tu-h のようになり、後続するハ行子音は半濁音化しないと考えられるからである。従って、舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化するには、

舌内入声音



—

ハ行子音



のような関係しか残らない。しかし、t-p(Φ)のような関係では半濁音化しない。なぜなら t は唇音ではなく歯茎音であり、p(Φ)が唇音性を保存する条件を満たせないからである。舌内入声音-t に続くハ行子音が半濁音化する場合も p-p(Φ)のような関係にならなければならない。

舌内入声音-t とハ行子音が p-p(Φ)のような関係を作るためには、唇内入声音-p に続くハ行子音が半濁音である場合と同様に、舌内入声音-t も特定の条件下(無声子音が続く場合)で促音化したと考える必要がある。現に、「吉報キッポウ」「密閉ミッペイ」…のように、舌内入声音-t は無声子音が続くと促音化を起こしているから、t と p(Φ)の関係は、

$$t-p(\Phi) \rightarrow /Q/-p(\Phi)$$

$$/Q/ = p \rightarrow p-p(\Phi)$$

のようになり、舌内入声音-tでも $p-p(\Phi)$ のような関係を作り出すことができる。すなわち、舌内入声音-tは促音化し後続子音 $p(\Phi)$ との間に $p-p(\Phi)$ のような関係を作ることによって、ハ行子音の唇音的特徴を保存させたと見なされる。

ここで「促音」の性格を確認しておきたい。促音の持続部は、後続子音の調音点における閉鎖音または摩擦音である。例えば「絶（舌内入声音）」が促音化する場合は、

例)	絶品ゼッピン	zep	—	pin
	絶対ゼツタイ	zet	—	tai
	絶景ゼツケイ	zek	—	kei

のように、絶[zet]の t が後続の無声子音の影響を受けて、 $p-p$, $t-t$, $k-k$ のように同じ無声子音を持続させる関係を作り出している。

この促音のように、舌内入声音-t は後続するハ行子音 $p(\Phi)$ に影響されて、 $t-p(\Phi)$ から $p-p(\Phi)$ のような関係を作り出すことができたと推測できる。

一方、喉内入声音-k はハ行子音が続いても原則として半濁音化しない。なぜなら、喉内入声音は開音節化が早かったために $p-p(\Phi)$ のような関係が作れなかったからと推測できる。喉内入声音にハ行子音が続く場合は、以下のような組み合わせが考えられる。

喉内入声音		ハ行子音
k ki ku	—	p Φ h

なお、k,ki,ku に関していえば、ki, ku は k が開音節化したものである。

このうち、喉内入声音-k に続くハ行子音が半濁音化するための条件は、喉内入声音-k が開音節化せず入声の特徴を保存している場合、すなわち、舌内入声音-t と同様に促音化する場合であると考えられる。その場合、入声音-k は後続する $p(\Phi)$ の影響を受けて $k-p(\Phi)$ から $p-p(\Phi)$ のような関係になるはずであるが、以下のように、喉内入声音-k に続くハ行子音は半濁音化しない。

喉内入声音		ハ行子音	
ki ku	—	h	(激変 geki – hen) (爆発 baku – hatsu)

これはつまり、喉内入声音-k は入声音-p, -t, -k の中で最も早く開音節化したためと推定される。その結果、p-p(Φ)のような関係を作ることができず、従って後続するハ行子音は半濁音化しなかったと考えられる。

(2) 鼻音に続くハ行子音

第3節(2)で述べたように、唇内鼻音-m と舌内鼻音-n にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化するのに対し、喉内鼻音-ŋ にハ行子音が続く場合は原則的に半濁音化しない。その理由を検討する。

鼻音韻尾のうち、唇内鼻音-m と舌内鼻音-n は日本語化の過程を通じて、

唇内鼻音 林リン -m > /N/

舌内鼻音 山サン -n > /N/

のように撥音/N/となり、鼻音が保存されている。

ところで、撥音/N/の音価は促音/Q/と同様に後続の子音に影響される。そのうち、後続子音が鼻音の場合は、

例)	新聞シ <u>ン</u> ブ <u>ン</u>	—	<u>モ</u>	siN <u>bu</u> m	—	<u>mo</u>	(唇音)
			<u>ノ</u>	siN <u>bu</u> n	—	<u>no</u>	(歯茎音)
			<u>ガ</u>	siN <u>bu</u> ŋ	—	<u>ŋa</u>	(軟口蓋音)

のように、撥音/N/は後続鼻音の持続部として実現される。後続子音が鼻音でない場合でも、

例)	乾杯カ <u>ン</u>	—	<u>パイ</u>	ka <u>m</u>	—	<u>pai</u>	(唇音)
	鑑定カ <u>ン</u>	—	<u>テイ</u>	ka <u>n</u>	—	<u>tei</u>	(歯茎音)
	関係カ <u>ン</u>	—	<u>ケイ</u>	ka <u>ŋ</u>	—	<u>kei</u>	(軟口蓋音)

のように、撥音/N/は後続子音の調音点に影響される。

つまり、鼻音に続くハ行子音が半濁音として実現される可能性があるのは p 音そのもの、あるいは Φ 音 (の P 音化) と考えられるから、鼻音に続く半濁音は、

$$/N/ \text{ — } \chi \quad \chi = p(\Phi)$$

のように表され、/N/は p(Φ)音と調音点が同じになる m 音でなければならない。すなわち、鼻音に続くハ行子音の半濁音化は/N/=m となり、m-p(Φ)のように相互が支えあって唇音性を保存できる関係になることが条件である。

一方、喉内鼻音の場合は、

-ŋ' > -ī > -i 明メイ
 -ŋ' -ŋ > -ū > -u 東トウ

のように非鼻音化したために、後続子音と支え合って m-p(Φ)と平行した関係を保てなくなった。このように喉内鼻音-ŋ' -ŋ は非鼻音化して-i,-u になった結果、i-p(Φ), u-p(Φ)のような関係になり、後続音 p 音またはΦ音は前接音の支えがなくなったために、固有語（日本語）に起きた p 音の非唇音化の影響を受けて i-h, u-h のような関係になってしまったと考えられる。

例) 明白メイ — ハク mei — haku
 東北トウ — ホク tou — hoku

このことから、鼻音性を今日に保存している唇内鼻音・舌内鼻音に対して、喉内鼻音は半濁音化の発生以前に、非鼻音化を起こしたということが推測される。

ここで、「半濁音化」について確認しておきたい。「半濁音化」とは、漢語に関していえば、「絶品ゼッピン」「散歩サンポ」のように、促音（入声音）・鼻音の後でハ行音が p 音になることをいう。ハ行音は p>Φ>h のように変化したから、半濁音の元になるハ行子音は p,Φ,h である。しかし、このうち h が p に変化する音韻論的環境は想定しがたい。すなわち、p 音として実現される可能性があるのは、元の（Φ に変化する前の）p または（p が変化した後の）Φ に限定されるから、それが元の p ならば、従来「半濁音化」と考えられていた p 音は、バ行音（b 音）と同様に本来の唇音 p が保存されて生き残ったものであることになる。

(3) 助数詞

第3節(2)で述べたように、ハ行にはじまる助数詞が半濁音化するか否かは原則に反するものが多い。その理由を検討する。

助数詞に前接する数詞の韻尾について見ると、

	入類（入声音）	陽類（鼻音）	陰類
唇内	十	三	二，四，五，九
舌内	一，七，八	—	
喉内	六	—	

のようになる。このうち、入類（入声音）と陽類（鼻音）にハ行にはじまる助数詞が続く場合、半濁音化するか否かについて見ると、表(3)のようになる。

なお、助数詞は「常用漢字表」と「表外漢字字体表」に載せられている合計 2,967 字のうち、助数詞として認められるハ行子音の漢字 19 字（杯・敗・拍・泊・発・版・班・匹・票・品・分・片・辺・遍・編・篇・歩・方・本）を調査の範囲とするが、すべての助数詞を示すのはスペースが許さないので、7 字のみ示すこととする。

表(3) 数詞（入声音・鼻音）に続くハ行子音の助数詞

数詞 助数詞	唇内入声音	舌内入声音			喉内入声音	唇内鼻音
	十	一	七	八	六	三
杯	ジッパイ ジュッパイ	イッパイ	シチハイ ななハイ	ハッポン ハチホン	ロツパイ ロクハイ	サンバイ
発	ジッパツ ジュッパツ	イッパツ	シチハツ ななハツ	ハッパツ (ハチハツ)	ロツパツ ロクハツ	サンパツ
匹	ジッピキ ジュッピキ	イッピキ	シチヒキ ななヒキ	ハッピキ ハチヒキ	ロツピキ ロクヒキ	サンビキ (サンヒキ)
票	ジッピョウ ジュッピョウ	イッピョウ	シチヒョウ ななヒョウ	ハッピョウ ハチヒョウ	ロツピョウ ロクヒョウ	サンピョウ サンヒョウ サンビョウ
分	ジッブン ジュッブン	イッブン	シチフン ななフン	ハッブン ハチフン	ロツブン ロクフン	サンブン サンブン
遍	ジッペン ジュッペン	イッペン	シチヘン ななヘン	ハッペン ハチヘン	ロツペン ロクヘン	サンベン
本	ジッポン ジュッポン	イッポン	シチホン ななホン	ハッポン ハチホン	ロツポン ロクホン	サンボン

表(3)をまとめると、以下のようになる。

数詞 助数詞	唇内入声音	舌内入声音			喉内入声音	唇内鼻音
	十	一	七	八	六	三
半濁音化	○	○	×	△	△	▲

○…全て半濁音化する ×…全て半濁音化しない

△…半濁音化するものとしらないものが併存する

▲…半濁音化するものと濁音化するものが併存する

まず、入声音にハ行にはじまる助数詞が続く場合について検討する。

唇内入声音である「十」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、規則的に半濁音化する。これは入声音・p と半濁音 p が結合して p-p(Φ)のような関係を作り、唇音性の保存ができていたからだと考えられる。なお、「十」においては「ジュー」のほかに、「ジュッー」となる読みが存在するが、これは数詞「ジュウ」形が促音化したものと見なされる。

舌内入声音である「一」「七」「八」にハ行にはじまる助数詞が続く場合については、個別的に検討する必要がある。ハ行にはじまる助数詞のうち、「一」に続く場合は規則的に半濁音化するが、「七」に続く場合は原則として半濁音化しない。「七」にハ行にはじまる助数詞が続く場合、半濁音化すると語形が「一」に助数詞が続く形と近似して「一」と「七」の識別が妨げられる恐れが大きい。例えば、「一本イッポン」に対する「七本*シッポン」の場合がそれである。ちなみに、中国語では同韻である「一 yī」と「七 qī」の音を聞き分けるのは困難であるため、「一」を「yāo」と発音されることがある⁴⁾。これと同じ理由で、日本語でも「一イチ」と「七シチ」は同韻であるがゆえに、近似した形になることを避けた可能性が大きい。「一」は「七」よりも先に数えられるので、漢語形が用いられ、後にくる「七」には固有語の「なな」を用いたと考えられる。その結果、後にハ行子音が続いても半濁音化せず「七本(ななホン→シチホン)」のように漢語形として形成された可能性が大きい。

「八」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、半濁音化するものとししないものが併存する。原則からいえば、「八」は「八本ハッポン」のような半濁音化した数え方が予想される。しかし、数を数える際、「八」の前が「七」であることが注目される。「七」には「七本シチホン」という半濁音化しない形があったために、それとの関連で「八」にも「八本ハチホン」という半濁音化しない形が生じたと考えられる。

喉内入声音である「六」にハ行にはじまる助数詞が続く場合について見ると、原則として喉内入声音・k に続くハ行子音は半濁音化しないので、「六」は「六本ロクホン」という数え方が期待される。しかし、「六」には半濁音化する場合とししない場合「六本ロクホン・ロッポン」、両方の数え方が存在する。喉内入声音・k は「国宝コクホウ k-p(h)」「国体コクタイ k-t」「国産コクサン k-s」などに対する「国会コッカイ k-k」のように、同じ無声子音 k が後接する場合に限り促音化し、それ以外の場合は促音化しない。喉内入声音・k には「六回ロッカイ」「六区ロック」「六個ロッコ」…のように、k-k のような関係を作って促音化した数え方があったために、そこからの類推で「六杯ロクハイ」「六発ロクハツ」「六匹ロクヒキ」「六本ロクホン」…も促音化した形を生じやすかったと考えられる。すなわち、「六」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、k-k という

関係になる場合に促音化し、その語形の影響で半濁音化した形「六本ロツポン」が生じたと考えられる。

次に、鼻音にハ行にはじまる助数詞が続く場合について検討する。

鼻音韻尾を持つ数詞は「三」のみである。鼻音に続くハ行子音は「心配シンパイ」「乾杯カンパイ」…のように半濁音 p になることが期待される。

先に示したハ行子音の助数詞 19 字のうち、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合について半濁音 p・濁音 b・清音 h 別にまとめたものが表 4 である。なお、以下はごく一般的な語形に限って考察する。例えば、「三品」には「サンピン」のほか「サンヒン」という語形があっても、後者は広く用いられる語形ではないと認められるので、表(4)から除いてある。

表(4) 「三」に続くハ行にはじまる助数詞

音価	助数詞	音価	助数詞
p	敗, 拍, 泊, 発, 版, 班, 品, 分, 片, 辺, 編, 篇, 歩, 方 (14 字)	b	杯, 分, 遍, 本 (4 字)
		b,(h)	匹 (1 字)
		p,b,h	票 (1 字)
		h	—

※「分」は意味の相違によって半濁音の読みと濁音の読みになる。

表(4)で掲げた 19 字のうち、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、基本的には原則通り半濁音 p になることが分かる。一方、「杯」「分」「遍」「本」「匹」のように濁音 b になる助数詞が 5 字、「票」のように半濁音 p 濁音 b 清音 h の 3 通りの読み方がある助数詞が 1 字存在する。ちなみに表 4 の 19 字に限っては、清音 h のみの助数詞は存在しない。

濁音 b になる助数詞について検討すると、漢語は歴史的に鼻音の後では「金色コンジキ」「信仰シンガウ」「強盗ガウダウ」のように連濁する傾向が認められており、その連濁のルールが影響して「三」にハ行にはじまる助数詞が続いた場合にも「三杯サンバイ」「三本サンボン」のように濁音 b になる読み方が生まれたと見なされる。

半濁音 p・濁音 b・清音 h の 3 通りの読み方が存在する「票」について見ると、

三票サン — ビョウ (サン — ピョウ) (サン — ヒョウ)

になり、「三票」は基本的に「サンビョウ」のように濁音 b で読まれる。票を数える際、「～ピョウ」「～ヒョウ」のような言い方が無いわけではないが、非標準的な形があらわれるとすれば、これは数詞と助数詞の結合の程度が低い場合であると言えそうである。

cf. 「百」の場合	
「六百ロッキャク」「八百ハッキャク」	→半濁音 p
「三百サンビャク」	→濁音 b
「七百ななヒャク」	→清音 h

「分」は、時間を表す場合は「三分サンブン」「六分ロクブン」のように半濁音 p になり、ある範囲の分量を表す場合は「三分サンブン」（例：三分する）、「六分ロクブン」（例：六分の一）のように濁音 b になる。これは、意味を区別するために半濁音 p と濁音 b の違いを利用する例である。半濁音と濁音は、こういう時にこそ相互に役割を果たす能力が潜在化されていると考えてよいと思われる。

以上のように、「三」にハ行にはじまる助数詞が続く場合は、予想に反して複雑である。

具体的には、「三発サンパツ」のように原則通り半濁音 p になるもの、「三本サンボン」のように濁音 b になるもの、「三票サンビョウ・サンピョウ・サンヒョウ」のように複数の読まれ方が存在するものなどである。「三」に続くハ行にはじまる助数詞 19 字を見ると、原則通り半濁音 p になる助数詞は 14 字で、「鼻音に続くハ行子音は半濁音 p になる」という原則に当てはまるものが圧倒的に多い。しかし、特定の助数詞（「三杯サンバイ」「三本サンボン」など）については連濁のルールに従うものもある。いかなる場合に連濁のルールに従うかは未詳である。非標準的な形（「三票サンピョウ・サンヒョウ」など）は、数詞と助数詞の結合の程度が低い場合にあらわれやすい。

陰類である「二」「四」「五」「九」は、母音の影響で後続するハ行子音は半濁音化しないことが期待される。しかし、「四」には半濁音化する例が見られる。これについては、「四」は「シ」という音を嫌って（「死」を連想させる）、和語「よ」に「ん」を付けて「ヨン」という漢語型の数詞に仕立てた結果、「四」には鼻音的な要素が生まれ、「四発ヨンパツ」「四分ヨンブン」…のように半濁音化する数え方が生じたと考えられる⁵⁾。

（４）反例語

唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音は半濁音 p になることが原則であるが、

- ①濁音 b になる場合 …「昆布コンブ」など
- ②半濁音 p にも濁音 b にもならない場合 …「溢浮イツフ」など

のように、一般原則に従わない場合が存在する。

一方、喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音は半濁音 p にならないことが原則であるが、これについても

- ③半濁音 p になる場合 …「北方ホッポウ」など
- ④濁音 b になる場合 …「銅版ドウバン」など

のように、一般原則に従わない場合が存在する。

次に、これらの漢字について順次検討していく。

最初に、①の唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢語と、④の喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢語を掲げる。

表(5)①唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字

漢字	p になる漢語の例	b になる漢語	漢字	p になる漢語の例	b になる漢語
配	心配シンパイ	按配アンバイ	餅	月餅ゲッペイ	煎餅センベイ
		軍配グンバイ	抱	襟抱キンポウ	辛抱シンボウ
版	絶版ゼツパン	鉛版エンバン	訪	詢訪ジュンポウ	探訪タンボウ
布	湿布シツプ	昆布コンブ			

表(5)より、本調査の範囲内において唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字は 6 字、漢語は 7 語に限られる。表 5 では p になる語例は 1 例のみ示したが、全体を確認するためにすべて掲げ、b になる漢語と対比させると、

配 p 心配シンパイ 分配ブンパイ 年配ネンパイ (軍配グンバイ)

b 按配アンバイ 軍配グンバイ

版 p 出版シュツパン 活版カツパン 新版シンパン 絶版ゼツパン

凸版トツパン 原版ゲンパン

b 鉛版エンバン

布 p 散布サンブ 湿布シツプ 発布ハツプ 宣布センブ 頒布ハンブ

分布ブンブ 綿布メンブ

b 昆布コンブ

餅 p 月餅ゲッペイ

b 煎餅センベイ

抱 p 襟抱キンポウ

b 辛抱シンボウ

訪 p 詢訪ジュンポウ

b 探訪タンポウ

※下線は重複する語形が認められる漢語を示す（以下同）

のようになる。「配」「版」「布」を見ると、原則通り p になる漢語のほうが圧倒的に多い。「軍配」はすべての辞書が濁音形の「グンバイ」を認めているが、『新選漢和辞典』は「グンバイ」と「グンパイ」の両形を認めている。「餅」「抱」「訪」は半濁音化する漢語としない漢語が1例ずつしか存在しないため、原則通り半濁音化する漢字か否かは明確にすることができない。b になる漢語を見ると、「昆布」「煎餅」「辛抱」など、生活の中にとけ込んできた日常語が目立つ。表5のbになる漢語はすべて鼻音に続くハ行子音であることから、いわゆる連濁によって生じた語形が生き残っていると考えられる。

次に、④の喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字について見ると、表(6)のようになる。

表(6) ④喉内の入声音および鼻音に続くハ行子音が濁音 b になる場合がある漢字

漢字	p にならない漢語の例	b になる漢語	漢字	p にならない漢語の例	b になる漢語
版	木版モクハン	銅版ドウバン 石版セキバン	風	北風ホクフウ	中風チュウブウ 屏風ビョウブ
兵	伏兵フクヘイ	精兵セイビョウ	法	合法ゴウホウ	明法ミョウボウ
品	薬品ヤクヒン	上品ジョウボン			

表(6)より、濁音 b になる場合がある漢字は5字、漢語は7語に限られる。この5字も先に示したように、原則通り半濁音 p にならない漢語をすべて掲げ、b になる漢語と対比させると、

版 h 凹版オウハン 重版ジュウハン 木版モクハン 銅版ドウハン

b 銅版ドウバン 石版セキバン

兵 h 伏兵フクヘイ 用兵ヨウヘイ 精兵セイヘイ

b 精兵セイビョウ

風 h 東風トウフウ 北風ホクフウ 洋風ヨウフウ 悪風アクフウ

強風キョウフウ 狂風キョウフウ 学風ガクフウ

清風セイフウ 中風チュウフウ 屏風ヘイフウ

b 中風チュウブウ 屏風ビョウブ

品 h 商品シヨウヒン 賞品シヨウヒン 名品メイヒン 作品サクヒン
 食品シヨクヒン 薬品ヤクヒン 上品ジョウヒン
 b 上品ジョウボン

法 h 刑法ケイホウ 商法シヨウホウ 方法ホウホウ 曆法レキホウ
 用法ヨウホウ 明法メイホウ
 b 明法ミョウボウ

のようになり、表(6)に掲げた漢字 5 字は原則通り半濁音化しない漢語のほうが圧倒的に多いことが分かる。ちなみに、濁音 b になる漢語には「銅版ドウハン」「精兵セイヒョウ」「上品ジョウヒン」…のように濁音 b にならない読みも認められる。「銅版」「石版」を除く 5 語を見ると、

精兵	中風	屏風	上品	明法
セイビョウ	チュウブウ	ビョウブ	ジョウボン	ミョウボウ
セイヘイ	チュウフウ	ヘイフウ	ジョウヒン	メイホウ

のようになる。このうち、「屏風ビョウブ」「上品ジョウボン」「明法ミョウボウ」は、「呉音+呉音」の構成で、濁音は連濁によるものである。「中風」は「中」「風」共に呉音・漢音が同形と認められるから、「中風チュウブウ」も呉音の連濁形と推定することが許される。「精兵セイビョウ」は、唯一「漢音+呉音」の構成になっているが、この場合も連濁形である。以上から、濁音 b になるのは「銅版」「石版」を除いて全てが呉音で連濁によるものである。すなわち、これらは古い呉音の連濁形が伝統的に使われ続けられているものと解される。

「銅版ドウバン」「石版セキバン」については、同韻である「板」が「～板(～バン)」のように慣用的に濁音形で使用され、その類推によって生じた可能性がある。

次に、②の唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音 p にも濁音 b にもならない漢語を掲げる。

表(7) ②唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音 p にも濁音 b にもならない場合がある漢語

漢字	p になる漢語	p にも b にもならない漢語	漢字	p になる漢語	p にも b にもならない漢語
浮	——	溢浮イツフ A	浦	——	烟浦エンホ A
沸	——	畢沸ヒツフツ B	攀	——	牽攀ケンハン A
捕	——	擒捕キンホ A	柏	——	扁柏ヘンハク A
畔	——	枕畔チンハン C	坂	——	峻坂シュンハン A (峻坂シュンパン B)
覆	転覆テンブク 反復ハンブク	掩覆エンフウ A (掩覆エンブ B)	避	——	遁避トンヒ A (遁避トンピ B)
憑	信憑 シンピョウ	文憑ブンヒョウ C	賓	——	燕賓エンヒン A
疲	——	昏疲コンヒ A			

※A は『角川新字源』, B は『新選漢和辞典』, C は『学研新漢和大字典』に収録されている漢語を示す

表(7)のように、唇内・舌内の入声音および鼻音に続くハ行子音が半濁音 p にも濁音 b にもならない漢字は 13 字、漢語は 13 語である。本調査の範囲内において、「覆」「憑」を除く 11 字の漢字には、p になる漢語は見られない。p にも b にもならない漢語について見ると、「溢浮イツフ」「擒捕キンホ」「昏疲コンヒ」「烟浦エンホ」「牽攀ケンハン」「扁柏ヘンハク」「峻坂シュンハン」「燕賓エンヒン」は『角川新字源』にのみ収録、「畢沸ヒツフツ」は『新選漢和辞典』にのみ収録、「枕畔チンハン」「文憑ブンヒョウ」は『学研新漢和大字典』にのみ収録されている。調査した 3 種の辞書に限定すると、「掩覆」「峻坂」「遁避」の 3 語を除いて複数の辞書に立項されている漢語は見られない。このことから、これらの漢語は極めて使用例が限られた語であると推測できる。注目すべきは、『新選漢和辞典』では「掩覆エンブ」「峻坂シュンパン」「遁避トンピ」のように原則通り p 音形が認められる漢語が、『角川新字源』では「掩覆エンフウ」「峻坂シュンハン」「遁避トンヒ」のように p 音形が認められないことである。

以上から、表(7)に掲げた殆どの漢語は通常、辞書の見出しとしてしか目にふれない極めて稀な単語であるために、いわゆる口頭語形（というのは、話されたり読まれたりする語形）が得られないので、辞書ではその漢字に逐字的な読みが示されたことによる結果だと推測できる。特に『角川新字源』には、その性格が顕著に現れている。

最後に、③の喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢語を掲げる。

表(8) ③喉内入声音と喉内鼻音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢字

漢字	pにならない漢語の例	pになる漢語	漢字	pにならない漢語の例	pになる漢語
迫	脅迫キョウハク	逼迫ヒツパク	歩	競歩キョウホ	独歩ドツポ
方	平方ヘイホウ	北方ホツポウ	腑	——	六腑ロツポ

表(8)より、喉内音に続くハ行子音が半濁音 p になる場合がある漢字は 4 字、漢語は 4 語のみである。ちなみに、本調査の範囲内においては p になるすべての漢語は喉内入声音にハ行子音が続く場合であり、喉内鼻音に続くハ行子音は p にならない。

「逼迫ヒツパク」について見ると、「圧迫アツパク」「切迫セツパク」のように同じ漢字が唇内・舌内の入声音の後で促音化を起こし、それからの類推で例外的に半濁音 p の語形が生じたと推測される。「北方ホツポウ」は、「南方ナンポウ」に合わせて半濁音化した語形であると解される（半濁音化に伴って促音化も生じている）⁶⁾。「独歩ドツポ」は、助数詞（「一步イツポ」「六歩ロツポ」など）からの類推で生じた語形と考えられる。「六腑ロツポ」は、「五臓六腑ゴゾウロツポ」のように一語化された漢語である。以上のように、喉内音に続くハ行子音が半濁音 p になる漢語は、ほかの漢語からの類推や類推による統一によって例外的に生じた漢語であると見なされる。

以上、半濁音化のルールに従わない漢語について個別的に眺めたが、このうち①④は連濁の影響によるものと推測できるもの、②は極めて使用例が限られた漢語であるためにその漢字に逐字的な読みが示されたと推測できるもの、③はほかの漢語からの類推や類推による統一によるものと推測できるものが目立つ。反例語にはそれぞれ理由の認められるものが多く見られる。但し、量的に見ると反例語の数は決して多くない。

第5節 まとめ

本章では、現代漢語における半濁音化の実態について調査し、それをもとに半濁音化する条件を分析し、例外として認められる助数詞・反例語についても考察を加えた。

現代漢語に用いられる頻度が高い約 3,000 字の調査では、唇内入声音-p・舌内入声音-t および唇内鼻音-m・舌内鼻音-n に続くハ行子音は半濁音化し、喉内入声音-k と喉内鼻音-ŋ に続くハ行子音は半濁音化しないという規則性が認められる。

入声音に続くハ行子音が半濁音化する場合は、促音化を伴う。その理由は、唇内入声音-p に関していうと、唇音性を保存することができる p-p(Φ)のような関係が、半濁音化する条件であると同時に促音化するための条件であるからと考えられる。舌内入声音-t の場合は、促音化して後続子音 p(Φ)との間に p-p(Φ)のような関係を作ることができたため、半濁音化したと推測できる。従って、半濁音化と促音化は一体となった関係であるということができる。一方、喉内入声音-k は入声音-p,-t,-k の中で最も早く開音節化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内入声音の場合は早く ki, ku のように開音節化してしまったために、半濁音化の条件である p-p(Φ)のような関係を作ることができなかつたと考えるのが妥当である。唇内鼻音-m と舌内鼻音-n に続くハ行子音も半濁音化する。その理由は、両者は日本語化の過程を通じて撥音/N/となり鼻音性が保存され、撥音/N/は後続子音 p(Φ)の影響を受け、m-p(Φ)のような相互に唇音性を保存できる関係を作ることができたためと考えられる。一方、喉内鼻音-ŋ は半濁音化の発生以前に非鼻音化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内鼻音の場合は-i, -u のように非鼻音化してしまったために、半濁音化の条件である m-p(Φ)のような関係を作ることができなかつたと考えるのが妥当である。半濁音化の条件、すなわち「p-p(Φ)もしくは m-p(Φ)のような関係を作ることができる場合のみ半濁音化する」という原則から、従来「半濁音化」と考えられていた p 音は、本来の唇音 p の残存であると認める余地がある。

ハ行にはじまる助数詞が半濁音化するか否かは、原則に反するものが多い。その理由の一つは、固有語（日本語）が用いられる数詞の数え方に原因があると考えられる。例えば「七（ななハツ→シチハツ）」は、固有語を含む形式の影響で、原則に反して半濁音化しない語形が生じたと推定できる。なお、「三」に続く助数詞には「三本サンボン」「三杯サンバイ」のように連濁のルールに従うものが僅かに存在する。

例外として認められる反例語は、量的に見るとごく僅かである。そのうち、「昆布コンブ」「屏風ビョウブ」などは連濁の影響によるもの、「溢浮イツフ」「畢沸ヒツフツ」などは極めて使用例が限られた漢語であるためにその漢字に逐字的な読みが示されたもの、そのほか「北方ホッポウ」のようにほかの漢語からの類推によって統一されたものなど

があり、反例語にはそれぞれ理由の認められるものが多く見られる。

以上、現代漢語における半濁音化の実態を明らかにしたが、それに伴って半濁音化の条件を検討するには「濁音化」との関連も検討すべきことが明らかになった。いかなる場合に連濁のルールに従うのか、これについては今後の課題としたい。

〈注〉

- 1) 本研究ではハ行音のみを調査の対象とする。例えば「板ハン・バン」のようにハ行音のほかにバ行音の読みも認められる場合、バ行音は調査の対象外とする。
- 2) 1つの漢和辞典でその読みが認められても、ごく稀な読み方だとされる場合には、調査の対象外とする。なお、漢和辞典によっては読み仮名が記されていない場合もあるため、その漢語については「新村出編（2008）『広辞苑（第六版）』岩波書店」で読みの確認を行う。
- 3) 但し、舌内入声音+tには「溢浮イツフ」「畢沸ヒツフツ」のように、例外的に半濁音化しない漢語も存在する。これについては、章を改めて検討する。
- 4) このほか「二(èr→liǎng)」、「九(jiǔ→gǒu)」、「十(shí→dòng)」にも特別な読み方が存在し、軍事用語から鉄道・航空など、数字（番号）を混同なく正確に伝達する必要のある分野に拡大している。
- 5) 「四」には、「ヨンー」形のほかに「シー」形の数え方も見られる。例：「四辺(ヨンヘン・ヨンペン・シヘン)」
- 6) このほか、「前半・後半」のような対になる漢語にも一般原則に反して読まれる語形が認められる。「前半」は「ゼンパン」と読まれることが期待されるが、「後半コウハン」は半濁音 p にならないため、それに合わせた語形「前半ゼンハン」が使用されている。

【引用文献】

小松英雄(1981)『日本語の世界 7 日本語の音韻』 pp.275-276 中央公論社

第5章 〈慣用音〉について

第1節 〈慣用音〉研究の目的

日本の漢字は、中国から伝えられたものであり、漢字とともに当時中国で使われていた漢字の音（字音）も伝えられ、「日本漢字音」として日本語に定着している。日本漢字音は、伝わってきた地方や時代の違いで複数の層に分かれており、その主な層は「呉音」と「漢音」である。例えば、「日」には「ニチ」「ジツ」のように、二通りの字音が存在するが、「ニチ」は呉音、「ジツ」は漢音である。

このほか、中古音から説明できないが古くから慣用的に使用されている字音は、「慣用音」として日本語に定着している。

例)

例字	中古音	呉音	漢音	慣用音	
由	øiu	ユ	ユウ(イウ)	ユイ	由緒ユイシヨ
漁	ŋio	ゴ	ギョ	リョウ	漁師リョウシ

上記のとおり、「由」は中古音から呉音「ユ」、漢音「ユウ(イウ)」になることが期待され、現代の漢語では「由来ユライ」、「自由ジユウ」のように読まれる。但し、「由緒ユイシヨ」の「ユイ」のように中古音から説明できない音は、慣用音とされる。「漁」は中古音から呉音「ゴ」、漢音「ギョ」になる。「漁」には呉音「ゴ」で読まれる漢語が見出せないが、「漁業ギョギョウ」のように漢音「ギョ」で読まれるものは存在する。このほか、「漁師リョウシ」の「リョウ」のように、中古音から導き出すことはできない音は、慣用音とされる。

具体的にどのような字音が慣用音と認められているのか。一般的な国語辞典では、

漢音・呉音・唐音以外の誤読などによって生じ、慣用として固定している音

(『日本語大辞典(第2版)』講談社 1995年)

呉音、漢音、唐音には属さないが、わが国でひろく一般的に使われている音

(『日本国語大辞典(第2版)』小学館 2000年)

この程度しか述べられていない。専門の字典でさえ、

日本漢字音のうち、その字の中国語原音および日本漢字音の体系に照らして、期待される字音とは異なり、かつ広く流通する字音をいう。

(『言語学大辞典 術語編』三省堂 1988 年)

わが国で慣用されている字音で、本来の漢音・呉音に合わないものを慣用音という。
(『日本語学研究事典』明治書院 2007 年)

と記されているだけで、国語辞典に示されている内容との差は認められない。

個々の漢字に慣用音を付している漢和辞典も、

わが国で慣用的に使われているもの (『新選漢和辞典』小学館 2003 年)

と記す程度で、慣用音について明確な定義がない。定義がないにも関わらず、漢和辞典に収録されている漢字には慣用音が認められている。

以上に示したように、各辞典・字典において慣用音の定義は曖昧であるが、

- ①日本漢字音に慣用音を認めている
- ②慣用音は、中古音では説明できない音である

という2つの点は、共通して記されている。慣用音は中古音から導き出すことができない音ならば、慣用音の実態を調査することによって、日本漢字音の特質のひとつを明らかにすることができる可能性がある。このような考え方から、この章では、漢和辞典が慣用音と認めるものの分析を通じて、日本漢字音のもつ一面を明らかにする。

本章では、まず次節に示す三種の漢和辞典から、慣用音とされるものを抜き出し、それが慣用音とされる理由を一字ずつ検討する。

第2節 漢和辞典における慣用音の調査およびその結果の概要

2. 1 調査の対象と範囲および調査方法

どのような字音が慣用音として認められているのかを、調査する。調査の対象は、現在の日本語で比較的使用頻度の高いと認められる「常用漢字表」の2,136字と「表外漢字字体表」の826字、合計2,967字とする。

調査は、現在比較的広く用いられている漢和辞典の中から、出版社と編者が異なる次の三種を選び、その範囲内で行う。

『角川新字源(改訂版)』角川学芸出版(1994) 小川環樹ほか編

『新選漢和辞典(第七版)』小学館(2003) 小林信明編

『学研新漢和大字典』学習研究社(2005) 藤堂明保・加納喜光編

この三種の漢和辞典の2,967字から、慣用音の付されたものを選んで、調査・分析する。まず、三種の漢和辞典すべてが慣用音と認めている字を中心に調査する。そのうえで、二種または一種の漢和辞典のみ慣用音と認めている字も参照する。

2. 2 調査結果

2,967字のうち、調査した三種の漢和辞典のいずれかに慣用音として認められている字は254字存在する。このうち、三種の漢和辞典すべてが慣用音として認めている字は、表(1)で掲げた145字である。

表(1) 三種の辞書が慣用音と認める漢字 (145字)

※印は、辞書によって慣用音の音形が異なる字に付す。(以下の表も同じ)

圧アツ	院イン(キン)	員イン(キン)	韻イン(キン)	均イン(キン)
佳カ	掛カ(クッ)	街ガイ	該ガイ	渴カツ
合カッ・ガッ・ ゴウ(ガフ)※	月ガツ・ゲツ※	甲カン・カッ※	含ガン	危キ
欺ギ	戯ギ・ゲ※	犠ギ	喫キツ	暁ギョウ(ゲウ)
紅ク	偶グウ	遇グウ	隅グウ	宮グウ・クウ※
軍グン	茎ケイ	掲ケイ	劇ゲキ	撃ゲキ
研ケン	験ケン	誇コ	格コウ(カウ)	仰コウ(カウ)
郷ゴウ(ガウ)	拷ゴウ(ガウ)	剛ゴウ(ガウ)	石コク・シヤク※	近コン
酢サク	冊サツ	早サツ	雑ザツ・ゾウ※	惨ザン
祉シ	次ジ	滋ジ	璽ジ	除ジ(ヂ)
執シツ・シュ※	湿シツ	実ジツ	十ジツ	煮シヤ

入ジュ	充ジュウ	銃ジュウ	従ジュウ・ジュ※	縦ジュウ
獸ジュウ(ジウ)	汁ジュウ(ジフ)	洩ジュウ(ジフ)	准ジュン	準ジュン
遵ジュン	蒸ジョウ	迅ジン	髓ズイ	樞スウ
崇スウ・ス※	数スウ	税ゼイ・ダツ	説ゼイ・セツ※	責セキ
撰セツ	接セツ	染セン	想ソ	憎ゾウ
造ゾウ(ザウ)	妥ダ	蛇ダ	耐タイ	滯タイ
濁ダク	堪タン	反タン・ヘン※	茶チャ	注チュウ
鑄チュウ(チウ)	緒チョ	賃チン	頭ト	登ト
胴ドウ	匿トク	南ナ	納ナ・ナッ・ナン ・トウ(タフ)※	軟ナン
女ニョウ	濃ノウ	派ハ	陪バイ	暴バク
爆バク	抜バツ	閥バツ	罰バツ・バチ※	般ハン
判バン・ハウ※	板バン	番バン	否ヒ	批ヒ
罷ヒ	匹ヒキ	拍ヒョウ(ヒャウ)	平ヒョウ(ヒャウ)	便ビン
不フ・ブ※	豊ブ	夫フウ	覆フウ・フク※	復フク
沸フツ	噴フン	別ベツ	返ヘン	畝ホ
父ホ	剖ボウ	紡ボウ(バウ)	膨ボウ(バウ)	朴ボク
法ホッ・ハッ	坊ボッ・ボウ※	輸ユ	由ユイ	裕ユウ
立リツ	虜リョ	漁リョウ(レフ)	露ロウ	賄ワイ

次に、二種の辞書が慣用音と認める漢字を表(2)(3)で掲げる。

表(2)『角川新字源』と『新選漢和辞典』が慣用音と認める漢字 (47字)

乙オツ	画ガ(グワ)	訓キン	救グ	身ケン
個コ	拘コウ	可コク	告コク	摻サク
述ジュツ	術ジュツ	手ス	寿ス	足スウ
寸スン	舌ゼツ	絶ゼツ	搜ソウ(サウ)	測ソク
帥ソツ	率ソツ	打ダ	奪ダツ	通ツウ・ツ※
仁ニ	寧ネイ	熱ネツ	培バイ	富フウ
仏ブツ・ボツ※	発ホツ	末マツ	抹マツ	密ミツ
米メ	命メイ	名メイ	銘メイ	鳴メイ
明メイ	盟メイ・ モウ(マウ)※	滅メツ	猛モウ(マウ)	没モツ
物モツ	話ワ			

表(3)『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が慣用音と認める漢字 (31 字)

奥オク	渦カ(クッ)	偽カ(クッ)	競キョウ(キャウ)	峽キョウ(ケフ)
狭キョウ(ケフ)	後ゴ	差サ	宗シュウ	増ゾウ
卒ソツ	停チョウ(チャウ)	弟デ	適テキ	斗ト
土ド	同ドウ	洞ドウ	銅ドウ	動ドウ
童ドウ	博バク	評ヒョウ(ヒャウ)	副フク	母ボ
簿ボ	僕ボク	迷メイ	毛モウ(マウ)・モ※	耗モウ(マウ)
竜リュウ・ロウ※				

最後に、一種の辞書のみ慣用音と認める漢字を表(4)に掲げる。なお、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』については、それだけが慣用音と認める漢字は存在しないため、『角川新字源』のみ慣用音と認める漢字掲げる。

表(4)『角川新字源』のみ慣用音と認める漢字 (31 字)

亜アツ	和オ(ヲ)	空クウ	華ゲ	欠ケツ
顛ゲン	減ゲン	碁ゴ	住ジュウ(ヂュウ)	重ジュウ(ヂュウ)
且ショ	助ジョ	召ショウ(セウ)	推スイ	施セ
障ソウ(サウ)	側ソク	台ダイ	脱ダツ	柱チュウ
駐チュウ	痛ツウ	乳ニュウ	柔ニュウ(ニウ)	農ノウ
封フウ	保ホ	麻マ	売マイ	盲モウ(マウ)
糧ロウ(ラウ)				

以上に示したように、調査で使用した三種の漢和辞典のいずれかに慣用音として認められている漢字は、調査の対象である 2,967 字のうち、254 字存在する。このうち、三種すべての漢和辞典に慣用音として認められている漢字は、表(1)のとおり 145 字で 2,967 字の約 5%である。

表(4)から、『角川新字源』は、他の二種の漢和辞典では慣用音と認めていない多くの漢字に慣用音を認めていることが分かる。

表(2)(3)(4)から、二種または一種の漢和辞典しか慣用音を認めていない漢字でも、「告コク」「同ドウ」「空クウ」など、このように日常よく使用される字音が存在することが分かる。しかし、これらの漢字は、一部の漢和辞典が認めているだけで、どの漢和辞典も慣用音と認めているわけではない。これは「慣用音」の定義が曖昧であることと関係があるように思われる。

では、どのような字音が慣用音とされているのか、一字ずつ検討する。まず、表(1)で示した 145 字について、検討する。

第3節 慣用音と認めるべき理由と範囲

3. 1 慣用音とは見なしがたいもの (36字)

表(1)に掲げた145字について、一字ずつ検討すると、慣用音とは見なしがたい字音が多数認められる。その漢字を挙げて、根拠を示す。

3. 1. 1 漢語の音の一部と認めるべきもの (10字)

①促音「ㄷ」形のもの (7字)

※カッコ内は掲載頁を示す。(以下同)

合カッ・ガッ(p.83)	甲カッ(p.86)	早サッ(p.87)	十ジッ(p.85)
納ナッ(p.84)	法ホッ・ハッ(p.86)	坊ボッ(p.88)	

漢和辞典が認めている慣用音には、促音「ㄷ」形のものが存在する。具体的には、以下の7字である。

「合カッ・ガッ」

字母：匣(濁)

韻目：合(1)

反切：侯閣切

見(清)

合(1)

古沓切(閣)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴウ(ゴフ)	ゴウ(ゴフ)	ゴウ(ゴフ)・コウ(コフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	カッ・ガッ・ゴウ(ガフ)	カッ・ガッ	カッ・ガッ・ゴウ(ガフ)

「合」の中古音¹⁾は、匣母合韻1等、見母合韻1等である。開口の字なので呉音は「ゴウ(ガフ)」「コウ(カフ)」、漢音は「コウ(カフ)」になるのが原則である。

調査に使用した三種の漢和辞典では、すべての辞書が呉音の歴史的仮名遣いに「ゴフ」を認めている。しかし、歴史的にこのように読まれた例は存在しないため、辞書が「ゴフ」にする根拠は明らかでない。中古音では、呉音は「ガフ」となるはずであるが、『角川新字源』と『学研新漢和大字典』では、これを慣用音としている。『新選漢和辞典』では、「合」に「ガフ」という字音を認めていない。

さらに『学研新漢和大字典』では、呉音に「コウ(コフ)」も認めている。これは見母(清)から導き出される音であり原則通りである。ただし、「合」が「コウ(コフ)」で読まれた実例はない。

このほか、三種すべての辞書が漢音に「コウ(カフ)」、慣用音に「カッ」「ガッ」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「合法ゴウホウ」「合沓ゴウトウ」「合成ゴウ

セイ」「合格ゴウカク」…のように「ゴウ」で読まれるものと、「合併ガッペイ」「合体ガッタイ」「合奏ガッソウ」…のように「ガッ」で読まれるもの、「合戦カッセン」のように「カッ」で読まれるものが存在する。一般には、入声音は無声子音が後接すると促音化を起ししやすいが、「合」は無声子音が後接しても促音化しないものと、促音化するもの、各々存在する。

「合」が「ガッ」「カッ」で読まれる理由は、歴史的仮名遣い「ガフ」「カフ」に無声子音が後接して促音化したものと考えられる。しかし、これを慣用音とするなら、「学校ガッコウ」の「学ガッ」や、「国会コッカイ」の「国コッ」のように、促音化する多くの漢字に「ーッ」形を認めなければならないが、漢和辞典が「ーッ」形を字音と認めているのは、ごく一部の漢字である。一部の漢字のみ「ーッ」形をのせるのは、不適切である。そもそも、「ーッ」は字音というよりは、ある特定の条件のもとであらわれる漢語の音である。

「納ナッ」

	字母：泥(清濁)	韻目：合(1)	反切：奴荅切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ノウ(ナフ)	ノウ(ナフ)	ノウ(ナフ)(ノフ)
漢音	ドウ(ダフ)	ドウ(ダフ)	ドウ(ダフ)
唐音	—	—	ナ
慣用音	ナ・ナン・トウ(タフ)	ナ・ナッ・ナン・トウ(タフ)	ナ・ナン・トウ(タフ)

「納」の中古音は、泥母合韻 1 等の外転であるから、呉音は「ノウ(ナフ)」、泥母であり漢音は非鼻音化するので「ドウ(ダフ)」になることが期待される。辞書では、呉音は三種すべての辞書が「ノウ(ナフ)」を認めている。合韻は外転なので、『学研新漢和大字典』が「ノフ」を認める理由は明らかでない。漢音は三種すべての辞書が「ドウ(ダフ)」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「納品ノウヒン」「納付ノウフ」「納骨ノウコツ」…のように「ノウ」で読まれるものと、「納得ナットク」「納豆ナットウ」「納所ナッショ」…のように無声子音が後接して促音化した「ナッ」、「納屋ナヤ」「納言ナゴン・ノウゴン」のように「ナ」で読まれるものが存在する。このほか、特殊な読み方として「納戸ナンド」のように「ナン」で読まれるもの、「出納スイトウ」のように「トウ」で読まれるものが一語ずつ存在する。辞書が認めている漢音「ドウ(ダフ)」で読まれる実例はない。

慣用音を見ると、『角川新字源』では「トウ(タフ)」「ナ」「ナン」、『新選漢和辞典』では「トウ(タフ)」「ナ」「ナン」「ナッ」、『学研新漢和大字典』では「トウ(タフ)」「ナン」

「ナッ」のように、辞書によって認めている字音が不統一である。

「ナ」は、唇内入声音が脱落したものと考えられる。

「トウ」で読まれるのは、「出納スイトウ(タフ)」の一語であるが、これは「納(ナフ)」がこの漢語のみ、特別な理由で非鼻音化して「タフ」になったものと考えられる。

「ナ」と「トウ(タフ)」は、「納屋ナヤ」「出納スイトウ」のように日常よく使用される漢語であり、「納ナ+屋ヤ」「出スイ+納トウ」のように分析できるから、慣用音と認めざるを得ない。

それに対して、「ナン」で読まれる「納戸ナンド」は、「ナン/ド」ではなく「ナー/ンド」というように、濁音の前の鼻音が発達した可能性がある。その場合、この「ナン」は慣用音とは認め難い。

「ナッ」を慣用音と認め難い理由は、前述した「合カツ・ガッ」の場合と同じである。

「十ジッ」

	字母：禪(濁)	韻目：緝(3 甲)	反切：是執切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	ジッ	ジッ	ジッ

「十」の中古音は、禪母緝韻 3 等甲類である。禪母は濁紐字なので、呉音は「ジュウ(ジフ)」、無声化した漢音は「シュウ(シフ)」になることが予想される。辞書では、三種すべての辞書が呉音は「ジュウ(ジフ)」、漢音は「シュウ(シフ)」を認めているが、漢音「シュウ(シフ)」で読まれる例は存在しない。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、呉音「ジュウ(ジフ)」は「十義ジュウギ」「十全ジュウゼン」「十二支ジュウニシ」…であり、慣用音「ジッ」は「十戒ジツカイ」「十干ジツカン」「十哲ジツテツ」「十方ジツポウ」…のように、無声子音が後接した場合に促音化した「ーッ」形で読まれる。

漢和辞典では促音化した「ジッ」を字音として認めているが、これは特定の条件で促音化する漢語であり、慣用音と認めるべきではない。その理由は、「合」や「納」の場合と同じである。

「法ホツ・ハツ」

字母：非(清)

韻目：乏(3)

反切：方乏切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホウ(ホフ)	ホウ(ホフ)	ホウ(ホフ)
漢音	ホウ(ハフ)	ホウ(ハフ)	ホウ(ハフ)
慣用音	ホツ・ハツ	ホツ・ハツ	ホツ・ハツ

「法」の中古音は、非母乏韻 3 等である。『韻鏡』では咸摂は開口であるから、呉音・漢音共に「ホウ(ハフ)」になることが期待される。辞書では、三種すべての辞書が呉音「ホウ(ホフ)」、漢音「ホウ(ハフ)」、慣用音「ホツ」「ハツ」を字音として認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「法官ホウカン」「法王ホウオウ」「法楽ホウラク」「法令ホウレイ」「立法リッポウ」…のように、ほとんどの漢語が「ホウ」で読まれる。「法螺ホウラ・ホラ」のみ「ホウ」の短縮形「ホ」で読まれる。

仏教用語では、「法曹ホウソウ・ホツソウ」「法橋ホウキョウ・ホッキョウ」「法体ホウタイ・ホツタイ」…のように、呉音の「ホウ(ホフ)」が使われる習慣がある。しかし、「法」は『韻鏡』では第 41 転に収録されており、外転であるから、本来は・au になることが期待される。「法」が-o-形になる理由は、中古音から説明することができない。この「ホウ(ホフ)」のような音こそ、呉音ではなく、慣用音とすべきである。

慣用音「ホツ」「ハツ」は、「合」「納」「十」の場合と同様、「ホフ」「ハフ」が特定の条件下で促音化した漢語の音であるから、慣用音と認めるべきではない。

「甲カッ」

字母：見(清)

韻目：狎(2)

反切：古狎切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	キョウ(ケフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	カン	カン・カッ	カン

「甲」の中古音は、見母狎韻 2 等の字である。従って、呉音・漢音共に「コウ(カフ)」になることが期待される。

『角川新字源』と『新選漢和辞典』は、中古音から推定される音のとおり、呉音・漢音共に「コウ(カフ)」を認めているが、『学研新漢和大字典』は、呉音に「キョウ(ケフ)」を認めている。しかし、2 等韻が「キョウ(ケフ)」のように拗音で読まれる理由は明らかでない。加えて、「甲」が「キョウ(ケフ)」で読まれた実例はない。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「甲騎コウキ」「甲舎コウシャ」「甲兵コウヘ

イ」「甲虫コウチュウ」…のように、ほとんどの漢語は「コウ」で読まれるが、ごく一部の漢語に「甲板コウハン・カンパン」のように「カン」で読まれるものと、「甲冑カッチュウ」「甲子コウシ・カッシ」のように「カツ」で読まれるものが存在する。ちなみに、『角川新字源』と『学研新漢和大字典』は、「合」に「ガッ」「カツ」、「法」に「ハッ」「ホッ」を認めておきながら、「甲」には「カツ」のように「ーッ」形を認めていない。

「甲」が「カン」で読まれる理由を検討すると、唇内入声音・p に唇音 p が後接する場合、「合併ガッペイ」の「合ガッ」、「立法リッポウ」の「立リッ」のように、唇内入声音・p は促音化を起しやすいが、「甲」の場合は促音化せず、後接する p 音と同じ調音点で唇音性を保存することができる m 音に変化した可能性があり、歴史的仮名遣い「カム」が現代仮名遣いで「カン」と記されたと推測できる。

「甲」が「カツ」となるのは、「コウ」の歴史的仮名遣い「カフ」に無声子音が後接して促音化を起したものと考えられる。これは、無声子音が後接する場合という特定の条件のもとで変化するものと考えられる。

以上から、後接する p 音によって生じた「カン」と、「ーッ」形の「カツ」は、慣用音とは認め難い。

「早サツ」

	字母：精(清)	韻目：皓(1)	反切：子皓切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
漢音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
慣用音	サツ	サツ	サツ

「早」の中古音は、精母皓韻 1 等である。従って、呉音・漢音共に「ソウ(サウ)」になることが原則である。

辞書を見ると、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は呉音・漢音共に「ソウ(サウ)」を認め、『角川新字源』は漢音のみ「ソウ(サウ)」を認めている。漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「早期ソウキ」「早計ソウケイ」「早春ソウシュン」「早朝ソウチョウ」…のように、ほとんどの漢語が「ソウ」で読まれる。

このほか、三種すべての辞書が慣用音として「サツ」を認めている。辞書には、「早急ソウキュウ・サッキュウ」「早速サツソク」の二語が収録されている。

「早」が入声の字なら、3. 1. 1①で掲げた「合」や「納」の場合と同様に、無声子音の前で促音化したものであると考えられるが、「早」は入類の字ではなく陰類の字である。可能性として、「早」が唇内入声音であると誤認され、「合」や「納」と同様の变化を起したと考える余地はある。

いずれにしても、この「サッ」は漢語の中で変化したものであるから、慣用音とは認め難い。

「坊ボッ」

字母：幫(清)

韻目：陽(3 乙)

反切：府良切(方)

並(濁)

陽(3 乙)

符方切(房)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)・ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)・ボウ(バウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボッ	ボッ	ボウ(バウ)・ボッ

「坊」の中古音は、陽韻 3 等乙類の幫母と並母である。呉音は「ホウ(ハウ)」「ボウ(バウ)」、漢音は「ホウ(ハウ)」になることが期待される。

辞書を見ると、呉音は三種すべての辞書が「ボウ(バウ)」を認めており、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は「ホウ(ハウ)」も認めている。漢音は三種すべての辞書が「ホウ(ハウ)」を認めている。『学研新漢和大字典』は、呉音と慣用音に「ボウ(バウ)」を認めている。同じ「ボウ(バウ)」をどのような根拠で呉音・慣用音に区別しているのか、不明である。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「坊主ボウス」「坊塞ボウソク」「坊間ボウカン」「坊本ボウボン」「坊門ボウモン」…のように、すべての漢語が「ボウ(バウ)」で読まれる。「ホウ(ハウ)」で読まれる例は存在しない。

三種すべての辞書が慣用音に「ボッ」を認めているが、これらの辞書に「ボッ」で読む漢語は収録されていない。「坊」が「ボッ」で読まれるのは、「坊ちゃん(ボッチャン)」のように呼称として使用する場合しか考えられない。

「坊」は「早」と同様に陰類の字なので、本来促音の「ボッ」にはならない。可能性として、「ボッチャン」の「チ」は無声子音であり、無声子音の前には促音が起きやすいので、入声音と同じような語形「ーッ」になったものと考えられる。従って、この「ボッ」は、「合」や「納」の場合と同様に、慣用音とは認め難い。

調査に用いた漢和辞典が慣用音と認める「ーッ」形の漢字は、以上に示した 7 字である。現代漢語において促音化する漢語は「絶品ゼッピン」「国会コッカイ」…のように多数あるが、これらの漢字には「ーッ」形の字音が認められていない。ちなみに上記の「早」

「坊」を除く 5 字は、いずれも唇内入声音の字である。これら三種の辞書が、唇内入声音の一部の字に限って「ーッ」形を字音とする理由は、不明である。

②促音「ーッ」形以外のもの(3字)

格コウ(カウ)(p.90) 拍ヒョウ(ヒャウ)(p.91) 夫フウ(p.89)

3. 1. 1①で掲げた漢字のほかに、漢和辞典では、漢語の一部と考えられるものを慣用音と認めているものが存在する。

「夫フウ」

字母：奉(濁)

韻目：麌(3)

反切：防無切(扶符)

非(清)

麌(3)

甫無切(附膚)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ・ブ	フ・ブ	フ・ブ
漢音	フ	フ	フ
慣用音	フウ	フウ	フウ

「夫」の中古音は、奉母麌韻3等と非母麌韻3等である。同じ麌韻であるが、奉母は濁紐字であり、非母は清字であるから、呉音は「ブ」「フ」、漢音は「フ」になることが期待される。

使用した三種すべての辞書が、呉音に「ブ」と「フ」、漢音に「フ」を認め、慣用音に「フウ」をあげている。

現代漢語では、「夫人フジン」「夫家フカ」…のように、「フ」で読まれるものが圧倒的に多いが、「夫婦フウフ」「夫子フウシ」…のように、慣用音「フウ」で読まれるものと、「夫役ブヤク・フエキ」…のように、呉音「ブ」で読まれるものが僅かに存在する。

遇摂の唇音3等において、「フウ」のような長音になる字は存在しない。

「夫」と同じ声符をもつ「扶」「芙」「伋」「月夫(膚)」…は、中古音から呉音・漢音共に「フ」になることが期待され、実際「扶養フヨウ」「芙蓉フヨウ」…のように「フ」で読まれており、「フウ」と読まれる例は存在しない。従って、声符からの類推とは考えにくい。

「夫」は単字で「フウ」と読まれる例はない。「夫フウ+婦フ」のように、二字漢語において一字目を二拍化した語形であると考えられる(同様の例として、現代漢語では「詩歌シイカ」「鼯鼠ヒイキ」などが挙げられる。ちなみに、調査に使用した辞書では「鼯ヒイ」は慣用音と認めているのに対し、「詩シイ」は字音と認めていない)。

一般に、二字漢語には「合格ゴウカク」「法律ホウリツ」のように、四拍のことが多い。しかし、「危機キキ」「地区チク」「由来ユライ」「秘訣ヒケツ」のように、二拍や三拍のものも多数存在する。「夫婦」「詩歌」「鼯鼠」は「フフ」「シカ」「ヒキ」のように、本来二拍になることが期待される漢語である。しかし、これらの漢語がどういう理由で二拍

から三拍になったのかは不明である。「夫婦フウフ」「詩歌シイカ」「鬮眞ヒイキ」のように三拍にして、より安定させた可能性はあるが、これは特定の漢語の、特定の条件の中で発生したものと考えられる。従って、「夫」の固有の音として「フウ」を字音と認めるのは無理がある。

「格コウ(カウ)」

	字母：見(清) 見(清)	韻目：鐸(1) 陌(2)	反切：古落切(各) 古伯切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キヤク	キヤク	キヤク
漢音	カク・ラク	カク	カク
慣用音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)

「格」の中古音は、見母鐸韻 1 等と見母陌韻 2 等である。梗撰の字は口蓋性が強いいため、呉音で拗音が出やすい。現に、梗撰 33 転を見ると、「客キヤク(呉音)」「逆ギヤク(呉音)」のように、2 等韻にもかかわらず呉音が拗音で現れる。従って、「格」の呉音は「キヤク」、漢音は「カク」になることが期待される。

調査に使用した三種すべての辞書は、呉音に「キヤク」を認めている。しかし、「格」が「キヤク」で読まれるのは「格式カクシキ・キヤクシキ」の一語のみであり、しかも一般には「格式カクシキ」で読まれる。

このほか、『角川新字源』のみ漢音に「ラク」を認めているが、実例はない。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「格段カクダン」「格別カクベツ」「格言カクゲン」「品格ヒンカク」「資格シカク」…のように、ほとんどの漢語が「カク」で読まれる。

このほか、「格子コウシ・カクシ」のみ、「コウ(カウ)」で読まれる²⁾。

声符「各」は、「客」「閣」「恪」「咯」「恪」などがあるが、「客員キヤクイン・カクイン」「剣客ケンキヤク・ケンカク」「閣僚カクリョウ」「内閣ナイカク」「恪守カクシュ」「格闘カクトウ」…のように、すべて「キヤク」または「カク」で読まれ、「コウ(カウ)」で読まれる漢語は存在しない。従って、「格コウ(カウ)」が声符からの類推とは考え難い。

「格」は入類の字なので、原則として末尾は「ーウ」にならない。「格」が「コウ(カウ)」で読まれるのは「格子コウシ」の一語に限られるので、これは一種の口語形と考えられる。たとえば、固有語に見られるウ音便と平行した変化として[kakuʃi]が[kauʃi]になった可能性がある。いずれにしても、「格」が「コウ(カウ)」になるのは個別的な例であり、これを固有の字音とは認め難い。従って、「格コウ(カウ)」を慣用音とは認めにくい。

「拍ヒョウ(ヒャウ)」

字母：滂(次清)

韻目：陌(2)

反切：普伯切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ハク	ヒャク
漢音	ハク	ハク	ハク
慣用音	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)

「拍」の中古音は、滂母陌韻 2 等である。喉内入声音なので、呉音は「ヒャク」または「ハク」、漢音は「ハク」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』が「ハク」としている。『学研新漢和大字典』は「ヒャク」を認めているが、実際に使用される例は見出せない。漢音は三種すべてが「ハク」としている。

調査に使用した三種の辞書では、「拍子ヒョウシ」の一語を除いて、「拍手ハクシュ」「拍車ハクシャ」「拍拍ハクハク」「拍板ハクハン」…のようにすべて「ハク」で読まれる。『学研新漢和大字典』が呉音に認めている「ヒャク」で読まれた例は見出せない。

「拍」の声符および同じ声符をもつ字には、「白」「迫」「泊」「伯」「柏」「舶」などがある。

このうち、比較的よく使用される「白」(並母陌韻 2 等)と「迫」(幫母陌韻 2 等)「泊」(並母鐸韻 1 等)を見ると、「白熱ハクネツ」「空白クウハク」(「白夜ビャクヤ」)「迫力ハクリョク」「宿泊シユクハク」「停泊テイハク」などのように、「ハク」(「ビャク」)で読まれる。「ヒョウ(ヒャウ)」で読まれる漢語は見出せない。

調査に用いた辞書に収録されている漢語に関していえば、「拍」が「ヒョウ(ヒャウ)」で読まれるのは「拍子ヒョウシ」のみである。これは「格子コウシ」の場合と同様に、「拍子ヒョウシ」の「拍ヒョウ(ヒャウ)」は、呉音形「ヒャク」が「拍子」の口語形として「ヒャウ」の形を生んだものと推定できる。「ヒャク」が「ヒャウ」になるのは、固有の日本語に発生したウ音便に平行したものと見られるので、慣用音とは認め難い。

3. 1. 2 呉音とみなすべきもの (14 字)

月ガツ・ゲツ(p.93)	含ガン(p.97)	滋ジ(p.95)	実ジツ(p.92)
従ジュウ・ジュ(p.95)	造ゾウ(ザウ)(p.96)	胴ドウ(p.99)	陪バイ(p.94)
抜バツ(p.100)	罰バツ・バチ(p.94)	番バン(p.101)	別ベツ(p.92)
膨ポウ(バウ)(p.99)	賄ワイ(p.98)		

調査に使用した三種の漢和辞典が慣用音と認めているものの中には、本来呉音とみなすべきものが多数存在する。以下に 14 字すべてを示す。

「別ベツ」

	字母：並(濁)	韻目：薛(3 乙)	反切：皮列切 方別切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ベチ	ベチ	ベチ
漢音	—	ヘツ	ヘツ
慣用音	ベツ	ベツ	ベツ

「別」の中古音は、並母薛韻 3 等乙類であり、濁紐字であるから呉音は「ベチ」または「ベツ」、無声化した漢音は「ヘツ」になることが期待される。

呉音は、三種すべての辞書が「ベチ」を認めており、漢音は、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』のみ「ヘツ」を認めている。『角川新字源』は漢音を示していない。

辞書に収録されている漢語を見ると、「別人ベツジン」「別意ベツイ」「別宴ベツエン」「別個ベッコ」「別科ベッカ」「区別ケベツ」「送別ソウベツ」…のように、すべての漢語が「ベツ」で読まれる。「ベチ」「ヘツ」で読まれる例は存在しない。

「別」は舌内入声音の字である。一般に、舌内入声音は呉音で「一チ」または「一ツ」になる。林(1980)によると、舌内入声音の呉音は、主母音が u になる場合は「一ツ」、それ以外は「一チ」となったが、その後「一チ」のほとんどは、「一ツ」へ変化した事実が確認されている³⁾。現代でも「質シツ」を「シチ」(「質屋シチヤ」)、「血ケツ」を「ケチ」(「血縁ケチエン」)と読むように、舌内入声音の呉音で「一チ」になるものは残っている。この「質シツ」「血ケツ」と同じように、「別ベツ」も「ベチ」が変化したものとされる。従って、「ベツ」も呉音の範疇に入れるべきものと考えられる。

「実ジツ」

	字母：牀(濁)	韻目：質(3 甲)	反切：神質切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ジチ	ジチ
漢音	シツ	シツ	シツ
慣用音	ジツ	ジツ	ジツ

「実」の中古音は、牀母質韻 3 等甲類である。濁紐字であるから呉音は「ジチ」または「ジツ」、無声化した漢音は「シツ」になることが原則である。

調査に使用した三種の辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ジチ」を認めており、漢音は三種すべての辞書が「シツ」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「実物ジツブツ」「実力ジツリョク」「実例ジツレイ」「実在ジツザイ」「実施ジツシ」「実証ジツシヨウ」「実態ジツタイ」…のように「ジツ」もしくは「ジツ」で読まれる。「ジチ」「シツ」で読まれる実例はない。

「ジツ」は、「別」の場合と同様に「ジチ」から「ジツ」へ変化した呉音と考えられる。従って、「ジツ」は呉音とすべきである。

「月ガツ(グワツ)・ゲツ」

	字母：疑(清濁)	韻目：月(3乙)	反切：魚厥切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ガチ(グワチ)	ゴチ
漢音	ガツ(グワツ)	ゲツ	ゲツ(グエツ)
慣用音	ゲツ	ガツ(グワツ)	ガツ(グワツ)

「月」の中古音は、疑母月韻3等乙類である。月韻の牙音合口字なので、呉音は「ガチ(グワチ)」または「ガツ(グワツ)」、漢音は「ゲツ(グエツ)」になることが予想される。

調査に使用した辞書の呉音を見ると、『新選漢和辞典』は「ガチ(グワチ)」、『学研新漢和大字典』は「ゴチ」を認め、『角川新字源』は呉音を示していない。漢音については、『角川新字源』は「ガツ(グワツ)」、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は「ゲツ(グエツ)」を認めている。

以上のように、「月」は漢和辞典によって字音の認め方が異なる。慣用音についても、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は「ガツ(グワツ)」を認めているのに対し、『角川新字源』は「ゲツ」を認めており、字音の認め方に違いがある。

『学研新漢和大字典』では呉音に「ゴチ」を認めているが、『韻鏡』外転第二十二合を見ると、「月」と同じ牙音には「元」「阮」「願」があり、例えば「元」は呉音「ガン(グワン)」(「元旦ガントン」)、漢音「ゲン(グエン)」(「元気ゲンキ)」のように、呉音は-a-、漢音は-e-になる。この「元」と同じ牙音の入声字である「月」の呉音を、「ゴチ」とするのは適当ではない。月韻3等乙類の喉音には「遠」「越」があり、これらの呉音は「遠オン」「越オチ」のように-o-になるため、「月」の呉音にも「ゴチ」を認めた可能性がある。

以上から、『角川新字源』が慣用音と認めている「ゲツ(歴史的仮名遣いではグエツ)」は、漢音と認めるべきである。

『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が慣用音と認めている「ガツ(グワツ)」は、「別ベツ」の場合と同様の理由で、呉音と認めるべきである。

「陪バイ」

字母：並(濁)

韻目：灰(1)

反切：薄回切(裴)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ベ
漢音	ハイ	ハイ	ハイ
慣用音	バイ	バイ	バイ

「陪」の中古音は、並母灰韻 1 等である。濁紐字であるから呉音は「バイ」、無声化した漢音は「ハイ」になることが期待される。

調査に使用した辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ベ」を認めている。漢音は三種すべての辞書が「ハイ」を認めている。

漢語を見ると、「陪客バイカク」「陪観バイカン」「陪侍バイジ」「陪乗バイジョウ」「陪審バイシン」「陪席バイセキ」…とすべて「バイ」で読まれる。(但し一語のみ、唐音で読まれる漢語「陪堂ホイトウ」も存在する)。「ベ」「ハイ」で読まれる漢語は存在しない。

「陪」と同じ声符をもつ「倍(海韻)」「培(灰韻)」はすべて 1 等韻であり、中古音から「陪」の呉音は「バイ」になることが予想される。従って、陪の「バイ」は慣用音ではなく、呉音とすべきである。

「罰バツ・バチ」

字母：奉(濁)

韻目：月(3 乙)

反切：房越切(伐)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バチ	バチ	ボチ
漢音	ハツ	ハツ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ・バチ

「罰」の中古音は、奉母月韻 3 等乙類である。濁紐字であるから呉音は「バチ」または「バツ」、無声化した漢音は「ハツ」になることが期待される。

調査に使用した辞書では、呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「バチ」、『学研新漢和大字典』が「ボチ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「ハツ」を認めている。

『学研新漢和大字典』は呉音に「ボチ」を認めている。外転第二十二合の唇音には「翻ホン」「煩ボン」のように、たしかに呉音が-oになる例はあるが、「罰」を「ボチ」と読んだ例はない。従って「ボチ」を呉音とするのは、非現実的である。慣用音としている「バチ」こそ、『角川新字源』と『新選漢和辞典』が認めるように、呉音とすべきである。

辞書に収録されている漢語を見ると、「刑罰ケイバツ」「処罰ショバツ」「懲罰チョウバツ」「罰金バッキン」「罰則バツソク」「罰作バツサク」…のように、すべての漢語が「バ

ツ」または「バツ」で読まれる。「バチ」は調査に使用した辞書には用例が収録されていないが、例えば「罰(バチ)が当たる」という場合、呉音「バチ」で読まれる。

漢和辞典が慣用音と認めている「バツ」は、「別」や「月」の場合と同様に、呉音「バチ」が「バツ」に変化したものと考えられるから、「バツ」は慣用音ではなく呉音とすべきである。

「滋ジ」

字母：牀(濁) 韻目：之(3甲) 反切：疾之切(慈)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	シ	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

「滋」の中古音は、牀母之韻 3 等である。濁紐字なので呉音は「ジ」、無声化した漢音は「シ」になることが原則である。

調査に使用した三種すべての辞書が、呉音・漢音共に「シ」としている。三種すべての辞書が濁紐字である「滋」の呉音に「シ」を認める理由は不明である。漢音は「シ」で中古音と矛盾しないが、「滋」が「シ」で読まれた事例はない。

漢和辞典に収録されている漢語は「滋雨ジウ」「滋味ジミ」「滋養ジョウ」…のように、すべて「ジ」で読まれ、「シ」で読まれる例はない。「滋ジ」は呉音そのものであるべきなのに、慣用音とするのは不適當である。

ちなみに、同じ小韻にある「慈」は、三種すべての辞書が呉音に「ジ」を認めており、漢語は「慈愛ジアイ」「慈善ジゼン」「慈悲ジヒ」…のように全て濁音形「ジ」で読まれる。この「慈ジ」と同様に、「滋ジ」は呉音と認めるべきである。

「従ジュウ・ジュ」

字母：牀(濁) 韻目：鍾(3甲) 反切：疾容切
牀(濁) 用(3甲) 疾用切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュ	ジュウ	ジュ・ジュウ・シュ
漢音	ショウ	ショウ	ショウ
慣用音	ジュウ	ジュ	ジュウ

「従」は2つの韻に属するが、鍾韻と用韻は四声相配するので、一緒に検討する。

「従」は牀母鍾韻 3 等甲類と牀韻用韻 3 等甲類の字である。「従」と同じ通攝の齒音 3 等甲類には「嵩」「種」「衝」「松」などがあるが、呉音形は「嵩高スウコウ」「種子シュ

シ」のように-uu, -u、漢音形は「衝動ショウドウ」「松風ショウフウ」のように-ou で読まれるものが多い。これに従えば、「従」の呉音は濁紐字であるから「ジュウ」または「ジュ」、無声化した漢音は「ショウ」になることが期待される。

従って、漢和辞典が慣用音として認めている「ジュウ」「ジュ」は、どちらも呉音とすべき音である。

調査に使用した三種の辞書を見ると、呉音は『角川新字源』は「ジュ」、『新選漢和辞典』は「ジュウ」、『学研新漢和大字典』は「ジュ」「ジュウ」「シュ」を認めている。漢音は三種すべての辞書が「ショウ」を認めている。慣用音においては、『角川新字源』と『学研新漢和大字典』は「ジュウ」、『新選漢和辞典』は「ジュ」を認めている。

漢語は、「従然ショウゼン」「従親ショウシン」…のように、漢音「ショウ」で読まれる漢語も存在するが、一般には「従順ジュウジュン」「服従フクジュウ」…のように、「ジュウ」が用いられる。この「ジュウ」は呉音として認めても中古音に矛盾しない。『学研新漢和大字典』は「ジュウ」を呉音と慣用音に認めているが、同じ音が呉音かつ慣用音であること自体が不適切である。

このほか、調査に使用した漢和辞典には「従横ジュウオウ・ショウコウ」「従心ジュウシン・ショウシン」のように、呉音「ジュウ」と漢音「ショウ」の両形が認められる漢語や、「従者ジュウシャ・ズサ」のように、呉音「ジュウ」の直音形「ズ」が認められる漢語がある。「ショウ」で読まれる例は少ないが、これを漢音として認めても中古音に矛盾しない。

『角川新字源』と『新選漢和辞典』は、呉音と慣用音の認め方がそれぞれ逆になっている。すなわち、『角川新字源』は呉音に「ジュ」、慣用音に「ジュウ」を認め、『新選漢和辞典』は呉音に「ジュウ」、慣用音に「ジュ」を認めているが、「ジュウ」「ジュ」どちらも呉音と認めるべきである。

「造ゾウ(ザウ)」

字母：従(濁)

韻目：皓(1)

反切：昨早切(阜)

清(次清)

号(1)

七到切(操)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)・ソウ(サウ)
漢音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
慣用音	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)

「造」は2つの韻に属するが、皓韻と号韻は四声相配し、従母と清母はどちらも歯音に属するので、まとめて検討する。

「造」の中古音は、従母皓韻1等韻と清母号韻1等の字である。従母は濁紐字なので

呉音は「ゾウ(ザウ)」、漢音は無声化して「ソウ(サウ)」になることが原則であり、清母は、呉音・漢音共に「ソウ(サウ)」になることが原則である。

調査に使用した辞書を見ると、『角川新字源』は呉音を認めず、漢音「ソウ(サウ)」と慣用音「ゾウ(ザウ)」のみである。『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は、呉音と慣用音に各々「ゾウ(ザウ)」を認めているが、これは

『新選漢和辞典』 皓韻：呉音「ゾウ(ザウ)」 漢音「ソウ(サウ)」

号韻： 一 漢音「ソウ(サウ)」 慣用音「ゾウ(ザウ)」

『学研新漢和大字典』 皓韻：呉音「ゾウ(ザウ)」 漢音「ソウ(サウ)」

号韻：呉音「ソウ(サウ)」 漢音「ソウ(サウ)」 慣用音「ゾウ(ザウ)」

のように、皓韻から導き出される字音と号韻から導き出される字音を区別したからである。皓韻で呉音として認めている「ゾウ(ザウ)」を、号韻で慣用音に示すのは不適當である。従って、「ゾウ(ザウ)」は呉音にのみ認めるべきである。

漢語は「造花ゾウカ」「造語ゾウゴ」「造反ゾウハン」「製造セイゾウ」「構造コウゾウ」…のように、使用した漢和辞典には全て濁音形の「ゾウ(ザウ)」が収録されている。「ソウ(サウ)」で読まれる例は存在しない。

「含ガン」

字母：匣(濁)

韻目：覃(1)

反切：胡男切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴン	ゴン	ゴン(ゴム)
漢音	カン	カン	カン(カム)
慣用音	ガン	ガン	ガン

「含」の中古音は、匣母覃韻1等韻の字である。濁紐字であるから呉音は「ガン(ガム)」、無声化した漢音は「カン(カム)」になることが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音に「ゴン(ゴム)」、漢音に「カン(カム)」を認めている。

「含」が収録されている外転第三十九開は、咸摂であり1等韻の主母音は-aになるはずである。現に、覃・感・勘韻の呉音は「南ナン(ナム)」「感カン(カム)」「暗アン(アム)」などのように、すべての主母音が-aで写されている。

但し、「含」には「阿含経アゴンキョウ」のように、「含ゴン(ゴム)」で読まれる場合がある。これは仏典の音訳として使用された特別な例であり、この場合は「ゴン(ゴム)」は呉音と認められる。従って、「含」は音訳として使用される「ゴン(ゴム)」と中古音から導き出すことができる「ガン(ガム)」の両形を呉音とすべきである。

漢和辞典では「含有ガンユウ」「含味ガンミ」「含情ガンジョウ」「含笑ガンショウ」「包含ハウガン」…のように、調査に用いた辞書には「ガン(ガム)」のみ収録されている。「カン(カム)」で読まれる例はない。

「賄ワイ」

	字母：曉(清)(合)	韻目：賄(1)	反切：呼罪切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ(クエ)
漢音	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)
慣用音	ワイ	ワイ	ワイ

「賄」の中古音は曉母賄韻 1 等である。一般に曉母の字は「灰：呉音・漢音共にカイ(クワイ)」「海：呉音・漢音共にカイ」などのようにカ行になるが、喉音の合口字は、呉音の子音が脱落する場合があります、「賄」はまさにその例である。従って「賄」の呉音は「ワイ」、漢音は「カイ(クワイ)」になることが期待される。

調査に使用した三種の辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ケ(クエ)」を認めており、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は認めていない。このほか、三種すべての辞書が漢音に「カイ(クワイ)」、慣用音に「ワイ」を認めているが、辞書が慣用音に認めているこの「ワイ」こそ、呉音にすべきである。

調査した三種の辞書に収録されている漢語を見ると、「贈賄ゾウワイ・ゾウカイ」のように、「カイ(クワイ)」で読まれるものが一語あるが、この漢語は「ゾウワイ」のように一般には「ワイ」で読まれる。このほかの漢語は「賄賂ワイロ」「収賄シュウワイ」…のように、すべて「ワイ」で読まれる。

『学研新漢和大字典』では呉音に「ケ(クエ)」を認めている。これは「賄」と同じ蟹撰喉音の合口字には「回：呉音エ(エ)、漢音カイ(クワイ)」「会：呉音エ(エ)、漢音カイ(クワイ)」などのように呉音が「エ(エ)」になる例があるので、これからの類推であると推測できるが、「賄」が「ケ(クエ)」で読まれた実例はないので、呉音と認めるのは不適切である。

「膨ボウ(バウ)」

字母：並(濁)

韻目：庚(2)

反切：薄庚切(彭)

並(濁)

映(2)

蒲孟切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ビョウ(ビャウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)

「膨」は2つの韻に属するが、庚韻と映韻は四声相配するので、まとめて検討する。

「膨」の中古音は、並母庚韻 2 等韻と並母映韻 2 等韻であり、濁紐字なので呉音は「ボウ(バウ)」、無声化した漢音は「ホウ(ハウ)」になることが原則である。

三種の漢和辞典では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ビョウ(ビャウ)」を認めており、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は呉音をとっていない。無声化した漢音は、三種すべての辞書が「ホウ(ハウ)」としているが、これは原則通りである。

調査に使用した三種すべての辞書が慣用音としている「ボウ(バウ)」を呉音と認めても中古音に矛盾しないので、これを呉音とすべきである。

調査に使用した三種の漢和辞典には「膨大ボウダイ」「膨張ボウチョウ」「膨満ボウマン」の三語のみ漢語が収録されているが、すべて「ボウ(バウ)」で読まれる。「ハウ(ハウ)」で読まれる例は存在しない。

なお、『学研新漢和大字典』が呉音に認めている「ビョウ(ビャウ)」について言うと、梗摂の唇音には、呉音で「兵ヒョウ(ヒャウ)」「平ビョウ(ビャウ)」「明ミョウ(ミャウ)」などのように、拗音になるものが存在するので、ここからの類推だと推測できるが、「兵」「平」「明」はすべて 3 等韻であり、2 等韻である「膨」が拗音化するのには原則に矛盾する。そのうえ「膨」が「ビョウ(ビャウ)」で読まれた実例はない。従って、「膨」の呉音を「ビョウ(ビャウ)」とするのは不適切である。

「胴ドウ」

字母：定(濁)

韻目：送(1)

反切：徒弄切(洞)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	ドウ	ドウ

「胴」の中古音は、定母送韻 1 等である。濁紐字であるから呉音は「ドウ」、無声化した漢音は「トウ」になることが原則である。

調査に使用した三種の辞書を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ズウ(ヅウ)」を認め、漢音は三種すべての辞書が「トウ」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「胴体ドウタイ」「胴乱ドウラン」…のように、すべての漢語が「ドウ」で読まれる。「ズウ(ヅウ)」「ツウ」「トウ」で読まれた実例はない。

『学研新漢和大字典』が呉音に「ズウ(ヅウ)」を認めるのは、通撰の主母音の現れ方に理由があると考えられる。林(1982)が述べているように、東・鍾韻(上・去声も含む)には、「公ク・コウ」「通ツウ・トウ」「宮クウ・キウ」のように、呉音-u, -uu、漢音-ou, -iu となるものが多い。『学研新漢和大字典』は、この通撰に現れる主母音の特徴から、呉音に「ズウ(ヅウ)」を認めた可能性が高いが実例はない。

「胴」と同じ声符をもつ「同」は、送韻と四声相配する定母東韻 1 等、徒紅切であるから、呉音は「ドウ」、漢音は「トウ」になることが原則である。漢語は「同盟ドウメイ」「同僚ドウリョウ」「同筆ドウヒツ」…のように、すべて「ドウ」で読まれる。この「同ドウ」は呉音と認められているが、同様に「胴ドウ」も呉音とすべきである。「胴ドウ」を慣用音と認める理由や必要はない。

「抜バツ」

字母：並(濁)	韻目：黠(2)	反切：蒲八切
並(濁)	末(1)	蒲撥切(跋)
奉(濁)	月(3 乙)	房越切(伐)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハイ	—	バチ
漢音	ハツ・ハイ	ハツ・ハイ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ

「抜」は 3 つの韻に属するが、すべて山撰唇音濁紐字の入声音であるため、まとめて検討する。

「抜」の中古音は、並母黠韻 2 等、並母末韻 1 等、奉母月韻 3 等乙類である。舌内入声音の濁紐字なので、1 等韻・2 等韻の呉音は「バチ」または「バツ」、無声化した漢音は「ハツ」になるのが原則である。また、3 等韻乙類の呉音は「ベツ」、漢音は「ヘツ」「ベツ」となるのが原則である。

調査に使用した三種の辞書を見ると、呉音は『角川新字源』が「ハイ」、『学研新漢和大字典』が「バチ」を認め、漢音は三種すべてが「ハツ」を認めている。これに加え『角川新字源』と『新選漢和辞典』は「ハイ」も漢音に認めている。この「ハイ」に関しては、『角川新字源』は泰韻と隊韻、『新選漢和辞典』は隊韻も認めているからであるが、

『広韻』には収録されていない。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「抜群バツグン」「選抜センバツ」「抜粋バツスイ」「抜擢バツテキ」…のように、すべて「バツ」または促音形「バツ」で読まれ、「バチ」「ハツ」「ハイ」で読まれる漢語は見出せない。

「抜バツ」は「別ベツ」「罰バツ」の場合と同様、呉音「バチ」が「バツ」に変化したものであると考えられる。従って、「抜バツ」は慣用音ではなく呉音と認めるべきである。

「番バン」

字母：奉(濁)	韻目：元(3 乙)	反切：附袁切(煩)
敷(次清)	元(3 乙)	孚袁切(翻)
滂(次清)	桓(1)	普官切(潘)
幫(清)(合)	戈(1)	博禾切(波)
幫(清)(合)	過(1)	補過切(播)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バン・バ	—	バン・バ・ハ・ボン・ホン
漢音	ハン・ハ	ハン・ハ	ハン・ハ
慣用音	バン	バン	バン

「番」は4つの韻に属する。

元韻に関していうと、奉母3等乙類と敷母3等乙類である。呉音は-o,-a,-e、漢音は-eになるのが原則であるが、漢音の唇音は「反ハン」「発ハツ」などのように-aが現れるので、「番」の呉音は「バン」、漢音は「ハン」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』が「ボン」と「ホン」とし、漢音は三種すべてが「ハン」としている。

桓韻に関していうと、滂母1等なので、呉音・漢音共に「ハン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「バン」とし、漢音は三種すべてが「ハン」としている。

戈韻と過韻は四声相配するのでまとめて検討する。戈韻と過韻に関していうと、幫母1等なので、呉音・漢音共に「ハ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「バ」、『学研新漢和大字典』は「ハ」とし、漢音は三種すべてが「ハ」としている。

辞書が見出し語として立てている漢語では、「番号バンゴウ」「番人バンニン」「番船バンセン」「交番コウバン」「順番ジュンバン」「当番トウバン」…などのように、一般には「バン」で読まれる。但し、「番禺ハンゴウ」(地名)「番陽ハヨウ」(地名)「番番ハハ」

などのように、「ハン」「ハ」で読まれる漢語も存在する。

言うまでもなく、調査の対象とした辞書が三種ともに慣用音としている「番バン」は明らかに呉音である。

調査に使用した三種すべての漢和辞典が認めている慣用音のうち、呉音とみなすべきものは、以上に示したとおりである。

3. 1. 3 漢音とみなすべきもの (7字) (「明メイ」を除く)

佳カ(p.109)	掛カ(クワ)(p.109)	酢サク(p.107)	否ヒ(p.103)
罷ヒ(p.106)	復フク(p.105)	返ヘン(p.108)	(明メイ(p.102))

次に、取り上げた三種の漢和辞典が認めている慣用音のうち、本来の漢音とすべきものを全て抜き出し、検討する。

「明メイ」

	字母：明(清濁)	韻目：庚(3乙)	反切：武兵切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	—	ベイ	メイ
唐音	ミン	ミン	ミン
慣用音	メイ	メイ	—

「明メイ」を慣用音に認めている漢和辞典は二種のみであるが、この「明メイ」については特筆すべき例であるため、ここで検討する。

「明」の中古音は明母庚韻 3 等乙類である。呉音は「ミョウ(ミャウ)」になることが期待される。

漢音は、頭子音に関して言うと、有坂(1940)は、

唐代の西北支那音方言では、明母・泥母の頭音は、一般には[mb-][nd-]のように発音されたが、[-m][-n][-ŋ]のような鼻音で終わる音節では、尾音の影響を受けて、純鼻音[m-][n-]の形で発音される傾向があったらしいのである。

のように指摘している⁴⁾。

漢音の韻尾に関して言うと、林(1982)は、

漢音の場合、日本漢字音に反映された(M)V と F(-ŋ,-ŋ')とが、次のようなはつきりとした対応関係を示しており、

	(M)V		F
-ŋ'	{	e 経・清・平など	…… -i
		a 行・横・孟など	…… -u
		o 興・勝・増など	

…（中略）韻尾の受け止め方と第一拍目の母音とが、相互にきわめて密接な関係にあるのは注目すべきことである。

のように指摘しており、梗撰のように口蓋的な喉内鼻音は漢音で[-i]になることを明らかにしている⁵⁾。

この有坂説と林説をふまえると、「明」の漢音は「メイ」になることが原則である。

調査に使用した三種の辞書を見ると、呉音は三種すべての辞書が「ミョウ(ミヤウ)」を認め、漢音は『新選漢和辞典』が「ベイ」、『学研新漢和大字典』は「メイ」を認めている。『角川新字源』は漢音を認めていない。このほか、三種すべての辞書が唐音に「ミン」を認めている。「明」の字音に限っては、『学研新漢和大字典』の認め方が適当である。

『新選漢和辞典』が漢音に認めている「ベイ」は、明母の字は「馬：呉音マ、漢音バ」「米：呉音マイ、漢音ベイ」のように、漢音はバ行[b-]になるという原則から類推したと推測できるが、これは鼻音韻尾をもたない字に見られる現象であり、鼻音韻尾[-ŋ']をもつ「明」の漢音を「ベイ」にするのは不適切である。

『角川新字源』は、漢音に「メイ」を認めず、慣用音に認めている。『角川新字源』と『新選漢和辞典』が慣用音に認めているこの「メイ」こそ、漢音とすべきである。ちなみに『角川新字源』は「明」と同じ明母の「名」「盟」の場合も漢音とすべき「メイ」を慣用音として認めている。

「否ヒ」

字母：並(濁)	韻目：旨(3乙)	反切：方久切
幫(清)	有(3乙)	方久切(缶)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フ・ヒ	フ・ビ
漢音	フ・ヒ	フ・ヒ	フウ・ヒ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

「否」は2つの韻に属する。

並母旨韻 3 等乙類の音に関して言うと、呉音は「ビ」、漢音は「ヒ」になることが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』は「ヒ」、『学研新漢和大字典』は「ビ」を認め、『角川新字源』は呉音をとっていない。呉音に関しては『学研新漢和大字典』のみ中古音に矛盾しない。但し、「否」が「ビ」で読まれた実例はない。

漢音は三種すべての辞書が「ヒ」を認めており、これは中古音に矛盾しない。

現代漢語では「否認ヒニン」「否閉ヒヘイ」…のように、すべて漢音の「ヒ」で読まれる。

以上のように、並母旨韻の場合は原則通り漢音に「ヒ」を認めているので、問題点は見出せない。

幫母有韻 3 等乙類の音に関して言うと、例えば宥韻 3 等甲類の「就：呉音ジュ、漢音シュウ(シウ)」や尤韻 3 等甲類の「由：呉音ユ、漢音ユウ(イウ)」のように、呉音に短音形、漢音に長音形が現れやすいので、これに従うと「否」の呉音は「フ」、漢音は「フウ」になることが期待される。

辞書では、呉音は三種すべての辞書が「フ」を認め、漢音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「フ」、『学研新漢和大字典』が「フウ」を認めている。

調査に使用した三種の辞書のうち、『角川新字源』には「否徳ヒトク・フトク」の一語のみ「否」を「フ」で読む例が収録されているが、一般には「拒否キョヒ」「否定ヒテイ」…のように、「ヒ」で読まれる。

ところで、漢和辞典は慣用音に「ヒ」を認めている。この「ヒ」は『角川新字源』を見ると、

『角川新字源』

有韻：呉音「フ」漢音「フ」慣用音「ヒ」意味) 不同意を表すことば。など

紙韻⁶⁾： — 漢音「ヒ」 意味) わるい。よくない。など

のように、慣用音「ヒ」はどうやら有韻の意味に相当する音として認めているようである。

『角川新字源』では、「不同意を表すことば」として使用する場合は有韻、「わるい。よくない。」意味として使用する場合は紙韻、というように意味に対応した音を示しているが、日本語では有韻の意味とされる「拒否キョヒ」「否定ヒテイ」の場合も、意味に関係なく紙韻の漢音「ヒ」を使用している。

ちなみに、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』も『角川新字源』と同じように、「否」を有韻と紙韻の2つに分類し、韻ごとに字音と意味を各々示している。これは漢

和辞典の特徴のひとつといえる。

漢和辞典が有韻の慣用音に認めている「否ヒ」は、意味の区別を無視して旨韻（紙韻）の漢音「ヒ」を使用しているのもあって、有韻の呉音「フ」または漢音「フウ」が変化したものとは考えられない。従って、「否ヒ」は慣用音ではなく旨韻（紙韻）の漢音とすべきである。

「復フク」

字母：奉(濁)

韻目：屋(3 乙)

反切：房六切(伏)

奉(濁)

宥(3 乙)

扶服切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	ブク・ブ	ブク・ブ
漢音	フク・フ	フク・フウ	フク・フウ
慣用音	フク	フク	フク

「復」は、2つの韻に属する。

奉母屋韻 3 等乙類は、濁紐字なので呉音は「ブク」、無性化した漢音は「フク」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ブク」を認め、『角川新字源』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「フク」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語では、「復職フクショク」「報復ハウフク」「復帰フッキ」「復興フッコウ」…のように、すべて漢音の「フク」または「フッ」で読まれる。呉音「ブク」で読まれる例はない。

宥韻は、例えば「就：呉音ジュ、漢音シュウ(シウ)」のように、呉音に短音形、漢音に長音形が現れやすいので、これに従うと「復」は濁紐字なので呉音は「ブ」のように短音形、無声化した漢音は「フウ」のように長音形になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「フ」、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ブ」を認め、漢音は『角川新字源』が「フ」、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「フウ」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語では、「復習フクシュウ」「反復ハンブク」…のように、すべて「フク」で読まれる。辞書が呉音・漢音に認めている「フ」「ブ」「フウ」で読まれる例はない。

ところで、三種すべての辞書が慣用音に「フク」を認めている。この「フク」は、漢和辞典を見ると、

『角川新字源』屋韻：呉音 — 漢音「フク」 意味) かえる。もどる。など

宥韻：呉音「フ」 漢音「フ」 慣用音「フク」 意味) くりかえす。など

のように、どうやら宥韻の意味に相当する音として認めているようである。『角川新字源』に従うと、「復習フクシュウ」の「復フク」は宥韻の慣用音であるということになるが、「フク」は『角川新字源』が宥韻の呉音と漢音に認めている「フ」が変化したものとは考えがたいから、「フク」を宥韻の慣用音とするのは不適當である。日本語では「復」は意味の区別を無視して、すべての漢語に屋韻の漢音「フク」をあてているのである。

以上から、「復フク」は慣用音ではなく屋韻の漢音とすべきである。

「罷ヒ」

字母：並(濁)	韻目：支(3 乙)	反切：符羈切(皮)
並(濁)	紙(3 乙)	皮義切(被)
並(濁)	蟹(2)	薄蟹切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ビ・ヒ・ベ
漢音	ヒ・ハ・ハイ	ヒ・ハイ	ヒ・ハイ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

「罷」は3つの韻に属する。支韻と紙韻は四声相配するので、まとめて検討する。

並母支韻 3 等乙類と並母紙韻 3 等乙類からは、濁紐字なので呉音は「ビ」、無声化した漢音は「ヒ」になることが期待される。

漢和辞典を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』が支韻の音として「ビ」、紙韻の音として「ヒ」を認めているが、紙韻の場合も並母であり濁紐字なので「ビ」になることが原則である。『角川新字源』と『新選漢和辞典』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「ヒ」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「罷勞ヒロウ」「罷弊ヒヘイ」「罷極ヒキョク」…のように、すべて「ヒ」で読まれる。

並母蟹韻 2 等からは、濁紐字なので呉音は「バイ」、無声化した漢音は「ハイ」になることが期待される。

漢和辞典を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』が「ベ」を認めている。蟹摂の字には「解：呉音ゲ、漢音カイ」のように単母音化を起こすものがあり、『学研新漢和大字典』はここからの類推で「罷」の呉音に「ベ」を認めたと推測できるが、この字音の日本語におけるあり方に反する。『角川新字源』と『新選漢和辞典』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「ハイ」を認めている。『角川新字源』は禡韻の漢音として「ハ」

も漢音に認めているが、『広韻』には収録されていない。)

辞書に収録されている漢語を見ると、「罷休ハイキュウ・ヒキュウ」「罷市ハイシ・ヒシ」「罷免ハイメン・ヒメン」…のように、蟹韻の漢語として使用される漢語には、「ハイ」と「ヒ」の両方の読み方が存在する。

さて、調査に使用した三種の漢和辞典は揃って「罷」の慣用音に「ヒ」を認めている。漢和辞典を見ると、

『角川新字源』蟹韻 : 漢音「ハイ」 慣用音「ヒ」 意味) やめる。中止する。など
禡韻⁸⁾ : 漢音「ハ」 慣用音「ヒ」 意味) やめる。中止する。など
支韻 : 漢音「ヒ」 意味) つかれる。よわい。など

のように、慣用音「ヒ」は蟹韻と禡韻の意味に相当する音として認めているようである。(『新選漢和辞典』では禡韻と支韻、『学研新漢和大字典』では支韻と紙韻と蟹韻の字として収録されている。)

漢和辞典は、それぞれの意味や用法に関連づけて音を分けているが、日本語では、意味に関係なく、「罷」の音に「ヒ」を用いる。この「ヒ」は、蟹韻の「ハイ」または禡韻の「ハ」が変化したものではなく、支韻の漢音「ヒ」であると認められるから、「罷ヒ」は慣用音ではなく支韻の漢音とすべきである。

「酢サク」

	字母：從(濁)	韻目：鐸(1)	反切：在各切(昨)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソ	ソ・サク	シ・ザク
漢音	ソ・サク	ソ・サク	ソ・サク
慣用音	サク	サク	サク

「酢」の中古音は、從母鐸韻 1 等である。濁紐字なので呉音は「ザク」、無声化した漢音は「サク」になることが期待される。

三種の漢和辞典を見ると、呉音は『新選漢和辞典』は「サク」、『学研新漢和大辞典』は「ザク」を認めており、『角川新字源』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「サク」を認めている。

鐸韻のほかに「酢」は三種すべての辞書が遇韻を認めているが、『広韻』には収録されていない。遇韻から導き出される呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ソ」、『学研新漢和大字典』が「シ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「ソ」を認めている。

ところで、漢和辞典は「酢」の慣用音に「サク」を認めている。漢和辞典を見ると、

『角川新字源』遇韻：呉音「ソ」 漢音「ソ」 慣用音「サク」 意味) すっぱい。など
 薬韻⁹⁾：呉音 — 漢音「サク」 意味) むくいる。など

のように、慣用音「サク」は遇韻の意味に相当する音として認めているようである。

ちなみに『校訂本集韻(丁度等編)』(以下、『集韻』)を見ると、「酢」は鐸韻と暮韻(『広韻』では遇韻に相当する)に収録されている。『集韻』に収録されている暮韻の「酢」は「厝」と同じ小韻なので、中古音は清母暮韻1等(倉故切)であり、呉音・漢音共に「ソ」になることが期待される。漢和辞典は『集韻』からこの音をとっているように見えるが、『集韻』は切韻系の韻書とは認められないので、『集韻』を中古音と認めることは適当ではない。

辞書に収録されている漢語を見ると、「サク」で読まれるのは「酢酸サクサン」「酬酢シュウサク」の二語のみ、「ソ」で読まれるのは「酢漿ソショウ」の一語のみで、漢語の例はごく僅かであるが、「サク」「ソ」の二通りの読み方が存在する。『角川新字源』に従えば、「酢酸」は遇韻の意味として使用されるから「ソサン」と読むべきであるが、一般には「酢酸サクサン」で読まれるように、日本語では、意味の区別に関係なく鐸韻(薬韻)の漢音「サク」を使用している。

「酢サク」は遇韻(暮韻)の呉音または漢音「ソ」が変化したものとは考えがたいので、遇韻(暮韻)の慣用音とは認められない。

以上から、「酢サク」は慣用音ではなく鐸韻(薬韻)の漢音にすべきである。

「返ヘン」

	字母：非(清)	韻目：阮(3乙)	反切：府遠切(反)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大事典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	ヘン	ヘン	ヘン

「返」の中古音は、非母阮韻3等乙類なので、呉音は「ホン」漢音は「ハン」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音「ホン」、漢音「ハン」を字音として認めている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語では、「返魂香ハンゴンカ」を除いて、あとは「返却ヘンキヤク」「返事ヘンジ」「返信ヘンシン」「返答ヘントウ」…のように、すべて「ヘン」で読まれる。

「返」の声符「反」については、元(阮・願)韻3等乙類を見ると、

呉音	o	言ゴン	遠オン(ヲン)	反ホン
	a	万マン	願ガン(グワン)	
	e	返ヘン	原ゲン(グエン)	
漢音	a	万バン	反ハン	
	e	言ゲン	遠エン(エン)	(反ヘン)

のように、漢音は一般に-enになる(唇音は-an)。但し、唇音が-enとなる可能性は否定できないので、「反ヘン」は漢音の一種と認められる。この「反ヘン」と同様に、「返ヘン」は漢音の一種と認めるべきである。

「佳カ」

	字母：見(清)	韻目：佳(2)	反切：古睽切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ケ	ケ	ケ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	カ	カ	カ

「佳」の中古音は、見母佳韻 2 等なので、呉音は「カイ」または「ケ」、漢音は「カイ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音は「ケ」、漢音は「カイ」としている。

現代の漢語では、「佳境カキョウ」「佳作カサク」「佳人カジン」「佳日カジツ」…のように、すべて「カ」で読まれ、「ケ」や「カイ」で読まれる漢語は見出せない。

「佳」の声符および同じ声符をもつ字のうち、「カ」で読まれる漢語は「掛」の「掛錫カシヤク・カイシヤク」以外見出せないので、声符からの類推とは言い難い。

蟹摂 2 等について見ると、佳韻には「佳カ」「卦カ(クワ)」「掛カ(クワ)」などのように、漢音で単母音化しているものがある。但し、同じ蟹摂 2 等でも皆韻には単母音化するものが見られない。この「佳カ」は、漢音と認められるが、佳韻で単母音化する理由は不明である。

「掛カ(クワ)」

	字母：見(清)(合)	韻目：卦(2)	反切：古賣切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ケ	—	ケ(クエ)
漢音	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)
慣用音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)

「掛」の中古音は、見母卦韻 2 等である。合口なので、呉音は「ケ(クエ)」、漢音は「カイ(クワイ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』を除く二種が「ケ」を認め、漢音は三種すべてが「カイ(クワイ)」としている。

調査に使用した辞書に収録されている漢語は、「掛冠カイカン」「掛軸カイジク」のように一般には「カイ(クワイ)」で読まれるが、「掛錫カシャク・カイシャク」のように「カ(ク)」で読まれる漢語も存在する。

卦韻は佳韻と四声相配するので、「掛カ(ク)」は、「佳カ」の場合と同様に、佳・卦韻に見られる単母音化した漢音であると考えられる。

調査に使用した三種すべての漢和辞典が認めている慣用音のうち、漢音とみなすべきものは、以上に示したとおりである。

3. 1. 4 呉音または漢音とすべきもの（呉音・漢音が同形の場合）

(5 字)

渴カツ(p.110)	揭ケイ(p.113)	閥バツ(p.114)	般ハン(p.115)
覆フウ・フク(p.111)			

最後に、取り上げた三種の漢和辞典が認めている慣用音のうち、呉音または漢音とすべきもの（呉音と漢音が同形である場合）を全て抜き出し、検討する。

「渴カツ」

字母：溪(次清)

韻目：曷(1)

反切：苦曷切

群(濁)

薛(3 乙)

渠列切(傑)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	カチ	カチ・ゲチ
漢音	ケツ・カツ	カツ・ケツ	カツ・ケツ
慣用音	カツ	カツ	カツ

「渴」は 2 つの韻に属する。

曷韻に関していうと、中古音は溪母曷韻 1 等である。舌内入声音である呉音は「カチ」または「カツ」、漢音は「カツ」になることが期待される。

調査に使用した三種の辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「カチ」、漢音は三種すべての辞書が「カツ」を認めている。

次に薛韻に関していうと、中古音は群母薛韻 3 等乙類である。舌内入声音の濁紐字な

ので呉音は「ゲチ」または「ゲツ」、無声化した漢音は「ケツ」になることが期待される。

調査に使用した三種の辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ゲチ」、漢音は三種すべての辞書が「ケツ」を認めているが、「渴」を「ゲチ」「ケツ」で読む例は存在しない。

漢語は「渴望カツボウ」「渴愛カツアイ」「枯渴コカツ」「渴水カッスイ」「渴筆カッピツ」…のように、すべて「カツ」または「カッ」で読まれる。調査に使用した辞書に「カチ」「ゲチ」「ケツ」で読まれる例は存在しない。

問題の慣用音に注目すると、三種すべての辞書が慣用音に「カツ」を認めている。漢和辞典をを見ると、

『角川新字源』屑韻¹⁰⁾：漢音「ケツ」慣用音「カツ」意味) 水がつきてなくなる。など
曷韻：漢音「カツ」意味) のどがかわく。など

のように、慣用音「カツ」は薛韻（屑韻）の意味に相当する音として認めているようである。しかし日本語では「渴水カッスイ」のように、意味の区別を無視して曷韻の呉音または漢音「カツ」を使用しているのであり、屑韻の音が変化したものではない。

従って、「渴カツ」は曷韻の呉音または漢音とすべきである。

「覆フウ・フク」

字母：滂(次清) 韻目：屋(3 乙) 反切：芳福切(虻)
滂(次清) 宥(3 乙) 敷救切(副)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フク	フク・フ	フク・フ・ブ
漢音	フク・フ	フク・フ	フク・フウ
慣用音	フウ	フウ	フク

「覆」は2つの韻に属する。

滂母屋韻 3 等乙類に関していうと、屋韻は喉内入声字なので「福フク」「複フク」のように-uk になることが原則であるから、呉音・漢音共に「フク」になることが期待される。

滂母宥韻 3 等乙類に関していうと、「富(呉音フ、漢音フウ)」「副(呉音フ、漢音フウ)」のように呉音は-u、漢音は-uu になるのが原則であるから、それに従えば「覆」の呉音は「フ」、漢音は「フウ」になることが期待される。

調査に使用した三種の漢和辞典では、辞書によって慣用音の認め方が異なるので、辞書ごとに各々見ると、

『角川新字源』宥韻： 一 漢音「フ」 慣用音「フウ」 意味) おおう。

屋韻： 呉音「フク」 漢音「フク」 意味) くつがえす。

『新選漢和辞典』宥韻： 呉音「フ」 漢音「フ」 慣用音「フウ」 意味) おおう。

屋韻： 呉音「フク」 漢音「フク」 意味) くつがえす。

『学研新漢和大字典』宥韻： 呉音「フ」 漢音「フウ」 慣用音「フク」 意味) おおう。

宥韻： 呉音「ブ」 漢音「フウ」 慣用音「フク」 意味) 伏兵。

屋韻： 呉音「フク」 漢音「フク」 意味) くつがえす。

のようになる。三種すべての辞書が呉音または漢音に認めている「フ」は、「フウ」の短音形と考えられる。呉音に関していうと、『学研新漢和辞典』のみ濁音形の「ブ」を認めているが、これは中古音から導き出すことができない音であり、実例もない。

『角川新字源』と『新選漢和辞典』が慣用音に認めている「フウ」は、漢音と認めても中古音に矛盾しないので、漢音とすべきである。

『学研新漢和大字典』のみ宥韻の慣用音に「フク」を認めているが、前述の「渴カツ」と同様に、「復フク」は意味の区別を無視して屋韻の音を使っていると考えられるべきだから、「復フク」は屋韻の呉音または漢音とするのが適当である。

漢語の例は、「覆書フクショ」「覆試フクシ」…のように、「フク」で読まれる例が目立つが、「覆蕩フウトウ」のように、「フウ」で読まれる例も僅かに存在する。「フウ」が認められるのは、「覆面フクメン・フウメン」…のように、「フク」と「フウ」両方の読み方が認められる語がある場合である。このほか、「覆育フイク・フクイク・フウイク」「覆載フサイ・フウサイ」…のように、「フ」で読まれる漢語も僅かにある。

ちなみに、「覆水」を「フクスイ」と読む場合には「こぼれた水」、「フウスイ」と読む場合には「水面をおおいかくすこと」の意味になるといったように、「覆」に関していうと、音で意味の区別を表す漢語も存在する。

以上をまとめると、『角川新字源』と『新選漢和辞典』が慣用音に認める「フウ」は宥韻の漢音、『学研新漢和大字典』が慣用音に認める「フク」は屋韻の呉音または漢音とすべきである。

「掲ケイ」

字母：群(濁)	韻目：月(3 乙)	反切：其謁切
見(清)	月(3 乙)	居列切(訐)
群(濁)	薛(3 乙)	渠列切(傑)
溪(次清)	薛(3 乙)	去謁切
溪(次清)	祭(3 乙)	去例切(憩)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ゲチ・ケ
漢音	ケイ・ケツ	ケツ・ケイ	ケツ・ケイ
慣用音	ケイ	ケイ	ケイ

「掲」は5つの韻に属する。

祭韻に関しては、溪母祭韻3等乙類なので、呉音・漢音共に「ケイ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ケ」を認め、漢音は三種すべてが「ケイ」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「掲載ケイサイ」「掲示ケイジ」「掲暁ケイギョウ」「掲貼ケイチョウ」「掲帖ケイチョウ」「掲揚ケイヨウ」…のように、ほとんどが「ケイ」で読まれる。

月韻と薛韻に関しては、群母3等乙類、見母3等乙類、溪母3等乙類なので、呉音は「ゲチ」「ゲツ」または「ケチ」「ケツ」、漢音は「ケツ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ゲチ」を認め、漢音は三種すべてが「ケツ」を認めている。このほか、月韻と薛韻の慣用音に「ケイ」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「掲焉ケツエン・ケチエン」「掲驕ケツキョウ」「掲掲ケツケツ」…のように、「ケツ」で読まれた例はあるが、日常あまり使用しない漢語である。

現代の漢語では、「掲」は一般に「ケイ」で読まれ、「かかげる」という意味で使用する。中古漢語における音と意味との関係が失われて、現代日本語では祭韻に対応する「ケイ」の音のみが用いられるが、「ケイ」の音自体は中古音にもとづく。

「閔バツ」

字母：奉(濁)

韻目：月(3乙)

反切：房越切(伐)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ボチ
漢音	ハツ	ハツ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ

「閔」の中古音は、奉母月韻3等乙類である。舌内入声音の濁紐字であるから呉音は「バチ」または「バツ」、無声化した漢音は「ハツ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ボチ」を認め、漢音は三種すべてが「ハツ」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「閔閔バツエツ」「閔族バツゾク」「派閔ハバツ」「財閥ザイバツ」「学閥ガクバツ」「藩閥ハンバツ」…のように、すべて「バツ」で読まれる。「ボチ」「ハツ」で読まれる漢語は見出せない。

三種の辞書が慣用音に認めている「バツ」は、「別ベツ」「罰バツ」などの場合と同様、呉音「バチ」が「バツ」に変化したものであると考えられるから、呉音と認めるべきである。

「般ハン」

字母：並(濁)

韻目：桓(1)

反切：薄官切(槃)

幫(清)

桓(1)

北潘切(黠)

幫(清)

刪(2)

布還切(班)

幫(清)

末(1)

北末切(撥)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バン・ハン	ハチ	バン・ヘン
漢音	ハン・ハツ	ハン・ハツ	ハン
慣用音	ハン	ハン	ハン

「般」は、3つの韻に属する。

桓韻に関しては、並母1等と幫母1等なので、呉音は「バン」「ハン」、漢音は「ハン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「バン」を認め、漢音は三種すべてが「ハン」としている。

刪韻に関しては、幫母2等である。刪韻には、主母音を呉音で-eに写すものがあるので、呉音は「ヘン」または「ハン」、漢音は「ハン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』では「ハン」、『学研新漢和大字典』では「ヘン」を認め、漢音は三種すべてが「ハン」としている。

末韻に関しては、幫母 1 等なので、呉音は「ハチ」または「ハツ」、漢音は「ハツ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』のみ「ハチ」を認め、漢音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ハツ」を認めている。

辞書が見出し語として立てている漢語では、「般旋ハンセン」「般若ハンニャ」「般楽ハンラク」「全般ゼンパン」「先般センパン」…のように、ほとんどが「ハン」または「パン」で読まれる。この「パン」は、鼻音に続くハ行子音が半濁音化したものである。このほか、「般桓バンカン・ハンカン」のように、ごく一部に「バン」で読まれる漢語も存在する。「ヘン」「ハチ」「ハツ」で読まれる漢語は見出せない。

問題の慣用音に注目すると、三種すべての辞書が慣用音に「ハン」を認めている。漢和辞典を見ると、

『角川新字源』寒韻¹¹⁾：呉音「バン」漢音「ハン」 意味) うつす。はこぶ。他
刪韻 ；呉音「ハン」漢音「ハン」 意味) 区別。種類。他
曷韻¹²⁾：呉音「一」漢音「ハツ」慣用音「ハン」意味) 梵語の音訳語。

のように、慣用音「ハン」は末韻（曷韻）に相当する音として認めているようである。

しかし、日本語では「般若ハンニャ」のように、意味の区別を無視して桓韻もしくは刪韻の「ハン」を使用しているのであり、末韻（曷韻）の音が変化したものではない。従って、「般ハン」は桓韻もしくは刪韻の呉音または漢音（歴史的に見て、恐らくは呉音）とすべきである。

調査に使用した三種すべての漢和辞典が認めている慣用音のうち、呉音または漢音とみなすべきもの（呉音・漢音が同形の場合）は、以上に示したとおりである。

表(1)に掲げた 145 字のうち、慣用音とは見なしがたいものは 36 字存在する。

これまでの検討によって、調査の対象とした三種すべての漢和辞典は、慣用音の定義が曖昧であり、辞書によって慣用音の認め方が様々であることが明らかになった。例えば、

・唇内入声音である「合」は、一般に「合成ゴウセイ」「合格ゴウカク」…のように「ゴウ(ガフ)」で読まれるが、後に無声子音が続くと「合体ガッタイ」「合戦カッセン」…のように促音化して「ガッ」「カッ」で読まれる。漢和辞典は、この「ーッ」形（「ガッ」「カッ」）を慣用音に認めている。しかし同じ唇内入声音の「甲」は、「甲冑カッチュウ」

のように「ーッ」形があるにもかかわらず、この「カツ」を慣用音に認めているのは一種に過ぎず、辞書によって字音の認め方が異なる。そもそも、「ーッ」形は無声子音が続く場合に現れる漢語の音であり、漢字の音とは認め難い。漢和辞典は語音と字音の区別が明らかでない。

・舌内入声音である「別ベツ」や「罰バツ」は、呉音「別ベチ」「罰バチ」が日本漢字音として変化したものである。従って、舌内入声音に見られる「ーチ」「ーツ」はどちらも呉音とすべき音である。しかし、漢和辞典はこの「ーチ」形を呉音に認め、「ーツ」形を慣用音に認めている。

「明メイ」のように、明母のうち鼻音韻尾[-ŋ']をもつ漢音には、唐代に起きた非鼻音化の影響を受けずにマ行[m-]で読まれるものが存在する。鼻音韻尾[-ŋ']をもつ字は、(日本漢字音の)母音が非前舌の[e]であれば、漢音は「ーイ」形になる。「明」は非鼻音化の影響を受けなかった字であり、且つ母音は[e]、韻尾は[-ŋ']であるから、漢音は「ーイ」形の「メイ」となる。この「メイ」を漢音ではなく、慣用音に認めている辞書も存在する。

「別ベツ」や「明メイ」のように、調査した漢和辞典には、中古音との関連において呉音または漢音であると考えられるものを慣用音と認めている場合も少なくない。

・「否ヒ」や「復フク」などのように、一つの漢字が二つ以上の韻に属する場合、漢和辞典はその韻がもつ意味に基づいて各々字音を示している。本来は呉音または漢音に認めるべき音を、意味との関連で慣用音に認めてしまっている例も目立つ。

次に、表(1)に掲げた145字から慣用音とは認めがたい36字を除いた109字について、全て抜き出し検討する。

3. 2 慣用音と認める必要のあるもの (109 字)

表(1)に掲げた145字について一字ずつ検討すると、調査の対象とした漢和辞典が認めている通り、慣用音とする必要のあるものが109字存在する。この109字について、

3. 2. 1 音的な特徴による分類

3. 2. 2 「慣用音」を生じる理由による分類

この2面から検討する¹³⁾。

3. 2. 1 音的な特徴による分類 (延べ120字)

一般に、「声母・韻腹・韻尾」のいずれかにおいて、中古音との対応が見られない音が慣用音とされる。調査した漢和辞典の「慣用音」のうち、これに該当するものを音的特

徴によって分類すると、以下のようになる。(慣用音と認める必要がある 109 字には、原音との対応が認められない音が複数ある漢字が存在するので、字数は延べ 120 になる。)

①声母に関して、原音との対応が認められないもの (67 字)

a) 中古音の清音が濁音になるもの (42 字)

街ガイ(p.160)	該ガイ(p.161)	欺ギ(p.120)	戲ギ(p.121)
犧ギ(p.159)	曉ギョウ(ゲウ)(p.127)	宮グウ(p.189)	軍グン(p.120)
劇ゲキ(p.129)	撃ゲキ(p.129)	郷ゴウ(ガウ)(p.131)	拷ゴウ(ガウ)(p.132)
剛ゴウ(ガウ)(p.128)	慘ザン(p.130)	次ジ(p.179)	璽ジ(p.166)
充ジュウ(p.117)	銃ジュウ(p.118)	縦ジュウ(p.166)	獸ジュウ(ジウ)(p.178)
汁ジュウ(ジフ)(p.176)	渋ジュウ(ジフ)(p.132)	准ジュン(p.125)	準ジュン(p.124)
遵ジュン(p.126)	蒸ジョウ(p.131)	迅ジン(p.125)	髓ズイ(p.173)
税ゼイ・ダツ(p.123)	説ゼイ(p.122)	憎ゾウ(p.175)	妥ダ(p.128)
蛇ダ(p.165)	濁ダク(p.119)	爆バク(p.168)	判バン(p.190)
板バン(p.189)	不ブ(p.133)	豊ブ(p.118)	剖ボウ(p.134)
紡ボウ(バウ)(p.127)	朴ボク(p.156)		

「充ジュウ」

字母：穿(次清)

韻目：東(3 甲)

反切：昌終切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	シュウ	シュウ(シフ)	シュウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

「充」の中古音は、穿母東韻 3 等甲類の字なので、呉音・漢音共に「シュウ」になることが期待される。

辞書に収録されている漢語を見ると、「充分ジュウブン」「補充ホジュウ」…のように、すべて「ジュウ」で読まれる。呉音または漢音の「シュウ」で読まれた実例はない。

辞書が慣用音と認める「ジュウ」は、呉音または漢音の「シュウ」と清濁のみ異なる。とすると、まず考えられるのは連濁であるが、「填充テンジュウ」のように特殊な例を除いて、現代の辞書からは連濁を生じる条件をもった漢語は見当たらない。

「充」と同じ声符をもつ「銃」は「充」と四声相配するので、声符からの類推とは考えにくい。可能性として、「充」は何らかの理由で元から濁音形「ジュウ」で写されたと

考えられるが、確証を得ることはできない。しかし、「充ジュウ」は日常よく使用される音であり、日本語に定着しているから、慣用音と認める必要がある。

なお、呉音に関して言うと、東韻は「宮ク」や「紅グ・ク」などのように、短音化する例がある。『学研新漢和大字典』が呉音に「シュ」を認めたのは、そのような例からの類推であろう。しかし、「充」が「シュ」で読まれた例はない。漢音は、三種すべての辞書が「シュウ」を認めている。

「銃ジュウ」

	字母：穿(次清)	韻目：送(3 甲)	反切：充仲切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	シュウ	シュウ	シュウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

「銃」の中古音は、穿母送韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュウ」になることが期待される。

漢和辞典を見ると、「銃口ジュウコウ」「銃声ジュウセイ」「拳銃ケンジュウ」…のように、全て「ジュウ」で読まれる。「シュ」「シュウ」で読まれる実例はない。

「銃」と同じ声符をもつ「充」の場合と同様の理由で、「銃」は元から濁音形「ジュウ」で写された可能性がある。従って、「ジュウ」は慣用音と認めるべきである。

なお、調査に使用した三種の辞書を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シュ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「シュウ」を認めている。『学研新漢和大字典』が呉音を「シュ」とするのは、「充」の場合と同じであろう。

「豊ブ」

	字母：滂(次清)	韻目：東(3 乙)	反切：後敷切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フウ	フ
漢音	ホウ・フウ	ホウ	ホウ
慣用音	ブ	ブ	ブ

「豊」の中古音は、滂母東韻 3 等乙類である。

東韻 1 等の漢音は、「東トウ」「同ドウ」「公コウ」…のように、-ou になるのに対して、東韻 3 等の漢音は、唇音以外では「中チュウ」「弓キュウ」「充ジュウ」…のように、-juu になるのが原則である。東韻 3 等の唇音は、「風（呉音フ・フウ、漢音ホウ）」…のように呉音は-u または-uu、漢音は-ou になるのが一般的であるから、「豊」の呉音は「フ」

または「フウ」、漢音は「ホウ」になることが期待される。

辞書に収録されている漢語を見ると、「豊富ホウフ」「豊満ホウマン」…のように、「ホウ」になる例が目立つ。呉音「フ」「フウ」で読まれた実例はない。この「豊フ・フウ」のように、漢和辞典は実例がなくても、他からの類推で呉音や漢音に認めているものが少なくない。

「ブ」の音は、「豊干(ブカン)」「豊前(ブゼン)」「豊後(ブンゴ)」…のように、地名や人名に認められる。これは呉音「フ」を濁音の「ブ」で写したもので、濁音になる理由は、中古音から説明できないから、慣用音とせざるを得ない。

「濁ダク」

	字母：澄(濁)	韻目：覚(2)	反切：直角切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジョク(ヂョク)	ジョク(ヂョク)	ダク
漢音	タク	タク	タク
慣用音	ダク	ダク	ジョク(ヂョク)

「濁」の中古音は、澄母覚韻 2 等である。覚韻 2 等の呉音は-**ok**、漢音は-**ak** になるのが原則なので、濁紐字である呉音は「ジョク(ヂョク)」、無声化された漢音は「タク」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ジョク(ヂョク)」を認め、『学研新漢和大字典』は「ダク」を認めている。『学研新漢和大字典』は、慣用音に「ジョク(ヂョク)」を認めているが、この「ジョク(ヂョク)」はまさしく呉音である。漢音は三種すべての辞書が「タク」を認めている。

『広韻』を見ると、「濁」の同韻には「濯」「連」などがあり、漢音はいずれも「タク」で読まれる。一方、「濁」の漢語は「濁音ダクオン」「濁点ダクテン」…また、「汚濁オジョク・オダク」のように、すべて濁音形の「ジョク」「ダク」で読まれ、漢音の「タク」で読まれる例はない。この「ダク」は、漢音形を示すにもかかわらず、漢音に認められる無声化を示していない。声母は呉音の特徴を、韻母(韻腹・韻尾)は漢音の特徴を示している。従って、慣用音とせざるを得ない。

「欺ギ」

字母：溪(次清)

韻目：之(3 乙)

反切：去其切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ー	ゴ	コ
漢音	キ	キ	キ
慣用音	ギ	ギ	ギ

「欺」の中古音は、溪母之韻 3 等乙類である。之韻の場合、呉音については「期ゴ」「碁ゴ」のように、稀に-o になることがあるので、呉音は「キ」または「コ」、漢音は「キ」になることが期待される。

辞書を見ると、呉音は『新選漢和辞典』が「ゴ」、『学研新漢和大辞典』が「コ」を認めている。この「ゴ」「コ」は、之韻の字である「期」や「碁」から類推したものと考えられ、「欺」が「ゴ」「コ」で読まれた例は見出せない。漢音は、三種すべての辞書が「キ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「欺詐ギサ」「欺騙ギヘン」…のように、ほとんどの漢語が「ギ」で読まれる。「欺罔キモウ」「欺瞞ギマン・キマン」…のように「キ」で読まれる漢語も僅かに存在するが、一般には「ギ」で読まれる。この「ギ」は、中古音から説明できないので、慣用音とされる。

次清字である「欺」が濁音形「ギ」で読まれる理由については、連濁を発生させる条件を持つ漢語が特定できないから、連濁によるとは考えにくい。濁紐字である「其」の声符（「期ゴ」「碁ゴ」など）からの類推の可能性は否定できない。

「軍グン」

字母：見(清)

韻目：文(3 乙)

反切：舉云切(君)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	クン	クン	クン
漢音	クン	クン	クン
慣用音	グン	グン	グン

「軍」の中古音は、見母文韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「クン」になることが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「クン」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「軍隊グンタイ」「軍艦グンカン」「軍人グンジン」「軍服グンプク」「軍用グンヨウ」「将軍ショウグン」「援軍エングン」…のように、すべての漢語が「グン」で読まれ、「クン」で読まれる実例は存在しない。

ちなみに、「軍」は「君」と同じ小韻であるが、「君」には「君子クンシ」「君臨クンリン」「諸君ショクン」…のように、すべて「クン」となり、濁音「グン」で読まれる漢語はない。この「君」と同じ声符をもつ「群」は、「軍」「君」と同じ文韻の濁紐字であり、漢語は「群集グンシュウ」「群衆グンシュウ」「群像グンゾウ」…のように、すべて濁音の「グン」で読まれる。

さらに「郡」は、問韻に属し、濁紐字である。漢語は「郡主グンシュ」「郡地グンチ」「郡部グンブ」「一郡イチグン」「僻郡ヘキグン」…のようにすべて濁音「グン」で読まれる。

以上から、「軍」「群」「郡」には各々「(人を)集める」という共通の意味があり、同じ意味で使用される漢字であるために、「軍」も「一軍イチグン」「軍隊グンタイ」のように濁音形で読まれた可能性がある。

「戯ギ」

字母：曉(清)	韻目：支(3乙)	反切：許羈切(犧)
曉(清)	寘(3乙)	香義切
曉(清)	模(1)	火故切(呼)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゲ・キ	—	ク・キ(クキ)・ケ
漢音	キ	キ・コ	コ・キ(クキ)
慣用音	ギ	ギ・ゲ	ギ・ゲ

「戯」は3つの韻に属する。支韻と寘韻は四声相配するので、まとめて検討する。

支韻と寘韻の場合は、曉母支韻3等乙類と曉母寘韻3等乙類なので、呉音・漢音共に「キ」になるのが原則である。

模韻の場合は、曉母模韻1等なので、呉音は「ク」「コ」、漢音は「コ」になるのが原則である。

辞書を見ると、

『角川新字源』支韻：呉音「キ」 漢音「キ」 意味) 嘆息または感嘆の声。
 寘韻：呉音「ゲ」 漢音「キ」 慣用音「ギ」 意味) たわむれる。など

『新選漢和辞典』支韻：呉音 — 漢音「キ」 意味) 武器の名。など
 寘韻：呉音 — 漢音「キ」 慣用音「ギ・ゲ」 意味) 遊ぶ。など
 虞韻¹⁴⁾：呉音 — 漢音「コ」 意味) 感嘆のこぼ。

『学研新漢和大字典』支韻：呉音「キ」 漢音「キ」 意味) 大将の旗のこと。

眞韻：呉音「ケ」 漢音「キ」 慣用音「ギ・ゲ」 意味) たわむれるなど

模韻：呉音「ク」 漢音「コ」 意味) はあとというため息。

以上のように、韻ごとに各々字音が示されている。

慣用音に注目すると、三種すべての辞書が眞韻に慣用音を認めている。『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は、慣用音に「ギ」と「ゲ」を認めているのに対し、『角川新字源』は「ギ」のみ慣用音に認め、「ゲ」は呉音に認めている。この「ゲ」について検討すると、「戯」は曉母(清)なので、呉音に濁音の「ゲ」を認めることは中古音に矛盾する。

漢語を見ると、「戯曲ギキョク」「戯書ギシヨ」…のように、辞書に収録されている大部分の漢語が「ギ」で読まれるが、「戯作ギサク・ゲサク」「戯文ギブン・ゲブン」のように、「ギ」と「ゲ」の二通りの読み方があるものも存在する。「戯下キカ」のように、ごく稀に「キ」で読むものも存在するが、これは特殊な例である。現代の漢語には、「戯」を「ケ」「ク」「コ」で読む例は存在しない。このように、「戯」は一般に「ギ」または「ゲ」で読まれるが、その濁音的特徴は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

ちなみに、支韻には「施行セコウ」の「施セ」のように、呉音には-eになるものが存在する。この「施セ」と同様に、「戯」の呉音が「ケ」で読まれたと考えると、「戯ゲ」は呉音「ケ」の濁音形であると言える。

「説ゼイ」

字母：審(清)	韻目：薛(3 甲)	反切：失熬切
喩(清濁)	薛(4)	弋雪切(悦)
審(清)	祭(3 甲)	舒芮切(税)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	セチ・ダツ	セチ・セ・エチ
漢音	セツ・エツ	セツ・エツ・セイ・タツ	セツ・セイ・エツ
慣用音	ゼイ	ゼイ	ゼイ・セツ

「説」は3つの韻に属する。

審母薛韻 3 等甲類からは、呉音は「セチ」または「セツ」、漢音は「セツ」になることが期待される。

喩母薛韻 4 等韻からは、呉音は「エチ」または「エツ」、漢音は「エツ」になることが期待される。

審母祭韻 3 等甲類からは、呉音・漢音共に「セイ」になることが期待される。

調査に使用した三種の辞書では、呉音は『新選漢和辞典』は「セチ」「ダツ」、『学研新漢和大字典』は「セチ」「セ」「エチ」を認め、『角川新字源』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「セツ」「エツ」を認めている。これに加えて『新選漢和辞典』は「セイ」「タツ」、『学研新漢和大字典』は「セイ」を、各々漢音に認めている。

『新選漢和辞典』が認めている「ダツ」「タツ」は、中古音から導き出すことができない音である。漢語の例は、三種の漢和辞典のうち『新選漢和辞典』のみ、「説驂ダツサン」「説輻ダツク」のように、「ダツ」で読まれる漢語を収録している。しかし、一般に「説」を「ダツ」で読むことはない。

三種の辞書が収録している漢語を見ると、

「エツ」…「説懌エツエキ」「説喜エツキ」「説諭エツユ」「説楽エツラク」

「説命エツメイ」「説道エツドウ」「説予エツヨ」

「ゼイ」…「説苑ゼイエン・セツエン」「説客ゼイカク」「説論ゼイロン」…

「セツ」…「説客セツカク」「説教セツキョウ」「説経セツケイ・セツキョウ」

「説得セツトク」「説破セツパ」「説白セツハク・セツパク」「説伏セツプク」

「説法セツポウ」「説諭セツユ」「説道セツドウ」「説論セツロン」…

※下線の漢語は、複数の読み方があるものを示す。

のように、「説」には「セツ」「エツ」「ゼイ」で読まれる漢語が存在する。このうち「エツ」と「セツ」は、中古音から呉音または漢音である（『学研新漢和大字典』は慣用音に「セツ」を認めているが、これは呉音または漢音とすべきである）。「ゼイ」の濁音的特徴は、中古音から導き出すことはできないが、実例があるので慣用音に認めることができる。

辞書が慣用音に認めている「ゼイ」は、漢音「セイ」の濁音形である。辞書に収録されている漢語から、「ゼイ」は連濁によるものとは考えにくい。中古音のシステムとしては清音「セイ」であるが、「説」が「セイ」で読まれた漢語は存在しないので、「説」は元々濁音の「ゼイ」だった可能性がある。

「税ゼイ・ダツ」

	字母：審(清)	韻目：祭(3 甲)	反切：舒芮切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	セ・タチ
漢音	セイ・タツ・エツ	セイ・タツ・タイ・タン	セイ・タツ
慣用音	ゼイ・ダツ	ゼイ・ダツ	ゼイ・ダツ

「税」の中古音は、審母祭韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「セイ」になるのが原

則である。

辞書を見ると、「税」は複数の韻から字音が導き出されている。例えば『角川新字源』を見ると、

霽韻¹⁵⁾：呉音「一」 漢音「セイ」 慣用音「ゼイ」

曷韻：呉音「一」 漢音「タツ」 慣用音「ダツ」

屑韻：呉音「一」 漢音「エツ」

のように3つの韻に属する字として収録されている。『集韻』を見ると、たしかに「税」は祭韻の他に末韻や薛韻などの入声音の字としても収録されているが、『広韻』を見ると、祭韻にしか収録されていない。すなわち、祭韻以外は中古以後のものである。

祭韻から導き出される字音のみ確認すると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「セ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「セイ」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「税関ゼイカン」「税率ゼイリツ」「印税インゼイ」「免税メンゼイ」「国税コクゼイ」「脱税ダツゼイ」…のように、ほとんどの漢語が祭韻の濁音形「ゼイ」で読まれる。この濁音的特徴は、中古音から導き出すことはできないので、慣用音と認めざるを得ない。

「税」はまた、「税冕ダツベン・タツベン」「脱介ダツカイ・タツカイ」「税服ゼイフク・タイフク」のように、「ダツ」「タツ」「タイ」で読む漢語が存在する。このうち「ダツ」は三種すべての辞書が「税」の慣用音に認めている。

『集韻』における末韻・薛韻は、それぞれ透母1等、審母3等甲類と見なされ、どちらも清音であるから、濁音の「ダツ」になる理由は説明できない。しかし、「税冕ダツベン」などのように実例は存在するので、「税ダツ」も慣用音と認めざるを得ない。

「準ジュン」

字母：照(清)

韻目：準(3甲)

反切：之尹切

喻(清濁)

薛(4)

職悦切(拙)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	一	シュン	シュン・セチ
漢音	セツ	シュン・セツ	シュン・セツ
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

「準」は2つの韻に属する。

薛韻に関しては、中古音は喻母薛韻4等なので、呉音は「セチ」または「セツ」、漢音は「セツ」になることが期待されるが、現代の漢語には「準」が「セチ」「セツ」で読まれた例が存在しないので、薛韻は本検討から除外する。

準韻に関しては、照母準韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュン」になることが期待される。

辞書を見ると、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は呉音・漢音共に「シュン」を認めている。一方、『角川新字源』は呉音・漢音共に「シュン」を認めていない。

辞書に収録されている漢語を見ると、「準拠ジュンキョ」「準則ジュンソク」「準備ジュンビ」「準用ジュンヨウ」「基準キジュン」「水準スイジュン」「標準ヒョウジュン」…のように、すべて「ジュン」で読まれる。「シュン」で読まれる漢語はない。

この濁音形「ジュン」は、中古音から導き出すことはできないから、慣用音と認めざるを得ない。

「准ジュン」

	字母：照(清)	韻目：準(3 甲)	反切：之尹切(準)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュン
漢音	シュン	シュン	シュン
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

「准」の中古音は、照母準韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュン」になるのが期待される。

辞書を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シュン」を認め、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は認めていない。漢音は三種すべての辞書が「シュン」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、語例は多くないが「准行ジュンコウ」「准奏ジュンソウ」「批准ヒジュン」のように、「ジュン」で読まれる。このほか、「准后ジュンコウ・ジュゴウ」「准三宮ジュサングウ」のように「ジュ」で読まれる語も存在するが、これは特殊な例である。

いずれにしても、濁音形「ジュン」は中古音から導き出せないから、慣用音と認めざるを得ない。

「迅ジン」

	字母：審(清)	韻目：震(3 甲)	反切：息晉切(信)
	審(清)	稔(3 甲)	私閨切(峻)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シン・シュン	シン	シン・シュン
漢音	シン・シュン	シン	シン・シュン
慣用音	ジン	ジン	ジン

「迅」は、2つの韻に属する。

稔韻の場合、中古音は審母稔韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュン」になるのが原則である。しかし、現代の漢語では「迅」が「シュン」で読まれる例がないので、本検討では省略する。

震韻の場合、中古音は審母震韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シン」になるのが原則である。

辞書を見ると、三種すべての辞書が呉音・漢音ともに「シン」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「迅速ジンソク」「迅撃ジンゲキ」「迅風ジンプウ」「奮迅フンジン」…のように、すべて「シン」の濁音形「ジン」で読まれる。この「ジン」は中古音から導き出すことはできないので、慣用音と認められる。

「迅」が「ジン」で読まれる理由については、「迅」と同じ声符「𠂔」を持つ字は「訊」くらいであるが、「訊」は「迅」と同じ小韻なので、声符からの類推とは考え難い。連濁に関しては、現代の辞書に収録されている漢語は「奮迅フンジン」「急迅キュウジン」程度なので、連濁の影響も考え難い。

以上のように、「迅」が「ジン」で読まれる理由は明らかにすることができないので、「迅」は元々濁音形の「ジン」で日本に入ってきた可能性がある。

確証はないが、「迅」の声符「𠂔」と震韻の日母に属する「刃」（呉音「ニン」漢音「ジン」）との部首が混同された可能性も否定できない。

「遵ジュン」

	字母：照(清)	韻目：諄(3 甲)	反切：将倫切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュン
漢音	シュン	シュン	シュン
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

「遵」の中古音は、照母諄韻 3 等甲類であるから、呉音・漢音共に「シュン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シュン」を認めており、漢音は三種すべての辞書が「シュン」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「遵守ジュンシュ」「遵奉ジュンポウ」「遵法ジュンポウ」「遵養ジュンヨウ」…のように、すべての漢語が「ジュン」で読まれる。呉音または漢音の「シュン」で読まれる漢語はない。この「ジュン」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

ちなみに、「遵」と同じ 18 転の照母には「諄」「準」が属するが、これらも「諄諄ジ

「ジュン」「準備ジュンビ」のように、現代の漢語では濁音形の「ジュン」で読まれ、「シュン」で読まれた例は存在しない。従って、「遵ジュン」「諄ジュン」「準ジュン」は、いずれも元々濁音「ジュン」で日本に入ってきた可能性がある。

「曉ギョウ(ゲウ)」

	字母：曉(清)	韻目：篠(4)	反切：馨畠切(金曉)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)
漢音	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)
慣用音	ギョウ(ゲウ)	ギョウ(ゲウ)	ギョウ(ゲウ)

「曉」の中古音は、曉母篠韻 4 等である。清音の字なので、呉音・漢音共に「キョウ(ケウ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「キョウ(ケウ)」、漢音は三種すべての辞書が「キョウ(ケウ)」である。

辞書に収録されている漢語では、「曉雲ギョウウン」「曉鐘ギョウショウ」「曉然ギョウゼン」…のように、すべての漢語が「ギョウ(ゲウ)」で読まれる。呉音または漢音の「キョウ(ケウ)」で読まれる漢語は存在しない。

「ギョウ(ゲウ)」の濁音的特徴は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「曉」の声符「堯」および同じくそれを声符とする「曉」「僥」「澆」などの中古音は、疑母宵韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ギョウ(ゲウ)」になるのが原則であり、実際そのように読まれる。従って、「ギョウ(ゲウ)」は声符からの類推である可能性が高い。

「紡ボウ(バウ)」

	字母：敷(次清)	韻目：養(3f)	反切：妃兩切(髣)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホウ(ハウ)	—	ホウ(ハウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)

「紡」の中古音は、敷母養韻 3 等である。中古音から、呉音・漢音ともに「ホウ(ハウ)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「ホウ(ハウ)」、漢音は三種すべての辞書が「ホウ(ハウ)」である。

辞書に収録されている漢語では、「紡績ボウセキ」「紡錘ボウスイ」「混紡コンボウ」…

のように、すべての漢語が「ボウ(バウ)」で読まれる。呉音または漢音の「ホウ(ハウ)」で読まれる例は存在しない。

以上のように、「紡」は「ボウ(バウ)」しか読み方がないが、その濁音的特徴は中古音から説明できないので、慣用音とされる。

次清字である「紡」が濁音で読まれる理由については、「紡」と同じ声符「方」をもつ奉母漾韻の「防」や並母陽韻の「傍」の呉音が「ボウ(バウ)」であり、「防犯ボウハン」「傍聴ボウチョウ」のように実例があるので、声符からの類推である可能性が高い。

「剛ゴウ(ガウ)」

	字母：見(清)	韻目：唐(1)	反切：古郎切(岡)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

「剛」の中古音は、見母唐韻 1 等なので、呉音・漢音共に「コウ(カウ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「コウ(カウ)」である。

辞書に収録されている漢語では、「剛健ゴウケン」「剛力ゴウリキ」「剛日ゴウジツ」「内剛ナイゴウ」…のように、全て濁音の「ゴウ(ガウ)」で読まれる。呉音または漢音の「コウ(カウ)」で読まれる例は存在しない。

「ゴウ(ガウ)」の濁音的特徴は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「剛」と同じ声符をもつ「岡」「鋼」「綱」は「剛」と同じ小韻であり、「岡陵コウリョウ」「鋼鉄コウテツ」「綱目コウモク」…のように、すべての漢語が「コウ(カウ)」で読まれ中古音に矛盾しない。「剛」のみ濁音で読まれる理由として、「剛」は「剛健ゴウケン」「剛気ゴウキ」「剛猛ゴウモウ」など、「つよい」「かたい」「たけだけしい」の意味を表すことから、和語の語頭濁音¹⁶⁾と同様に、濁音形をとつと可能性がある。

「妥ダ」

	字母：透(次清)(合)	韻目：果(1)	反切：他果切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	タ
漢音	タ	タ	タ
慣用音	ダ	ダ	ダ

「妥」の中古音は、透母果韻 1 等であるから、呉音・漢音共に「タ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「タ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「タ」である。

辞書に収録されている漢語では、「妥協ダキョウ」「妥当ダトウ」「妥結ダケツ」…のように、すべて濁音の「ダ」で読まれる。清音の「タ」で読まれる例はない。

「ダ」の濁音的特徴は中古音から説明できないので、慣用音と認められる。

「劇ゲキ」

	字母：群(濁)	韻目：陌(3 乙)	反切：奇逆切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ギャク	ギャク	ギャク
漢音	ケキ	ケキ	ケキ
慣用音	ゲキ	ゲキ	ゲキ

「劇」の中古音は、群母陌韻 3 等乙類である。陌韻は呉音で-jak、漢音で-ek になるのが原則なので、濁紐字である呉音は「ギャク」、無声化した漢音は「ケキ」になることが期待される。

辞書を見ると、三種すべての辞書が呉音は「ギャク」、漢音は「ケキ」である。

辞書に収録されている漢語では、「劇作ゲキサク」「劇団ゲキダン」…のように、すべて「ゲキ」で読まれる。「ギャク」「ケキ」で読まれる漢語は見出せない。

「ゲキ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「撃ゲキ」

	字母：見(清)	韻目：錫(4)	反切：古歴切(激)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キヤク	キヤク
漢音	ケキ	ケキ	ケキ
慣用音	ゲキ	ゲキ	ゲキ

「撃」の中古音は、見母錫韻 4 等である。錫韻は陌韻と同様に、呉音は-jak、漢音は-ek になるのが原則だから、呉音は「キヤク」、漢音は「ケキ」になることが期待される。

辞書を見ると、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「キヤク」、漢音は三種すべての辞書が「ケキ」である。

辞書に収録されている漢語では、「撃退ゲキタイ」「撃破ゲキハ」「攻撃コウゲキ」「目撃モクゲキ」…のように、すべて濁音の「ゲキ」で読まれる。「キヤク」「ケキ」で読ま

れる例はない。

「ゲキ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

ちなみに、「撃」と同じ小韻には「激」がある。「激情ゲキジョウ」「激昂ゲキコウ」「激励ゲキレイ」…のように、「激」の漢語もすべて濁音の「ゲキ」で読まれるので、「撃」や「激」は、元々濁音の「ゲキ」で読まれた可能性がある。あるいは、「剛」と同様に和語の語頭濁音の影響を受けた可能性がある。

「惨ザン」

	字母：清(次清)	韻目：感(1)	反切：七感切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	サン	サン	ソン(ソム)
漢音	サン	サン	サン(サム)
慣用音	ザン	ザン	ザン

「惨」の中古音は、清母感韻1等なので、呉音・漢音共に「サン(サム)」になるのが原則である。

辞書を見ると、呉音に関しては『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「サン」としているのに対し、『学研新漢和大字典』は「ソン(ソム)」を認めている。「ソン(ソム)」は咸攝1等で「紺コン(コム)」「曇ドン(ドム)」のような主母音を-oで写す例があることによると思われるが、「惨」には歴史的にも「ソン(ソム)」の音を認め難い。漢音に関しては、三種すべての辞書が「サン(サム)」としている。

漢和辞典に収録されている漢語では、「惨事サンジ」「惨劇サンゲキ」「惨劇サンゲキ」…のように、一般には「サン」で読まれるが、「無惨ムザン」「惨虐ザンギャク/サンギャク」「惨死ザンシ」…のように、濁音の「ザン」で読まれる漢語も存在する。

「ザン」の濁音的特徴は中古音から導き出せないので、慣用音と認めざるを得ない。

「惨」の声符「参」は「参拝サンパイ」「参加サンカ」などのように、「サン」で読まれるので、声符からの類推とは言い難い。また、「ザン」を連濁によって生じた濁音と推定できる漢語の存在も見出せない。

「惨」は、元々濁音の「ザン」として借用された可能性がある。

「蒸ジョウ」

字母：照(清)

韻目：蒸(3 甲)

反切：煮仍切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ	ショウ	ショウ
漢音	ショウ	ショウ	ショウ
慣用音	ジョウ	ジョウ	ジョウ

「蒸」の中古音は、照母蒸韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「ショウ」になるのが原則である。

辞書を見ると、調査に使用した三種すべての辞書が呉音・漢音共に「ショウ」としている。

辞書に収録されている漢語では「蒸発ジョウハツ」「蒸気ジョウキ」「蒸暑ジョウショ」…のように、ほとんどの漢語が「ジョウ」で読まれる。「蒸籠セイロウ/ジョウリョウ」のみ、「セイ」で読まれる。この「セイ」は、調査に使用した辞書には認められていないが、例えば『漢辞海』（三省堂）では、唐音に認められている。

「ジョウ」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音とせざるを得ない。

「蒸」を濁音「ジョウ」とするのは、律令制における省の三等院を指した「丞」からの類推であろう。ちなみに「丞」は濁紐禅母（證韻）で「ジョウ」と読まれる。

「郷ゴウ(ガウ)」

字母：曉(清)

韻目：陽(3 乙)

反切：許良切(香)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
漢音	キョウ(キャウ)	キョウ(キャウ)	キョウ(キャウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

「郷」の中古音は、曉母陽韻 3 等乙類なので、呉音は「コウ(カウ)」、漢音は「キョウ(キャウ)」になるのが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音は「コウ(カウ)」、漢音は「キョウ(キャウ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「郷愁キョウシュウ」「郷里キョウリ」「郷土キョウド」…のように、多くの漢語が「キョウ(キャウ)」で読まれるが、「郷社ゴウシャ」「郷村ゴウソン」「近郷キンゴウ」…のように、「ゴウ(ガウ)」で読まれる漢語も存在する。「コウ(カウ)」で読まれる例はない。

「ゴウ(ガウ)」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを

得ない。

「郷」と同じ声符をもつ「響」は、曉母養韻 3 等乙類なので、「郷」と四声相配するから、呉音は「コウ(カウ)」、漢音は「キョウ(キャウ)」になるのが原則である。現代の漢語では、「音響オンキョウ」「影響エイキョウ」など、すべて「キョウ(キャウ)」で読まれるので、声符からの類推とは言い難い。

「渋ジュウ(ジフ)」

字母：審(清)

韻目：緝(3 乙)

反切：色立切 (澀)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュウ(シフ)	—	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	ソウ(ソフ)
慣用音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)

「渋」の中古音は、審母緝韻 3 等乙類なので、呉音・漢音ともに「シュウ(シフ)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「シュウ(シフ)」とし、漢音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「シュウ(シフ)」としている。一方、『学研新漢和大字典』は「ソウ(ソフ)」を認めているが、「渋」が「ソウ(ソフ)」で読まれる例は見出せない。

辞書に収録されている漢語では、「渋滞ジュウタイ・シュウタイ」「苦渋クジュウ」「渋面ジュウメン」…のように、一般には「ジュウ(ジフ)」で読まれる。「渋滞」のように、漢和辞典では「シュウ(シフ)」を認めている漢語もあるが、「渋滞」は通常「ジュウタイ」で読まれる。

「ジュウ(ジフ)」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「拷ゴウ(ガウ)」

字母：溪(次清)

韻目：皓(1)

反切：苦浩切(考)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	コウ(カウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

「拷」は、『広韻』にはない。調査に使用した漢和辞典は、いずれも皓韻の字としている。根拠となる韻書を調べると、漢和辞典は『集韻』の音「苦浩切」にもとづくと思われるが、その音からは呉音・漢音共に「コウ(カウ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「コウ(カウ)」を認め、漢音は三種すべての辞書が「コウ(カウ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「拷問ゴウモン」「拷囚ゴウシュウ」「拷責ゴウセキ」…のように、すべて「ゴウ(カウ)」で読まれる。「コウ(カウ)」で読まれる例はない。

「ゴウ(ガウ)」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「不ブ」

字母：非(清)	韻目：尤(3 乙)	反切：甫鳩切
非(清)	有(3 乙)	方久切(缶)
非(清)	宥(3 乙)	甫救切(富)
非(清)(合)	物(3f)	分勿切(弗)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フ	フ・ホチ
漢音	フウ・フツ・ヒ	フ・フウ	フウ・フツ・フ
慣用音	フ・ブ	ブ	フ・ブ

「不」は4つの韻に属する。このうち、尤・有・宥韻は四声相配するので、合わせて検討する。

尤・有・宥韻の場合は、非母3等乙類である。これらの韻の呉音は「有ウ」「首シュ」などのように-(j)u、漢音も唇音は「富フ」のように-uになるのが原則なので、「不」は呉音・漢音共に「フ」になることが期待される。

物韻の場合は、非母3等乙類である。この韻の唇音は、呉音は-ot または-ut、漢音は-ut になるのが原則なので、「不」の呉音は「ホチ」または「ホツ」、漢音は「フツ」になることが期待される。

辞書では、

『角川新字源』 尤・有韻：呉音「フ」 漢音「フウ」 慣用音「ブ」
 物・月韻：呉音「一」 漢音「フツ」 慣用音「フ」
 紙韻：呉音「一」 漢音「ヒ」

『新選漢和辞典』 有韻：呉音「フ」 漢音「フウ」
 物韻：呉音「フ」 漢音「フ」 慣用音「ブ」

『学研新漢和大字典』 有韻：呉音「フ」 漢音「フウ」
 物韻：呉音「ホチ」 漢音「フツ」 慣用音「フ・ブ」
 虞韻：呉音「フ」 漢音「フ」

のように、漢和辞典によって字音の示し方に違いが見られる。まず、『角川新字源』では月韻と紙韻を、『学研新漢和大字典』では虞韻を認めているが、『広韻』ではこれらの韻に収録されていないので、この二韻は検討から除く。

尤韻と有韻に関しては、三種すべての辞書が呉音は「フ」、漢音は「フウ」としている。

物韻に関しては、呉音は『新選漢和辞典』が「フ」、『学研新漢和大字典』が「ホチ」を認め、漢音は『新選漢和辞典』が「フ」、『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「フツ」を認めている。

慣用音「ブ」に注目すると、『角川新字源』は尤・有韻に認めているのに対して、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は物韻に認めている。『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が慣用音に認めている「フ」は、呉音・漢音と一致するので、呉音または漢音とすべきである。慣用音とする理由はない。

辞書に収録されている漢語では、「不在フザイ」「不動フドウ」「不毛フモウ」…のように、ほとんどの漢語が「フ」で読まれるが、「不細工ブサイク」「不精ブショウ・フゼイ」…のように、僅かに「ブ」で読まれる漢語も存在する。この「ブ」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「不」に「ブ」の音が発生した理由は、同じ否定辞で漢音で「ブ」となる「無」との混同であろう。「ブショウ」が「無精」「不精」両様に表記されることがそれを窺わせる。

『学研新漢和大字典』は呉音に「ホチ」を認めているが、これは物韻および四声相配する文・吻・問韻の唇音清濁字が、呉音では「物モチ・モツ」「文モン」「問モン」のように -ot、-on になるので、これに倣った可能性がある。しかし、「不」が「ホチ」で読まれた例は見出せない。

「剖ボウ」

字母：滂(次清)

韻目：厚(1)

反切：普后切

滂(次清)

虞(3 乙)

芳武切(撫)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	—	フ
漢音	ホウ	ホウ	ホウ
慣用音	ボウ	ボウ	ボウ

「剖」は複数の韻に属する。厚韻の場合は、滂母 1 等である。厚韻の呉音は「ロク」や「頭ズ」(侯韻) などのように、-(j)u になるものも多く見られるので、それに従うと「剖」の呉音は「フ」または「ホウ」、漢音は「ホウ」になるのが原則である。

虞韻の場合は、滂母 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「フ」になるのが原則である。

調査に使用した三種の辞書では、厚韻のみ示し、虞韻は示していない。呉音は、『角川

新字源』と『学研新漢和大字典』が「フ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「ホウ」としている。

現代の漢語では、「剖析ホウセキ」「剖判ホウハン」「剖決ホウケツ」…のように、辞書が収録しているほとんどの漢語は「ホウ」で読まれるが、「解剖カイボウ」のように濁音の「ボウ」で読まれるのが一般的である。

「ボウ」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音とせざるを得ない。

b) 中古音の濁音が清音になるもの (12 字)

危キ(p.169)	紅ク(p.135)	研ケン(p.136)	験ケン(p.172)
仰コウ(カウ)(p.138)	近コン(p.136)	石シヤク(p.178)	染セン(p.140)
耐タイ(p.138)	滯タイ(p.163)	賃チン(p.137)	平ヒョウ(ヒャウ)(p.139)

「紅ク」

	字母：匣(濁)	韻目：東(1)	反切：戸公切(洪)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ・ク
漢音	コウ	コウ	コウ
慣用音	ク	ク	ク

「紅」の中古音は、匣母東韻 1 等である。東韻の呉音は、「公ク」「通ツウ」などのように -u, -uu となることが多い。漢音の東韻 1 等は、「公コウ」「空コウ」などのように -ou となることが多い。従って、「紅」の呉音は「グ」または「グウ」、漢音は「コウ」になることが期待される。

辞書では、呉音は三種すべての辞書が「グ」を認め、『学研新漢和大字典』のみ「ク」も認めている。この呉音「ク」は、

『学研新漢和大字典』東韻(ピンインは *hóng*)：呉音「グ」漢音「コウ」慣用音「ク」
東韻(ピンインは *gōng*)：呉音「ク」漢音「コウ」

のように、『学研新漢和大字典』は匣母と見母に認めているようである。見母の字である「公」と同じ小韻の字を見ると、「紅」の声符および同じ声符をもつ「工」「缸」「功」などがあるので、『広韻』以降の韻書には見母にも収録されている可能性が高い。

しかし、『広韻』には匣母の字である「洪」と同じ小韻にしか収録されていない。

辞書に収録されている漢語では、「紅白コウハク」「紅玉コウギョク」「紅巾コウキン」…のように、「コウ」で読まれる漢語が圧倒的に多いが、「真紅シンク」「深紅シンク・シンコウ」…のように「ク」で読まれる漢語や、「紅蓮グレン・コウレン」のように「グ」

「研」の中古音は、疑母霰韻 4 等専属韻である。疑母なので、呉音・漢音共に「ゲン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ゲン」、漢音は三種すべての辞書が「ゲン」を認めている。『角川新字源』は呉音をとっていない。

辞書に収録されている漢語では、「研究ケンキュウ」「研鑽ケンサン」「研修ケンシュウ」「研磨ケンマ」…のように、すべて「ケン」で読まれる。「ゲン」で読まれる例はない。

「研」が清音の「ケン」で読まれるのは、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「賃チン」

	字母：娘(清濁)	韻目：沁(3)	反切：乃禁切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ニン	ニン(ニム)
漢音	ジン(ヂン)	ジン(ヂン)	ジン(ヂム)
慣用音	チン	チン	チン

「賃」の中古音は、娘母沁韻 3 等なので、呉音は「ニン(ニム)」、非鼻音化した漢音は「ジン(ヂム)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』『学研新漢和大字典』が「ニン(ニム)」、漢音は三種すべての辞書が「ジン(ヂム)」としている。『角川新字源』は呉音を認めていない。

辞書に収録されている漢語では、「賃金チンギン」「賃貸チンタイ」「運賃ウンチン」「駄賃ダチン」…のように、すべての漢語が「チン」で読まれ、「ニン(ニム)」「ジン(ヂム)」で読まれる例はない。

この「チン」は漢音「ヂン」が清音化したものであるが、中古音から説明できないので慣用音と認めざるを得ない。

「賃」の声符「任」をもつ字には、「任」「荏」などがある。

「任」は侵韻と沁韻に属し、呉音は「ニン(ニム)」、漢音は「ジン(ヂム)」になることが予想され、「任務ニンム」「任意ニンイ」「就任シュウニン」「任人ニンジン・ジンジン」「任侠ニンキョウ・ジンキョウ」…のように、すべての漢語が「ニン」または「ジン」で読まれる。

「荏」は寢韻に属し、侵韻・沁韻と四声相配するので、呉音は「ニン(ニム)」、漢音は「ジン(ヂム)」になることが予想される。漢語は「荏弱ジンジャク」「荏染ジンゼン」のように、「ジン」で読まれ、「チン」で読まれる例は存在しない。従って、声符からの類推とは考え難い。

「耐タイ」

字母：泥(清濁)

韻目：代(1)

反切：奴代切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ナイ・ノウ	ノウ	ナイ・ノウ・ノ
漢音	ダイ・ドウ	ダイ・ドウ	ダイ・ドウ
慣用音	タイ	タイ	タイ

「耐」の中古音は、泥母代韻 1 等なので、呉音は「ナイ」、非鼻音化した漢音は「ダイ」になることが期待される。

辞書では、呉音は三種すべての辞書が「ノウ」、このほか『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「ナイ」、『学研新漢和大字典』のみ「ノ」を認めている。漢音は、三種すべての辞書が「ダイ」と「ドウ」を認めている。辞書は「耐」に蒸韻を認めており、蒸韻の音として「ノウ」と「ドウ」を認めているが、『広韻』には収録されていない。

辞書に収録されている漢語では、「耐久タイキュウ」「耐震タイシン」「忍耐ニンタイ」…のように、すべて「タイ」で読まれる。この「タイ」は、漢音「ダイ」が清音化したものであるが、中古音から説明できないので慣用音とせざるを得ない。

「仰コウ(カウ)」

字母：疑(清濁)

韻目：養(3 乙)

反切：魚兩切

疑(清濁)

漾(3 乙)

魚向切(軒)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)
漢音	ギョウ(ギャウ)	ギョウ(ギャウ)	ギョウ(ギャウ)
慣用音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)

「仰」は2つの韻に属するが、養韻と漾韻は四声相配するので、まとめて検討する。

「仰」の中古音は、疑母養韻 3 等乙類と疑母漾韻 3 等乙類なので、呉音は「ゴウ(ガウ)」、漢音は「ギョウ(ギャウ)」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音を「ゴウ(ガウ)」、漢音を「ギョウ(ギャウ)」としている。

辞書が見出し語に立てている漢語では、「仰天ギョウテン」「仰望ギョウボウ」「仰角ギョウカク」「敬仰ケイギョウ」「慕仰ボギョウ」…のように、一般には漢音「ギョウ(ギャウ)」で読まれるが、「仰仰ゴウゴウ・ギョウギョウ」「渴仰カツゴウ」などのように呉音「ゴウ(ガウ)」で読まれる漢語も存在する。このほか、「信仰シンコウ」「景仰ケイコウ・ケイギョウ」などのように「コウ(カウ)」で読まれる漢語が存在するが、この「コウ(カウ)」は中古音から説明できない。

「仰」の声符および同じ声符をもつ字には、「印」「迎」「昂」などがある。

このうち、日常よく使用される「迎」（疑母庚韻 3 等甲類・疑母映韻 3 等乙類）の呉音は「ゴウ(ガウ)」、漢音は「ゲイ」になることが期待される。現に、「迎合ゲイゴウ」「迎春ゲイシュン」「歓迎カンゲイ」「送迎ソウゲイ」などのように、一般には「ゲイ」で読まれる。辞書では、「来迎ライゲイ・ライゴウ・ライコウ」の一語に「コウ(カウ)」で読まれる漢語が存在するが、「来仰」は一般には「ライゲイ」もしくは「ライゴウ」で読まれ、「ライコウ」は一般的ではない。

「仰」の声符である「印」の中古音は、疑母唐韻 1 等と疑母養韻 3 等乙類なので、唐韻では呉音・漢音共に「ゴウ(ガウ)」、養韻では呉音「ゴウ(ガウ)」、漢音「ギョウ(ギャウ)」になるのが原則である。現に、「印貴ゴウキ」「低印テイゴウ」「印天ギョウテン」「印望ギョウボウ」などのように、「ゴウ(ガウ)」または「ギョウ(ギャウ)」で読まれる。

「昂」の中古音は疑母唐韻 1 等であり、「印」と同じ小韻である。従って呉音・漢音共に「ゴウ(ガウ)」になることが期待される。しかし、現代の漢語では、「激昂ゲキコウ」「昂昂コウコウ」「昂然コウゼン」「昂蔵コウゾウ」などのように、すべて「コウ(カウ)」で読まれる。

以上から、「仰コウ(カウ)」は呉音「ゴウ(ギャウ)」の清音形であると考えられるが、使用頻度から見て、「仰コウ(カウ)」が「昂コウ(カウ)」からの類推とは考え難い。「仰コウ(カウ)」「昂コウ(カウ)」ともに「呉音の濁音は漢音で清音になる」という意識から生まれた形とも考えられる。

「平ヒョウ(ヒャウ)」

字母：並(濁)

韻目：庚(3 乙)

反切：符兵切

並(濁)

仙(3 甲)

房連切(便)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大数据』
呉音	ビョウ(ビャウ)・ベン	ビョウ(ビャウ)・ベン	ビョウ(ビャウ)・ベン
漢音	ヘイ	ヘイ・ヘン	ヘイ・ヘン
慣用音	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)

「平」は 2 つの韻に属する。

庚韻に関しては、並母 3 等乙類なので、呉音は「ビョウ(ビャウ)」、漢音は「ヘイ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音を「ビョウ(ビャウ)」、漢音を「ヘイ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「平常ヘイジョウ」「平然ヘイゼン」「平和ヘイワ」「平日ヘイジツ」…のように、「ヘイ」で読まれる漢語が圧倒的に多いが、「平等ビョウドウ」のように「ビョウ」で読まれる漢語も存在し、日常よく使用される。

仙韻に関しては、並母 3 等甲類なので、呉音は「ベン」、漢音は「ヘン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は三種すべてが「ベン」とし、漢音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ヘン」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「平平ベンベン・ヘイヘイ」「平議ベンギ・ヘイギ」のように「ベン」で読まれる漢語がある。「ヘン」で読まれる漢語は見出せない。

ところで、調査に使用した三種の辞書が慣用音に認めている「ヒョウ(ヒャウ)」について見ると、「平声ヒョウショウ・ヒョウセイ」「平文ヒョウモン」などがある。

この「平ヒョウ(ヒャウ)」は、庚韻の呉音「ビョウ(ビャウ)」の清音形であると考えられるが、漢音形を生じる理由は明らかにできない。

「染セン」

字母：日(清濁)

韻目：豔(3 甲)

反切：如検切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ネン(ネム)
漢音	ゼン	ゼン	ゼン(ゼム)
慣用音	セン	セン	セン

「染」の中古音は、日母豔韻 3 等甲類なので、呉音は「ネン(ネム)」、漢音は「ゼン(ゼム)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ネン(ネム)」を認め、漢音は三種すべてが「ゼン(ゼム)」としている。

辞書が見出し語として立てている漢語では、「愛染アイゼン」のように原則通り「ゼン(ゼム)」で読まれる漢語も存在するが、一般には「染料センリョウ」「染色センシヨク」「染化センカ」「染指センシ」「伝染デンセン」「感染カンセン」…のように「セン(セム)」で読まれる。「ネン(ネム)」でよまれる漢語は見出せない。

この「セン(セム)」は、漢音「ゼン(ゼム)」の清音形であると考えられるが、清音化する理由は明らかにできない。

c) その他 (13 字)

均イン(キン)(p.170)	石コク(p.178)	祉シ(p.156)	堪タン(p.154)
反タン(p.182)	茶チャ(p.192)	注チュウ(p.171)	鑄チュウ(チウ)(p.184)
緒チヨ(p.164)	匿トク(p.183)	畝ホ(p.194)	輸ユ(p.157)
漁リョウ(レフ)(p.180)			

② 韻腹に関して、原音との対応が認められないもの (38 字)

a) 中古音の重母音を短音とするもの (4 字)

入ジュ(p.143)	想ソ(p.141)	頭ト(p.141)	登ト(p.142)
------------	-----------	-----------	-----------

「想ソ」

	字母：審(清)	韻目：養(4)	反切：息両切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
漢音	—	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)
慣用音	ソ	ソ	ソ

「想」の中古音は、審母養韻 4 等なので、呉音は「ソウ(サウ)」、漢音は「ショウ(シャウ)」になるのが原則である。

辞書を見ると、呉音は三種すべてが「ソウ(サウ)」を認め、漢音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ショウ(シャウ)」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「想像ソウゾウ」「想念ソウネン」「想望ソウボウ」「予想ヨソウ」「理想リソウ」…のように、ほとんどの漢語が「ソウ」で読まれるが、「愛想アイソウ・アイソ」に限っては、「ソ」で読まれる。

「想」の声符「相」は、「想」と四声相配するので、呉音は「ソウ(サウ)」、漢音は「ショウ(シャウ)」になるのが原則である。漢語は「相互ソウゴ」「相談ソウダン」「相伴ショウバン」「真相シンソウ」「首相シュショウ」…のように、「ソウ(サウ)」または「ショウ(シャウ)」で読まれ、「ソ」になる漢語は見出せない。

「想」が「ソ」で読まれるのは、「愛想」のみである。例えば「房」は、一般には「ボウ」で読まれるが、「女房ニョウボ」のように、特定の漢語の口語形において、短音化するものがある。これと同様に、「愛想」は「アイソウ」が「アイソ」のように、口語形で短音化した可能性が高い。この「ソ」は中古音から説明できないので、慣用音とせざるを得ない。

「頭ト」

	字母：定(濁)	韻目：侯(1)	反切：度侯切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ズ(ヅ)	ズ(ヅ)	ズ(ヅ)
漢音	トウ	トウ	トウ
唐音	—	チュウ(チウ)	ジュウ(ヂュウ)
慣用音	ト	ト	ト

「頭」の中古音は、定母侯韻 1 等なので、呉音は「ズ(ヅ)」、漢音は「トウ」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音に「ズ(ヅ)」、漢音に「トウ」を認めている。このほか、唐音として『新選漢和辞典』は「チュウ(チウ)」、『学研新漢和大字典』は「ジュウ(ヂュウ)」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「頭角トウカク」「頭髮トウハツ」「没頭ボツトウ」「咽頭イントウ」「冒頭ボウトウ」…のように、「トウ」で読まれる漢語が圧倒的に多いが、「頭脳ズノウ」「頭上ズジョウ・トウジョウ」「頭巾ズキン・トキン」「頭痛ズツウ・トウツウ」…のように、「ズ」で読まれる漢語も多数存在する。このほか、「塔頭タッチュウ」「饅頭マンジュウ」のように、「チュウ」「ジュウ(ヂュウ)」で読まれる漢語が一語ずつ存在するが、これは唐音である。

辞書が認めている「ト」で読まれるのは、「音頭オンド」の一語のみである。これは、「女房ニョウボ」「愛想アイソ」と同様に、「音頭オンド」は、漢音の「トウ」が短縮されて「ト」になり、さらに連濁によって「ド」になったものと考えられる。この「ド」は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「登ト」

	字母：端(清)	韻目：登(1)	反切：都滕切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	トウ	トウ	トウ
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ト	ト	ト

「登」の中古音は、端母登韻 1 等なので、呉音・漢音共に「トウ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「トウ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「登記トウキ」「登校トウコウ」「登場トウジョウ」「登録トウロク」…のように、ほとんどの漢語が「トウ」で読まれるが、「登城トウジョウ・トジョウ」「登山トザン」のように、一部に「ト」で読まれる漢語が存在する。

「登」の声符「豆」の中古音は、定母侯韻 1 等なので、呉音は「ズ(ヅ)」、漢音は「トウ」であり、漢語は「大豆ダイズ」「豆腐トウフ」「納豆ナットウ」などのように、原則通り「ズ(ヅ)」または「トウ」で読まれる。「ト」で読まれる漢語は見出せないで、声符「豆」からの類推とは考え難い。

「愛想アイソ」「音頭オンド」などのように、「トウ」が短縮したものであると考えられるが、理由は明らかでない。「ト」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざる

を得ない。

「入ジュ」

字母：日(清濁)

韻目：緝(3 甲)

反切：人執切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニュウ(ニフ)	ニュウ(ニフ)	ニュウ(ニフ)
漢音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)
慣用音	ジュ	ジュ	ジュ

「入」の中古音は、日母緝韻 3 等甲類なので、呉音は「ニュウ(ニフ)」、非鼻音化した漢音は「ジュウ(ジフ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音は「ニュウ(ニフ)」、漢音は「ジュウ(ジフ)」を認めている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「入閣ニュウカク」「入念ニュウネン」「入学ニュウガク」「転入テンニュウ」「輸入ユニュウ」…のように、ほとんどが呉音の「ニュウ(ニフ)」で読まれる。

「入声ニュウショウ・ニッショウ」のように、「ニュウ(ニフ)」が無声子音の前で促音化して「ニッ」で読まれる漢語も一語存在する。

このほか、「入魂ジッコシ・ジュコン・ジュッコシ」「入水ニュウスイ・ジュスイ」「入洛ニュウラク・ジュラク」のように、僅かであるが「ジュ」で読まれる漢語も存在する。

この「ジュ」は、漢音形「ジュウ(ジフ)」が短音化したものと思われるが、その条件は明らかでない。漢音形にはこの「ジュ」しか認められない。これは中古音から導かれる形と一致しないので、慣用音と認めざるを得ない。

b) 中古音の単母音を長音とするもの (8 字)

偶グウ(p.175)	遇グウ(p.173)	隅グウ(p.174)	枢スウ(p.144)
数スウ(p.145)	女ニョウ(p.143)	裕ユウ(p.146)	露ロウ(p.145)

「女ニョウ」

字母：娘(清濁)

韻目：語(3)

反切：尼虜切

娘(清濁)

御(3)

尼據切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニョ	ニョ	ニョ
漢音	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)
慣用音	ニョウ	ニョウ	ニョウ

「女」の中古音は、娘母語韻 3 等と娘母御韻 3 等なので、呉音は「ニョ」、非鼻音化した漢音は「ジョ(ヂョ)」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音は「ニョ」、漢音は「ジョ(ヂョ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「女流ジョリュウ」「女優ジョユウ」…のように、「ジョ」になる漢語が圧倒的に多いが、「天女テンニョ」「女人ニョニン」…のように、「ニョ」で読まれる漢語も存在する。

このほか、「女房ニョウボウ・ジョボウ・ニョウボ(口語形)」「女院ニョウイン・ニョイン」…のように、「ニョウ」で読まれる漢語が存在する。

この「ニョウ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。これらは「詩歌シイカ」「鼻屑ヒイキ」などのように、特定の漢語において長音化した例であるが、その理由は明らかになっていない。

「枢スウ」

	字母：穿(次清)	韻目：虞(3 甲)	反切：昌朱切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ス
漢音	シュ	シュ	シュ
慣用音	スウ	スウ	スウ

「枢」の中古音は、穿母虞韻 3 等甲類である。虞韻（虞韻・遇韻）は、「主ス・シュ」「樹ジュ・シュ」などのように、呉音は u , ju、漢音は ju になるので、「枢」の呉音は「ス」または「シュ」、漢音は「シュ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ス」を認め、漢音は三種すべての辞書が「シュ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「枢密スウミツ」「枢軸スウジク」「枢衡スウコウ」「中枢チュウスウ」…のように、すべて「スウ」で読まれる。

この「スウ」は、「女房ニョウボウ」「詩歌シイカ」などと同様、漢語の音として生じた呉音「ス」の長音化であると考えられるが、中古音からは説明できないので慣用音と認めざるを得ない。

「数スウ」

字母：審(清)	韻目：麌(3 乙)	反切：所矩切
審(清)	遇(3 乙)	所據切(揀)
審(清)	覺(2)	所角切(朔)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ・ソク	シュ・サク・ソク	シュ・サク・ソク
漢音	ス・サク・ソク	ス・サク・ショク	ス・サク・ソク
慣用音	スウ	スウ	スウ

「数」は3つの韻に属する。麌韻と遇韻は四声相配するので、まとめて検討する。なお、漢和辞典では沃韻にも認めているが、『広韻』には収録されていないので、本検討から除外する。

覺韻に関しては、中古音は審母2等なので、呉音・漢音共に「サク」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「サク」を認め、漢音は三種すべての辞書が「サク」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「数奇サクキ・スウキ」を除いて「数罟サクコ・ソクコ」「数数サクサク・ソクソク」…のような語を挙げているが、一般的ではない。

麌韻と遇韻に関しては、中古音は審母3等乙類なので、呉音は「ス」または「シュ」、漢音は「シュ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音に「シュ」、漢音に「ス」を認めているが、辞書が漢音に認めている「ス」は、「枢」や「主」の場合と同様に呉音とすべきである。

辞書に収録されている漢語では、「数学スウガク」「数詞スウシ」「数字スウジ」「数値スウチ」…のように、「スウ」で読まれる漢語が圧倒的に多いが、「数寄スキ」のように「ス」で読まれる漢語が僅かに存在する。

「スウ」は、「女房ニョウボウ」「詩歌シイカ」などの場合と同様、漢語の音として発生した音で、呉音「ス」の長音化であると考えられるが、中古音から説明できないので慣用音と認めざるを得ない。

「露ロウ」

字母：来(清濁)	韻目：暮(1)	反切：洛故切(路)
----------	---------	-----------

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ロ	ロ	ル
漢音	ロ	ロ	ロ
慣用音	ロウ	ロウ	ロウ

「露」の中古音は、来母暮韻 1 等なので、呉音・漢音共に「ロ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ロ」、『学研新漢和大字典』が「ル」を認め、漢音は三種すべての辞書が「ロ」としているが、『学研新漢和大字典』の呉音「ル」には根拠がない。

辞書に収録されている漢語では、「披露ヒロウ・ヒロ」を除くすべての漢語が「露店ロテン」「玉露ギョクロ」「吐露トロ」「暴露バクロ」…のように「ロ」で読まれる。

「ロウ」で読まれる理由については、「露」の声符「路」は「露」と同じ小韻にあり、漢語は「路地ロジ」「路頭ロトウ」「路面ロメン」…のようにすべて「ロ」で読まれるので、声符からの類推とは考え難い。

「ロウ」は「女房ニョウボウ・ニョウボ」「詩歌シイカ」「中枢チュウスウ」などと同様の長音化であるが、中古音から説明できないので慣用音と認めざるを得ない。

「裕ユウ」

	字母：喻(清濁)	韻目：遇(3 甲)	反切：羊戍切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ユ	—	ユ
漢音	ユ	ユ	ユ
慣用音	ユウ	ユウ	ユウ

「裕」の中古音は、喻母遇韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「ユ」になるのが原則であるが、遇摂の三等韻には「遇グウ」「注チュウ」「乳ニユウ」のように長音化する例が認められる。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「ユ」、漢音は三種すべての辞書が「ユ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「裕福ユウフク」「裕寛ユウカン」「余裕ヨユウ」「富裕フユウ」…のように、すべて「ユウ」で読まれる。

遇摂十二転において、唇音・牙音・喉音の 3 等は「無ム・ブ」「区ク・ク」「羽ウ・ウ」などのように短音節になるので、喉音である「裕」も「ユ」となるはずであるが、原則に反する。

喻母の字に注目すると、流摂には「由ユ・ユウ(イウ)」「遊ユ・ユウ(イウ)」「有ウ・ユウ(イウ)」などのように漢音で「ユウ」になる例がある。

いずれにしても、この「ユウ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

c) その他 (26字)

院イン(キン)(p.186)	員イン(キン)(p.185)	韻イン(キン)(p.186)	喫キツ(p.168)
茎ケイ(p.162)	誇コ(p.161)	石コク(p.178)	除ジ(ヂ)(p.181)
煮シャ(p.158)	崇スウ(p.147)	責セキ(p.155)	茶チャ(p.192)
注チュウ(p.171)	鑄チュウ(チウ)(p.184)	軟ナン(p.192)	濃ノウ(p.167)
派ハ(p.191)	暴バク(p.180)	批ヒ(p.158)	便ビン(p.193)
沸フツ(p.170)	噴フン(p.163)	父ホ(p.187)	朴ボク(p.156)
由ユイ(p.194)	虜リョ(p.171)		

「崇スウ」

字母：牀(濁)

韻目：東(3乙)

反切：鋤弓切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ス	—	ズウ
漢音	シュウ	シュウ	シュウ
慣用音	スウ	ス・スウ	スウ

「崇」の中古音は、牀母東韻 3 等乙類である。

東韻の呉音については、「公ク」「通ツウ」などのように -u, -uu となることが多い。漢音については、1 等韻は「東トウ」「同ドウ」「公コウ」…のように、-ou になるのに対して、3 等韻は唇音以外では「中チュウ」「弓キュウ」「充ジュウ」…のように、-juu になるものが多い。従って、濁紐字である「崇」の呉音は「ズ」または「ズウ」、無声化した漢音は「シュウ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ス」、『学研新漢和大字典』が「ズウ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「シュウ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「崇高スウコウ」「崇拝スウハイ」…のように、実際に使われるのは「スウ」のみである。「スウ」は呉音形「ズ」が清音化とともに直音化したものか、呉音形「ズウ」が清音化したものか、あるいは漢音形「シュウ」が直音化したものかは明らかにできない。いずれにしても、「スウ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

ちなみに「崇」の声符「宗」は、

宗	字母：精(清)	韻目：冬(1)	反切：作冬切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュウ	ソ
漢音	ソウ	ソウ	ソウ
慣用音	シュウ	—	シュウ

のようになり、現代の漢語は「宗教シュウキョウ」「宗旨ソウシ」…のように「シュウ」「ソウ」となり、「スウ」で読まれる例がないので、声符からの類推とは考え難い。

③ 韻尾に関して、原音との対応が認められないもの (15 字)

a) 唇内入声音[-p]を「ーツ」とするもの (7 字)

圧アツ(p.149)	雑ザツ(p.150)	執シツ(p.149)	湿シツ(p.152)
摂セツ(p.151)	接セツ(p.151)	立リツ(p.148)	

「立リツ」

	字母：来(清濁)	韻目：緝(3)	反切：力入切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)
漢音	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)
慣用音	リツ	リツ	リツ

「立」の中古音は、来母緝韻 3 等なので、呉音・漢音共に「リュウ(リフ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「リュウ(リフ)」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「立談リツダン」「立論リツロン」「立法リッポウ」「立派リツパ」「立春リツシュン」…のように、ほとんどの漢語が「リツ」または「リッ」で読まれる。

このほか、「立命リツメイ・リュウメイ」「立坊リツボウ・リュウボウ」「建立コンリュウ」のように、「リュウ」で読まれる漢語も存在する。

「立」は唇内入声音-p の字であり、後に無声子音が続くと促音化しやすかったという歴史的事実がある。例えば、「立命」は、最初は「リュウメイ」で読まれていたものが、促音化の影響により「ーツ」の形（「リツ」）「リツメイ」という読み方も加えられた可能性が高い。

この「リツ」は、日本漢語に発生した音であり、「起立キリツ」などのように「ーツ」

形が現代の漢語に定着しているので、慣用音と認める必要がある。

「執シツ」

	字母：照(清)	韻目：緝(3 甲)	反切：之入切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	シツ・シュ	シツ	シツ

「執」の中古音は、照母緝韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュウ(シフ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』「シュウ(シフ)」、漢音は三種すべての辞書が「シュウ(シフ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「執権シッケン」「執事シツジ」「執筆シツピツ」「執刀シットウ」「確執カクシツ」「固執コシツ」…のように、ほとんどの漢語が「シツ」または「シツ」で読まれる。

このほか、「執心シュウシン」「執念シュウネン」のように「シュウ(シフ)」で読まれる漢語も存在する。

「執行シッコウ・シュギョウ」の一語のみ、「シュ」で読まれる漢語が存在するが、この「シュ」は一般的な語形ではない。これは「シュウ(シフ)」の短縮形であると考えられるが、この漢語のみ「シュ」になる理由は不明である。

「執」は、「立」と同様に唇内入声音であるから、「シツ」は無声子音が後接して促音化を起こした「ーツ」が字音として定着したものと考えられる。

「圧アツ」

	字母：影(清)	韻目：狎(2)	反切：烏甲切(鴨)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン	—	ヨウ(エフ)
漢音	エン・オウ(アフ)	オウ(アフ)	オウ(アフ)
慣用音	アツ	アツ	アツ

「圧」の中古音は、影母狎韻 2 等なので、呉音は「ヨウ(エフ)」、漢音は「オウ(アフ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』が「ヨウ(エフ)」を認め、漢音は三種すべての辞書が「オウ(アフ)」を認めている。

このほか、『角川新字源』は琰・豔韻を認めており、呉音・漢音共に「エン」としてい

るが、『広韻』には収録されていない。また、実際に「エン」で読まれた漢語は見出せない。

辞書に収録されている漢語を見ると、「圧巻アツカン」「圧勝アツショウ」「圧縮アツシユク」「電圧デンアツ」…のように、すべて「アツ」または「アッ」で読まれる。

この「アツ」も、唇内入声音に無声子音が後接して促音化したものが字音として定着したものと考えられる。

「雑ザツ」

	字母：従(濁)	韻目：合(1)	反切：徂合切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゾウ(ザフ)	ゾウ(ザフ)	ゾウ(ゾフ)
漢音	ソウ(サフ)	ソウ(サフ)	ソウ(サフ)
慣用音	ザツ	ザツ	ザツ・ゾウ(ザフ)

「雑」の中古音は、従母合韻 1 等なので、呉音は「ゾウ(ザフ)」、漢音は「ソウ(サフ)」になることが期待される。

辞書では、現代仮名遣いは、三種すべての辞書が呉音は「ゾウ」、漢音は「ソウ」としているが、歴史的仮名遣いは、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は呉音を「ザフ」にしているのに対し、『学研新漢和大字典』では「ゾフ」としている。

『広韻』を見ると、「雑」は「合」と同じ小韻にあり、合韻の字は「答」「納」などのように、本来開口だから、「雑」の呉音は「ザフ」であって、『学研新漢和大字典』の「ゾフ」は誤りである。

辞書に収録されている漢語を見ると、「雑炊ゾウスイ」「雑巾ゾウキン」「雑煮ゾウニ」…のように「ゾウ」で読まれる漢語と、「雑筆ザツピツ」「雑誌ザツシ」「雑草ザツソウ」…のように「ザツ」で読まれる漢語、それから、「雑学ザツガク」「雑談ザツダン」「雑乱ザツラン」…のように「ザツ」で読まれる漢語が存在する。

「雑」も唇内入声字であるが、「雑誌ザツシ」「雑草ザツソウ」のように無声子音が後接して促音化する漢語と、「雑炊ゾウスイ」「雑煮ゾウニ」のように無声子音が後接しても促音化しない漢語とが存在する。

「ザツ」は、唇内入声音に無声子音が後接して促音化したものが字音として定着したものと考えられる。

「接セツ」

字母：精(清)

韻目：葉(4)

反切：即葉切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)
漢音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)・ソウ(サウ)	ショウ(セフ)
慣用音	セツ	セツ	セツ

「接」の中古音は、精母葉韻 4 等なので、呉音・漢音共に「ショウ(セフ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「ショウ(セフ)」としている。このほか、『新選漢和辞典』は、洽韻の字として漢音に「ソウ(サウ)」も認めているが、『広韻』には収録されていない。また、「接」が「ソウ(サウ)」で読まれた例もない。

辞書に収録されている漢語を見ると、「接客セツキヤク」「接近セツキン」「接骨セツコツ」「応接オウセツ」「直接チョクセツ」…のように、ほとんどの漢語が「セツ」または「セツ」で読まれる。「接伴セツパン・ショウバン」のように「ショウ」で読まれる漢語もあるが、一般には「セツ」で読まれる。

この「セツ」は、唇内入声音に無声子音が後接して促音化したものが字音として定着したものと考えられる。

「掇セツ」

字母：審(清)

韻目：葉(3 甲)

反切：書涉切

泥(清濁)

帖(4)

奴協切(茶)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)
漢音	ショウ(セフ)・ジョウ(デフ)	ショウ(セフ)・デツ	ショウ(セフ)
慣用音	セツ	セツ	セツ

「掇」は 2 つの韻に属する。

葉韻に関しては、審母 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「ショウ(セフ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音に「ショウ(セフ)」を認めている。

帖韻に関しては、泥母 4 等なので、呉音は「ニョウ」、漢音は「ジョウ(デフ)」になることが期待される。

辞書では、漢音のみ『角川新字源』が「ジョウ(デフ)」、『新選漢和辞典』が「デツ」を認めている。但し、「掇」が「デツ」で読まれる漢語は見出せない。

辞書に収録されている漢語では、「撰関セツカン」「撰生セッセイ」「撰斉セッセイ」「撰政セッセイ・セツショウ」「撰理セツリ」…のように、ほとんどの漢語が「セツ」または「セツ」で読まれる。「撰受ショウジュ」「撰然ジョウゼン」のように、「ショウ」「ジョウ」で読まれる漢語も僅かに存在するが、日常あまり使用されない漢語である。

「セツ」は、唇内入声音に無声子音が後接して促音化したものが字音として定着したものと考えられる。

「湿シツ」

字母：審(清) 韻目：緝(3 甲) 反切：失入切
透(次清) 合(1) 他合切(鎔)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大数据』
呉音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)・トウ(タフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	シツ	シツ	シツ

「湿」は2つの韻に属する。

緝韻に関しては、審母3等甲類なので、呉音・漢音共に「シュウ(シフ)」になるのが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「シュウ(シフ)」としている。

合韻に関しては、透母1等なので、呉音・漢音共に「トウ(タフ)」になることが期待される。

辞書では、『角川新字源』のみ漢音に「トウ(タフ)」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「湿潤シツジュン」「湿度シツド」「湿疹シツシン」「湿気シツケ」…のように、ほとんどの漢語が「シツ」または「シツ」で読まれる。「湿湿シユウシユウ」「湿水トウスイ」のように、「シュウ」「トウ」で読まれる漢語も存在するが、一般的ではない。

この「シツ」は、唇内入声音に無声子音が後接して促音化したものが字音として定着したものと考えられる。

b) その他 (8字)

喫キツ(p.168)	莖ケイ(p.162)	冊サツ(p.177)	責セキ(p.155)
南ナ(p.153)	匹ヒキ(p.153)	沸フツ(p.170)	漁リョウ(レフ)(p.180)

「南ナ」

字母：泥(清濁)

韻目：覃(1)

反切：那含切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ナン	ナン	ナン(ナム)
漢音	ダン	ダン	ダン(ダム)
慣用音	ナ	ナ	ナ

「南」の中古音は、泥母覃韻 1 等なので、呉音は「ナン(ナム)」、非鼻音化した漢音も韻尾が鼻音の場合は頭子音の鼻音的特徴が保存されるので、「ナン(ナム)」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音を「ナン(ナム)」、漢音を「ダン(ダム)」としているが、漢音「ダン(ダム)」は演繹的に導かれた音である。

辞書に収録されている漢語では、「南極ナンキョク」「南風ナンプウ」「指南シナン」「東南トウナン」…のように、ほとんどの漢語は「ナン」であるが、「南無ナム」の一語だけ「ナ」で読まれる。

「南無ナム」は梵語 **namah** の音訳とされている。この「ナ」は、「南」**nam** の末尾音 **m** と「無」**mu** の頭子音 **m** が重合されて生じた読み方であると考えられる。これは、音訳によって生じた特定の語の読み方であるが、中古音から導かれる形と一致しないので、慣用音と認めざるを得ない。

「匹ヒキ」

字母：滂(次清)

韻目：質(3 甲)

反切：譬吉切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ヒチ
漢音	ヒツ	ヒツ	ヒツ
慣用音	ヒキ	ヒキ	ヒキ

「匹」の中古音は、滂母質韻 3 等甲類である。舌内入声音なので、呉音は「ヒチ」または「ヒツ」、漢音は「ヒツ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ヒチ」を認め、漢音は三種すべてが「ヒツ」としている。

調査した辞書の見出し漢語には、「匹偶ヒツグウ」「匹似ヒツジ」「匹馬ヒツバ」…のように「ヒツ」になるもの、それから「匹敵ヒツテキ」「匹夫ヒツフ」「匹婦ヒツフ」「匹配ヒツパイ」…のように促音化して「ーツ」になるものが存在する。

「ヒツ」になるのが原則の舌内入声音が「ヒキ」になる理由は、明らかではない。一

説には、布の長さを表す単位として和訓「ヒキ（引き）」が字音化したものという。

いずれにしても、「匹ヒキ」は中古音から説明できないので慣用音とせざるを得ない。

3. 2. 2 「慣用音」を生じる理由による分類（109字）

① 声符の類推にもとづくもの（37字）

均イン(キン)(p.170)	街ガイ(p.160)	該ガイ(p.161)	危キ(p.169)
犧ギ(p.159)	喫キツ(p.168)	暁ギョウ(ゲウ)(p.127)	紅ク(p.135)
偶グウ(p.175)	遇グウ(p.173)	隅グウ(p.174)	茎ケイ(p.162)
駮ケン(p.172)	誇コ(p.161)	祉シ(p.156)	璽ジ(p.166)
煮シャ(p.158)	縦ジュウ(p.166)	汁ジュウ(ジフ)(p.176)	蒸ジョウ(p.131)
髓ズイ(p.173)	責セキ(p.155)	憎ゾウ(p.175)	蛇ダ(p.165)
滯タイ(p.163)	堪タン(p.154)	注チュウ(p.171)	緒チョ(p.164)
濃ノウ(p.167)	爆バク(p.168)	批ヒ(p.158)	沸フツ(p.170)
噴フン(p.163)	紡ボウ(バウ)(p.127)	朴ボク(p.156)	輸ユ(p.157)
虜リョ(p.171)			

「堪タン」

字母：溪(次清)

韻目：覃(1)

反切：口含切(龕)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	カン	コン(コム)
漢音	カン	カン	カン(カム)
慣用音	タン	タン	タン

「堪」の中古音は、溪母覃韻 1 等なので、呉音・漢音共に「カン(カム)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』が「カン」、『学研新漢和大字典』は「コン(コム)」を認め、漢音は三種すべてが「カン」としている。

『学研新漢和大字典』が呉音に「コン(コム)」を認めた理由については、「堪」と同じ覃韻の字は「曇ドン(ドム)」「含ゴン(ゴム)」「(阿含経アゴンキョウ)」などがあり、それらの例から「堪」の呉音にも「コン(コム)」を認めた可能性があるが、「堪」が「コン(コム)」で読まれた例は見出せない。

辞書に収録されている漢語では、「堪忍カンニン」「堪輿カンヨ」のように、漢音「カン」で読まれるが、「堪能タンノウ・カンノウ」に限っては、一般に「タン」で読まれる。

この「タン」は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「堪」の声符および同じ声符をもつ字には「甚」「勘」「湛」などがある。

「甚」は沁韻に属し、中古音から呉音は「ジン(ジム)」漢音は「シン(シム)」になることが期待され、現代漢語は「甚雨ジンウ」「甚句ジンク」「甚大ジンダイ」…のように、すべて「ジン(ジム)」で読まれる。

「勘」は勘韻に属し、中古音から呉音・漢音共に「カン(カム)」になることが期待され、現代漢語は「勘合カンゴウ」「勘査カンサ」「勘弁カンベン」…のように、すべて「カン」で読まれる。

一方、「湛」は覃韻と侵韻に属し、現代漢語では「湛然タンゼン」「湛露タンロ」「湛恩チンオン」「湛冥チンメイ」「湛湛タンタン・チンチン」…のように、覃韻の場合は「タン」、侵韻の場合は「チン」で読まれる。

以上から、「堪」と同じ声符をもつ字のうちには、「タン(タム)」で読まれるのもの(「湛」)があり、声符からの類推である可能性は否定できない。

「責セキ」

	字母：照(清)	韻目：麦(2)	反切：側革切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シャク	シャク	シャク・セ
漢音	サク・サイ	サク・サイ	サク・サイ
慣用音	セキ	セキ	セキ

「責」の中古音は、照母麦韻 2 等なので、呉音は「シャク」、漢音は「サク」になることが期待される。

辞書では、呉音は三種すべて「シャク」とし、加えて『学研新漢和大字典』は「セ」も認めている。漢音は三種すべて「サク」「サイ」としている。麦韻のほかに、卦韻も認められているが、『広韻』に収録されているのは麦韻のみなので、本検討から除く。

辞書に収録されている漢語では、「呵責カシャク」の一語を除いて「責任セキニン」「責善セキゼン」「自責ジセキ」「職責ショクセキ」…のように、すべて「セキ」で読まれる。

梗摂の 3・4 等韻は、「石シャク・セキ」のように呉音は-(j)ak、漢音は-ek になるが、2 等韻は、「策シャク・サク」のように呉音は-(j)ak、漢音は-ak になることが期待される。「責」は 2 等韻であるにもかかわらず「セキ」になるのは中古音との関係に矛盾するので、この「セキ」は慣用音と認めざるを得ない。

「責」と同じ声符をもつ字には「積」「績」「蹟」などがある。

このうち「積」と「蹟」は同韻(昔韻)、「績」(錫韻)も同じ梗摂の 4 等韻で、呉音は「シャク」、漢音は「セキ」になる。現に、「積載セキサイ」「面積メンセキ」「成績セ

イセキ」「業績ギョウセキ」などのように「セキ」で読まれる。

ほかにも「史蹟シセキ」など、声符「責」をもつ字はすべて「セキ」で読まれるから、「責セキ」は声符からの類推であると考えられる。

「祉シ」

	字母：徹(次清)	韻目：止(3)	反切：敕里切(恥)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	チ	—	チ
漢音	チ	チ	チ
慣用音	シ	シ	シ

「祉」の中古音は、徹母止韻 3 等なので、呉音・漢音共に「チ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「チ」、漢音は三種すべてが「チ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「福祉フクシ」「休祉キュウシ」「介祉カイシ」…のように、「シ」になるものがほとんどであるが、「祉福チフク・シフク」のような読み方を挙げる辞書も存在する。

この「シ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「祉」の声符および同じ声符をもつ字には、「止」「此」「雌」などがある。

このうち、「止」は照母止韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シ」になる。現に「停止テイシ」「中止チュウシ」などのように「シ」で読まれる。

また「此中シチュウ」「雌雄シユウ」…のように声符「止」をもつ字はすべて「シ」で読まれるので、「祉シ」は声符からの類推であると考えられる。

「朴ボク」

	字母：滂(次清)	韻目：覚(2)	反切：匹角切(璞)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハク	—	ホク
漢音	ハク・ホク	ハク・ホク	ハク
慣用音	ボク	ボク	ボク

「朴」の中古音は、滂母覚韻 2 等なので、呉音・漢音共に「ハク」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ハク」、『学研新漢和大字典』が「ホク」とし、漢音は三種すべてが「ハク」としている。加えて『角川新字源』と『新選漢和辞典』は

漢音に「ホク」も認めている。この「ホク」については、通撰では「木モク・ボク」(屋韻)「僕ボク・ホク」(沃韻)などのように-okになるので、江撰の覚韻にも-ok形を認められた可能性があるが、覚韻の字は「剥ハク」「璞ハク」のように-akになる。

辞書に収録されている漢語では、「朴訥ボクトツ」「朴直ボクチョク」「素朴ソボク」…のように、すべて「ボク」で読まれる。

この「ボク」は、清・濁に関しても主母音に関しても中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「朴」の声符「卜」は幫母屋韻1等であり、呉音・漢音共に「ホク」になることが期待されるが、漢語は「卜祝ボクシュク」「卜占ボクセン」などのようにすべて濁音の「ボク」で読まれるので、「朴」は声符「卜」からの類推であると考えられる。全清音の「卜」が濁音になる理由は明らかでない。

「輸ユ」

字母：審(清) 韻目：麌(3甲) 反切：式注切
 審(清) 遇(3甲) 傷遇切(戌)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ	シュ	ス
漢音	シュ	シュ	シュ
慣用音	ユ	ユ	ユ

「輸」は2つの韻に属する。麌韻と遇韻は四声相配するので、まとめて検討する。

「輸」の中古音は、審母虞韻3等甲類と、審母遇韻3等甲類なので、呉音は「ス」もしくは「シュ」、漢音は「シュ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ス」を認め、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は「シュ」としている。漢音はすべてが「シュ」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「輸心シュシン」「輸羸シュエイ・ユエイ」…のように、「シュ」で読まれる漢語も僅かに存在するが、これらの漢語は現代あまり使用されない。一般には「輸出ユシュツ」「輸入ユニュウ」「運輸ウンユ」「密輸ミツユ」「輸送ユソウ・シュソウ」…のように、「ユ」で読まれる。

「輸」と同じ声符をもつ字には「諭」「癒」「諭」「楡」…などがある。

このうち「諭」は、諭母虞韻3等甲類なので、呉音・漢音共に「ユ」になることが期待され、「比喩ヒユ」「喩意ユイ」などのように「ユ」で読まれる。

ほかにも「治癒チユ」「教諭キョウユ」など、声符「癒」をもつ字はすべて「ユ」で読まれるから、「輸ユ」は声符からの類推であると考えられる。

「煮シャ」

字母：照(清)

韻目：語(3 甲)

反切：普庚切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シヨ	シヨ
漢音	シヨ	シヨ	シヨ
慣用音	シャ	シャ	シャ

「煮」の中古音は、照母語韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シヨ」となるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「シヨ」を認め、漢音は三種すべてが「シヨ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「煮沸シャフツ」「煮炊シャスイ」のように、漢語の例は僅かであるがどちらも「シャ」となり、「シヨ」で読まれる例は見出せない。

この「シャ」は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「煮」の声符および同じ声符をもつ字には「者」「緒」「諸」「署」「暑」「曙」…などがある。しかし、「者」は照母馬韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シャ」になる。現に「医者イシャ」「記者キシヤ」「作者サクシャ」などのように「シャ」で読まれる。

このうち、「緒」は禪母語韻 3 等甲類なので、呉音は「ジョ」漢音は「シヨ」になることが期待され、中古音から「シャ」は導き出せない。漢語は「由緒ユイシヨ」「情緒ジョウチヨ・ジョウシヨ」などのように「シヨ」または「チヨ」で読まれる。

そのほか、「諸兄シヨケイ」「署名シヨメイ」「残暑ザンシヨ」などのように、声符「者」をもつ字の多くは「シヨ」となる。

「者」は一般に広く用いられる字であるから、「煮シャ」は声符「者」からの類推であると考えられる。

「批ヒ」

字母：滂(次清)

韻目：齊韻(4)

反切：匹迷切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ヘイ・ビ	—	ハイ
漢音	ヘイ・ヒ	ヘイ	ヘイ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

「批」の中古音は、滂母齊韻 4 等なので、呉音・漢音共に「ヘイ」になるのが期待される。但し、齊韻 (13 転の場合) においては、「迷マイ」「齊サイ」「妻サイ」「西サイ」…のように、呉音は -ai になる場合があるから、「批」の呉音は「ハイ」となる可能性も

ある。

辞書では、『角川新字源』は紙韻も認めており、呉音「ビ」漢音「ヒ」としているが、『広韻』には収録されていないので本検討から除くと、呉音は『角川新字源』が「ヘイ」、『学研新漢和大字典』は「ハイ」を認め、漢音は三種すべてが「ヘイ」としている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語には、「批准ヒジュン」「批点ヒテン」「批答ヒトウ」「批判ヒハン」「批評ヒヒョウ」「批鱗ヒリン」…のようにすべて「ヒ」で読まれる。

この「ヒ」は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「批」の声符および同じ声符をもつ字には、「比」「屁」「庇」「琵琶」…などがある。

このうち「比」は、幫母旨韻 3 等甲類であり、呉音・漢音共に「ヒ」になる。漢語は「比較ヒカク」「比肩ヒケン」「比喩ヒユ」「比例ヒレイ」「対比タイヒ」…のように、すべて「ヒ」で読まれる。

ほかにも「放屁ホウヒ」「庇護ヒゴ」「琵琶ビワ」…のように、声符「比」をもつ字はすべて「ヒ」（「ビ」）で読まれるから、「批ヒ」は声符からの類推であると考えられる。

「犧ギ」

	字母：曉(清)	韻目：支(3 乙)	反切：許羈切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	キ
漢音	キ	キ	キ
慣用音	ギ	ギ	ギ

「犧」の中古音は、曉母支韻 3 等乙類である。支韻（紙韻・寘韻）乙類は、「皮ビ・ヒ」「奇ギ・キ」「偽ギ(グキ)・ギ(グキ)」「委イ(キ)」…のように呉音・漢音共に-(u)i になるのが原則なので、「犧」は呉音・漢音共に「キ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「キ」とし、漢音は三種すべてが「キ」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「犠牲ギセイ」「犧尊ギソン」「芻犧スウギ」…のように、すべて「ギ」で読まれる。

「犧」の声符および同じ声符をもつ字には、「義」「議」「儀」「蟻」「礮」「犧」…などがある。

このうち、「義」「議」は疑母寘韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ギ」になることが期待される。現に、「義兵ギヘイ」「正義セイギ」「議会ギカイ」「会議カイギ」などのように、漢語はすべて「ギ」で読まれる。

そのほか「儀」「蟻」「礮」「犧」もすべて疑母で「ギ」となる。

以上から、「犧」は声符からの類推である可能性が高い。

「街ガイ」

字母：見(清) (開)

韻目：佳(2)

反切：古睽切 (佳)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	ガイ	ガイ	ガイ

「街」の中古音は、見母佳韻 2 等の字である。蟹摂の呉音は -ai になるのが原則であるが、「解ゲ」や「外ゲ」などのように、蟹摂の呉音には単母音化して -e になるものが存在する。従って、「街」の呉音は「カイ」または「ケ」、漢音は「カイ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ケ」を認め、ほか二種の辞書は呉音を認めていない。漢音は、三種すべてが「カイ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「街道カイドウ」を除いて、「街上ガイジョウ」「街頭ガイトウ」「街路ガイロ」「市街シガイ」「繁華街ハンカガイ」…のように、「ガイ」で読まれる。

「街」の声符および同じ声符をもつ字には「圭」「崖」「涯」「佳」…などがある。

このうち、「圭」の中古音は見母齊韻 4 等専属韻なので、呉音は「カイ」または「ケ」、漢音は「ケイ」になるのが原則である。漢語は「圭角ケイカク」「圭撮ケイサツ」「圭復ケイフク」「圭壁ケイヘキ」「圭勺ケイシャク」…のように、すべて「ケイ」で読まれる。

また「桂」の中古音は、見母霽韻 4 等専属韻なので、呉音は「カイ」または「ケ」、漢音は「ケイ」になるのが原則である。漢語は、「桂月ケイゲツ」「桂舟ケイシュウ」「桂冠ケイカン」「桂蕩ケイトウ」「桂馬ケイマ」…のように、「桂」も「圭」と同じくすべて「ケイ」で読まれる。

一方、「崖」「涯」の中古音は疑母佳韻 2 等なので、呉音・漢音共に「ガイ」になるのが原則である。漢語は、「崖谷ガイコク」「断崖ダンガイ」「生涯ショウガイ」「涯分ガイブン」などのように、すべて「ガイ」で読まれる。

以上から、「街ガイ」は、声符「圭」をもつ字のうち、「崖」「涯」などからの類推であると推測される。

「該ガイ」

字母：見(清)

韻目：咍(1)

反切：古哀切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	カイ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	ガイ	ガイ	ガイ

「該」の中古音は、見母咍韻 1 等の字なので、呉音・漢音共に「カイ」になるのが原則である。

辞書を見ると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「カイ」を認め、『角川新字源』と『新選漢和辞典』は呉音を認めていない。漢音は三種すべての辞書が「カイ」である。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「該案ガイアン」「該当ガイトウ」「該博ガイハク」「該地ガイチ」「該通ガイツウ」「該洽ガイコウ」…のように、すべての漢語が濁音の「ガイ」で読まれる。呉音または漢音の「カイ」で読まれる漢語は存在しない。

「該」は現代の漢語には「ガイ」しか読み方がないが、その濁音的特徴は中古音に一致しないので、「ガイ」は慣用音と認めざるを得ない。

「該」の声符および同じ声符をもつ字には、「亥」「骸」「咳」などがある。

このうち、「亥」の中古音は、匣母海韻 1 等である。濁紐字であるから呉音は「ガイ」、無声化した漢音は「カイ」になるのが原則であり、漢語は「亥月ガイゲツ」「辛亥シンガイ」などのように、すべて「ガイ」で読まれる。

また「骸」の中古音は、匣母皆韻 2 等である。「亥」と同様に、呉音は「ガイ」、漢音は「カイ」になるのが原則であり、漢語は「骸骨ガイコツ」「骸炭ガイタン」「死骸シガイ」「遺骸イガイ」などのように、すべて「ガイ」で読まれる。

以上から、「該ガイ」は声符からの類推である可能性が高い。

「誇コ」

字母：溪(次清)(合)

韻目：麻(2)

反切：苦瓜切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ(クエ)
漢音	カ(クッ)	カ(クッ)	カ(クワ)
慣用音	コ	コ	コ

「誇」の中古音は、溪母麻韻 2 等の合口字なので、呉音は「カ(クエ)」または「ケ(クエ)」、漢音は「カ(クッ)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ケ(クエ)」を認め、漢音は三種すべて

が「カ(クワ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「誇示コジ」「誇色コシヨク」「誇張コチヨウ」「誇多コタ」…のように、すべて「コ」で読まれる。

「誇」の声符および同じ声符をもつ字には、「夸」「膀」「跨」「袴」「袴」などがある。

このうち、「夸」「膀」「跨」は「誇」と同じ小韻にある。

「袴」「袴」は、暮韻に属する字で、呉音・漢音共に「コ」になるのが原則であるが、漢語は「袴下コカ」「袴鞞コカ」「袴褶コシュウ」「袴下コカ」のように「コ」で読まれる。

「誇コ」はこの「袴」などからの類推である可能性がある。

「茎ケイ」

字母：匣(濁)

韻目：耕(2)

反切：戸耕切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ギョウ(ギャウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(コウ)
慣用音	ケイ	ケイ	ケイ

「茎」の中古音は、匣母耕韻 2 等であるから、呉音は「ゴウ(ガウ)」または「ギョウ(ギャウ)」、漢音は「コウ(カウ)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ギョウ(ギャウ)」を認め、漢音は三種すべてが「コウ(カウ)」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「根茎コンケイ」「球茎キュウケイ」「塊茎カイケイ」「地下茎チカケイ」「茎刃ケイジン」のように、漢語の例は僅かであるが、すべて「ケイ」で読まれる。

「茎」の声符および同じ声符をもつ字には、「茎」「経」「軽」「径」などがある。

このうち「経」「軽」は青韻 4 等で、呉音は「キョウ(キャウ)」、漢音は「ケイ」になる。

また「径」は径韻 4 等で、こちらも呉音は「キョウ(キャウ)」、漢音は「ケイ」になる。

漢語を見ると、「経」は「経験ケイケン」「経文キョウモン・ケイブン」「経典キョウテン・ケイテン」…のように、「キョウ(キャウ)」および「ケイ」で読まれる。

「軽」「径」は、「軽食ケイシヨク」「軽快ケイカイ」「直径チョッケイ」「径行ケイコウ」…のように全て「ケイ」で読まれる。

以上から、「茎ケイ」は声符からの類推だと考えられる。

「滯タイ」

字母：澄(濁)

韻目：祭(3)

反切：直例切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ダイ
漢音	テイ	テイ	テイ
慣用音	タイ	タイ	タイ

「滯」の中古音は、澄母祭韻 3 等である。濁紐字であるから呉音は「デイ」または「ダイ」、漢音は「テイ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ダイ」を認め、漢音は三種すべてが「テイ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「滯在タイザイ」「滯納タイノウ」「滯留タイリュウ」「延滯エンタイ」「停滯テイタイ」「渋滯ジュウタイ」…のように、すべて「タイ」で読まれる。

「滯」の声符は「帯」である。「帯」は、蟹摂端母泰韻 1 等であるから、呉音・漢音共に「タイ」になるのが原則であり、漢語は「帯出タイシュツ」「一帯イッタイ」「世帯セタイ」「所帯ショタイ」「連帯レンタイ」「熱帯ネッタイ」…のように、すべて「タイ」になる。

以上から、「タイ」は声符「帯」からの類推である可能性が高い。

「噴フン」

字母：滂(次清)

韻目：魂(1)

反切：普魂切(瀆)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ホン	ホン	ホン
慣用音	フン	フン	フン

「噴」の中古音は、滂母魂韻 1 等なので、呉音・漢音共に「ホン」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音・漢音共に「ホン」としている。

辞書に収録されている漢語は、「噴煙フンエン」「噴出フンシュツ」「噴石フンセキ」「噴泉フンセン」「噴騰フントウ」…のように、すべて「フン」になる。

「噴」の声符および同じ声符をもつに字は、「賁」「墳」「憤」「瀆」「債」「贖」「贖」などがあり、すべて「フン」で読まれる。

このうち、比較的使用頻度が高い「墳」「憤」について見ると、「墳」は文韻と吻韻に

属し、濁紐字（並母）なので、呉音は「ブン」、無声化した漢音は「フン」になることが期待される。辞書では、呉音・漢音ともに「フン」とし、「古墳コフン」「墳起フンキ」「墳史フンシ」「墳墓フンボ」「墳頭フントウ」…のようにすべて「フン」となる。

また「憤」は、吻韻で「墳」と同じ小韻である。辞書では、呉音・漢音ともに「フン」とし、漢語は「憤慨フンガイ」「憤激フンゲキ」「憤然フンゼン」「憤懣フンマン」…のように、すべて「フン」となる。

以上から、「噴フン」は声符からの類推であると考えられる。

「緒チョ」

	字母：禪(濁)	韻目：語(3 甲)	反切：徐呂切(叙)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ジョ
漢音	シヨ	シヨ	シヨ
慣用音	チョ	チョ	チョ

「緒」の中古音は、禪母語韻 3 等甲類である。濁紐字なので呉音は「ジョ」、無声化した漢音は「シヨ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ジョ」を認め、ほかの二種は呉音をとっていない。漢音は三種すべてが「シヨ」としている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語では、「緒業シヨギョウ」「緒余シヨヨ」「由緒ユイシヨ」…のように、基本的には漢音「シヨ」で読まれるが、「緒戦シヨセン・チョセン」「緒言シヨゲン・チョゲン」「緒風シヨフウ・チョフウ」「緒論シヨロン・チョロン」「情緒ジョウシヨ・ジョウチョ」「端緒タンシヨ・タンチョ」…のように、「シヨ」と「チョ」の二通りの読み方がある漢語が複数存在する。

「緒」と同じ小韻には「叙」「序」などがあるが、これらの字が「チョ」で読まれる漢語は見出せない。

「緒」の声符および同じ声符をもつ字には、「者」「猪」「諸」「著」「箸」「署」などがある。声符「者（照母馬韻 3 等甲類）」を除いて、「緒」と同じ声符をもつ「猪」「諸」「著」「箸」「署」などは、すべて「緒」と四声相配する。

このうち、「猪」（知母魚韻 3 等）と「著」（知母御韻 3 等）は、呉音・漢音ともに「チョ」になることが期待される。現に、「猪口チョコ・チョク」「猪突チョトツ」「著述チョジュツ」「著名チョメイ」…のように「チョ」で読まれる。（ちなみに、「著」は葉韻にも収録されており、その場合は呉音「ジャク」漢音「チャク」となる。「著意チャクイ」「著眼チャクガン」などのように、「着」と同じ意味で使用している。）

「緒チョ」は、同じ声符「者」をもつ「猪」「著」などからの類推であると考えられる。

「蛇ダ」

字母：牀(濁)	韻目：麻(3 甲)	反切：食遮切
喻(清濁)	支(4)	戈支切(移)
透(次清)	歌(1)	託何切(佗)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジャ・イ	ジャ	ジャ・イ・タ
漢音	ジャ・イ・タ	シャ・イ・タ	シャ・イ・タ
慣用音	ダ	ダ	ダ

「蛇」は、3つの韻に属する。

麻韻については、牀母 3 等甲類なので、濁紐字である呉音は「ジャ」、無声化した漢音は「シャ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は三種すべてが「ジャ」とし、漢音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「シャ」、『角川新字源』は「ジャ」としている。

支韻については、喻母 4 等なので、呉音・漢音共に「イ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「イ」とし、漢音は三種すべてが「イ」としている。

歌韻については、透母 1 等なので、呉音・漢音共に「タ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「タ」を認め、漢音は三種すべてが「タ」を認めている。

辞書が見出し語として立てている漢語では、

「イ」：「蛇蛇イイ」「委蛇イイ」

「ジャ」：「蛇口ジャグチ」「蛇目ジャノメ」「蛇毒ジャドク」「蛇腹ジャバラ」

「大蛇ダイジャ」

「ダ」：「蛇足ダソク」「蛇行ダコウ」「蛇毒ダドク」「蛇珠ダジュ」「長蛇チョウダ」

「委蛇イダ」

などのように、一般には「ジャ」もしくは「ダ」で読まれる。ごく稀に「イ」で読まれるものが存在する。「タ」で読まれる例は無い。

「蛇」の声符および同じ声符をもつ字には、「它」「陀」「佗」「詔」「柁」「舵」などがある。

このうち、「陀」（定母歌韻 1 等）は、呉音「ダ」漢音「タ」になることが期待される。現に、「阿弥陀アミダ」のように、音訳字として仏教用語によく使用されるので、慣用音とされる「蛇ダ」はこの「陀」からの類推であると考えられる。

「璽」

字母：審(清)

韻目：紙(3 甲)

反切：斯氏切(徒)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	—	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

「璽」の中古音は、審母紙韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「シ」とし、漢音は三種すべてが「シ」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「璽綬ジジュ」「璽書ジシヨ」「璽符ジフ」「吏璽リジ」…のように、すべて「ジ」で読まれる。

「璽」の声符および同じ声符をもつ字には、「爾」「邇」「爾」がある。

「爾」「邇」(日母紙韻 3 等甲類)の呉音は「ニ」、漢音は「ジ」,「爾」(泥母紙韻 3 等)の呉音は「ニ」、漢音は「ジ(ヂ)」が原則で、現に漢語は、「爾雅ジガ」「爾来ジライ」「邇言ジゲン」などのように、すべて「ジ」で読まれるので、「璽」が声符からの類推であるのは確実と思われる。

「縦」

字母：精(清)

韻目：鍾(3 甲)

反切：即容切, 子用切

精(清)

用(3 甲)

子用切, 子容切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	ショウ・ソウ	ショウ	ショウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

「縦」は、2つの韻に属するが、鍾韻と用韻は四声相配するので、一緒に検討する。

「縦」の中古音は、精母鍾韻 3 等甲類と精母用韻 3 等甲類である。鍾韻(用韻)の呉音は、「種シュ」「供ク」「重ジュウ(ヂウ)」などのように-u または-uu になり、漢音は、3 等韻では「供キョウ」「重チョウ(チウ)」などのように、唇音以外では-jou になる。従って、「縦」の呉音は「シュ」または「シュウ(シウ)」、漢音は「ショウ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シュ」を認め、ほかの二種は呉音をとっていない。漢音は三種すべてが「ショウ」とし、『角川新字源』は「ソウ」も認めてい

る。『角川新字源』が「ソウ」を認める理由は明らかでない。

調査した辞書の見出し漢語には、「縦適ショウテキ」「縦歌ショウカ」「縦欲ショウヨク」…のように、「気ままなさま」の意味で使う場合は「ショウ」で読まれ、「縦横ジュウオウ・ショウオウ・ショウコウ」「縦目ジュウモク・ショウモク」「縦列ジュウレツ」…のように、「たて」の意味で使う場合は「ジュウ(ジウ)」で読まれる。「シュ」や「ソウ」で読まれる漢語は見出せない。

「縦」の声符「従」は、牀母 3 等甲類なので、呉音は「ジュ」または「ジュウ(ジウ)」、漢音は「ショウ」になる。現に、「従来ジュウライ」「従事ジュウジ」「服従フクジュウ」「従然ショウゼン」「従約ショウヤク」などのように、「従」を含む漢語はすべて「ジュウ(ジウ)」または「ショウ」で読まれる漢語がほとんどである。

以上から、「縦ジュウ(ジウ)」は、声符「従」からの類推であると考えられる。

「濃ノウ」

	字母：娘(清濁)	韻目：鍾(3)	反切：女容切(醜)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ニユウ
漢音	ジョウ(ヂョウ)	ジョウ(ヂョウ)	ジョウ(ヂョウ)
慣用音	ノウ	ノウ	ノウ

「濃」の中古音は、娘母鐘韻 3 等である。「縦」の場合と同様に、呉音は「ニユ」または「ニユウ(ニウ)」、非鼻音化した漢音は「ジョウ(ヂョウ)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ニユウ」を認め、ほかの二種は呉音をとっていない。漢音は三種すべてが「ジョウ(ヂョウ)」としている。

調査した辞書の見出し漢語では、「濃厚ノウコウ」「濃淡ノウタン」「濃縮ノウシュク」「濃密ノウミツ」…のように、すべて「ノウ」で読まれる。

「濃」の声符および同じ声符をもつ字には、「農」「膿」「禮」「儂」などがある。

このうち、「農」は泥母冬韻 1 等なので、呉音は「ノウ」、漢音は「ドウ」になる。現に、「農業ノウギョウ」「農場ノウジョウ」「酪農ラクノウ」などのように、ほとんどの漢語が「ノウ」で読まれる。

「濃ノウ」は、この「農」からの類推であると考えられる。

「爆バク」

字母：幫(清)

韻目：效(2)

反切：北教切(豹)

幫(清)

覚(2)

北角切(剥)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ホウ(ハウ)・ハク	ヒョウ(ヘウ)・ホク
漢音	ホウ(ハウ)・ハク	ホウ(ハウ)・ハク	ホウ(ハウ)・ハク
慣用音	バク	バク	バク

「爆」は2つの韻に属する。

效韻に関していえば、幫母2等なので呉音・漢音共に「ホウ(ハウ)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ホウ(ハウ)」、『学研新漢和大字典』が「ヒョウ(ヘウ)」としている。漢音は三種すべてが「ホウ(ハウ)」としている。

覚韻に関していえば、幫母2等なので呉音・漢音共に「ハク」になるのが原則である。

ただし、覚韻の呉音には、「濁ジョク(ヂョク)・タク」「朴ボク・ハク」などのように、-(j)okになるものがあるので、これに従えば、「爆」の呉音は「ホク」になる。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』が「ハク」、『学研新漢和大字典』が「ホク」を認め、漢音は三種すべてが「ハク」としている。

調査した辞書の見出し漢語では、「爆竹バクチク」「爆裂バクレツ」「爆弾バクダン」「爆薬バクヤク」…のように、ほとんど「バク」で読まれる。「爆燂ハクラク」のように、「ハク」で読まれる漢語もあるが、一般的ではない。

「爆」の声符および同じ声符をもつ字には、「暴」「瀑」「曝」などがある。これらの三字は同音（並母号韻1等・並母屋韻1等）で、呉音は「ボウ」「ボク」、漢音は「ホウ」「ホク」になるのが原則であるが、実際には「暴露バクロ」「暴師バクシ」また「瀑布」「曝書バクショ」などのように、「バク」で読まれる。「爆バク」はこれらからの類推であると考えられるが、「瀑」「曝」が「バク」となる理由は明らかではない。

「喫キツ」

字母：溪(次清)

韻目：錫(4)

反切：苦撃切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	キヤク・ケ
漢音	ケキ	ケキ	ケキ・カイ
慣用音	キツ	キツ	キツ

「喫」の中古音は、喉内入声の溪母錫韻4等韻なので、呉音は「キヤク」、漢音は「ケ

キ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「キヤク」「ケ」を認め、漢音は三種すべてが「ケキ」としている。『学研新漢和大字典』は「カイ」も認めている。

『学研新漢和大字典』では、錫韻のほかに卦韻の音も採っているので、呉音に「ケ」、漢音に「カイ」を認めているが、現代の漢語では「喫」が「ケ」や「カイ」で読まれる例は見出せない。

辞書に収録されている漢語は、「喫煙キツエン」「喫茶キッサ・キツチャ」「喫緊キツキン」「満喫マンキツ」…など、舌内入声と同形の「キツ」で読まれる。

「喫」の声符「契」は、霽韻と迄韻、屑韻に属する。漢語は「契約ケイヤク」「契合ケイゴウ」「契符ケイフ」「契印ケイイン」…のようにほとんどが霽韻に対応する「ケイ」で読まれるが、「契」の屑韻は溪母4等で呉音・漢音共に「ケツ」となる。「契ケツ」はこの音が定着したものと考えられる。

「喫」はこの「契ケツ」からの類推であろう。

「危キ」

字母：疑(清濁) (合) 韻目：支(3乙) 反切：魚為切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ギ	ギ(グキ)
漢音	—	ギ	ギ(グキ)
慣用音	キ	キ	キ

「危」の中古音は、疑母支韻3等乙類の合口である。疑母は呉音・漢音共に濁音になるので、「危」は呉音・漢音共に「ギ(グキ)」になるのが原則である。

辞書では、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が呉音・漢音共に「ギ(グキ)」とし、『角川新字源』は呉音・漢音いずれも認めていない。

辞書に収録されている漢語では、「危険キケン」「危機キキ」「危害キガイ」…のように、すべて清音の「キ(クキ)」で読まれ、濁音「ギ(グキ)」で読まれる漢語は見出せない。

疑母である「危」が清音「キ(クキ)」になるのは、中古音から説明できないので、「キ(クキ)」は慣用音と認めざるを得ない。

「危」の声符および同じ声符をもつ字には、「詭」「跪」「侷」「隄」「桅」「峩」などがある。このうち、「詭」は見母であり、「跪」は溪母である。これらの字がすべて「キ」で読まれることから、声符からの類推である可能性がある。

「均イン(キン)」

字母：見(清)

韻目：諄(3 甲)

反切：居勻切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キン	キン	キン・ウン
漢音	キン・ウン	キン・ウン	キン・ウン
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

「均」の中古音は見母諄韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「キン」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音・漢音共に「キン」を認めている。

「均」は、『広韻』では諄韻にのみ収録されているが、漢和辞典では問韻も認めている。

従って、問韻の呉音・漢音として「ウン」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「均一キンイツ」「均衡キンコウ」「均斉キンセイ」「均調キンチョウ」「均等キントウ」…のように、すべて「キン」で読まれる。

「イン(キン)」は、三種の漢和辞典すべてが慣用音に認めているにもかかわらず、実際に読まれた漢語は見出せない。

「均」の声符または同じ声符をもつ字には、「勻」「韻(韻)」などがある。

「勻」の中古音は喻母諄韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「イン(キン)」になる。

「韻(韻)」の中古音は喻母問韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ウン」になることが期待されるが、漢語は「韻書インショ」「音韻オンイン」のように「イン(キン)」で読まれる。

この「勻」「韻(韻)」などからの類推で、「均」にも「イン(キン)」を認めたと考えられるが、事例がない音を慣用音とする理由は不明である。

「沸フツ」

字母：非(清)

韻目：未(3 乙)

反切：方味切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ヒ・フツ	—	ヒ・ホチ
漢音	ヒ・フツ	ヒ・フツ	ヒ・フツ
慣用音	フツ	フツ	フツ

「沸」の中古音は、非母未韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ヒ」となるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ヒ」「フツ」、『学研新漢和大字典』が「ヒ」「ホチ」としている。漢音は三種すべてが「ヒ」「フツ」としている。漢和辞典は呉音または

漢音に「フツ」を認めているが、これは漢和辞典が物韻も認めているからである。但し、『広韻』では未韻にしか収録されていない。

調査に使用した辞書の見出し漢語では、「煮沸シャフツ」「沸沸フツフツ」「沸騰フットウ」「沸点フッテン」…のように、すべて「フツ」で読まれる。

「沸」の声符「弗」およびそれを声符とする「拂」「佛」などは、いずれも入声の物韻 3 等乙類である。特に、使用頻度が多い「佛」は奉母で呉音は「ブチ」または「ブツ」、漢音は「フツ」となる。「沸フツ」は、この「佛」からの類推であると考えるのが妥当であると思われる。

「虜リョ」

	字母：来(清濁)	韻目：姥(1)	反切：郎古切(魯)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ロ	—	ル
漢音	ロ	ロ	ロ
慣用音	リョ	リョ	リョ

「虜」の中古音は、来母姥韻 1 等なので、呉音は「ル」または「ロ」、漢音は「ロ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ロ」、『学研新漢和大字典』が「ル」を認め、漢音は三種すべてが「ロ」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「虜獲リョカク」「虜館リョカン」「虜兵リョヘイ」「虜掠リョリヤク」「囚虜シュウリョ」「降虜コウリョ」「捕虜ホリョ」…のように、すべて「リョ」で読まれる。「ル」「ロ」で読まれる漢語は見出せない。

「虜」と同じ声符ではないが、似た字形である「慮」の中古音は来母御韻 3 等なので、呉音・漢音共に「リョ」になるのが原則である。現に、「慮外リョガイ」「遠慮エンリョ」「配慮ハイリョ」などのように、すべて「リョ」で読まれる。

以上から、「虜リョ」は「慮」からの類推である可能性がある。

「注チュウ」

	字母：照(清)	韻目：遇(3 甲)	反切：之戍切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ・チュ	—	ス
漢音	シュ・チュ	シュ	シュ
慣用音	チュウ	チュウ(チウ)	チュウ

「注」の中古音は、照母遇韻 3 等甲類なので、呉音は「ス」または「シュ」、漢音は

「シュ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「シュ」「チュ」、『学研新漢和大字典』が「ス」とし、漢音は三種すべてが「シュ」を認めている。加えて、『角川新字源』は「チュ」も漢音に認めている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語を見ると、「注意チュウイ」「注射チュウシヤ」「注入チュウニュウ」「注文チュウモン」「注解チュウカイ」「注釈チュウシヤク」「注脚チュウキヤク」「注視チュウシ」「注進チュウシン」…のように、すべて「チュウ」で読まれる。「ス」「シュ」「チュ」で読まれる漢語は見出せない。

「注」の声符および同じ声符をもつ字には、「主」「住」「柱」「駐」などがある。これらの字は日常よく使用される字であるが、この中から「住」「柱」と「駐」を見てみると、「住」は澄母遇韻 3 等甲類、「柱」はその上声なので、呉音は「ジュ(ヂュ)」または「ジユウ(ヂウ)」、漢音は「チュ」または「チュウ(チウ)」になるのが原則である。現に、「住」は「住居ジュウキョ」「住宅ジュウタク」「住人ジュウニン」などのように、すべて「ジユウ(ヂュウ)」で読まれ、「柱」は「柱石チュウセキ」「支柱シチュウ」「門柱モンチュウ」などのように、すべて「チュウ(チウ)」で読まれる。

一方、「駐」の中古音は知母遇韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「チュ」または「チュウ(チウ)」になるのが原則である。現に、「駐車チュウシヤ」「駐在チュウザイ」「駐屯チュウトン」などのように、すべて「チュウ」で読まれる。

以上から、「注チュウ」は「住・柱」(漢音)・「駐」などの声符からの類推である。

「験ケン」

字母：疑(清濁)

韻目：豔(3 乙)

反切：魚窠切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゲン	ゲン	ゲン(ゲム)
漢音	ゲン	ゲン	ゲン(ゲム)
慣用音	ケン	ケン	ケン

「験」の中古音は、疑母豔韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ゲン(ゲム)」になることが期待される。

辞書では、三種すべてが呉音・漢音共に「ゲン(ゲム)」としている。

調査に使用した三種の辞書に収録されている漢語では、「験者ゲンジャ・ゲンザ」「験力ゲンリキ」「霊験レイゲン・レイケン」…のように、原則通り「ゲン(ゲム)」で読まれる漢語も存在するが、一般には「経験ケイケン」「実験ジッケン」「体験タイケン」「験視ケンシ」「験問ケンモン」…のように、「ケン(ケム)」で読まれる。

「験」と同じ声符をもつ字には、「検」「陰」「儉」「劍」などがある。

このうち、「儉」は群母琰韻 3 等乙類なので、呉音は「ゲン(ゲム)」、漢音は「ケン(ケム)」になるのが原則である。「檢」(見母琰韻 3 等乙類)と「險」(曉母琰韻 3 等乙類)と「劍」(見母梵韻 3 等乙類)は、いずれも呉音・漢音共に「ケン(ケム)」になるのが原則である。現に、「儉約ケンヤク」「勤儉キンケン」「檢診ケンシン」「点検テンケン」「險悪ケンアク」「危険キケン」「劍道ケンドウ」「真劍シンケン」のように、すべて「ケン(ケム)」で読まれる。従って、辞書が三種ともに慣用音としている「験ケン(ケム)」は、声符からの類推であると考えられる。

「髓ズイ」

	字母：審(清) (合)	韻目：紙(3 甲)	反切：息委切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	スイ	—	スイ
漢音	スイ	スイ	スイ
慣用音	ズイ	ズイ	ズイ

「髓」の中古音は、審母紙韻 3 等甲類である。合口字なので、呉音と漢音は共に「スイ」になることが期待される。

辞書を見ると、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「スイ」を認め、漢音は三種すべての辞書が「スイ」を認めている。

しかしながら、辞書に収録されている漢語では「髓脳ズイノウ」「髓膜ズイマク」「骨髄コツズイ」「脊髄セキズイ」…のように、すべて「ズイ」で読まれ、「スイ」で読まれた例はない。「ズイ」は、中古音から導き出すことはできないので、この「ズイ」は慣用音と認められる。

ちなみに、「髓」と同じ声符をもつ「隋」「隨」は、濁紐字なので呉音は「ズイ」になり、「隋書ズイショ」「隨筆ズイヒツ」のように、「ズイ」で読まれた実例が存在する。「髓ズイ」は声符からの類推である可能性が高い。

「遇グウ」

	字母：疑(清濁)	韻目：遇(3 乙)	反切：牛具切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	グ	グ	グ
慣用音	グウ	グウ	グウ

「遇」の中古音は、疑母遇韻 3 等乙類である。『韻鏡』第十二転の母音に注目すると、唇音では、1 等は「模モ・ボ」「暮モ・ボ」などのように o、3 等は「無ム・ブ」「武ム・

ブ」などのように u となり、短母音になる。一方、舌音では、1 等は「都ツ・ト」「奴ヌ・ド」などのように u (呉音) o (漢音) となるので、唇音と同様に短母音であるが、3 等は「住ジュウ(ヂュウ)・チュウ」「誅チュウ・チュウ」などのように uu となり、重母音である。牙音では、1 等は「古コ・コ」「五ゴ・ゴ」などのように o となり、3 等は「区ク・ク」「駆ク・ク」などのように u となり、1 等と 3 等どちらも短母音になるので、「遇」は呉音・漢音共に「グ」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「グ」としている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語を見ると、「不遇フグウ」「待遇タイグウ」「境遇キョウグウ」「優遇ユウグウ」…のように、すべて「グウ」で読まれ、「グ」で読まれる漢語は見出せない。

「遇」の声符および同じ声符をもつ字には、「隅」「禺」「寓」「偶」…などがある。

このうち、「偶」を除く「隅」「禺」「寓」は、「遇」と四声相配するので、呉音・漢音共に「グ」になるのが原則である。「偶」は、2 つの韻に属しているが、疑母侯韻 1 等と疑母厚韻 1 等で四声相配するので、呉音は「グ」、漢音は「ゴウ」になることが期待される。

漢語を見ると、「禺」は「禺谷グコク」「禺淵グエン」のように原則通り「グ」で読まれるが、「隅」「寓」「偶」は「隅角グウカク」「寓居グウキョ」「偶然グウゼン」…のようにすべて「グウ」となる。

以上から、声符「禺」をもつ字はすべて「グウ」で読まれるが、中古音からは説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「隅グウ」

	字母：疑(清濁)	韻目：虞(3 乙)	反切：遇俱切 (虞)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	グ	グ	グ
慣用音	グウ	グウ	グウ

「隅」の中古音は、疑母虞韻 3 等乙類である。「遇」と四声相配するので、呉音・漢音は共に「グ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「グ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「隅奥グウオウ」「隅角グウカク」「廉隅レンジウ」…のように、すべて「グウ」で読まれる。

この「グウ」は「遇」と同様に、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「偶グウ」

字母：疑(清濁)

韻目：候(1)

反切：五遘切

疑(清濁)

厚(1)

五口切(藕)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	ゴウ	ゴウ	ゴウ
慣用音	グウ	グウ	グウ

「偶」は2つの韻に属する。中古音は疑母候韻1等と厚韻1等であり、候韻と厚韻は四声相配するので一緒に検討する。候韻(厚韻)は「頭ズ(ヅ)・トウ」「ロク・コウ」などのように、呉音はu、漢音はouとなるので、「偶」の呉音は「グ」、漢音は「ゴウ」になることが期待される。

辞書では、三種すべての辞書が呉音は「グ」、漢音は「ゴウ」としている。

辞書に収録されている漢語では、「偶数グウスウ」「偶然グウゼン」「偶像グウゾウ」「偶発グウハツ」「土偶ドグウ」「対偶タイグウ」…のように、すべて「グウ」となる。

「グウ」は中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「偶」と同じ声符をもつ「遇」「隅」「寓」はすべて遇撰の字であり、漢語は「境遇キョウグウ」「隅角グウカク」「寓居グウキョ」…などのようにすべて「グウ」で読まれる。遇撰の牙音がuuになる理由は不明であるが、「偶グウ」は遇撰の声符「禺」を有する諸字からの類推と考えられる。

「憎ゾウ」

字母：精(清)

韻目：登(1)

反切：作藤切(増)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ソウ
漢音	—	ソウ	ソウ
慣用音	ゾウ	ゾウ	ゾウ

「憎」の中古音は、精母登韻1等なので、呉音・漢音共に「ソウ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ソウ」を認め、ほか二種の辞書は呉音を認めていない。漢音は、『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ソウ」を認め、『角川新字源』は漢音を認めていない。

辞書に収録されている漢語では、語例は多くないが「憎悪ゾウオ」「憎疾ゾウシツ」「愛憎アイゾウ」…のように、すべて濁音「ゾウ」で読まれる。「ソウ」で読まれる例はない。

「ゾウ」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので慣用音と認めざるを得ない。

「憎」と同じ声符をもつ字には「曾」「増」「層」「僧」「贈」…などがある。このうち「贈」は、濁紐字なので呉音は「ゾウ」、無声化した漢音は「ソウ」になるのが原則である。語例は「贈呈ゾウテイ」「贈賄ゾウワイ」「寄贈キゾウ」などのように、すべて「ゾウ」で読まれる。ちなみに「層」も濁紐字なので、呉音は「ゾウ」、無声化した漢音は「ソウ」になるのが原則である。しかし、語例は「層雲ソウウン」「高層コウソウ」「断層ダンソウ」などのように、すべて「ソウ」で読まれる。

「憎」が濁音形で読まれる理由については、「贈」など声符からの類推である可能性が高い。但し、「憎」と同じ小韻には「増」があり、こちらも「増加ゾウカ」「増税ゾウゼイ」「倍增バイゾウ」などのように、すべて濁音の「ゾウ」で読まれるので、「憎」は元々「ゾウ」だった可能性も否定できない。

「汁ジュウ(ジフ)」

	字母：照(清)	韻目：緝(3 甲)	反切：之入切(執)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キョウ(ケフ)	—	シュウ(シフ)・ジュウ(ジフ) ギョウ(ゲフ)
漢音	シュウ(シフ)・キョウ(ケフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)・キョウ(ケフ)
慣用音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)

「汁」の中古音は、照母緝韻 3 等甲類なので、呉音・漢音共に「シュウ(シフ)」になるのが原則である。

辞書を見ると、

『角川新字源』 緝韻：呉音「—」 漢音「シュウ(シフ)」 慣用音「ジュウ(ジフ)」

葉韻：呉音「キョウ(ケフ)」 漢音「キョウ(ケフ)」

『新選漢和辞典』 緝韻：呉音「—」 漢音「シュウ(シフ)」 慣用音「ジュウ(ジフ)」

『学研新漢和大字典』 緝韻：呉音「シュウ(シフ)」 漢音「シュウ(シフ)」

慣用音「ジュウ(ジフ)」

緝韻：呉音「ジュウ(ジフ)」 漢音「シュウ(シフ)」

葉韻：呉音「ギョウ(ゲフ)」 漢音「キョウ(ケフ)」

のように、『角川新字源』と『学研新漢和大字典』は、緝韻のほかに、葉韻も認めている。しかし、『広韻』には緝韻にのみ収録されているので、葉韻については、本検討から除く。

緝韻について見ると、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シュウ(シフ)」と「ジュウ(ジフ)」

フ)」を認めている。「汁」は清音の字であるにも関わらず、濁音になる理由は不明である。漢音は、三種すべての辞書が「シュウ(シフ)」としている。

辞書に収録されている漢語では、「果汁カジュウ」「苦汁クジュウ」…のように、一般には「ジュウ(ジフ)」で読まれるが、「汁滓シュウシ」のように「シュウ(シフ)」で読まれる漢語も存在する。

「ジュウ(ジフ)」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。

「汁」の声符「十」は、同じ緝韻の濁紐字（禪母）なので、呉音は「ジュウ(ジフ)」、無声化した漢音は「シュウ(シフ)」になる。現に、「十分ジュウブン」「十全ジュウゼン」…のように、呉音の通常は濁音が用いられるから、「汁」は声符の類推である可能性が高い。

② 個別的な理由が考えられるもの (24 字)

a) 入声音の促音化を反映したもの (8 字)

圧アツ(p.149)	冊サツ(p.177)	雑ザツ(p.150)	執シツ(p.149)
湿シツ(p.152)	撰セツ(p.151)	接セツ(p.151)	立リツ(p.148)

「冊サツ」

	字母：穿(次清)	韻目：麦(2)	反切：楚革切(策)
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シヤク
漢音	サク	サク	サク
慣用音	サツ	サツ	サツ

「冊」の中古音は、穿母麦韻 2 等なので、呉音は「サク」または「シヤク」、漢音は「サク」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「シヤク」とし、漢音は三種すべてが「サク」としている。

漢和辞典が見出し語に立てている漢語を見ると、「冊書サクショ」「冊文サクブン」「冊立サクリツ」「短冊タンザク・タンジャク」…のように、ほとんどが「サク」で読まれるが、「冊子サッシ・ソウシ」や「一冊イッサツ」「二冊ニサツ」…のように、助数詞として使用する場合は、「サツ」で読まれる。この「サツ」は中古音から導き出せない。

「冊」は喉内入声音・k である。喉内入声音は、「国会コッカイ」「食感ショッカカン」などのように、同じ無声子音 k が続く場合に促音化する。漢和辞典から、促音化する漢語

は「冊子サッシ」しか見出せない。「子シ」はsであるが、「冊」が促音化している唯一の例である。「冊サツ」は、「冊子サッシ」のように、喉内入声音の促音化を反映させたものであると考えられる。

b) 和語における濁音の表現価値によるもの (4字)

剛ゴウ(ガウ)(p.128) 獣ジュウ(ジウ)(p.178) 濁ダク(p.119) 不ブ(p.133)

「獣ジュウ(ジウ)」

字母：審(清)

韻目：宥(3甲)

反切：舒救切(狩)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュ	シュ
漢音	—	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)
慣用音	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)

「獣」の中古音は、審母宥韻 3 等甲類である。宥韻の呉音は「首シュ」「狩シュ」などのように-(j)u になり、漢音は「留リュウ(リウ)」「周シュウ(シウ)」などのように-iu になるので、「獣」の呉音は「シュ」、漢音は「シュウ(シウ)」になることが期待される。

辞書を見ると、『角川新字源』は呉音・漢音共に字音を認めていない。『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は共に呉音に「シュ」、漢音に「シュウ(シウ)」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「獣医ジュウイ」「獣行ジュウコウ」「猛兽モウジュウ」…のように、すべての漢語が「ジュウ(ジウ)」で読まれる。「シュ」「シュウ(シウ)」で読まれる漢語はない。

「ジュウ(ジウ)」の濁音的特徴は、中古音から説明できないので、慣用音と認めざるを得ない。「剛ゴウ」の場合と同様に、和語の語頭濁音の影響を受けた可能性がある。

c) 他字の音が‘移転’されたもの (3字)

石コク・シャク(p.178) 次ジ(p.179) 漁リョウ(レフ)(p.180)

「石コク・シャク」

字母：禪(濁)

韻目：昔(3甲)

反切：常隻切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジャク	シャク	ジャク
漢音	セキ	セキ	セキ
慣用音	シャク・コク	コク	シャク・コク

「石」の中古音は、禪母昔韻 3 等甲類である。濁紐字なので呉音は「ジャク」、無声化した漢音は「セキ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「ジャク」、『新選漢和辞典』が「シャク」とし、漢音は三種すべてが「セキ」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「石材セキザイ」「石室セキシツ」「石器セッキ」「石灰セツカイ」…のように、ほとんどが「セキ」で読まれる。このほか、「磁石ジシャク」「石橋セキキョウ・シャッキョウ」のように、「シャク」で読まれる漢語や、容積を計る単位として「千石船センゴクブネ」「一万石イチマンゴク」のように、「コク」で読まれる漢語も存在する。

「シャク」に関しては、清音となる理由は明らかでない。日本語には元々清音として受け入れられた可能性がある。

「コク」に関しては、中国で使用される単位に「斛コク」があり、五斛＝十石とされる。「石コク」はこの「斛コク」が元になったものと考えられる。

「次ジ」

	字母：穿(次清)	韻目：至(3)	反切：七四切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	—	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

「次」の中古音は穿母至韻 3 等なので、呉音・漢音共に「シ」で読まれることが予想される。

呉音は、『新選漢和辞典』を除く二種の漢和辞典が「シ」を認め、漢音は、三種すべての辞書が「シ」を認めている。

辞書に収録されている漢語では、「次回ジカイ」「次席ジセキ」「次男ジナン」…のように、濁音形の「ジ」で読まれる例が圧倒的に多い。但し、「次第シダイ」のように、「シ」で読まれる例も僅かに存在する。この「シ」は、本来の呉音ないし漢音であり、中古音から導かれる音が実際に使用されている証拠である。

次清音である「次」が濁音形「ジ」で読まれる理由は、「今次コンジ」「順次ジュンジ」「漸次ゼンジ」…のように、連濁の可能性も否定できないが、「次男・二男(ジナン)」「次女・二女(ジジョ)」のように、「二」の字音(呉音「ニ」、漢音「ジ」)の影響を受けた(「ジ」の音が転移した)可能性が大きい。

「漁リョウ(レフ)」

字母：疑(清濁)

韻目：魚(3 乙)

反切：語居切(魚)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゴ	ゴ
漢音	ギョ	ギョ	ギョ
慣用音	リョウ(レフ)	リョウ(レフ)	リョウ(レフ)

「漁」の中古音は疑母魚韻 3 等乙類なので、呉音は「ゴ」または「ギョ」、漢音は「ギョ」となるのが原則である。

辞書では、呉音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』が「ゴ」を認め、漢音は三種すべてが「ギョ」としている。

調査に使用した辞書の見出し漢語では、「漁村ギョソン」「漁獲ギョカク」「漁船ギョセン」「漁父ギョホ・ギョフ」…のように、ほとんどが「ギョ」で読まれる。このほか、「大漁タイリョウ」「漁師リョウシ」のように、一部で「リョウ」となる漢語が存在するが、「リョウ」は中古音から説明できない音である。

この「リョウ」は、動物などを狩る意の「獵」の音が、魚を獲る意の「漁」に転移されたものである。ちなみに、「獵」は来母葉韻 3 等で呉音・漢音共に「リョウ(レフ)」となる。

d) ‘合成音’ と解されるもの (1 字)

「暴バク」

字母：並(濁)

韻目：屋(1)

反切：蒲木切

並(濁)

号(1)

薄報切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ボク・ボウ(バウ)	ボク・ボウ	ボク・ボウ
漢音	ホク	ホク・ホク	ホク・ホウ
慣用音	バク	バク	バク

「暴」は 2 つの韻に属する。

屋韻に関しては、並母 1 等である。屋韻 1 等は、「木モク・ボク」「族ゾク・ソク」などのように、呉音は「ボク」、漢音は「ホク」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音は「ボク」、漢音は「ホク」としている。

漢和辞典に収録されている漢語からは、「ボク」または「ホク」で読まれた例は見出せない。

号韻に関しては、並母 1 等なので、呉音は「ボウ」、漢音は「ホウ」になるのが原則

である。

辞書では、呉音は三種すべてが「ボウ」とし、漢音は『新選漢和辞典』と『学研新漢和辞典』が「ホウ」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語では、「暴動ボウドウ」「暴力ボウリョク」「暴走ボウソウ」「暴飲ボウイン」「乱暴ランボウ」…のように、一般には「ボウ」で読まれるが、「暴露バクロ」「暴師バクシ」のように、「バク」で読まれる漢語が僅かに存在する。この「バク」は、中古音から説明できない音である。

有坂(1942)「帽子」等の假名遣について『国語音韻史の研究（増補版） pp.263-282 から、号韻「暴」の仮名は「ボウ」から「バウ」に変化したことが分かる。

「暴バク」は、号韻の-au と屋韻の-k が結合して「バク」になったと考えられる。

e) その他 (8字)

除ジ(ヂ)(p.181)	想ソ(p.141)	反タン(p.182)	頭ト(p.141)
登ト(p.142)	匿トク(p.183)	南ナ(p.153)	匹ヒキ(p.153)

「除ジ(ヂ)」

字母：定(濁)

韻目：魚(3)

反切：直魚切

定(濁)

御(3)

遅倨切(箸)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和辞典』
呉音	ジョ(ヂョ)・ヨ	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)
漢音	チョ・ヨ	チョ・シヨ	チョ
慣用音	ジ(ヂ)	ジ(ヂ)	ジ(ヂ)

「除」は2つの韻に属するが、魚韻と御韻は四声相配するので、まとめて検討する。

「除」の中古音は、定母魚韻3等と定母御韻3等なので、呉音は「ジョ(ヂョ)」、漢音は「チョ」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音は「ジョ(ヂョ)」、漢音は「チョ」としている。このほか、『角川新字源』は魚韻の音として呉音・漢音共に「ヨ」を認めているが、『広韻』の音ではない。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語では、「除籍ジョセキ」「除去ジョキョ」「除名ジョメイ」「排除ハイジョ」…のように、ほとんどが「ジョ」で読まれる。

このほか、「掃除ソウジ」「除目ジモク・ジョモク」の二語に限って「ジ(ヂ)」で読まれるが、この「ジ(ヂ)」は中古音から説明できない。

「除目ジモク・ジョモク」に関しては、「ジョモク」が訛って「ジモク」になったとされる。「除ジ」は、「除目ジモク・ジョモク」「掃除ソウジ」のような特定の漢語の口語形

から発生したものであると考えられる。

「反タン」

字母：敷(次清)

韻目：元(3 乙)

反切：孚袁切(翻)

非(清)

阮(3 乙)

府遠切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	ヘン・タン	タン	ヘン・タン

「反」は2つの韻に属するが、元韻と阮韻は四声相配するので、一緒に検討する。

「反」の中古音は、敷母元韻 3 等乙類と非母阮韻 3 等乙類である。元(阮) 韻 3 等乙類は外転であるが、呉音は「言ゴン」「遠オン」などのように内転的な特徴がみられる。

従って、「反」の呉音は「ホン」、漢音は「ハン」になることが期待される。

辞書では、三種すべてが呉音は「ホン」、漢音は「ハン」としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「反映ハンエイ」「反旗ハンキ」「反省ハンセイ」「反復ハンブク」…のように、ほとんど「ハン」で読まれるが、「謀反ムホン・ボウハン」「反古(故)ハンコ・ホゴ・ホグ」のように、ごく一部に「ホン」で読まれる漢語がある。

このほか、「一反イッタン」「二反ニタン」…のように助数詞として使用される「タン」や、「反吐ヘド」のように「ヘン」の「ン」を省いた語形「ヘ」など、特殊な漢語が存在する。漢和辞典では、慣用音に「ヘン」を認めているが、実際に「ヘン」で読まれた漢語は見出せない。

「反ヘン」になる理由については、元(阮・願) 韻 3 等乙類を見ると、

呉音	o	言ゴン	遠オン(ヲン)	反ホン
	a	万マン	願ガン(グワン)	
	e	返ヘン	原ゲン(グエン)	
漢音	a	万バン	反ハン	
	e	言ゲン	遠エン(エン)	(反ヘン)

のように、漢音は一般に-en になる(唇音は-an)。但し、唇音が-en となる可能性は否定できないので、「反ヘン」は漢音の一種と認められる。

「反タン」になる理由については、日本語で織物(反物)、面積、距離の単位として用いられた「段」(換韻去声 1 等定母)の漢音「タン」の省略字が「反」とされたことから、「反」の音とされたものである(省略字形)。

「匿トク」

字母：娘(清濁)

韻目：職(3)

反切：女刀切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ノク	—	ジョク(ヂョク)・ニョク・トク
漢音	ジョク(ヂョク)	ジョク(ヂョク)・トク	ジョク(ヂョク)・ニョク・トク
慣用音	トク	トク	トク

「匿」の中古音は娘母職韻 3 等なので、呉音は「ノク」または「ニョク」、非鼻音化した漢音は「ジョク(ヂョク)」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』が「ノク」、『学研新漢和大字典』が「ジョク(ヂョク)」「ニョク」を認め、漢音は三種すべてが「ジョク(ヂョク)」を認めている。このほか『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』は徳韻も認めており、呉音または漢音を「トク」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「匿名トクメイ」「匿情トクジョウ」「匿伏トクフク」「匿光トクコウ」「隠匿イントク」…のように、すべての漢語が「トク」で読まれる。「ノク」「ニョク」「ジョク(ヂョク)」で読まれる漢語は見出せない。

「匿」の声符「若」では、中古音は日母薬韻 3 等甲類と日母馬韻 3 等甲類なので、呉音は「ニャク」または「ニャ」、漢音は「ジャク」または「ジャ」になるのが原則である。現に、「老若男女ロウニャクナンニョ」「般若ハンニャ」「若輩ジャクハイ」「若干ジャツカン・ジャカン」などのように、「ニャク」「ニャ」「ジャク」「ジャ」で読まれる。「トク」で読まれる漢語は見出せないので、声符からの類推とは考え難い。

『広韻』には職韻にのみ収録されているが、『集韻』では徳韻(楊徳切)にも収録されており、反切から「トク」が導き出せる。

「匿トク」は中古音との関係では説明できないが、後世の韻では反切から導き出せる。

③ 最初から、韻書の音と異なる音を生じたと考えられるもの(12字)

院イン(キン)(p.186)	員イン(キン)(p.185)	韻イン(キン)(p.186)	撃ゲキ(p.129)
惨ザン(p.130)	充ジュウ(p.117)	銃ジュウ(p.118)	遵ジュン(p.126)
迅ジン(p.125)	説ゼイ(p.122)	鑄チュウ(チウ)(p.184)	父ホ(p.187)

「鑄チュウ(チウ)」

字母：照(清)

韻目：遇(3 甲)

反切：之戍切(注)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ス
漢音	シュ・シュウ(シウ)	シュ	シュ
慣用音	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)

「鑄」の中古音は、照母遇韻 3 等甲類なので、呉音は「ス」または「シュ」、漢音は「シュ」となることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ス」を認め、漢音は三種すべてが「シュ」としている。このほか、『角川新字源』は「シュウ(シウ)」も漢音に認めている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語を見ると、「鑄錢チュウセン」「鑄造チュウゾウ」「鑄像チュウゾウ」「鑄貨チュウカ」「鑄鉄チュウテツ」…のように、すべて「チュウ」で読まれる。

「鑄」の声符「寿(壽)」は、有韻(禪母 3 等甲類)と宥韻(禪母 3 等甲類)に属するので、呉音「ジュ」、漢音「シュウ(シウ)」になる。現代の漢語では、「寿福ジュフク」「寿命ジュミョウ」「長寿チョウジュ」などのように、すべて「ジュ」で読まれるので、声符からの類推とは考え難い。

「鑄」と同じ小韻には「注」があるが、「注意チュウイ」「注射チュウシャ」「注文チュウモン」「注釈チュウシャク」「注進チュウシン」…のように、「注」もすべて「チュウ」で読まれる。

この「注」の声符または同じ声符をもつ字には「主」「柱」「住」「駐」「註」…がある。

このうち、「主」は「注」と四声相配するが、「主役シュヤク」「坊主ボウズ」などのように、「シュ」または「ズ」で読まれ、「チュウ」で読まれた漢語は見出せない。

一方、共通の声符を有する形成字「柱」(澄母麌韻 3 等、知母遇韻 3 等)「住」(澄母遇韻 3 等)「駐」(知母遇韻 3 等)「註」(知母遇韻 3 等)はすべて舌音 3 等に属し、呉音は、澄母では「ジュウ(ヂウ)」、知母では「チュウ(チウ)」、漢音は「チュウ(チウ)」になる。現に、「住居ジュウキョ」「電柱デンチュウ」「駐車チュウシャ」「註釈チュウシャク」などのように、現代の漢語ではすべて「ジュウ(ヂウ)」「チュウ」で読まれる。

「注チュウ」は、同じ声符をもつ「柱」「駐」「註」などからの類推であると考えられる。

歯音の「鑄」が舌音の形「チュウ」で読まれるのは、同じ小韻である「注」と同様の環境(歯音が舌音と混同しやすい環境)において生じた歯音と舌音の混同であると思われる。

「員イン(キン)」

字母：喩(清濁)	韻目：問(3 乙)	反切：王問切(運)
喩(清濁)	文(3 乙)	王分切(雲)
喩(清濁)	仙(3 乙)	王權切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン(エン)	—	エン(エン)・ウン
漢音	エン(エン)・ウン	エン(エン)・ウン	エン(エン)・イン(キン)
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

「員」は喩母 3 等乙類であるが、3 つの韻（問・文・仙）に属する。

仙韻については、呉音・漢音共に「エン(エン)」となるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「エン(エン)」とし、漢音は三種すべてが「エン(エン)」としている。

問韻と文韻は四声相配するので一緒に検討すると、呉音・漢音共に「ウン」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』が「ウン」とし、漢音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ウン」、『学研新漢和大字典』が「イン(キン)」としている。

漢和辞典が見出し語として立てている漢語を見ると、「員外インガイ」「員石インセキ」「団員ダンイン」「会員カイイン」「役員ヤクイン」…のように、すべて「イン(キン)」で読まれる。

「員」と同じ声符をもつ字には、「韻」「隕」「殞」などがある。

このうち、「韻」（喩母問韻 3 等乙類）は、問韻（3 等乙類）の「員」と同じ小韻であり、呉音・漢音共に「ウン」になるのが原則であるが、「韻書インショ」「音韻オンイン」「押韻オウイン」などのように、すべて「イン(キン)」で読まれる。これは、「員」と全く同じである。

また「隕」（喩母軫韻 3 等乙類）は、呉音・漢音共に「イン(キン)」になるのが原則であり、「隕石インセキ」「隕墜インツイ」などのように、すべて「イン(キン)」で読まれる。

「員イン(キン)」「韻イン(キン)」は、「隕イン(キン)」からの類推である可能性は否定できないが、使用頻度から考えて、よりそれが高いと思われる「員」「韻」の音が「隕」から類推されるとは考え難い。韻書・韻図の体系には矛盾するが、「員イン(キン)」「韻イン(キン)」は最初から「イン(キン)」として取り入れられた可能性が大きい。

「韻イン(キン)」

字母：喻(清濁)

韻目：問(3 乙)

反切：王問切(運)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ウン
漢音	ウン	ウン	ウン
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

「韻」の中古音は、喻母問韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ウン」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ウン」を認め、漢音は三種すべてが「ウン」としている。

調査に使用した漢和辞典の見出し漢語では、「韻書インショ」「韻学インガク」「韻文インブン」「韻律インリツ」「余韻ヨイン」「押韻オウイン」「音韻オンイン」…のように、すべて「イン(キン)」で読まれる。

「韻」が「イン(キン)」になる理由については、「員」の場合と同様に考えられる。

「院イン(キン)」

字母：匣(濁)

韻目：桓(1)

反切：胡官切(桓)

喻(清濁)

線(3 乙)

于願切(瑗)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン(エン)	—	エン(エン)
漢音	カン(クワン)	エン(エン)・カン(クワン)	エン(エン)
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

「院」は2つの韻に属する。

桓韻に関しては、匣母 1 等なので、呉音は「ガン(グワン)」、漢音は「カン(クワン)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は三種すべてが認めておらず、漢音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「カン(クワン)」を認めている。

線韻に関しては、喻母 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「エン(エン)」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『学研新漢和大字典』が「エン(エン)」を認め、漢音は三種すべてが「エン(エン)」を認めている

調査した辞書が見出し語に立てている漢語を見ると、「院政インセイ」「院中インチュウ」「院落インラク」「院展インテン」「寺院ジイン」「医院イイン」…のように、すべて

「イン(キン)」で読まれる。

「院」の声符「完」は、匣母桓韻 1 等なので、呉音は「ガン(グワン)」、漢音は「カン(クワン)」になる。現に、「完全カンゼン」「完了カンリョウ」「完封カンブウ」などのように、現代の漢語ではすべて「カン(クワン)」で読まれるので、声符からの類推とは考え難い。

「院」と同じ小韻には「援」「媛」などがあるが、「援護エンゴ」「応援オウエン」「才媛サイエン」などのようにすべて「エン(エン)」で読まれるので、同じ小韻からの影響とは考え難い。

「院」が属する線韻と四声相配する仙韻には「員」がある。「員」も「員数インスウ」「員石インセキ」「定員テイイン」「教員キョウイン」「店員テンイン」などのように、現代の漢語ではすべて「イン(キン)」で読まれる。

「員」と同じ声符をもつ字には、「隕」「韻」などがある。

「隕」は喻母軫韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「イン(キン)」になる。現に、「隕石インセキ」「隕失インシツ」「隕墜インツイ」などのように、現代の漢語ではすべて「イン(キン)」で読まれる。

一方、「韻」は喻母問韻 3 等乙類なので、呉音・漢音共に「ウン」になる。しかし、現代の漢語では「韻書インショ」「韻文インブン」「押韻オウイン」などのように、すべて「イン(キン)」で読まれる。

以上から、「員」「韻」などと同様、「院」も韻書の反切から導かれる音とは異なる「イン(キン)」の音を生じたと考えられる。

「父ホ」

	字母：非(清)	韻目：麌(3 乙)	反切：方矩切(甫)
	奉(濁)	麌(3 乙)	扶雨切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	ブ	ブ・フ
漢音	フ	フ	フ
慣用音	ホ	ホ	ホ

「父」は、2つの韻に属する。

非母麌韻 3 等乙類に関しては、呉音・漢音共に「フ」になるのが原則である。

奉母麌韻 3 等乙類に関しては、濁紐字なので呉音は「ブ」、無声化した漢音は「フ」になるのが原則である。

「父」の字音は、辞書によって認め方が異なるので各々見ると、

『角川新字源』：麿韻 呉音「フ」 漢音「フ」 意) ちち。他

麿韻 呉音「一」 漢音「フ」 慣用音「ホ」 意) 男子に対する総称。他

『新選漢和辞典』：麿韻 呉音「ブ」 漢音「フ」 慣用音「ホ」 意) ちち。他

麿韻 呉音「ブ」 漢音「フ」 慣用音「ホ」 意) 男性の老人の総称。他

『学研新漢和大字典』：麿韻 呉音「ブ」 漢音「フ」 意) ちち。男親。他

麿韻 呉音「フ」 漢音「フ」 慣用音「ホ」 意) 年老いた男。他

のように、呉音は『角川新字源』が「フ」のみ、『新選漢和辞典』が「ブ」のみ、『学研新漢和大字典』が「ブ」と「フ」とし、漢音は三種すべてが「フ」としている。

調査した漢和辞典の見出し漢語では、「父母フボ」「父兄フケイ」「父子フシ」「伯父ハクフ」「叔父シュクフ」…のように、ほとんどが「フ」で読まれるが、「漁父ギョホ・ギョフ」「田父デンホ」「亜父アホ」「仲父チュウホ」…のように、「父」が漢語の末尾にあると「ホ」で読まれる場合がある。

遇撰第12転を見ると、3等韻では「膚フ・フ」「付フ・フ」「無ム・ブ」などのように、呉音・漢音共に-uになるのに対し、1等韻では「補フ・ホ」「奴ヌ・ド」などのように、呉音は-u、漢音は-oになる。

「父」は「甫」(非母)と同じ小韻であり、呉音・漢音共に「フ」になるのが原則であるが、辞書を見ると、「甫」は「甫田ホデン」「甫甫ホホ」「尼甫ジホ」「章甫ショウホ」のように、すべて「ホ」で読まれる。

この「甫」と同じ声符をもつ字には、「捕」「補」「舗」「輔」「浦」「圃」などがある。

このうち、日常よく使用される「捕」「補」「舗」はすべて遇撰の1等韻なので、漢音は「ホ」になるのが原則である。現に、「捕獲ホカク」「補欠ホケツ」「店舗テンポ」…のように、現代の漢語では「ホ」で読まれる。

「輔」は遇撰の3等乙類なので、呉音は「ブ」漢音は「フ」になるのが原則であるが、「輔行ホコウ」「輔車ホシャ」「輔弼ホヒツ」のように、漢語はすべて「ホ」で読まれる。

以上から、「父ホ」は、同じ小韻である「甫」または声符「甫」をもつ字と同様、漢音(特に唇音)において-uのほかには-oの形を生じた結果であると思われる。

④ 連濁の影響と考えられるもの(3字)

宮グウ(p.189)

判バン(p.190)

板バン(p.189)

「宮グウ」

字母：見(清)(開)

韻目：東(3 乙)

反切：居戎切(弓)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ク	ク	ク・クウ
漢音	キュウ	キュウ(キウ)	キュウ
慣用音	グウ・クウ	グウ	グウ

「宮」の中古音は、見母東韻 3 等乙類である。東韻・鐘韻（上声・去声も含む）の呉音は「公ク」「供ク」などのように -u になるものと、「空クウ」「風フウ」などのように -uu になるものがあるもので、これに従うと、「宮」の呉音は「ク」または「クウ」、漢音は「キュウ(キウ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべてが呉音は「ク」、漢音は「キュウ(キウ)」としている。

この字が用いられる漢語の多くは、「宮殿キュウデン」「宮中キュウチュウ」「離宮リキュウ」などのように漢音が用いられるが、「宮内庁クナイチョウ」「内宮ナイクウ」「宮司グウジ」などのように呉音で読む語もある。

呉音における母音の長短、すなわち「ク」と「クウ」のような関係は明らかでない。同様の例に「集シュ／シユウ」などがある。長音形は漢語としての語形を補強し、整えるために発生したことも考えられる。

清・濁について見ると、三種すべての辞書が慣用音に「グウ」を認めている。漢和辞典を見ると、「神宮ジングウ」「行宮アングウ」「東宮トウグウ」…などがある。「神」「行」「東」はすべて鼻音韻尾をもつ字なので、「宮グウ」は連濁の影響によるものと考えられる。

「板バン」

字母：幫(清)

韻目：漣(2)

反切：布縮切(版)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハン	ハン	ヘン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	バン	バン	バン

「板」の中古音は、幫母漣韻 2 等なので、呉音・漢音共に「ハン」になることが期待される。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』が「ハン」、『学研新漢和大字典』が「ヘン」を認めているが、『学研新漢和大字典』が呉音に「ヘン」を認める理由は不明である。漢音は三種すべてが「ハン」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「板橋ハンキョウ」「板屋ハンオク」「板刻ハンコク」…のように、「ハン」で読まれるものが多いが、「板書バンショ」「板木ハンギ・バンギ」のように、濁音形の「バン」で読まれるものも存在する。

慣用音は、三種すべてが「バン」を認めている。「板」は清音の字であるから、中古音から濁音形「バン」を導き出すことはできない。

「板」が「バン」で読まれる理由として、まず考えられるのは声符「反」からの類推であるが、「反」元韻敷母3等で呉音「ホン」、漢音「ハン」のように呉音・漢音共に清音であり、濁音の「バン」で読まれた例はない。ちなみに「反」と同じ声符をもつ漢字は「坂」「版」「飯」「販」などがあるが、これらもすべて「ハン」で読まれ、「バン」で読まれる例はない。従って、「バン」は声符「反」からの類推とは考え難い。

「板バン」で読まれる漢語には、「看板カンバン」「鉛板エンバン」…のように、鼻音の後に続くものが見られる。従って、「板バン」は連濁によって「〇〇板(〇〇バン)」のように読まれた可能性がある。

「判バン」

	字母：滂(次清)	韻目：換(1)	反切：普半切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハン	ハン	ハン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	バン	バン・ホウ(ハウ)	バン

「判」の中古音は、滂母換韻1等なので、呉音・漢音共に「ハン」になるのが原則である。

辞書を見ると、三種すべての辞書が呉音・漢音共に「ハン」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語では、「判然ハンゼン」「判断ハンダン」「判定ハンテイ」…のように、一般に「ハン」で読まれるが、「裁判サイバン」「評判ヒョウバン」…のように、濁音の「バン」で読まれるものや、「審判シンパン」「談判ダンパン」…のように、半濁音の「パン」で読まれるものも存在する。

「判」が「バン」や「パン」で読まれるのは、漢語の二字目に現れる場合に限られる。このことから、「バン」は連濁の影響によるものであり、「パン」は鼻音または入声音に続くハ行子音が半濁音化したものであると考えられる。ただし、「公判コウハン」のように、鼻音の後でも濁音にならない漢語が存在する。

三種すべての辞書が慣用音として認めている「判バン」は、連濁が字音化したものと考えられるが、中古音から導き出すことができないから、慣用音と認めざるを得ない。

半濁音化は、特定の条件下で起こる漢語の音であり、従って「パン」は字音とは認め

難い。

『新選漢和辞典』のみ、「バン」のほか「ホウ(ハウ)」も慣用音に認めている。漢語は「判官ホウガン/ハンガン」の一語のみであるが、「ホウガン」は慣用的な語形であるから、「ホウ(ハウ)」を字音と認める限り、やはり慣用音としなければならない。

⑤ 理由が不明なもの（原音に理由がある場合）（33字）

欺ギ(p.120)	戯ギ(p.121)	軍グン(p.120)	劇ゲキ(p.129)
研ケン(p.136)	仰コウ(カウ)(p.138)	郷ゴウ(ガウ)(p.131)	拷ゴウ(ガウ)(p.132)
近コン(p.136)	入ジュ(p.143)	渋ジュウ(ジフ)(p.132)	准ジュン(p.125)
準ジュン(p.124)	枢スウ(p.144)	崇スウ(p.147)	数スウ(p.145)
税ゼイ・ダツ(p.123)	染セン(p.140)	妥ダ(p.128)	耐タイ(p.138)
茶チャ(p.192)	賃チン(p.137)	軟ナン(p.192)	女ニョウ(p.143)
派ハ(p.191)	平ヒョウ(ヒャウ)(p.139)	便ビン(p.193)	豊ブ(p.118)
畝ホ(p.194)	剖ボウ(p.134)	由ユイ(p.194)	裕ユウ(p.146)
露ロウ(p.145)			

「派ハ」

	字母：滂(次清)	韻目：卦(2)	反切：匹卦切
	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	へ
漢音	ハイ	ハイ	ハイ
慣用音	ハ	ハ	ハ

「派」の中古音は、滂母卦韻 2 等なので、呉音は「ハイ」または「へ」、漢音は「ハイ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「へ」を認め、漢音は三種すべてが「ハイ」を認めている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「派遣ハケン」「派出ハシュツ」「派閥ハバツ」「派兵ハヘイ」「硬派コウハ」「宗派シュウハ」…のように、すべて「ハ」で読まれる。

蟹摂には、「解ゲ」「弟デ」などのように単母音化するものがある。もし「派」が単母音化するなら、『学研新漢和大字典』が呉音に認めているように「へ」になることが期待されるので、「ハ」は単母音化とは異なるものである。「派」が「ハ」で読まれる理由は不明である。

「茶チャ」

字母：澄(濁)

韻目：麻(2)

反切：宅加切

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ダ	ダ	ジャ(ヂャ)
漢音	サ・タ	タ	タ
唐音	サ	サ	サ
慣用音	チャ	チャ	チャ

「茶」の中古音は、澄母麻韻 2 等なので、呉音は「ダ」、漢音は「タ」になるのが原則である。

辞書では、呉音は『角川新字源』と『新選漢和辞典』は「ダ」、『学研新漢和大字典』は「ジャ(ヂャ)」を認め、漢音は三種すべてが「タ」としている。『角川新字源』は「サ」も漢音としている。このほか、三種すべてが「サ」を唐音としている。

辞書に収録されている漢語を見ると、「茶園チャエン」「茶気チャキ」「茶巾チャキン」「茶碗チャワン」…のように、「茶」は一般に「チャ」で読まれるが、「茶煙サエン」「茶店サテン」「茶茗サメイ」「茶炉サロ」…のように、「サ」で読まれる漢語も多数存在する。

また、「茶道チャドウ・サドウ」「茶人チャジン・サジン」「茶湯チャトウ・サトウ」「茶房チャボウ・サボウ」…のように、「チャ」「サ」二通りの読み方がある漢語も存在する。

麻韻 2 等の舌音が拗音「チャ」になる理由は明らかでない。

「軟ナン」

字母：日(清濁)(合)

韻目：獮(3 甲)

反切：而亮切(軟)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ネン	ネン	ネン
漢音	ゼン	ゼン	ゼン
慣用音	ナン	ナン	ナン

「軟」の中古音は、日母獮韻 3 等甲類なので、呉音は「ネン」、非鼻音化した漢音は「ゼン」になるのが原則である。

辞書では、三種すべてが呉音を「ネン」、漢音を「ゼン」としている。

調査に使用した漢和辞典が見出し語に立てている漢語を見ると、「軟骨ナンコツ」「軟弱ナンジャク」「軟体ナンタイ」「柔軟ジュウナン」「硬軟コウナン」…のように、ほとんどが「ナン」で読まれるが、「軟障ゼジョウ・ゼゾウ」のように「ゼ」で読まれる漢語が存在する。呉音「ネン」と漢音「ゼン」で読まれる漢語は見出せない。

獮韻と四声相配する「然」(仙韻 3 等甲類開口)の呉音は「ネン」、漢音は「ゼン」に

「畝ホ」

字母：明(清濁)

韻目：厚(1)

反切：莫厚切(母)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ム・モ
漢音	ボウ	ボウ	ボウ
慣用音	ホ	ホ	ホ

「畝」の中古音は明母厚韻 1 等なので、呉音は「モ」または「モウ」、あるいは「ム」、非鼻音化した漢音は「ボ」または「ボウ」になることが期待される。

辞書では、呉音は『学研新漢和大字典』のみ「ム」「モ」を認め、漢音は三種すべてが「ボウ」を認めている。

慣用音とされる「ホ」については、唯一『角川新字源』が「畝ホケンポ」を収録しているだけで、この音については詳細を明らかにできない。

「由ユイ」

字母：喻

韻目：尤(3)

反切：以周切(猷)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ユ	ユ	ユ
漢音	ユウ(イウ)	ユウ(イウ)	ユウ(イウ)
慣用音	ユイ	ユイ	ユイ

「由」の中古音は、喻母尤韻 3 等なので、呉音は「ユ」、漢音は「ユウ(イウ)」になることが期待される。

辞書では、三種すべてが呉音は「ユ」、漢音は「ユウ(イウ)」としている。

漢和辞典に収録されている漢語を見ると、「由縁ユエン」「由来ユライ」「経由ケイユ」「解由ゲユ」…のように呉音「ユ」で読まれるものと、「由由ユウユウ」「自由ジユウ」「事由ジユウ」「理由リュウ」…のように漢音「ユウ」で読まれるものが拮抗する。このほか、「由緒ユイショ」の一語のみ「ユイ」で読まれる。

「由緒」の語源を調べると、「ユイショ」は「ユウショ」が変化したものとして説明されているが、同様の変化は他に求め難い。

第4節 〈慣用音〉に認められる日本漢字音の特質

日本漢字音には、呉音・漢音・唐(宋)音のほかに、〈慣用音〉がある。この慣用音は、一般に「中国語の原音から説明できない音」と認識されている。慣用音は中国語の原音から導き出すことができない音ならば、慣用音の実態とそれを生じる理由を明らかにすることによって、日本漢字音の特質のひとつを解明することができる。このような考え方から、本章では、慣用音とされる字音の分析を通じて、日本漢字音のもつ一面を明らかにした。

調査の対象は、現在の日本語で比較的使用頻度の高いと認められる「常用漢字表」の2,136字と「表外漢字字体表」の826字、合計2,967字とした。この2,967字に関して、慣用音と認められる字音を特定するため、漢和辞典を利用し、その字音が慣用音に認められるか否かを判断した。調査に使用した漢和辞典については、第2節(2.1)で述べた通りである。

調査に使用した漢和辞典に関していうと、漢和辞典の慣用音の認め方は一定しておらず、三種すべての辞書が慣用音を認めている字もあれば、二種または一種の辞書しか慣用音を認めていない字も存在する。三種すべての辞書が慣用音を認めている字は、「漁リョウ」「茶チャ」などの145字に限られる。それ以外、二種の辞書が慣用音とする字は、「母ボ」「手ス」などの78字、一種の辞書のみ慣用音とする字は、「売マイ」「和オ(フ)」などの31字であった。

そのうち、本研究では、まず三種すべての辞書が慣用音を認めている145字を中心に、それを慣用音とすることが適切かどうか分析を行った。

145字を1字ずつ検討した結果、三種の辞書が慣用音を認めている字でも、慣用音とは見なしがたいものが36字存在した。具体的には、以下①～④の通りである。

① 漢語の音の一部と認めるべきもの(10字)

「合カツ・ガツ」「格コウ」「十ジツ」「夫フウ」など

② 呉音と解すべき音(14字)

「月ガツ・ゲツ」「実ジツ」「造ゾウ(ザウ)」「別ベツ」など

③ 漢音と解すべき音(7字)

「佳カ」「掛カ(クッ)」「酢サク」「否ヒ」「罷ヒ」「復フク」「返ヘン」

④ 呉音または漢音とすべきもの(呉音・漢音が同形の場合)(5字)

「渴カツ」「掲ケイ」「覆フウ・フク」「閥バツ」「般ハン」

以上の36字を除く「紅ク」「数スウ」などの109字については、一応慣用音と見なすことができる。なお、調査に用いた漢和辞典が認める慣用音については、認め方が曖昧

であることが指摘できる。その理由として、慣用音と認める判断基準が明確になっていないことが考えられる。

次に、慣用音 109 字について、

(A) 音的な特徴による分類

(B) 「慣用音」を生じる理由による分類

この 2 面から考察した。

(A) 音的な特徴による分類 (120 字)

まず、音的な特徴に関して言うと、「声母・韻腹・韻尾」のそれぞれについて、以下の結果が得られた。(原音との対応が認められない音が複数ある漢字が存在するので、字数は延べ 120 字になる。)

〈声母に関して〉 (67 字)

① 清濁に関するもの (54 字)

a) 中古音の清音を濁音とするもの (42 字) 「犧ギ」「判バン」「剛ゴウ」など

b) 中古音の濁音を清音とするもの (12 字) 「紅ク」「近コン」「平ヒョウ」など

② その他 (13 字) 「輸ユ」「祉シ」「畝ホ」など

〈韻腹に関して〉 (38 字)

① 母音の長短に関するもの (12 字)

a) 中古音の重母音を短音とするもの (4 字) 「想ソ」「入ジュ」「登ト」「頭ト」

b) 中古音の単母音を長音とするもの (8 字) 「女ニョウ」「露ロウ」など

② その他 (26 字) 「煮シャ」「批ヒ」「虜リョ」「父ホ」「茎ケイ」など

〈韻尾に関して〉 (15 字)

① 唇内入声音[-p]を「ーツ」とするもの (7 字) 「圧アツ」「雑ザツ」「立リツ」など

② その他 (8 字) 「南ナ」「匹ヒキ」「冊サツ」「茎ケイ」など

声母に関しては、特に清濁に関するものが 54 字で最も多く、全 67 字中の約 8 割を占める。音的な特徴による分類の対象となる 120 字に対して見ると、45%を占める。中でも、「犧ギ」「判バン」などのように、中古音の清音を濁音とするものが 42 字で、54 字中の約 78%を占める。この 42 字は、分類の対象とした 120 字中に対しても 35%を占める。これは注目すべきことである。

韻腹に関しては、母音の長短に関するものがほとんどである。「愛想アイソ」や「女房ニョウボウ」などのように、漢語の音として短音化あるいは長音化したものが慣用音に

認められている。

韻尾に関しては、「圧アツ」「雑ザツ」などのように唇内入声音[-p]を「ーツ」とするものがほとんどである。

次に、「慣用音」を生じる理由に関しては、以下の理由が考えられる。

(B)「慣用音」を生じる理由による分類 (109 字)

- ① 声符からの類推にもとづくもの (37 字) 「該ガイ」「縦ジュウ」「批ヒ」など
- ② 個別的な理由が考えられるもの (24 字)
 - a) 入声音の促音化を反映したもの (8 字) 「冊サツ」「立リツ」「撮セツ」など
 - b) 和語における濁音の表現価値によるもの (4 字) 「剛ゴウ」「獣ジュウ」など
 - c) 他字の音が‘移転’されたもの (3 字) 「石コク」「次ジ」「漁リョウ」
 - d) ‘合成音’と解されるもの (1 字) 「暴バク」
 - e) その他 (8 字) 「除ジ」「反タン」「匿トク」など
- ③ 最初から、韻書の音と異なる音を有したと考えられるもの (12 字)
「韻イン」「迅ジン」「鑄チュウ」「父ホ」など
- ④ 連濁の影響と考えられるもの (3 字) 「宮グウ」「判バン」「板バン」
- ⑤ 理由が不明なもの (33 字) 「茶チャ」「派ハ」「便ビン」「由ユイ」など

慣用音を生じる理由に関しては、理由が不明なもの (33 字) が分類の対象とした 109 字中の 3 割以上を占めており目立つ。慣用音の多くは、それを生じる理由が不明である。

理由が不明な 33 字を除く 76 字について見ると、声符からの類推にもとづくものが 37 字で最も多く、76 字中の約 5 割を占める。

次に多いのは、個別的な理由が考えられるもの (24 字) である。この中には、「冊サツ」「立リツ」などのように入声音の促音化を反映したものや、「剛ゴウ」「獣ジュウ」などのように、和語における濁音の表現価値、すなわち、どぎつい感じ、粗い感じ、不快な感じなどが語頭の濁音で表される傾向の影響を受けて、濁音化したと考えられるものが含まれる。

音的な特徴による分類では、中古音の清音を濁音とするものが圧倒的に多かったため、これは連濁の影響によるものであると推測されやすいが、実際には連濁の影響と考えられるものは 3 字 (「宮グウ」など) で、ごく僅かである。

「韻イン」「父ホ」などのように、最初から韻書の音と異なる音を有したと考えられるものは 12 字存在する。

本研究では、いわゆる「慣用音」について、音的な特徴による分類と「慣用音」を生じる理由による分類から考察を行った。これを総合すると、慣用音には「蛇ダ」「紅ク」

などのように、「清濁に関するもの」で「声符からの類推によるもの」と認められるものが最も多く、18字存在することが明らかになった。

音的な特徴による分類のうち、最も比率の高い清濁に関するもののうち、中古音の清音が濁音になるもの42字を、「慣用音」を生じる理由で分類すると、

- ①声符からの類推によるもの（14字）「街ガイ」「汁ジュウ」「蛇ダ」など
- ②個別的な理由が考えられるもの（7字）「次ジ」「迅ジン」「獣ジュウ」など
- ③連濁の影響と考えられるもの（3字）「宮グウ」「判バン」「板バン」
- ④最初から、韻書の音と異なる音を有したと考えられるもの（6字）

（①②③の理由では説明できないもの）「充ジュウ」「迅ジン」「遵ジュン」など

- ⑤理由が不明なもの（12字）「豊ブ」「郷ゴウ」「剖ボウ」など

のように、やはり声符からの類推によるものが14字で最も多い。

以上から、以下のことが言える。

- 1) 「慣用音」はそれを生じる理由が明らかでないものが多く、説明をつくすことができない。
- 2) 理由の明らかなものについては、
 - (i) 日本漢字音化の過程で生じたもの
 - (ii) 漢字の構成に起因するもの
 - ・ 声符からの類推によるもの
 - ・ 日本漢語の音が定着したために生じたもの
 - (iii) 和語の音の影響によるもの
 - (iv) 個別的な理由によるものなどがある。

全体として見ると、清濁に関するものがとりわけ目立つ。中でも、中古音の清音を濁音とするものが35%を占めている。

「慣用音」とは、一般には「日本漢字音と中国語原音に対応関係が認められないもの」とされているが、上記のとおり、「慣用音」には興味深い現象が認められる。

〈注〉

- 1) 本研究で「中古音」というのは、特に断らない限り、『広韻』および『韻鏡』から帰納される音の体系に基づいて推定された音を指す。
- 2) 『新選漢和辞典』では「格天井ゴウテンジョウ」のように、濁音形「ゴウ」で読まれる漢語も載せられている。
- 3) 林史典(1980)「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』122 国語学会。
- 4) 有坂秀世(1940)「メイ(明)・ネイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」『国語音韻史の研究』(pp.369-374)。
- 5) 林史典(1982)『日本語の世界 4 日本の漢字 (第五章 日本の漢字音)』 pp.357-361。
- 6) 『広韻』では旨韻の字として収録されている。
- 7) 調査に使用したほか二種の漢和辞典『新選漢和辞典』と『学研新漢和大字典』の場合も、同様のことがいえる。
- 8) 『角川新字源』には禡韻の字として収録されているが、『広韻』には収録されていない。
- 9) 『広韻』では鐸韻の字として収録されている。
- 10) 『広韻』では薛韻の字として収録されている。
- 11) 『広韻』では桓韻の字として収録されている。
- 12) 『広韻』では末韻の字として収録されている。
- 13) 慣用音と見なすことができる 109 字の検討については、3. 2. 1 音的な特徴による分類または 3. 2. 2 「慣用音」を生じる理由による分類のどちらか一方で論じる。
- 14) 『広韻』では、模韻として収録されている。
- 15) 『広韻』では祭韻に属する。
- 16) 固有の日本語には、濁音で語頭に立たない。それを利用して「どあほう」「ごつい」「どぎつい」など、感情を表現した独特の表現がある。

【引用文献】

有坂秀世(1940)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」

(『国語音韻史の研究 増補新版』1957年 三省堂 再録)

林 史典(1982)『日本語の世界 4 日本の漢字 (第五章 日本の漢字音)』中央公論社

『言語学大辞典 術語編』三省堂(1988)

『日本語学研究事典』明治書院(2007)

『日本語大辞典(第2版)』講談社(1995)

『日本国語大辞典(第2版)』小学館(2000)

総括

従来の日本漢字音研究は、歴史的な研究に偏重している。すなわち、それが対象としてきたのは、ほとんどが仏典や漢籍の読誦音として伝承された漢字音(古辞書の漢字音も、中古以前のもはそのような読誦音を根拠とする)である。現代の日本語で一般言語材として用いられる漢字音がどのような実態を示し、また、それが歴史的事実とどう関連するのかが全く問われていない。

このような視点から、本研究では次の3事象を取り上げて重点的に考究した。すなわち、頭子音に関連する問題からはハ行子音の半濁音化、韻尾に関する問題からは唇内入声音の促音化、韻腹を含む字音の形態に関する問題からは〈慣用音〉を取り上げた。

論述の都合で、それらを次の順で述べた。

- (1) 唇内入声音の促音化について
- (2) ハ行子音の半濁音化について
- (3) 〈慣用音〉について

(1)～(3)の論旨と結論は以下のとおりである。

(1) 唇内入声音の促音化について

唇内入声音が「ーツ」になるのは、無声子音が続いて促音化が生じ、それが字音として定着したためだと考えられている。しかし、唇内入声音に無声子音が続いても規則的に促音化が起きるわけではない。現代漢語に用いられる頻度が高い約3,000字の調査では、唇内入声字(77字)のうち、無声子音が後接して促音化する唇内入声字は僅か9.1%(6字)で、全体の一割にも満たない。それに対して、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字(50字)や、促音化したりしなかったりする唇内入声字(11字)のほうが、全体の90.9%となり圧倒的に多い。勿論、唇内入声音が促音化する場合は無声子音が後接する場合に限られるから、その限りではこれまでの解釈に誤りはないが、無声子音が後接する唇内入声音が無条件に促音化するわけではない以上、促音化する条件が問題になる。

それについては、現代漢語に限って見ると、原音の韻類と後接子音との関連は認められないが、一方、主母音(促音化を生じる直前の母音)との関連が認められた。すなわち、促音化する唇内入声音の主母音は前舌・中舌の*-i-, -e-, -a-*、促音化しない唇内入声音の主母音は奥舌の非広母音*-o-, -u-*である。

しかし、歴史的仮名遣いに反映された字音では実態が異なっており、唇内入声音が特定の母音の後で促音化するという事実は認められない。従って、現代漢語における唇内

入声音と主母音との相関性は、促音の前で、すなわち促音化によって元の母音が保存された結果であると見なされる。

結局、唇内入声音が促音化する音韻論的条件はそれを限定することができない。唇内入声音に無声子音が続くと促音化するか否かは各漢字の個別的要因によると結論せざるを得ない。

(2) ハ行子音の半濁音化について

現代漢語における半濁音化の実態については、半濁音化する条件を分析し、例外として認められる助数詞・反例語についても考察を加えた。

現代漢語に用いられる頻度が高い約 3,000 字の調査では、唇内入声音・ p ・舌内入声音・ t および唇内鼻音・ m ・舌内鼻音・ n に続くハ行子音は半濁音化し、喉内入声音・ k と喉内鼻音・ η に続くハ行子音は半濁音化しないという規則性が認められる。

入声音に続くハ行子音が半濁音化する場合は、促音化を伴う。その理由は、唇内入声音・ p に関していうと、唇音性を保存することができる $p-p(\Phi)$ のような関係が、半濁音化する条件であると同時に促音化するための条件であるからと考えられる。舌内入声音・ t の場合は、促音化して後続子音 $p(\Phi)$ との間に $p-p(\Phi)$ のような関係を作ることができたため、半濁音化したと推測できる。従って、半濁音化と促音化は一体となった関係であるということができる。一方、喉内入声音・ k は入声音・ p, t, k の中で最も早く開音節化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内入声音の場合は早く ki, ku のように開音節化してしまったために、半濁音化の条件である $p-p(\Phi)$ のような関係を作ることができなかつたと考えるのが妥当である。唇内鼻音・ m と舌内鼻音・ n に続くハ行子音も半濁音化する。その理由は、両者は日本語化の過程を通じて撥音/ N /として鼻音性が保存され、撥音/ N /は後続子音 $p(\Phi)$ の影響を受け、 $m-p(\Phi)$ のような相互に唇音性を保存する関係を作ることができたためと考えられる。一方、喉内鼻音・ η は半濁音化の発生以前に非鼻音化したために、後に続くハ行子音は半濁音化しなかったと推定できる。すなわち、喉内鼻音の場合は $-i, -u$ のように非鼻音化してしまったために、半濁音化の条件である $m-p(\Phi)$ のような関係を作ることができなかつたと考えるのが妥当である。半濁音化の条件、すなわち「 $p-p(\Phi)$ もしくは $m-p(\Phi)$ のような関係を作ることができる場合のみ半濁音化する」という原則から、従来「半濁音化」と考えられていた p 音は、本来の唇音 p の残存であると認める余地がある。

ハ行にはじまる助数詞が半濁音化するか否かは、原則に反するものが多い。その理由の一つは、固有語（日本語）が用いられる数詞に原因があると考えられる。例えば「六発」は「ロッパツ」のように半濁音化するが、「七発」は「シッパツ」のように半濁音化しないのは、「ななハツ」という固有語を含む形式の影響で「シチハツ」のように原則に

反して半濁音化しない語形が生じたと推定できる。

(3) 〈慣用音〉について

現代漢語に用いられる頻度が高い約 3,000 字に関して、慣用音と認められる字音を特定するため、三種の漢和辞典を利用し、その字音が慣用音と認められるか否かを判断した。

調査に使用した漢和辞典に関していうと、漢和辞典の慣用音の認め方は一定しておらず、三種すべての辞書が慣用音を認めている字もあれば、二種または一種の辞書しか慣用音を認めていない字も存在する。そのうち、本研究では、三種すべての辞書が慣用音を認めている 145 字を中心にして、まず、それを慣用音とすることが適切かどうか分析を行った。

145 字を 1 字ずつ検討した結果、三種の辞書が慣用音を認めている字でも、慣用音とは見なしがたいものが 36 字存在した。

次に、慣用音と認められる 109 字について、音的な特徴による分類と「慣用音」を生じる理由による分類の 2 面から考察した。

音的な特徴に関して言うと、「声母・韻腹・韻尾」のうち、「声母」の清濁に関するものが 54 字で最も多い。中でも中古音の清音を濁音とするものが 42 字で、54 字中の約 78% を占める。この 42 字は、分類の対象とした 120 字（延べ字数）に対しても 35% を占める。「韻腹」に関しては、母音の長短に関するものが 12 字で最も多く、「韻尾」に関しては、唇内入声音[-p]を「ーツ」とするものが 7 字で最も多い。

「慣用音」を生じる理由に関して言うと、理由が不明なもの（33 字）が分類の対象とした 109 字中の 3 割以上を占めており目立つ。慣用音の多くは、それを生じる理由が不明である。理由が不明な 33 字を除く 76 字について見ると、声符からの類推にもとづくものが 37 字で最も多く、76 字中の約 5 割を占める。次に多いのは、個別的な理由が考えられるもの（24 字）である。この中には、「冊サツ」「立リツ」などのように入声音の促音化を反映したものや、「剛ゴウ」「獣ジュウ」などのように、和語における濁音の表現価値、すなわち、どぎつい感じ、粗い感じ、不快な感じなどが語頭の濁音で表される傾向の影響を受けて、濁音化したと考えられるものが含まれる。音的な特徴による分類では、中古音の清音を濁音とするものが圧倒的に多かったため、これは連濁の影響によるものであると推測されやすいが、実際には連濁の影響と考えられるものは 3 字（「宮グウ」など）で、ごく僅かである。

音的な特徴による分類と「慣用音」を生じる理由による分類を合わせると、慣用音には「蛇ダ」「紅ク」などのように、「清濁に関するもの」で「声符からの類推によるもの」と認められるものが最も多く、18 字存在する。

以上を総合すると、以下のことが言える。

1) 「慣用音」はそれを生じる理由が明らかでないものが多く、説明をつくすことができない。

2) 理由の明らかなものについては、

(i) 日本漢字音化の過程で生じたもの

(ii) 漢字の構成に起因するもの

・ 声符からの類推によるもの

・ 日本漢語の音が定着したために生じたもの

(iii) 和語の音の影響によるもの

(iv) 個別的な理由によるもの

などがある。

全体として見ると、清濁に関するものがとりわけ目立つ。中でも、中古音の清音を濁音とするものが 35%を占めている。

以上(1)～(3)で明らかになった点は、現代日本漢語の漢字音に関する重要な一面を示すものである。

参考文献・資料

- 有坂秀世(1937-1938)「カールグレン氏の拗音説を評す」
 (『国語音韻史の研究 増補新版』1957年 三省堂 再録)
- 〃 (1940)「メイ(明) ネイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」
 (『国語音韻史の研究 増補新版』1957年 三省堂 再録)
- 〃 (1942)「帽子」等の假名遣いについて」
 (『国語音韻史の研究 増補新版』1957年 三省堂 再録)
- 〃 (1944)「正倉院御藏舊鈔本蒙求の漢音」『橋本博士還暦記念国語学論集』
 岩波書店
- 〃 (1957)『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂
- 〃 (1959)『音韻論』三省堂
- 飯田利行(1941)『日本に残存せる支那古韻の研究』富山房
- 〃 (1955)『日本に残存せる中国近世音の研究』
 飯田博士著書刊行会(駒澤大学中国文学研究室内)
- 大島正健(1912)『韻鏡音韻考』啓成社
- 〃 (1929)『支那古韻史』富山房
- 〃 (1931)『漢音呉音の研究』第一書房
- 大野 晋(1976)「上代日本語の母音体系について」月刊『言語』5-8 大修館書店
- 大矢 透(1914)『周代古音考及韻徴』国定教科書共同販売所
- 〃 (1924)『韻鏡考』明名堂印刷所
- 〃 (1932)『隋唐音図』大村書店
- 岡本 勲(1991)『日本漢字音の比較音韻史的研究』桜楓社
- 沖森卓也(1989)『日本語史』桜楓社
- 奥村三雄(1977)「音韻の変遷(2)」『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店
- 〃 (1982)「サ行音はどのように推移したか」『国文学解釈と教材の研究』27-16
 学燈社
- 小倉 肇(1981)「上古漢語の音韻体系」『言語研究』79 日本言語学会
- 〃 (1995)『日本呉音の研究』新典社
- 〃 (2014)『続・日本呉音の研究』新典社
- 亀井 孝(1943)「上代和音の舌内撥音尾と唇内撥音尾」『国語と国文学』20(4)
 東京大学国語国文学会
- 河野六郎(1968)「朝鮮漢字音の研究」(『河野六郎著作集2』1979年 平凡社 再録)

- 〃 (1976) 『「日本呉音」について』『言語学論叢』最終号
東京教育大学言語学研究会
- 〃 (1978) 「朝鮮漢字音と日本呉音」
『末松保和博士古稀記念論集—古代アジア史論集』上巻, 吉川弘文館
- 〃 (1979) 『河野六郎著作集2』平凡社
- 小松英雄(1956) 「日本字音における唇内入声音の促音化と舌内入声音への合流過程 —中
世博士家訓点資料からの跡付け—」『国語学』25 国語学会
- 〃 (1981) 『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社
- 〃 (1995) 「日本字音の諸体系—読誦音整備の目的を中心に—」
『日本漢字音史論輯』汲古書院
- 〃 (2014) 『日本語を動的にとらえる ことばは使い手が進化させる』笠間書院
- 佐々木勇(2009) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』汲古書院
- 佐藤喜代治編(1989) 『漢字講座 (第2巻 漢字研究の歩み)』明治書院
- 高松政雄(1982) 『日本漢字音の研究』風間書房
- 〃 (1986) 『日本漢字音概論』風間書房
- 〃 (1993) 『日本漢字音論考』風間書房
- 〃 (1997) 『日本漢字音論究』風間書房
- 築島 裕(1995) 「日本漢字音研究の回顧と展望」『日本漢字音史論輯』汲古書院
- 藤堂明保(1985) 『新訂 中国語概論』大修館書店
- 中田祝夫(1951) 「中古音韻史上の一問題」『国語学』6 国語学会
- 沼本克明(1974) 「日本漢字音に於ける唇内入声音の促音化とフ入声」
『国語学』99 国語学会
- 〃 (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 〃 (1986) 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 〃 (1997) 『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院
- 橋本進吉(1950) 『国語音韻の研究』(『橋本進吉博士著作集第4冊』) 岩波書店
- 〃 (1966) 『国語音韻史』(『橋本進吉博士著作集第6冊』) 岩波書店
- 服部四郎(1984) 「中古漢語と上代日本語—paper phonetics 的思考を防ぐために—」
月刊『言語』13-2 大修館書店
- 林 史典(1979) 『漢呉音図』(解説) 勉誠社文庫
- 〃 (1980) 「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』122
国語学会
- 〃 (1981) 『磨光韻鏡』(解説) 勉誠社文庫

- // (1982)『日本語の世界 4 日本の漢字 (第五章 日本の漢字音)』中央公論社
 // (1983)「中古漢語の介母と日本呉音」『文芸言語研究 (言語篇 8)』筑波大学
 // (1989)『漢字講座第 2 卷 漢字研究の歩み (近世の漢字音 4 字音に関する研究)』
 明治書院
 // (2001)「九世紀日本語の子音音価——日本語音韻史における文献学的考察の意
 味と方法」『国語と国文学』929 東京大学国語国文学会
 // (2005)『朝倉日本語講座②文字・書記 (第 1 章 日本語の文字と書記)』朝倉書店
 // (2010)「改定常用漢字表の意義」(『日本語学』2010 年 8 月号 29-10) 明治書院
 肥爪周二(2005)『朝倉日本語講座②文字・書記 (第 8 章 漢字音と日本語 c.唐音系字音)』
 朝倉書店
 平山久雄(1967)『中国文化叢書①言語 (中古漢語の音韻)』大修館書店
 馬淵和夫(1959)「上代・中古におけるサ行頭音の音価」『国語と国文学』36(1)
 東京大学国語国文学会
 // (1962,1963,1965)『日本韻学史の研究』日本学術振興会
 満田新造(1920)「「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣は正しからず」
 (『中国音韻史論考』1964 年 明治書院 再録)
 // (1926)「字音に於ける M 尾 N 尾の発見に就いて」
 (『中国音韻史論考』1964 年 明治書院 再録)
 // (1926)「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就いて」
 — 朝鮮に於ける字音伝来の経路」
 (『中国音韻史論考』1964 年 明治書院 再録)
 三根谷徹(1953)「韻鏡の三・四等について」『言語研究』22・23 日本言語学会
 // (1956)「中古漢語の韻母の体系」『言語研究』31 日本言語学会
 // (1993)「韻鏡と中古漢語」『中古漢語と越南漢字音』汲古書院
 山田孝雄(1940)『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
 湯沢質幸(1987)『唐音の研究』勉誠社
 // (1996)『日本漢字音史論考』勉誠社
 頼 惟勤(1989)『中国音韻論』『頼惟勤著作集 I』汲古書院
 董 同龢(1948)『上古音韻表稿』『中央研究院歴史語言研究所集刊第 18 本』
 羅 常培(1933)『唐五代西北方音』歴史語言研究所単刊甲種之十二

- 『朝日新聞』 2009年4月7日(朝刊) 23面
- 『韻鏡校注』 藝文印書館(1982年影印本)
- 『学研新漢和大字典』 学習研究社(2005)(藤堂明保・加納喜光編)
- 『角川新字源(改訂版)』 角川学芸出版(1994)(小川環樹ほか編)
- 『漢辞海 第三版(机上版)』 三省堂(2011)(佐藤進・濱口富士雄編)
- 『漢字出現頻度数調査(3)』 凸版印刷(2004-2006)
- 『言語学大辞典 第6卷(術語編)』 三省堂(1995)(亀井孝ほか編)
- 『現代雑誌九十種用字用語』 国立国語研究所報告 25(1964)
- 『広辞苑(第六版)』 岩波書店(2008)(新村出編)
- 『校正宋本広韻』 藝文印書館(1986年影印本)
- 『常用漢字表』 平成22年内閣告示第2号(2010)
- 『新選漢和辞典(第七版)』 小学館(2003)(小林信明編)
- 『新選国語辞典(第八版)』 小学館(2002)(金田一京助ほか編)
- 『日本国語大辞典(第2版)』 小学館(2000)
- 『日本語学研究事典』 明治書院(2007)
- 『日本語大辞典(第2版)』 講談社(1995)
- 『日本語大事典』 朝倉書店(2014)(佐藤武義・前田富祺)
- 『表外漢字字体表』 国語審議会(2000)

資 料 篇

第3章

表(3) 無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
オウ (アフ)	鴨		鴨頭オウトウ	鴨水オウスイ	鴨脚オウキヤク 鴨黄オウコウ
	凹	凹版オウハン	凹地オウチ 凹凸オウトツ	凹処オウシヨ	
	押	押班オウハン		押紙オウシ 押収オウシュウ 押送オウソウ	押解オウカイ 押券オウケン
キュウ (キフ)	及		及逮キュウタイ	及早キュウソウ	及瓜キュウカ 及筭キュウケイ 及肩キュウケン
	汲			汲索キュウサク	汲汲キュウキュウ 汲古キュウコ
	吸	吸鼻キュウヒ	吸著キュウチャク	吸収キュウシュウ	吸気キュウキ 吸吸キュウキュウ 吸血鬼キュウケツキ
	泣		泣涕キュウテイ	泣訴キュウソ	泣諫キュウカン 泣血キュウケツ
	急	急迫キュウハク 急変キュウヘン	急湍キュウタン 急迫キュウツイ 急転キュウテン	急死キュウシ 急使キュウシ 急疾キュウシツ 急襲キュウシュウ 急設キュウセツ 急峻キュウシュン 急所キュウシヨ 急杵キュウシヨ 急進キュウシン 急須キュウス 急性キュウセイ 急逝キュウセイ	急管キュウカン 急遽キュウキョ 急景キュウケイ 急行キュウコウ

				急切キユウセツ 急箭キユウセン 急先鋒 キユウセンボウ 急装キユウソウ 急足キユウソク 急促キユウソク 急趣キユウソク 急速キユウソク 急卒キユウソツ	
	級		級等キユウトウ	級差キユウサ 級数キユウスウ	
	給	給費キユウヒ 給付キユウフ 給復キユウフク		給食キユウシヨク 給水キユウスイ 給足キユウソク	給仮キユウカ 給金キユウキン 給血キユウケツ 給犒キユウコウ
	脅 ^{注)}				脅肩キユウケン
キョウ (ケフ)	怯	怯怕キョウハ 怯夫キョウフ		怯懼キョウシヨウ	
	俠	俠白キョウハク	俠盜キョウトウ	俠士キョウシ 俠少キョウシヨウ	俠客キョウカク 俠氣キョウキ 俠骨キョウコツ
	脇			脇息キョウソク	
	頰	頰輔キョウホ	頰適キョウテキ	頰車キョウシャ	
	協	協比キョウヒ 協風キョウフウ	協泰キョウタイ 協調キョウチヨウ 協定キョウテイ	協賛キョウサン 協讚キョウサン 協商キョウシヨウ 協心キョウシン 協奏キョウソウ	協会キョウカイ 協諧キョウカイ 協契キョウケイ
	峽		峽中キョウチュウ 峽天キョウテン	峽州キョウシュウ	峽間キョウカン 峽谷キョウコク

	挟	挟扶キョウフ 挟輔キョウホ		挟策キョウサク 挟書キョウシヨ 挟鐘キョウシヨウ	挟貴キョウキ 挟攻キョウコウ
	狭	狭薄キョウハク	狭中キョウチュウ	狭窄キョウサク 狭斜キョウシヤ 狭小キョウシヨウ	狭郷キョウキョウ 狭巷キョウコウ
	脅	脅迫キョウハク 脅逼キョウヒョク		脅守キョウシュ 脅制キョウセイ 脅息キョウソク	脅嚇キョウカク 脅喝キョウカツ 脅恐キョウキョウ <u>脅肩キョウケン</u>
	劫	劫迫キョウハク 劫風キョウフウ	劫質キョウチ 劫盜キョウトウ	劫殺キョウサツ 劫弑キョウシ 劫守キョウシュ 劫制キョウセイ	<u>劫灰キョウカイ</u> <u>劫劫キョウキョウ</u> 劫脅キョウキョウ
ギョウ (ゲフ)	業		業地ギョウチ	業績ギョウセキ	
コウ (コフ)	蛤		蛤柱コウチュウ	蛤子コウシ	蛤灰コウカイ 蛤蚶コウカイ 蛤蟹コウカイ
	閣				閣下コウカ 閣閣コウコウ
	劫				<u>劫劫コウコウ</u>
ゴウ (ゴフ)	業	業風ゴウフウ 業報ゴウホウ		業障ゴウシヨウ	業火ゴウカ 業果ゴウカ 業鏡ゴウキョウ 業苦ゴウク
	劫			劫初ゴウシヨ	劫火ゴウカ <u>劫灰ゴウカイ</u>
シュウ (シフ)	拾		拾掇シュウテツ 拾得シュウトク	拾収シュウシュウ 拾穂シュウスイ 拾翠シュウスイ 拾撫シュウセキ	拾芥シュウカイ

	葺			葺襲シュウシュウ 葺檣シュウショウ	
	習	習復シュウフク 習癖シュウヘキ	習知シュウチ 習得シュウトク	習作シュウサク 習示シュウシ 習習シュウシュウ 習誦シュウショウ 習親シュウシン 習性シュウセイ 習静シュウセイ 習染シュウセン	習慣シュウカン 習貫シュウカン 習坎シュウカン 習氣シュウキ 習故シュウコ 習狎シュウコウ
	襲	襲歩シュウホ 襲封シュウホウ		襲殺シュウサツ 襲刺シュウシ 襲爵シュウジャク 襲取シュウシュ 襲承シュウショウ 襲侵シュウシン 襲迹シュウセキ	襲吉シュウキツ 襲継シュウケイ
	洩		<u>洩滞シュウタイ</u>		
	汁	汁防シュウホウ		汁滓シュウシ	
ジュウ (ジフ)	洩		<u>洩滞ジュウタイ</u>		
ショウ (セフ)	妾	妾婦ショウフ 妾腹ショウフク	妾宅ショウタク	妾出ショウシュツ	
	摺	摺本ショウホン	摺置ショウチ	摺扇ショウセン 摺奏ショウソウ	
	涉		涉度ショウト	涉史ショウシ 涉手ショウシュ 涉世ショウセイ 涉浅ショウセン 涉想ショウソウ	涉禽ショウキン
	葉		<u>葉適ショウテキ</u>		葉公ショウコウ

ジョウ (デフ)	疊	疊峰ジョウホウ	疊重ジョウチョウ 疊濤ジョウトウ	疊嶂ジョウショウ 疊翠ジョウスイ 疊声ジョウセイ	疊棋ジョウキ 疊起ジョウキ 疊句ジョウク 疊鼓ジョウコ
	帖			帖試ジョウシ	帖括ジョウカツ 帖経ジョウケイ
ソウ (サフ)	挿			挿釵ソウサイ	挿架ソウカ 挿花ソウカ
チョウ (テフ)	涉				涉血チョウケツ
	帖	帖伏チョウフク 帖服チョウフク	帖着チョウチャク 帖帖チョウチョウ	帖子チョウシ 帖息チョウソク 帖装チョウソウ	帖括チョウカツ
	貼	貼付チョウフ (テンブ) 貼附チョウフ (テンブ)	貼地チョウチ	貼書チョウシヨ 貼秤チョウシヨウ 貼襯チョウシン 貼親チョウシン 貼切チョウセツ	貼黄チョウコウ
	牒		牒中チョウチュウ	牒書チョウシヨ	
	喋		喋喋チョウチョウ		喋聒チョウカツ 喋血チョウケツ
	諜	諜報チョウホウ	諜知チョウチ 諜諜チョウチョウ	諜者チョウシャ	諜記チョウキ 諜候チョウコウ
トウ (タフ)	沓		沓中トウチュウ 沓潮トウチョウ 沓沓トウトウ	沓至トウシ	
	踏	踏破トウハ 踏翻トウハン 踏伏トウフク	踏踏トウトウ	踏查トウサ 踏襲トウシュウ 踏牀トウシヨウ 踏青トウセイ 踏籍トウセキ	踏歌トウカ 踏閣トウカク 踏鞠トウキク

	答	答拝トウハイ 答表トウヒョウ 答布トウフ		答賽トウサイ 答颯トウサツ 答申トウシン	
	搭			搭載トウサイ	
ボウ (バフ)	乏		乏頓ボウトン		乏匱ボウキ 乏窮ボウキュウ 乏困ボウコン
ヨウ (エフ)	葉	葉柄ヨウヘイ	<u>葉適</u> ヨウテキ	葉菜ヨウサイ 葉酸ヨウサン 葉散ヨウサン 葉子ヨウシ 葉書ヨウショ 葉底ヨウテイ 葉針ヨウシン	葉貫ヨウカン
	厭	厭伏ヨウフク	厭翟ヨウテキ 厭当ヨウトウ		
リュウ (リフ)	笠		笠沢リュウタク	笠子リュウシ	
	粒			粒子リュウシ 粒食リュウシヨク	
リョウ (レフ)	獵	獵夫リョウフ		獵師リョウシ 獵者リョウシャ 獵涉リョウシヨウ	獵官リョウカン 獵奇リョウキ 獵期リョウキ 獵区リョウク 獵犬リョウケン 獵戸リョウコ 獵較リョウコウ リョウカク

注) 下線部は 2 つ以上読み方がある唇内入声字を示す (以下同)。

表(4) 無声子音が後接して促音化する唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
アツ	圧	圧迫アツパク 圧伏アツブク 圧服アツブク	圧倒アツトウ	圧搾アツサク 圧殺アツサツ 圧死アツシ 圧縮アツシュク 圧酒囊アツシュノウ 圧勝アツショウ 圧政アツセイ 圧制アツセイ 圧尺アツセキ 圧塞アツソク アツサク	圧巻アツカン
シツ	湿	湿布シツプ	湿地シツチ	湿疹シツシン 湿瘡シツソウ	湿気シツケ 湿蝨シツコ
ジュウ (ジフ)	十	十方ジツポウ 十法界ジツポウカ イ	十手ジツテ ジュツシュ 十哲ジツテツ 十徳ジツトク	十秋ジツシュウ 十州ジツシュウ 十成ジツセイ 十霜ジツソウ	十戒ジツカイ 十界ジツカイ 十干ジツカン 十金ジツキン
セツ	接	接伴セツパン ショウバン 接吻セツブン	接待セツタイ 接着セツチャク 接頭辞セツトウ ジ	接種セツシュ 接收セツシュウ 接踵セツショウ 接触セツショク 接神セツシン 接戦セツセン	接客セツキヤク 接近セツキン 接見セツケン 接穀セツコク 接骨セツコツ
	撰		撰提セツテイ 撰津セツツ	撰取セツシュ 撰承セツショウ 撰生セツセイ 撰斉セツセイ 撰政セツセイ セツショウ	撰官セツカン 撰関セツカン 撰家セツケ 撰行セツコウ

リツ	立	立派リツパ 立範リツパン 立腹リツプク 立方リツポウ 立法リツポウ 立本リツボン	立体リツタイ 立地リツチ 立竹リツチク 立儲リツチョ 立冬リツトウ 立德リツトク	立志リツシ 立嗣リツシ 立者リツシヤ 立車リツシヤ 立秋リツシュウ 立春リツシュン 立証リツシヨウ 立食リツシヨク 立身リツシン 立説リツセツ	立夏リツカ 立花リツカ 立脚リツキヤク 立教リツキョウ 立僵リツキョウ 立極リツキョク 立勲リツクン 立計リツケイ 立憲リツケン 立后リツコウ 立功リツコウ 立国リツコク
----	---	---	---	--	--

表(5) 無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字

(上段：促音化しない漢語，下段：促音化する漢語)

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
コウ (カフ)	恰				<u>恰好コウコウ</u> ^{注)} 恰恰コウコウ
		恰幅カッフク			<u>恰好カッコウ</u>
	甲	甲板コウハン カンパン カンバン 甲兵コウヘイ	甲宅コウタク 甲虫コウチュウ 甲邸コウテイ	<u>甲子コウシ</u> 甲士コウシ 甲舎コウシャ 甲首コウシュ 甲卒コウソツ	甲科コウカ 甲殻コウカク 甲館コウカン 甲観コウカン 甲騎コウキ 甲光コウコウ 甲骨文字 コウコツモンジ
			甲冑カッチュウ	<u>甲子カッシ</u>	

ゴウ (ゴフ) カッ ガッ	合	合判ゴウハン 合肥ゴウヒ 合筆ゴウヒツ 合符ゴウフ 合変ゴウヘン 合浦ゴウホ 合法ゴウホウ 合抱ゴウホウ	合著ゴウチョ 合朝ゴウチョウ 合沓ゴウトウ 合遯ゴウトウ	合祭ゴウサイ 合子ゴウシ 合祀ゴウシ 合資ゴウシ <u>合聚ゴウシュウ</u> <u>ゴウシュ</u> 合信ゴウシン 合心ゴウシン 合親ゴウシン 合成ゴウセイ 合勢ゴウセイ 合尖ゴウセン <u>合葬ゴウソウ</u> 合成ゴウセイ	合下ゴウカ 合会ゴウカイ 合諧ゴウカイ 合格ゴウカク 合歡ゴウカン 合器ゴウキ 合釀ゴウキョ 合鏡ゴウキョウ 合喬ゴウキン 合金ゴウキン 合計ゴウケイ 合契ゴウケイ 合口ゴウコウ 合好ゴウコウ 合谷ゴウコク 合婚ゴウコン
		合羽カッパ 合評ガツピョウ 合併ガツペイ 合璧ガツペキ カッペキ 合璧ガツペキ 合本ガツポン	合体ガツタイ 合致ガツチ <u>(合点ガテン)</u> ※ガッテンの音変化	合切ガツサイ 合作ガツサク 合冊ガツサツ 合算ガツサン <u>合聚ガツシュウ</u> 合宿ガツシュク 合唱ガツショウ 合掌ガツショウ 合従ガツショウ 合縦ガツショウ 合奏ガツソウ <u>合葬ガツソウ</u> 合戦カッセン	

ゾウ (ザフ) ザツ	雑	雑兵ゾウヒョウ		雑作ゾウサク	雑巾ゾウキン
		雑泛ザツハン		ゾウサ	雑木林 ゾウキバヤシ
		雑佩ザツパイ	雑多ザツタ	雑碎ザツサイ	雑貨ザツカ
		雑帛ザツパク	雑体ザツタイ	雑綵ザツサイ	雑家ザツカ
		雑駁ザツパク	雑治ザツチ	雑菜ザツサイ	雑卦ザツカ
		雑費ザツピ	雑著ザツチョ	雑作ザツサク	雑花ザツカ
		雑筆ザツピツ	雑沓ザツトウ	雑纂ザツサン	雑感ザツカン
		雑兵ザツピョウ	雑鬧ザツトウ	雑散ザツサン	雑記ザツキ
		雑品ザツピン	雑踏ザツトウ	雑誌ザツシ	雑興ザツキョウ
		雑報ザツポウ		雑史ザツシ	雑件ザツケン
				雑仕ザツシ	雑戸ザツコ
				雑詩ザツシ	雑居ザツキョ
				雑廁ザツシ	雑考ザツコウ
				雑種ザツシュ	雑穀ザツコク
				雑集ザツシュウ	(ザコク)
				雑襲ザツシュウ	雑婚ザツコン
				雑聚ザツシュウ	
				雑出ザツシュツ	
				雑書ザツシヨ	
				雑処ザツシヨ	
				雑掌ザツシヨウ	
				雑抄ザツシヨウ	
				雑食ザツシヨク	
				雑色ザシヨク	
				ザツシキ	
				雑説ザツセツ	
				雑俎ザツソ	
				雑草ザツソウ	
				雑則ザツソク	

シュウ (シフ)	集	集配シュウハイ	集滞シュウタイ	集散シュウサン	集荷シュウカ
		集服シュウフク	集大成 シュウタイセイ	集矢シュウシ	集会シュウカイ
			集中シュウチュウ	集聚シュウシュウ	<u>集解シュウカイ</u>
			<u>集注シュウチュウ</u>	集成シュウセイ	集金シュウキン
			集註シュウチュウ	集積シュウセキ	集句シュウク
			集綴シュウテイ	集束シュウソク	集計シュウケイ
					集結シュウケツ
					集権シュウケン
					集賢シュウケン
					集古シュウコ
			<u>集注シツチュウ</u>		<u>集解シツカイ</u>
			集註シュウチュウ		
シュウ (シフ) シツ	執	執紼シツフツ	執中シツチュウ	執心シュウシン	
			執着シュウチャク (シュウジャク)		
		執筆シツピツ	執達シツタツ	執策シツサク	執柯シツカ
		執柄シツペイ	執刀シツトウ	執守シツシュ	執権シツケン
		執法シツポウ		執政シツセイ	執行シツコウ
				執奏シツソウ	
トウ (タフ)	塔		<u>塔頭トウトウ</u>	塔勢トウセイ	
			<u>塔頭タツチュウ</u>		

ニュウ (ニフ) ジュ	入	入破ニュウハ 入費ニュウヒ 入府ニュウフ	入対ニュウタイ <u>入質ニュウチ</u> 入超ニュウチョウ 入朝ニュウチョウ 入直ニュウチョク 入党ニュウトウ <u>入唐ニュウトウ</u> 入湯ニュウトウ	入札ニュウサツ <u>入質ニュウシ</u> 入室ニュウシツ 入手ニュウシュ 入社ニュウシヤ <u>入声ニュウシヨウ</u> 入相ニュウシヨウ 入植ニュウショク 入神ニュウシン 入信ニュウシン 入津ニュウシン 入水ニュウスイ (ジュスイ) 入籍ニュウセキ 入選ニュウセン	入荷ニュウカ 入会ニュウカイ 入閣ニュウカク 入格ニュウカク 入官ニュウカン 入棺ニュウカン 入京ニュウキョウ 入金ニュウキン 入覲ニュウキン 入見ニュウケン 入庫ニュウコ 入港ニュウコウ 入貢ニュウコウ 入寇ニュウコウ 入国ニュウコク
			<u>入唐ニットウ</u>	<u>入声ニツシヨウ</u>	入魂ジツコン ジュツコン
ノウ (ナフ) ナッ	納	納杯ノウハイ 納付ノウフ 納陛ノウヘイ 納幣ノウヘイ 納本ノウホン	納徴ノウチョウ	納采ノウサイ 納職ノウショク	納会ノウカイ 納款ノウカン 納棺ノウカン 納諫ノウカン 納期ノウキ 納吉ノウキツ 納経ノウキョウ 納金ノウキン 納屨ノウク 納后ノウコウ 納貢ノウコウ 納降ノウコウ 納交ノウコウ 納骨ノウコツ
			納豆ナットウ 納得ナットク	納所ナツシヨ (ノウジョ)	

ホウ (ハフ) (ホフ) ハッ ホッ	法	<u>法被</u> ホウヒ 法服ホウフク (ホウブク) 法幣ホウヘイ	<u>法体</u> ホウタイ 法治主義 ホウチシュギ 法誅ホウチュウ 法帖ホウチョウ ホウジョウ 法廷ホウテイ 法定ホウテイ 法程ホウテイ 法敵ホウテキ 法典ホウテン 法天ホウテン <u>法度</u> ホウド <u>法灯</u> ホウトウ	法師ホウシ <u>法嗣</u> ホウシ <u>法主</u> ホウシュ 法守ホウシュ 法書ホウショ <u>法相</u> ホウショウ 法象ホウショウ <u>法身</u> ホウシン 法正ホウセイ 法制ホウセイ <u>法数</u> ホウスウ <u>法曹</u> ホウソウ 法則ホウソク	法科ホウカ 法家ホウカ ホウケ <u>法界</u> ホウカイ 法戒ホウカイ 法官ホウカン <u>法橋</u> ホウキョウ 法規ホウキ 法器ホウキ 法教ホウキョウ 法曲ホウキョク 法禁ホウキン <u>法華</u> ホウケ 法故ホウコ 法効ホウコウ 法倣ホウコウ
		<u>法被</u> ハツピ	<u>法度</u> ハツト 法堂ハツトウ (ホウドウ) <u>法体</u> ホツタイ <u>法灯</u> ホツトウ	<u>法嗣</u> ホツシ <u>法身</u> ホツシン <u>法主</u> ホツシュ ホツス <u>法数</u> ホツスウ <u>法曹</u> ホツソウ <u>法相</u> ホツソウ	<u>法界</u> ホツカイ <u>法橋</u> ホツキョウ <u>法華</u> ホツケ (ホケ)
ロウ (ラフ) ラ ラッ	拉		拉丁ラテン <u>拉致</u> ラッチ (ラチ)	拉颯ロウサツ <u>拉殺</u> ロウサツ <u>拉薩</u> ラッサ (ラサ) 拉殺ラッサツ	拉朽ロウキユウ 拉脅ロウキョウ

注) 下線部は読み方が促音化する場合と促音化しない場合が共にある漢語を示す。

第4章

◎…調査対象とした辞書に漢語が収録されており、その漢語にかな表記が付されているもの

○…調査対象とした辞書に漢語が収録されており、その漢語にかな表記が付されていないもの

×…『広辞苑』には収録されていない漢語

唇内鼻音+八行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選漢和	学研	広辞苑
1	淫	風	イン	プウ	侵	東	◎			
2	陰	蔽	イン	ペイ	侵	祭	○			◎
3	淫	奔	イン	ポン	侵	魂	◎			
4	音	波	オン	パ	侵	戈	○	◎	○	
5	音	符	オン	プ	侵	虞	○	◎	○	
6	音	譜	オン	プ	侵	姥	○	◎	○	
7	金	波	キン	パ	侵	戈	○	◎	○	
8	金	杯	キン	パイ	侵	灰	○	◎	○	
9	金	牌	キン	パイ	侵	佳		◎		
10	金	箔	キン	パク	侵	鐸	○	◎	◎	
11	金	髮	キン	パツ	侵	月		◎		
12	金	肥	キン	ピ	侵	微	○		○	◎
13	金	風	キン	プウ	侵	東	○			◎
14	金	粉	キン	プン	侵	吻		◎	○	
15	擒	捕	キン	ホ	侵	暮	◎			
16	襟	抱	キン	ポウ	侵	皓	◎			
17	今	般	コン	パン	侵	刪	○	◎	○	
18	心	肺	シン	パイ	侵	廢	○			◎
19	心	配	シン	パイ	侵	隊	○	◎		
20	侵	犯	シン	パン	侵	范	○	◎	○	
21	心	服	シン	プク	侵	屋	○	◎		
22	心	腹	シン	プク	侵	屋	○		○	◎
23	万	博	バン	パク	侵	鐸				◎
24	林	薄	リン	パク	侵	鐸			◎	
25	函	封	カン	プウ	覃	鍾	◎			
26	蚕	箔	サン	パク	覃	鐸				◎
27	貪	鄙	タン	ピ	覃	旨	◎			
28	探	訪	タン	ボウ	覃	漾	○	◎	○	◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
29	南	風	ナン	プウ	覃	東	○	◎		
30	南	北	ナン	ボク	覃	徳		◎		
31	三	拝	サン	パイ	談	怪	○		◎	
32	参	拝	サン	パイ	談	怪	○	◎	○	
33	三	杯	サン	バイ	談	灰				◎
34	三	白	サン	パク	談	陌				◎
35	三	拍子	サン	ビョウシ	談	陌				◎
36	三	筆	サン	ピツ	談	質		◎		
37	三	品	サン	ピン	談	寢				◎
38	三	分	サン	ブン	談	文				◎
39	三	分	サン	ブン	談	文				×
40	三	遍	サン	ベン	談	線				◎
41	三	方	サン	ポウ	談	陽	○	◎		×
42	三	方	サン	ボウ	談	陽	○	○		◎
43	三	宝	サン	ポウ	談	皓	○	◎	○	×
44	三	宝	サン	ボウ	談	皓	○	○	○	◎
45	担	保	タン	ポ	談	皓	○	◎	○	
46	談	判	ダン	パン	談	換	○	◎	○	
47	談	柄	ダン	ペイ	談	映	○			◎
48	塩	分	エン	ブン	塩	文		◎		
49	潜	伏	セン	プク	塩	屋	○	◎	○	
50	尖	兵	セン	ペイ	塩	庚	◎			
51	兼	併	ケン	ペイ	添	勁	○			◎
52	添	付	テン	プ	添	遇	○	◎	○	
53	緘	封	カン	プウ	咸	鍾	◎	◎		
54	緘	封	カン	ポウ	咸	鍾	○	◎		
55	岩	壁	ガン	ペキ	銜	錫	○	◎		
56	巖	秘	ゲン	ピ	巖	至	○		○	◎
57	巖	父	ゲン	プ	巖	麌	○	◎	○	
58	巖	封	ゲン	プウ	巖	鍾	○			◎
59	巖	法	ゲン	ポウ	巖	乏		◎		
60	凡	百	ハン	ピャク	凡	陌	○	◎	○	
61	凡	百	ボン	ピャク	凡	陌	○	◎	○	
62	凡	夫	ボン	プ	凡	虞	○	◎	○	
63	錦	帆	キン	パン	寢	凡	◎			
64	審	判	シン	パン	寢	換	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選漢和	学研	広辞苑
65	枕	畔	チン	ハン	寢	換			◎	
66	品	評	ヒン	ピョウ	寢	庚	○	◎	○	
67	感	服	カン	プク	感	屋	○	◎	○	
68	感	憤	カン	ブン	感	吻	○			◎
69	感	奮	カン	ブン	感	問	○			◎
70	慘	敗	ザン	パイ	感	夬	○	◎		
71	一覽	表	イチラン	ヒョウ	敢	小			○	◎
72	一覽	表	イチラン	ピョウ?	敢	小			○	×
73	掩	覆	エン	フウ	琰	屋	◎			
74	掩	閉	エン	ペイ	琰	霽	◎			
75	掩	蔽	エン	ペイ	琰	祭	◎	◎		
76	檢	分	ケン	ブン	琰	文	○	◎		
77	減	法	ゲン	ポウ	賺	乏		◎		
78	減	俸	ゲン	ポウ	賺	用	○	◎	○	
79	斬	髮	ザン	パツ	賺	月		◎		
80	艦	砲	カン	ポウ	檻	效		◎		
81	廕	庇	イン	ピ	沁	至	◎			
82	妊	婦	ニン	プ	沁	有	○	◎	○	
83	淡	泊	タン	パク	闕	鐸	○	◎	○	
84	濫	発	ラン	パツ	闕	月		◎		
85	濫	費	ラン	ピ	闕	未		◎		
86	厭	飽	エン	ポウ	艶	巧	◎			
87	記念	碑	キネン	ヒ	捺	支		◎		
88	店	舗	テン	ポ	捺	模	○	◎	○	
89	劍	把	ケン	パ	梵	馬	○	◎		
90	劍	法	ケン	ポウ	梵	乏	○	◎		
91	劍	鋒	ケン	ポウ	梵	鍾	○			◎

舌内鼻音＋八行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
1	巾	幅	キン	プク	真	屋	◎			
2	銀	波	ギン	ポ	真	戈			○	◎
3	銀	杯	ギン	パイ	真	灰	○			◎
4	銀	牌	ギン	パイ	真	佳		◎		
5	銀	髪	ギン	パツ	真	月		◎		
6	新	版	シン	パン	真	潛		◎		
7	親	藩	シン	パン	真	元	○		○	◎
8	神	秘	シン	ピ	真	至	○	◎	○	
9	真	筆	シン	ピツ	真	質		◎		
10	神	品	シン	ピン	真	寢	○		○	◎
11	晨	牝	シン	ピン	真	軫		◎		
12	神	父	シン	プ	真	麌	○	◎	○	
13	新	婦	シン	プ	真	有	○	◎	○	
14	神	符	シン	プ	真	虞	○			◎
15	新	譜	シン	プ	真	姥		◎		
16	神	風	シン	プウ	真	東	○			◎
17	新	兵	シン	ペイ	真	庚	○			◎
18	身	辺	シン	ペン	真	先	○	◎	○	
19	神	変	シン	ペン	真	線	○	◎	○	
20	新	編	シン	ペン	真	銑	○	◎		
21	親	補	シン	ポ	真	姥	○	◎		
22	辛	抱	シン	ボウ	真	皓	○	◎	○	
23	新	報	シン	ポウ	真	号	○			◎
24	人	肥	ジン	ピ	真	微			○	◎
25	塵	表	ジン	ピョウ	真	小	◎			
26	人	品	ジン	ピン	真	寢	○		○	◎
27	仁	風	ジン	プウ	真	東	○			◎
28	人	糞	ジン	プン	真	問	○	◎		
29	珍	品	チン	ピン	真	寢	○	◎		
30	陳	腐	チン	プ	真	麌	○	◎	○	
31	珍	宝	チン	ポウ	真	皓	○		○	◎
32	人	夫	ニン	プ	真	虞	○	◎		
33	頻	発	ヒン	パツ	真	月		◎		
34	頻	煩	ヒン	ハン	真	元	◎			

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
35	頻	繁	ヒン	パン	真	元	◎		◎	
36	貧	富	ヒン	プ	真	宥	○	◎	○	
37	身	分	ミ	ブン	真	文		◎	○	
38	民	風	ミン	プウ	真	東	○	◎		
39	民	兵	ミン	ペイ	真	庚			○	◎
40	民	法	ミン	ポウ	真	乏	○	◎		
41	鱗	比	リン	ヒ	真	旨	◎			
42	鱗	片	リン	ペン	真	霰		◎		
43	隣	保	リン	ポ	真	皓	○		○	◎
44	隣	邦	リン	ポウ	真	江		◎		
45	春	風	シュン	プウ	諄	東		◎	○	
46	春	分	シュン	ブン	諄	文	○	◎		
47	巡	拝	ジュン	パイ	諄	怪	○	◎		
48	純	白	ジュン	パク	諄	陌	○	◎		
49	馴	伏	ジュン	プク	諄	屋		◎		
50	遵	奉	ジュン	ポウ	諄	腫	○			◎
51	遵	法	ジュン	ポウ	諄	乏	○	◎		
52	詢	訪	ジュン	ポウ	諄	漾	◎	○		×
53	詢	訪	ジュン	ホウ	諄	漾	○	◎		×
54	旬	報	ジュン	ポウ	諄	号		◎		
55	雲	版	ウン	パン	文	潛			○	◎
56	雲	表	ウン	ピョウ	文	小	○			◎
57	君	父	クン	プ	文	麌	○			◎
58	薰	風	クン	プウ	文	東		◎	○	
59	軍	配	グン	バイ	文	隊		◎	○	
60	軍	配	グン	パイ	文	隊		◎	○	
61	群	飛	グン	ピ	文	微	○			◎
62	軍	夫	グン	プ	文	虞	○			◎
63	軍	服	グン	プク	文	屋		◎		
64	群	芳	グン	ポウ	文	陽	○			◎
65	軍	法	グン	ポウ	文	乏		◎		
66	群	峰	グン	ポウ	文	鍾	○		○	◎
67	軍	鋒	グン	ポウ	文	鍾	○			◎
68	雰	雰	フン	ブン	文	文			◎	
69	分	派	ブン	パ	文	卦	○	◎	○	
70	分	配	ブン	パイ	文	隊	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
71	文	博	ブン	パク	文	鐸		◎		
72	分	泌	ブン	ピ	文	質	○	◎	○	
73	分	泌	ブン	ピツ	文	質	○	◎	○	
74	文	筆	ブン	ピツ	文	質		◎	○	
75	文	憑	ブン	ヒョウ	文	蒸			◎	
76	分	布	ブン	プ	文	暮	○	◎	○	
77	分	封	ブン	ポウ	文	鍾		◎		
78	文	法	ブン	ポウ	文	乏	○	◎	○	
79	殷	富	イン	プ	欣	宥	◎			
80	殷	阜	イン	フ	欣	有	◎			
81	猿	臂	エン	ピ	元	眞	◎		◎	
82	園	圃	エン	ポ	元	姥	○			◎
83	元	本	ガン	ポン	元	混	○	◎		
84	喧	煩	ケン	ハン	元	元	◎			
85	喧	繁	ケン	ハン	元	元	◎			
86	喧	紛	ケン	ブン	元	文	◎			
87	原	板	ゲン	パン	元	潛			○	◎
88	原	版	ゲン	バン	元	潛		◎	○	×
89	原	版	ゲン	パン	元	潛		◎	○	◎
90	元	妃	ゲン	ピ	元	微			○	◎
91	元	服	ゲン	プク	元	屋	○	◎	○	
92	源	平	ゲン	ペイ	元	庚		◎		
93	元	宝	ゲン	ホウ	元	皓		◎	○	
94	原	本	ゲン	ポン	元	混	○		○	◎
95	番	兵	バン	ペイ	元	庚		◎		
96	昏	疲	コン	ヒ	魂	支	◎			
97	昆	布	コン	ブ	魂	暮	○	◎		
98	存	廢	ソン	パイ	魂	廢			○	◎
99	存	否	ソン	ピ	魂	旨	○			◎
100	尊	卑	ソン	ピ	魂	支	○	◎	○	
101	尊	父	ソン	プ	魂	麌	○	◎		
102	尊	奉	ソン	ポウ	魂	腫			○	◎
103	存	分	ゾン	ブン	魂	文		◎	○	
104	噴	飯	フン	パン	魂	願	○	◎	○	
105	奔	放	ホン	ポウ	魂	漾	○	◎		
106	門	派	モン	パ	魂	卦		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
107	門	扉	モン	ピ	魂	微	◎		○	
108	門	標	モン	ピョウ	魂	笑	○	◎	○	
109	根	本	コン	ポン	痕	混	○	◎	○	
110	安	排	アン	バイ	寒	皆	○	◎	◎	
111	安	排	アン	パイ	寒	皆	○	◎	○	
112	安	否	アン	ピ	寒	旨	○	◎	○	
113	寒	波	カン	パ	寒	戈	○	◎		
114	乾	杯	カン	パイ	寒	灰	○	◎	○	
115	乾	板	カン	パン	寒	潛	◎		○	
116	刊	本	カン	ポン	寒	混		◎	○	
117	餐	飯	サン	パン	寒	願	◎			
118	残	杯	ザン	パイ	寒	灰	○			◎
119	残	飯	ザン	パン	寒	願	○	◎		
120	残	片	ザン	ペン	寒	霰		◎		
121	素寒	貧	スカン	ピン	寒	真		◎	○	
122	単	発	タン	パツ	寒	月			○	◎
123	単	複	タン	プク	寒	屋	○	◎	○	
124	弾	片	ダン	ペン	寒	霰		◎		
125	難	破	ナン	パ	寒	過	○	◎	○	
126	完	敗	カン	パイ	桓	夬	○			◎
127	官	費	カン	ピ	桓	未		◎		
128	官	府	カン	プ	桓	麋	○		○	◎
129	完	膚	カン	プ	桓	虞	○	◎	○	
130	寬	平	カン	ピョウ	桓	庚	○			◎
131	完	璧	カン	ペキ	桓	昔	○	◎	○	
132	官	報	カン	ポウ	桓	号	○	◎	○	
133	完	本	カン	ポン	桓	混	○		○	◎
134	関	白	カン	パク	刪	陌		◎		
135	還	付	カン	プ	刪	遇			○	◎
136	姦	婦	カン	プ	刪	有	◎			
137	頌	布	ハン	プ	刪	暮		◎	○	
138	山	腹	サン	プク	山	屋	○	◎	○	
139	山	砲	サン	ポウ	山	效		◎		
140	淵	博	エン	バク	先	鐸	◎			
141	烟	浦	エン	ホ	先	姥	◎			
142	咽	哺	エン	ポ	先	暮	◎			

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
143	牽	攀	ケン	ハン	先	刪	◎			
144	堅	氷	ケン	ピョウ	先	蒸	○		○	◎
145	賢	婦	ケン	プ	先	有	○	◎	○	
146	研	北	ケン	ポク	先	徳			○	◎
147	玄	牝	ゲン	ピン	先	軫	○		◎	
148	先	輩	セン	パイ	先	隊	○	◎	○	
149	先	発	セン	パツ	先	月	○	◎		
150	先	般	セン	パン	先	刪		◎	○	
151	先	非	セン	ピ	先	微	○			◎
152	千	百	セン	ヒヤク	先	陌	○			◎
153	先	夫	セン	プ	先	虞	○			◎
154	先	負	セン	ブ	先	有			○	◎
155	千	遍	セン	ペン	先	線		◎		
156	先	方	セン	ポウ	先	陽	○			◎
157	先	鋒	セン	ポウ	先	鍾	○	◎	◎	
158	前	半	ゼン	パン	先	換	○	◎	○	
159	前	半	ゼン	ハン	先	換	○	◎	○	
160	前	非	ゼン	ピ	先	微	○	◎		
161	前	編	ゼン	ペン	先	銑		○		◎
162	前	篇	ゼン	ペン	先	仙		○		◎
163	天	辺	テン	ヘン	先	先	○	◎		
164	天	辺	テッ	ペン	先	先	○	◎		
165	天	府	テン	プ	先	麌			○	◎
166	天	符	テン	プ	先	虞	○			◎
167	天	賦	テン	プ	先	遇	○	◎	○	
168	顛	覆	テン	プク	先	屋	◎	◎		
169	天	分	テン	ブン	先	文	○	◎		
170	天	辺	テン	ペン	先	先	○	◎		
171	天	変	テン	ペン	先	線	○	◎	○	
172	填	補	テン	ポ	先	姥	◎	◎		
173	田	夫	デン	プ	先	虞	○		○	◎
174	田	圃	デン	ポ	先	姥			◎	
175	年	配	ネン	パイ	先	隊			○	◎
176	年	輩	ネン	パイ	先	隊	○	◎	○	
177	年	表	ネン	ピョウ	先	小	○	◎		
178	年	賦	ネン	プ	先	遇			○	◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
179	年	譜	ネン	プ	先	姥	○	◎	○	
180	年	俸	ネン	ポウ	先	用		◎		
181	年	報	ネン	ポウ	先	号		◎		
182	辺	鄙	ヘン	ピ	先	旨	○		◎	
183	辺	幅	ヘン	プク	先	屋	○	◎	○	
184	憐	悲	レン	ピ	先	脂		◎		
185	鉛	板	エン	バン	仙	漕	○	◎		
186	鉛	版	エン	バン	仙	漕	○			◎
187	鉛	筆	エン	ピツ	仙	質	○	◎	○	
188	鉛	粉	エン	プン	仙	吻	○			◎
189	円	墳	エン	プン	仙	吻		◎		◎
190	円	墳	エン	フン?	仙	吻		○		×
191	縁	辺	エン	ペン	仙	先	○		○	◎
192	円	本	エン	ポン	仙	混	○			◎
193	権	柄	ケン	ペイ	仙	映	○	◎	○	
194	船	舶	セン	パク	仙	陌	○		○	◎
195	宣	布	セン	プ	仙	暮	○		○	◎
196	旋	風	セン	プウ	仙	東	○			◎
197	船	腹	セン	プク	仙	屋	○	◎	○	
198	煎	餅	セン	ベイ	仙	静	◎	◎		
199	全	敗	ゼン	パイ	仙	夬	○	◎		
200	全	廢	ゼン	パイ	仙	廢	○	◎		
201	全	般	ゼン	パン	仙	刪	○	◎	○	
202	全	豹	ゼン	ピョウ	仙	效	◎			
203	全	幅	ゼン	プク	仙	屋	○	◎	○	
204	伝	播	デン	パ	仙	過	○	◎		
205	伝	票	デン	ピョウ	仙	笑	○	◎	○	
206	燃	費	ネン	ピ	仙	未			○	◎
207	偏	頗	ヘン	パ	仙	戈	◎		◎	
208	偏	僻	ヘン	ペキ	仙	昔		◎	◎	
209	偏	僻	ヘン	ピ	仙	昔		○	◎	
210	翩	翻	ヘン	ポン	仙	元	◎			
211	綿	布	メン	プ	仙	暮		◎		
212	連	敗	レン	パイ	仙	夬			○	◎
213	連	発	レン	パツ	仙	月	○	◎		
214	連	判	レン	パン	仙	換	○		○	◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
215	連	比	レン	ピ	仙	旨	○		○	◎
216	連	邦	レン	ポウ	仙	江	○	◎	○	
217	連	峰	レン	ポウ	仙	鍾	○			◎
218	緊	迫	キン	パク	軫	陌		◎	○	
219	憤	発	フン	パツ	吻	月		◎		
220	粉	壁	フン	ペキ	吻	錫				◎
221	隱	蔽	イン	ペイ	隱	祭	○	◎		
222	隱	僻	イン	ペキ	隱	昔			◎	
223	苑	圃	エン	ポ	阮	姥	◎			
224	遠	方	エン	ポウ	阮	陽	○			◎
225	反	復	ハン	プク	阮	屋	○	◎		
226	反	覆	ハン	プク	阮	屋	○	◎	○	
227	反	璧	ハン	ペキ	阮	昔	○			◎
228	反	哺	ハン	ポ	阮	暮				◎
229	返	杯	ヘン	パイ	阮	灰	○	◎	○	
230	返	報	ヘン	ポウ	阮	号		◎		
231	梱	包	コン	ポウ	混	肴	◎	◎		
232	本	復	ホン	プク	混	屋	○		○	◎
233	本	分	ホン	ブン	混	文	○	◎		
234	本	邦	ホン	ポウ	混	江	○	◎	○	
235	本	俸	ホン	ポウ	混	用		◎		
236	蛋	白	タン	パク	旱	陌		◎		
237	嬾	婦	ラン	プ	旱	有	◎			
238	順風満	帆	ジュンプウマン	パン	緩	凡			○	◎
239	短	波	タン	パ	緩	戈	○	◎		
240	短	評	タン	ピョウ	緩	庚		◎		
241	短	編	タン	ペン	緩	銑	○	◎	○	
242	短	篇	タン	ペン	緩	仙	○			◎
243	断	髮	ダン	パツ	緩	月		◎	○	
244	断	臂	ダン	ピ	緩	寘	○			◎
245	断	片	ダン	ペン	緩	霰	○	◎	◎	
246	断	編	ダン	ペン	緩	銑	○			◎
247	断	篇	ダン	ペン	緩	仙	○			◎
248	満	幅	マン	プク	緩	屋	○			◎
249	満	腹	マン	プク	緩	屋	○	◎	○	
250	卵	白	ラン	パク	緩	陌		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
251	版	本	ハン	ボン	漕	混		◎		
252	産	婦	サン	プ	産	有	○	◎	○	
253	洗	髮	セン	パツ	銑	月		◎		
254	典	範	テン	パン	銑	范	◎	◎		
255	扁	柏	ヘン	ハク	銑	陌	◎			
256	扁	平	ヘン	ペイ	銑	庚	◎	◎		
257	辮	髮	ベン	パツ	銑	月	◎			
258	浅	薄	セン	パク	獮	鐸	○		○	◎
259	選	評	セン	ピョウ	獮	庚		◎		
260	浅	膚	セン	プ	獮	虞	○			◎
261	転	覆	テン	プク	獮	屋			○	◎
262	転	蓬	テン	ポウ	獮	東	○			◎
263	軟	派	ナン	パ	獮	卦	○	◎		
264	印	判	イン	バン	震	換	○	◎	○	◎
265	印	判	イン	パン?	震	換	○	○	○	×
266	印	譜	イン	プ	震	姥	○			◎
267	信	憑	シン	ピョウ	震	蒸	○			◎
268	振	幅	シン	プク	震	屋	○	◎		
269	震	幅	シン	プク	震	屋	○	◎		
270	進	歩	シン	ポ	震	暮	○	◎	○	
271	信	奉	シン	ポウ	震	腫	○			◎
272	進	奉	シン	ポウ	震	腫			○	◎
273	陣	法	ジン	ポウ	震	乏	○			◎
274	認	否	ニン	ピ	震	旨			○	◎
275	鬢	髮	ビン	パツ	震	月	◎			
276	峻	坂	シュン	ハン	稇	阮	◎			
277	順	風	ジュン	プウ	稇	東	○	◎	○	
278	運	搬	ウン	パン	問	桓	○	◎	○	
279	運	筆	ウン	ピツ	問	質	○	◎		
280	奮	発	フン	パツ	問	月		◎		
281	近	辺	キン	ペン	欣	先	○	◎	○	
282	怨	誹	エン	ピ	願	微	◎			
283	怨	府	エン	プ	願	麌			◎	
284	怨	婦	エン	プ	願	有	◎			
285	怨	憤	エン	ブン	願	吻	◎			
286	献	杯	ケン	パイ	願	灰	○	◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
287	建	白	ケン	パク	願	陌	○	◎		
288	健	歩	ケン	ポ	願	暮	○			◎
289	憲	法	ケン	ポウ	願	乏	○	◎	○	
290	万	波	バン	パ	願	戈			○	◎
291	万	派	バン	パ	願	卦	○	◎		
292	万	般	バン	パン	願	刪	○	◎	○	
293	万	邦	バン	ポウ	願	江	○	◎	○	
294	万	宝	バン	ポウ	願	皓	○		○	◎
295	万	福	マン	プク	願	屋	○	◎	○	
296	困	弊	コン	ペイ	恩	祭	○		○	◎
297	寸	評	スン	ピョウ	恩	庚	○	◎		
298	寸	分	スン	ブン	恩	文		◎	○	
299	寸	分	スン	ブン	恩	文		◎	○	
300	寸	歩	スン	ポ	恩	暮	○			◎
301	寸	法	スン	ポウ	恩	乏		◎		
302	遁	避	トン	ヒ	恩	寘	◎			
303	頓	服	トン	プク	恩	屋		◎		
304	論	破	ロン	パ	恩	過	○	◎	○	
305	論	評	ロン	ピョウ	恩	庚	○	◎		
306	論	法	ロン	ポウ	恩	乏	○	◎	○	
307	論	鋒	ロン	ポウ	恩	鍾	○	◎		
308	按	配	アン	バイ	翰	隊		◎		
309	案	分	アン	ブン	翰	文			○	◎
310	看	破	カン	パ	翰	過	○	◎	○	
311	看	板	カン	バン	翰	潛	○	◎	○	
312	漢	方	カン	ポウ	翰	陽			○	◎
313	岸	壁	ガン	ペキ	翰	錫		◎		
314	岸	辺	ガン	ペン	翰	先		◎		
315	散	髮	サン	パツ	翰	月	○	◎	○	
316	贊	否	サン	ピ	翰	旨	○	◎	○	
317	散	票	サン	ピョウ	翰	笑	○	◎		
318	散	布	サン	プ	翰	暮	○	◎	○	
319	散	歩	サン	ポ	翰	暮	○			◎
320	算	法	サン	ポウ	換	乏		◎		
321	半	臂	ハン	ピ	換	寘	○			◎
322	漫	筆	マン	ピツ	換	質		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
323	漫	評	マン	ピョウ	換	庚		◎		
324	漫	歩	マン	ポ	換	暮	○	◎		
325	乱	杯	ラン	パイ	換	灰	○			◎
326	乱	発	ラン	パツ	換	月	○	◎		
327	乱	髮	ラン	パツ	換	月	○	◎		
328	乱	費	ラン	ピ	換	未	○	◎		
329	乱	筆	ラン	ピツ	換	質	○	◎	○	
330	腕	白	ワン	パク	換	陌		◎	○	
331	雁	報	ガン	ポウ	諫	号	◎			
332	燕	賓	エン	ヒン	霰	真	◎			
333	現	品	ゲン	ピン	霰	寢		◎		
334	電	波	デン	パ	霰	戈		◎		
335	電	髮	デン	パツ	霰	月		◎		
336	澱	粉	デン	プン	霰	吻		◎		
337	電	報	デン	ポウ	霰	号	○	◎		
338	練	兵	レン	ペイ	霰	庚	○	◎		
339	絹	布	ケン	プ	線	暮	○	◎		
340	戦	敗	セン	パイ	線	夬			○	◎
341	戦	犯	セン	パン	線	范		◎		
342	戦	怖	セン	プ	線	暮	○			◎
343	戦	法	セン	ポウ	線	乏	○	◎		
344	便	秘	ベン	ピ	線	至		◎	○	
345	便	法	ベン	ポウ	線	乏	○	◎		
346	面	皮	ペン	ピ	線	支	○			◎

喉内鼻音十八行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
1	窮	迫	キュウ	ハク	東	陌		◎	○	
2	工	夫	ク	フウ	東	虞	◎	◎	○	
3	空	白	クウ	ハク	東	陌			○	◎
4	空	費	クウ	ヒ	東	未	○	◎		
5	空	腹	クウ	フク	東	屋	○	◎		
6	空	砲	クウ	ホウ	東	效	○	◎		
7	紅	白	コウ	ハク	東	陌		◎	○	
8	公	判	コウ	ハン	東	換	○	◎	○	
9	洪	範	コウ	ハン	東	范	○			◎
10	公	費	コウ	ヒ	東	未	○	◎		
11	公	表	コウ	ヒョウ	東	小	○	◎		
12	工	夫	コウ	フウ	東	虞	◎	◎	○	
13	公	布	コウ	フ	東	暮	○	◎	○	
14	紅	粉	コウ	フン	東	吻	○			◎
15	公	憤	コウ	フン	東	吻	○	◎		
16	公	平	コウ	ヘイ	東	庚	○	◎	○	
17	公	法	コウ	ホウ	東	乏		◎		
18	公	報	コウ	ホウ	東	号	○	◎	○	
19	充	分	ジュウ	ブン	東	文		◎	○	
20	崇	拝	スウ	ハイ	東	怪	○	◎	○	
21	中	波	チュウ	ハ	東	戈		◎		
22	中	風	チュウ	フウ	東	東	○	◎		
23	中	風	チュウ	ブ	東	東	○	◎		
24	中	風	チュウ	ブウ	東	東	○	◎		
25	中	腹	チュウ	フク	東	屋	○	◎	○	
26	通	風	ツウ	フウ	東	東		◎		
27	通	分	ツウ	ブン	東	文		◎	○	
28	通	弊	ツウ	ヘイ	東	祭			○	◎
29	通	宝	ツウ	ホウ	東	皓	○		○	◎
30	通	報	ツウ	ホウ	東	号	○		○	◎
31	東	風	トウ	フウ	東	東		◎		
32	東	北	トウ	ホク	東	徳		◎		
33	同	輩	ドウ	ハイ	東	隊	○	◎	○	
34	銅	牌	ドウ	ハイ	東	佳		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
35	同	伴	ドウ	ハン	東	緩	○	◎	○	
36	銅	板	ドウ	バン	東	漕	○			◎
37	銅	版	ドウ	ハン	東	漕	○	◎		
38	同	封	ドウ	フウ	東	鍾		◎		
39	同	腹	ドウ	フク	東	屋	○		○	◎
40	同	胞	ドウ	ホウ	東	肴	○	◎	○	
41	風	波	フウ	ハ	東	戈	○	◎	○	
42	風	伯	フウ	ハク	東	陌	○	◎		
43	風	帆	フウ	ハン	東	凡	○		○	◎
44	風	評	フウ	ヒョウ	東	庚	○	◎	○	
45	豊	富	ホウ	フ	東	宥	○	◎	○	
46	蒙	蔽	モウ	ヘイ	東	祭			◎	
47	雄	藩	ユウ	ハン	東	元	○			◎
48	雄	飛	ユウ	ヒ	東	微	○	◎	○	
49	雄	筆	ユウ	ヒツ	東	質	○			◎
50	雄	編	ユウ	ヘン	東	銑	○			◎
51	雄	篇	ユウ	ヘン	東	仙	○			◎
52	宗	派	シュウ	ハ	冬	卦	○	◎	○	
53	農	夫	ノウ	フ	冬	虞	○	◎	○	
54	農	婦	ノウ	フ	冬	有		◎		
55	農	圃	ノウ	ホ	冬	姥	○			◎
56	胸	腹	キョウ	フク	鍾	屋	○			◎
57	凶	変	キョウ	ヘン	鍾	線	○	◎	○	
58	凶	報	キョウ	ホウ	鍾	号	○	◎		
59	松	柏	ショウ	ハク	鍾	陌	○	◎		
60	松	風	ショウ	フウ	鍾	東		◎		
61	壅	蔽	ヨウ	ヘイ	鍾	祭	◎			
62	江	畔	コウ	ハン	江	換	○			◎
63	江	北	コウ	ホク	江	徳	○			◎
64	双	発	ソウ	ハツ	江	月	○	◎	○	
65	双	幅	ソウ	フク	江	屋			○	◎
66	双	璧	ソウ	ヘキ	江	昔	○	◎	◎	
67	窓	辺	ソウ	ヘン	江	先		◎		
68	双	方	ソウ	ホウ	江	陽	○		○	◎
69	双	峰	ソウ	ホウ	江	鍾			○	◎
70	王	妃	オウ	ヒ	陽	微	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
71	強	迫	キョウ	ハク	陽	陌	○	◎	○	
72	狂	風	キョウ	フウ	陽	東		◎		
73	強	風	キョウ	フウ	陽	東		◎		
74	僵	斃	キョウ	ヘイ	陽	祭	◎			
75	狂	奔	キョウ	ホン	陽	魂	○	◎	○	
76	香	粉	コウ	フン	陽	吻	○			◎
77	強	飯	ゴウ	ハン	陽	願	○	◎		
78	四方	拝	シホウ	ハイ	陽	怪			○	◎
79	商	舶	ショウ	ハク	陽	陌	○			◎
80	商	販	ショウ	ハン	陽	願	○			◎
81	商	標	ショウ	ヒョウ	陽	笑		◎	○	
82	商	品	ショウ	ヒン	陽	寢	○	◎	○	
83	祥	符	ショウ	フ	陽	虞	○		○	◎
84	祥	福	ショウ	フク	陽	屋	○			◎
85	牆	壁	ショウ	ヘキ	陽	錫	◎			
86	商	舗	ショウ	ホ	陽	模		◎	○	
87	商	法	ショウ	ホウ	陽	乏	○	◎		
88	詳	報	ショウ	ホウ	陽	号		◎	○	
89	常	服	ジョウ	フク	陽	屋	○	◎		
90	常	法	ジョウ	ホウ	陽	乏		◎		
91	孀	婦	ソウ	フ	陽	有	◎			
92	長	髮	チョウ	ハツ	陽	月		◎	○	
93	長	編	チョウ	ヘン	陽	銑	○	◎	○	
94	長	篇	チョウ	ヘン	陽	仙	○		○	◎
95	張	本	チョウ	ホン	陽	混		◎		
96	方	法	ホウ	ホウ	陽	乏	○	◎		
97	防	犯	ボウ	ハン	陽	范		◎		
98	防	風	ボウ	フウ	陽	東		◎		
99	洋	品	ヨウ	ヒン	陽	寢		◎		
100	洋	風	ヨウ	フウ	陽	東		◎		
101	洋	服	ヨウ	フク	陽	屋		◎		
102	良	否	リョウ	ヒ	陽	旨	○			◎
103	涼	風	リョウ	フウ	陽	東	○	◎		
104	光	背	コウ	ハイ	唐	隊			○	◎
105	荒	廢	コウ	ハイ	唐	廢	○	◎		
106	光	被	コウ	ヒ	唐	寘	○	◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
107	鋼	筆	コウ	ヒツ	唐	質		◎		
108	惶	怖	コウ	フ	唐	暮	◎			
109	岡	阜	コウ	フ	唐	有	◎			
110	光	風	コウ	フウ	唐	東	○	◎		
111	光	復	コウ	フク	唐	屋			○	◎
112	荒	墳	コウ	フン	唐	吻	○			◎
113	荒	僻	コウ	ヘキ	唐	昔			◎	
114	荒	圃	コウ	ホ	唐	姥			◎	
115	剛	腹	ゴウ	フク	唐	屋			○	◎
116	臧	否	ソウ	ヒ	唐	旨	○		◎	
117	倉	府	ソウ	フ	唐	麩			○	◎
118	臧	否	ゾウ	ヒ	唐	旨	◎		○	
119	当	否	トウ	ヒ	唐	旨	○	◎		
120	当	百	トウ	ビヤク	唐	陌	○			◎
121	糖	分	トウ	ブン	唐	文		◎		
122	当	分	トウ	ブン	唐	文			○	◎
123	旁	薄	ホウ	ハク	唐	鐸	◎			
124	横	柄	オウ	ヘイ	庚	映		◎		
125	驚	怖	キョウ	フ	庚	暮	○	◎	○	
126	驚	奔	キョウ	ホン	庚	魂	○	◎		
127	京	浜	ケイ	ヒン	庚	真	○		◎	
128	鯨	波	ゲイ	ハ	庚	戈			○	◎
129	迎	賓	ゲイ	ヒン	庚	真			○	◎
130	坑	夫	コウ	フ	庚	虞	○	◎	○	
131	行	歩	コウ	ホ	庚	暮	○			◎
132	生	平	セイ	ヘイ	庚	庚			○	◎
133	単行	本	タンコウ	ボン	庚	混		◎		
134	評	判	ヒョウ	バン	庚	換		◎	○	
135	平	板	ヘイ	バン	庚	潛	○	◎	○	
136	平	伏	ヘイ	フク	庚	屋	○	◎	○	
137	平	服	ヘイ	フク	庚	屋	○	◎		
138	平	復	ヘイ	フク	庚	屋		◎		
139	平	方	ヘイ	ホウ	庚	陽	○	◎	○	
140	兵	法	ヘイ	ホウ	庚	乏	○	◎	○	
141	明	法	ミョウ	ボウ	庚	乏	○			◎
142	明	白	メイ	ハク	庚	陌	○		○	◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
143	明	法	メイ	ホウ	庚	乏	○			◎
144	軽	輩	ケイ	ハイ	清	隊			○	◎
145	軽	薄	ケイ	ハク	清	鐸	○	◎	○	
146	軽	犯	ケイ	ハン	清	范	○			◎
147	軽	浮	ケイ	フ	清	尤	○			◎
148	傾	覆	ケイ	フク	清	屋	○	◎		
149	情	夫	ジョウ	フ	清	虞		◎		
150	城	府	ジョウ	フ	清	慶			○	◎
151	情	婦	ジョウ	フ	清	有	○	◎		
152	城	壁	ジョウ	ヘキ	清	錫		◎	○	
153	情	報	ジョウ	ホウ	清	号		◎	○	
154	成	敗	セイ	ハイ	清	夬		◎	○	
155	成	敗	セイ	バイ	清	夬		◎	○	
156	精	白	セイ	ハク	清	陌	○			◎
157	征	帆	セイ	ハン	清	凡	○		○	◎
158	成	否	セイ	ヒ	清	旨	○	◎	○	
159	清	貧	セイ	ヒン	清	真	○	◎		
160	征	夫	セイ	フ	清	虞	○			◎
161	清	風	セイ	フウ	清	東	○	◎	○	
162	征	服	セイ	フク	清	屋	○	◎	○	
163	成	分	セイ	ブン	清	文	○	◎		
164	清	平	セイ	ヘイ	清	庚	○		○	◎
165	精	兵	セイ	ヘイ	清	庚	○	◎	○	
166	精	兵	セイ	ビョウ	清	庚	○	◎	○	
167	旌	褒	セイ	ホウ	清	豪	◎			
168	貞	婦	テイ	フ	清	有	○	◎		
169	名	品	メイ	ヒン	清	寢			○	
170	名	分	メイ	ブン	清	文	○	◎		
171	名	宝	メイ	ホウ	清	皓	○	◎	○	
172	経	費	ケイ	ヒ	青	未	○	◎	○	
173	刑	法	ケイ	ホウ	青	乏	○	◎		
174	青	票	セイ	ヒョウ	青	笑		◎		
175	停	泊	テイ	ハク	青	鐸	○	◎	○	
176	屏	風	ビョウ	ブ	青	東		◎		
177	萍	漂	ヘイ	ヒョウ	青	笑	◎			
178	萍	浮	ヘイ	フ	青	尤	◎			

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
179	屏	風	ヘイ	フウ	青	東		◎		
180	冥	府	メイ	フ	青	慶	◎			
181	冥	福	メイ	フク	青	屋	◎	◎		
182	零	敗	レイ	ハイ	青	夬		◎		
183	靈	符	レイ	フ	青	虞			○	◎
184	靈	峰	レイ	ホウ	青	鍾	○	◎	○	
185	承	服	ショウ	フク	蒸	屋		◎	○	
186	蒸	発	ジョウ	ハツ	蒸	月	○	◎	○	
187	徵	発	チョウ	ハツ	蒸	月	○	◎		
188	徵	兵	チョウ	ヘイ	蒸	庚	○	◎	○	
189	徵	聘	チョウ	ヘイ	蒸	勁	○			◎
190	陵	犯	リョウ	ハン	蒸	范	○			◎
191	弘	播	コウ	ハ	登	過	◎			
192	弘	報	コウ	ホウ	登	号		◎		
193	僧	兵	ソウ	ヘイ	登	庚		◎		
194	増	補	ゾウ	ホ	登	姥			○	◎
195	増	俸	ゾウ	ホウ	登	用	○	◎		
196	登	攀	トウ	ハン	登	刪	○	◎	◎	
197	騰	本	トウ	ホン	登	混	○	◎		
198	能	筆	ノウ	ヒツ	登	質	○	◎		
199	朋	輩	ホウ	バイ	登	隊		◎		
200	拱	把	キョウ	ハ	腫	馬	◎			
201	恐	迫	キョウ	ハク	腫	陌		◎		
202	恐	怖	キョウ	フ	腫	暮	○	◎	○	
203	種	圃	シュ	ホ	腫	姥			◎	
204	冗	費	ジョウ	ヒ	腫	未	○	◎	○	
205	寵	褒	チョウ	ホウ	腫	豪	◎			
206	捧	腹	ホウ	フク	腫	屋	◎			
207	奉	幣	ホウ	ヘイ	腫	祭	○		○	◎
208	勇	憤	ユウ	フン	腫	吻	○			◎
209	講	評	コウ	ヒョウ	講	庚			○	◎
210	往	反	オウ	ハン	養	阮	○			◎
211	往	反	オウ	ヘン	養	阮	○			◎
212	往	復	オウ	フク	養	屋	○	◎	○	
213	往	返	オウ	ヘン	養	阮	○	◎		
214	往	訪	オウ	ホウ	養	漾	○	◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
215	賞	杯	ショウ	ハイ	養	灰	○	◎	○	
216	賞	牌	ショウ	ハイ	養	佳		◎		
217	賞	品	ショウ	ヒン	養	寢		◎		
218	攘	臂	ジョウ	ヒ	養	眞	◎			
219	丈	夫	ジョウ	フ	養	虞	○			◎
220	丈	夫	ジョウ	ブ	養	虞	○			◎
221	大丈	夫	ダイジョウ	ブ	養	虞		◎		
222	養	父	ヨウ	フ	養	麌	○	◎	◎	
223	養	分	ヨウ	ブン	養	文	○	◎		
224	広	博	コウ	ハク	蕩	鐸	○		○	◎
225	広	範	コウ	ハン	蕩	范			○	◎
226	広	報	コウ	ホウ	蕩	号			○	◎
227	党	派	トウ	ハ	蕩	卦	○	◎	○	
228	景	品	ケイ	ヒン	梗	寢	○	◎		
229	景	福	ケイ	フク	梗	屋	○			◎
230	警	報	ケイ	ホウ	梗	号	○	◎	○	
231	冷	評	レイ	ヒョウ	梗	庚		◎		
232	幸	福	コウ	フク	耿	屋	○	◎		
233	領	分	リョウ	ブン	静	文		◎		
234	鼎	沸	テイ	フツ	迥	未	◎			
235	等	輩	トウ	ハイ	等	隊	○			◎
236	等	比	トウ	ヒ	等	旨	○	◎	○	
237	等	分	トウ	ブン	等	文	○	◎		
238	貢	賦	コウ	フ	送	遇	○			◎
239	貢	幣	コウ	ヘイ	送	祭			◎	
240	銃	砲	ジュウ	ホウ	送	效		◎	○	
241	送	付	ソウ	フ	送	遇	○	◎		
242	送	本	ソウ	ホン	送	混	○			◎
243	痛	憤	ツウ	フン	送	吻	○			◎
244	弄	筆	ロウ	ヒツ	送	質	◎	◎		
245	共	犯	キョウ	ハン	用	范	○	◎	○	
246	供	奉	グ	ブ	用	腫	◎		○	
247	重	犯	ジュウ	ハン	用	范		◎	○	
248	重	版	ジュウ	ハン	用	潛	○	◎		
249	重	宝	ジュウ	ホウ	用	皓	○	◎	○	
250	重	複	チョウ	フク	用	屋	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
251	重	幣	チョウ	ヘイ	用	祭	○		◎	
252	重	宝	チョウ	ホウ	用	皓	○	◎	○	
253	用	兵	ヨウ	ヘイ	用	庚			○	×
254	用	法	ヨウ	ホウ	用	乏	○	◎		
255	降	伏	コウ	フク	絳	屋	○	◎	○	
256	降	服	コウ	フク	絳	屋	○	◎		
257	向	背	コウ	ハイ	漾	隊	○		○	◎
258	相	伴	ショウ	バン	漾	緩	○	◎	○	
259	尚	父	ショウ	ホ	漾	麌			◎	
260	将	兵	ショウ	ヘイ	漾	庚	○			◎
261	障	蔽	ショウ	ヘイ	漾	祭	○			◎
262	障	壁	ショウ	ヘキ	漾	錫		◎	○	
263	上	表	ジョウ	ヒョウ	漾	小	○	◎	○	
264	上	品	ジョウ	ヒン	漾	寢	○	◎	○	
265	上	品	ジョウ	ボン	漾	寢	○	◎	○	
266	讓	步	ジョウ	ホ	漾	暮		◎	○	
267	上	方	ジョウ	ホウ	漾	陽	○			◎
268	壯	夫	ソウ	フ	漾	虞	○			◎
269	放	屁	ホウ	ヒ	漾	至	○		◎	
270	放	僻	ホウ	ヘキ	漾	昔		◎		
271	謗	排	ボウ	ハイ	宕	皆	◎			
272	浪	費	ロウ	ヒ	宕	未	○	◎	○	
273	競	歩	キョウ	ホ	映	暮	○	◎		
274	競	奔	キョウ	ホン	映	魂			○	◎
275	敬	白	ケイ	ハク	映	陌	○	◎		
276	敬	服	ケイ	フク	映	屋	○	◎	○	
277	敬	復	ケイ	フク	映	屋		◎	○	
278	慶	福	ケイ	フク	映	屋	○		○	◎
279	硬	派	コウ	ハ	諍	卦	○	◎	○	
280	硬	筆	コウ	ヒツ	諍	質		◎		
281	性	分	ショウ	ブン	勁	文	○	◎	○	
282	浄	福	ジョウ	フク	勁	屋	○			◎
283	正	妃	セイ	ヒ	勁	微	○			◎
284	正	否	セイ	ヒ	勁	旨	○	◎		
285	政	府	セイ	フ	勁	麌	○	◎	○	
286	正	副	セイ	フク	勁	屋	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
287	政	柄	セイ	ヘイ	勁	映	○			◎
288	性	癖	セイ	ヘキ	勁	昔	○	◎	○	
289	性	僻	セイ	ヘキ	勁	昔			◎	
290	政	変	セイ	ヘン	勁	線	○	◎	○	
291	正	法	セイ	ホウ	勁	乏			○	◎
292	併	発	ヘイ	ハツ	勁	月		◎		
293	聘	幣	ヘイ	ヘイ	勁	祭	◎			
294	定	評	テイ	ヒョウ	徑	庚	○	◎	○	
295	定	本	テイ	ホン	徑	混		◎	○	
296	応	分	オウ	ブン	證	文		◎	○	
297	応	変	オウ	ヘン	證	線	○	◎		
298	応	報	オウ	ホウ	證	号	○	◎	○	
299	興	廢	コウ	ハイ	證	廢	○	◎		
300	興	復	コウ	フク	證	屋	○			◎
301	興	奮	コウ	フン	證	問	○	◎	○	
302	勝	敗	ショウ	ハイ	證	夬	○	◎	○	
303	証	票	ショウ	ヒョウ	證	笑		◎	○	
304	勝	負	ショウ	ブ	證	有	○	◎		
305	勝	報	ショウ	ホウ	證	号		◎		
306	孕	婦	ヨウ	フ	證	有	◎			

唇内入声音+ハ行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
1	急	迫	キュウ	ハク	緝	陌	○	◎	○	
2	急	坂	キュウ	ハン	緝	阮	○	◎		
3	給	費	キュウ	ヒ	緝	未	○	◎	○	
4	給	付	キュウ	フ	緝	遇	○	◎	○	
5	急	変	キュウ	ヘン	緝	線			○	◎
6	急	報	キュウ	ホウ	緝	号	○	◎		
7	五十	歩	ゴジツ	ポ	緝	暮	○	◎		
8	執	筆	シツ	ピツ	緝	質	○	◎	○	
9	湿	布	シツ	プ	緝	暮	○	◎	○	
10	十	分	ジツ	ブン	緝	文	○			×
11	十	方	ジツ	ポウ	緝	陽	○			◎
12	集	配	シュウ	ハイ	緝	隊		◎		
13	襲	封	シュウ	ホウ	緝	鍾	○		◎	
14	習	癖	シュウ	ヘキ	緝	昔	○	◎	○	
15	十	分	ジュウ	ブン	緝	文	○	◎		◎
16	入	費	ニュウ	ヒ	緝	未	○	◎		
17	立	腹	リツ	プク	緝	屋	○	◎	○	
18	立	方	リツ	ポウ	緝	陽		◎		
19	立	法	リツ	ポウ	緝	乏	○	◎	○	
20	合	璧	カッ	ペキ	合	昔	○			◎
21	合	評	ガッ	ピョウ	合	庚	○	◎	○	
22	合	併	ガッ	ペイ	合	勁	○	◎	○	
23	合	邦	ガッ	ポウ	合	江		◎		
24	合	抱	ゴウ	ホウ	合	皓	○			◎
25	合	法	ゴウ	ホウ	合	乏	○	◎	○	
26	雑	費	ザッ	ピ	合	未		◎	○	
27	答	拝	タッ	パイ	合	怪	○			◎
28	踏	破	トウ	ハ	合	過	○	◎		
29	答	拝	トウ	ハイ	合	怪	○			◎
30	納	付	ノウ	フ	合	遇		◎		
31	懾	怖	ショウ	フ	葉	暮	◎			
32	妾	腹	ショウ	フク	葉	屋	◎	◎	◎	
33	接	伴	セツ	パン	葉	緩	○			◎
34	接	吻	セツ	ブン	葉	吻	○		◎	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
35	妄	評	ボウ	ヒョウ	葉	庚		◎		
36	妄	評	モウ	ヒョウ	葉	庚		◎		
37	獵	夫	リョウ	フ	葉	虞		◎		
38	凹	版	オウ	ハン	洽	潛		◎	○	
39	圧	迫	アツ	パク	狎	陌	○	◎	○	
40	甲	板	カン	パン	狎	潛	○	◎	○	
41	甲	板	コウ	ハン	狎	潛	○	◎	○	
42	甲	兵	コウ	ヘイ	狎	庚		◎	○	
43	脅	迫	キョウ	ハク	業	陌	○	◎	○	
44	法	被	ハツ	ピ	乏	寘	◎	◎	○	

舌内入声音+ハ行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
1	一	把	イツ	パ	質	馬	○		◎	
2	一	派	イツ	パ	質	卦	○	◎	○	
3	一	杯	イツ	パイ	質	灰	○			◎
4	一	敗	イツ	パイ	質	夬				◎
5	一	拍	イツ	パク	質	陌				◎
6	一	泊	イツ	パク	質	鐸				◎
7	一	発	イツ	パツ	質	月				◎
8	一	反	イツ	タン	質	阮			◎	
9	一	半	イツ	パン	質	換	○	◎	○	
10	一	班	イツ	パン	質	刪				◎
11	一	般	イツ	パン	質	刪	○		○	◎
12	一	斑	イツ	パン	質	刪	○			◎
13	一	匹	イツ	ピキ	質	質				◎
14	一	筆	イツ	ピツ	質	質		◎		
15	一	品	イツ	ピン	質	寢	○		○	◎
16	逸	品	イツ	ピン	質	寢	○	◎	○	
17	一	夫	イツ	プ	質	虞	○			◎
18	一	服	イツ	プク	質	屋		◎		
19	一	幅	イツ	プク	質	屋			○	◎
20	一	分	イツ	ブン	質	文				×
21	一	片	イツ	ペン	質	霰	○	◎	○	
22	一	変	イツ	ペン	質	線	○			◎
23	一	遍	イツ	ペン	質	線				◎
24	一	編	イツ	ペン	質	銑		○		◎
25	一	方	イツ	ポウ	質	陽	○			◎
26	一	法	イツ	ポウ	質	乏				◎
27	一	本	イツ	ポン	質	混				◎
28	溢	浮	イツ	フ	質	尤	◎			
29	間一	髮	カンイツ	パツ	質	月	○	◎		
30	危機一	髮	キキイツ	パツ	質	月	○	◎	○	
31	吉	方	キツ	ポウ	質	陽				◎
32	吉	報	キツ	ポウ	質	号	○	◎	○	
33	七	篇	シチ	ヘン	質	仙		◎		×
34	七	宝	シチ	ホウ	質	皓	○		○	◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
35	失	敗	シツ	パイ	質	夬	○	◎	○	
36	失	費	シツ	ピ	質	未		◎		
37	疾	風	シツ	プウ	質	東		◎	○	
38	七	宝	シツ	ポウ	質	皓	○		○	◎
39	実	費	ジツ	ピ	質	未		◎	○	
40	日	報	ニツ	ポウ	質	号	○			◎
41	匹	夫	ヒツ	プ	質	虞	◎	◎	○	
42	匹	婦	ヒツ	プ	質	有	○	◎	○	
43	筆	法	ヒツ	ポウ	質	乏	○	◎	○	
44	筆	鋒	ヒツ	ポウ	質	鍾	○			◎
45	畢	沸	ヒツ	フツ	質	未		◎		
46	密	封	ミツ	プウ	質	鍾		◎	○	
47	密	閉	ミツ	ペイ	質	霽	○	◎	○	
48	出	発	シュツ	パツ	術	月	○	◎	○	
49	出	帆	シュツ	パン	術	凡	○	◎	○	
50	出	版	シュツ	パン	術	潛	○	◎	○	
51	出	費	シュツ	ピ	術	未	○	◎		
52	出	品	シュツ	ピン	術	寢			○	◎
53	出	兵	シュツ	ペイ	術	庚			○	◎
54	出	奔	シュツ	ポン	術	魂	○	◎	○	
55	律	法	リツ	ポウ	術	乏	○			◎
56	櫛	比	シツ	ピ	櫛	旨	○			◎
57	鬱	憤	ウツ	プン	物	吻	◎	◎		
58	屈	伏	クツ	プク	物	屋	○	◎	○	
59	屈	服	クツ	プク	物	屋	○	◎		
60	物	品	ブツ	ピン	物	寢	○	◎		
61	仏	法	ブツ	ポウ	物	乏	○	◎		
62	月	評	ゲツ	ピョウ	月	庚		◎		
63	月	賦	ゲツ	プ	月	遇	○	◎	○	
64	月	餅	ゲツ	ペイ	月	静			◎	
65	月	俸	ゲツ	ポウ	月	用	○	◎	○	
66	日進月	歩	ニッシンゲツ	ポ	月	暮	○	◎	○	
67	発	表	ハツ	ピョウ	月	小	○	◎		
68	発	布	ハツ	プ	月	暮	○	◎	○	
69	発	憤	ハツ	プン	月	吻	○	◎	○	
70	発	奮	ハツ	プン	月	問	○	◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
71	罰	杯	バッ	パイ	月	灰		◎		
72	罰	俸	バッ	ポウ	月	用	○		○	◎
73	骨	牌	コッ	パイ	没	佳	○		◎	
74	骨	粉	コッ	ブン	没	吻		◎		
75	突	破	トッ	パ	没	過	○	◎		
76	突	発	トッ	パツ	没	月	○	◎		
77	凸	版	トッ	パン	没	漕		◎	○	
78	突	飛	トッ	ピ	没	微	○	◎	○	
79	突	風	トッ	プウ	没	東		◎	○	
80	勃	発	ボッ	パツ	没	月		◎		
81	喝	破	カッ	パ	曷	過		◎		
82	割	腹	カッ	プク	曷	屋	○	◎	○	
83	達	筆	タッ	ピツ	曷	質	○	◎	○	
84	活	発	カッ	パツ	末	月		◎		
85	活	版	カッ	パン	末	漕		◎	○	
86	闊	歩	カッ	ポ	末	暮	◎	◎		
87	脱	藩	ダッ	パン	末	元	○			◎
88	脱	皮	ダッ	ピ	末	支	○	◎	○	
89	脱	糞	ダッ	ブン	末	問	○	◎		
90	末	派	マッ	パ	末	卦	○			◎
91	末	班	マッ	パン	末	刪	○			◎
92	末	筆	マッ	ピツ	末	質	○	◎		
93	末	法	マッ	ポウ	末	乏	○	◎		
94	嘘八	百	ウソハツ	ピャク	黠	陌		◎		
95	八	方	ハツ	ポウ	黠	陽	○	◎		
96	切	符	キッ	プ	屑	虞	○	◎		
97	潔	白	ケッ	パク	屑	陌	○	◎	○	
98	結	髮	ケッ	パツ	屑	月	○		○	◎
99	血	判	ケッ	パン	屑	換	○	◎	○	
100	結	氷	ケッ	ピョウ	屑	蒸	○	◎	○	
101	潔	癖	ケッ	ペキ	屑	昔	○	◎	○	
102	切	迫	セッ	パク	屑	陌	○	◎	○	
103	節	婦	セッ	プ	屑	有			○	◎
104	切	腹	セッ	プク	屑	屋	○		○	◎
105	節	分	セツ	ブン	屑	文		◎		
106	鉄	板	テッ	パン	屑	漕	○	◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
107	鉄	筆	テツ	ピツ	屑	質	○	◎		
108	鉄	壁	テツ	ペキ	屑	錫	○	◎	○	
109	鉄	砲	テツ	ポウ	屑	效		◎	○	
110	閱	兵	エツ	ペイ	薛	庚		◎	○	
111	折	伏	シヤク	ブク	薛	屋	◎	◎	○	
112	説	破	セツ	パ	薛	過	○	◎		
113	折	半	セツ	パン	薛	換	○	◎	○	
114	拙	筆	セツ	ピツ	薛	質	○			◎
115	雪	膚	セツ	プ	薛	虞	○			◎
116	説	伏	セツ	プク	薛	屋		◎		
117	雪	片	セツ	ペン	薛	霰			○	◎
118	説	法	セツ	ポウ	薛	乏	○	◎		
119	絶	版	ゼツ	パン	薛	潛		◎	○	
120	絶	筆	ゼツ	ピツ	薛	質	○	◎	○	
121	絶	品	ゼツ	ピン	薛	寢	○	◎	○	
122	絶	壁	ゼツ	ペキ	薛	錫		◎	○	
123	撤	廢	テツ	パイ	薛	廢	○	◎		
124	哲	夫	テツ	プ	薛	虞	○	◎		
125	撤	兵	テツ	ペイ	薛	庚			○	◎
126	別	派	ベツ	パ	薛	卦	○	◎	○	
127	滅	法	メツ	ポウ	薛	乏	○			◎
128	劣	敗	レツ	パイ	薛	夬			○	◎
129	列	藩	レツ	パン	薛	元	○		○	◎
130	烈	風	レツ	プウ	薛	東	○	◎		

喉内入声音+ハ行子音

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
1	菊	判	キク	バン	屋	換	○			◎
2	谷	風	コク	フウ	屋	東	○	◎		
3	祝	杯	シュク	ハイ	屋	灰		◎	○	
4	宿	泊	シュク	ハク	屋	鐸		◎	○	
5	叔	父	シュク	フ	屋	麌	◎	◎		
6	祝	福	シュク	フク	屋	屋	○	◎	○	
7	宿	弊	シュク	ヘイ	屋	祭	○		○	◎
8	速	歩	ソク	ホ	屋	暮	○			◎
9	速	報	ソク	ホウ	屋	号		◎		
10	族	譜	ゾク	フ	屋	姥	○			◎
11	竹	帛	チク	ハク	屋	陌	○			◎
12	竹	柏	チク	ハク	屋	陌	○			◎
13	読	破	ドク	ハ	屋	過	○	◎	○	
14	独	白	ドク	ハク	屋	陌	○	◎	○	
15	読	本	ドク	ホン	屋	混	○	◎		
16	独	歩	ドッ	ポ	屋	暮	○			◎
17	肉	迫	ニク	ハク	屋	陌	○	◎		
18	肉	薄	ニク	ハク	屋	鐸	○	◎	○	
19	肉	筆	ニク	ヒツ	屋	質		◎	○	
20	伏	拝	フク	ハイ	屋	怪	○		○	◎
21	腹	背	フク	ハイ	屋	隊	○		○	◎
22	伏	兵	フク	ヘイ	屋	庚	○	◎	○	
23	木	杯	モク	ハイ	屋	灰	○			◎
24	木	牌	モク	ハイ	屋	佳	○	◎		
25	木	版	モク	ハン	屋	潛	○	◎	○	
26	目	標	モク	ヒョウ	屋	笑	○	◎	○	
27	木	片	モク	ヘン	屋	霰	○	◎		
28	陸	風	リク	フウ	屋	東		◎		
29	六	腑	ロク	フ	屋	麌	○	◎	○	
30	六	腑	ロッ	プ	屋	麌	○	◎	◎	
31	六	法	ロッ	ポウ	屋	乏	○	◎	○	
32	告	白	コク	ハク	沃	陌	○	◎	○	
33	酷	薄	コク	ハク	沃	鐸			○	◎
34	告	発	コク	ハツ	沃	月		◎	○	

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
35	酷	評	コク	ヒョウ	沃	庚	○	◎	○	
36	毒	婦	ドク	フ	沃	有	○		○	◎
37	沃	沸	ヨク	フツ	沃	未	◎			
38	曲	庇	キョク	ヒ	燭	至	○			◎
39	曲	筆	キョク	ヒツ	燭	質	○	◎		
40	曲	譜	キョク	フ	燭	姥	○			◎
41	曲	阜	キョク	フ	燭	有	○			◎
42	曲	浦	キョク	ホ	燭	姥	○		○	◎
43	玉	杯	ギョク	ハイ	燭	灰	○	◎	○	
44	玉	帛	ギョク	ハク	燭	陌	○			◎
45	触	発	ショク	ハツ	燭	月		◎		
46	趨	班	スウ	ハン	燭	刪	◎			
47	促	迫	ソク	ハク	燭	陌		◎	○	
48	束	髮	ソク	ハツ	燭	月	○	◎		
49	俗	輩	ゾク	ハイ	燭	隊		◎		
50	続	発	ゾク	ハツ	燭	月	○	◎		
51	俗	評	ゾク	ヒョウ	燭	庚		◎		
52	続	編	ゾク	ヘン	燭	銑		◎		
53	緑	肥	リョク	ヒ	燭	微		◎		
54	楽	府	ガク	フ	覚	麌	◎		○	
55	確	保	カク	ホ	覚	皓	○	◎		
56	学	派	ガク	ハ	覚	卦	○	◎	○	
57	学	費	ガク	ヒ	覚	未	○	◎	○	
58	岳	父	ガク	フ	覚	麌	○	◎	○	
59	学	府	ガク	フ	覚	麌	○		○	◎
60	楽	譜	ガク	フ	覚	姥	○	◎	○	
61	学	風	ガク	フウ	覚	東	○	◎	○	
62	朔	風	サク	フウ	覚	東	◎	◎		
63	朔	北	サク	ホク	覚	徳	◎			
64	爆	破	バク	ハ	覚	過		◎		
65	爆	発	バク	ハツ	覚	月	○	◎		
66	爆	布	バク	フ	覚	暮	◎	◎		
67	脚	本	キヤク	ホン	薬	混	○	◎	○	
68	爵	封	シヤク	ハウ	薬	鍾	○			◎
69	若	輩	ジャク	ハイ	薬	隊	○	◎	○	
70	弱	輩	ジャク	ハイ	薬	隊		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
71	着	服	チャク	フク	菓	屋	○	◎		
72	菓	品	ヤク	ヒン	菓	寝	○	◎		
73	役	夫	ヤク	ブ	菓	虞	○		○	◎
74	約	分	ヤク	ブン	菓	文		◎	○	
75	菓	圃	ヤク	ホ	菓	姥	○			◎
76	菓	方	ヤク	ハウ	菓	陽	○	◎		
77	略	服	リヤク	フク	菓	屋		◎		
78	悪	筆	アク	ヒツ	鐸	質	○	◎		
79	悪	評	アク	ヒョウ	鐸	庚	○	◎	○	
80	悪	風	アク	フウ	鐸	東	○			◎
81	悪	弊	アク	ヘイ	鐸	祭		◎	○	
82	悪	癖	アク	ヘキ	鐸	昔	○	◎		
83	悪	報	アク	ハウ	鐸	号		◎		
84	鶴	髪	カク	ハツ	鐸	月	◎	◎		
85	擱	筆	カク	ヒツ	鐸	質	◎	◎		
86	作	法	サ	ハウ	鐸	乏	○	◎	○	
87	作	品	サク	ヒン	鐸	寝		◎		
88	作	法	サク	ハウ	鐸	乏	○	◎	○	
89	拓	本	タク	ホン	鐸	混	○	◎		
90	諾	否	ダク	ヒ	鐸	旨	○	◎	○	
91	薄	氷	ハク	ヒョウ	鐸	蒸	○	◎	○	
92	薄	片	ハク	ヘン	鐸	霰		◎		
93	幕	府	バク	フ	鐸	麌	○	◎	○	
94	漠	北	バク	ホク	鐸	徳			○	◎
95	落	髪	ラク	ハツ	鐸	月	○			◎
96	落	筆	ラク	ヒツ	鐸	質	○			◎
97	逆	風	ギャク	フウ	陌	東		◎		
98	沢	畔	タク	ハン	陌	換		◎		
99	白	髪	ハク	ハツ	陌	月		◎	○	
100	拍	板	ハク	ハン	陌	潛	○			◎
101	白	票	ハク	ヒョウ	陌	笑	○	◎	○	
102	伯	父	ハク	フ	陌	麌	◎	◎		
103	白	粉	ハク	フン	陌	吻			○	◎
104	白	璧	ハク	ヘキ	陌	昔	○			◎
105	百	般	ヒヤツ	パン	陌	刪	○	◎	○	
106	百	歩	ヒヤツ	ポ	陌	暮	○	◎		◎

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
107	百	方	ヒヤツ	ポウ	陌	陽	○			◎
108	隔	壁	カク	ヘキ	麦	錫			○	◎
109	冊	封	サク	ホウ	麦	鍾			○	◎
110	冊	封	サツ	ポウ	麦	鍾			○	◎
111	摘	発	テキ	ハツ	麦	月	○	◎		
112	麦	飯	バク	ハン	麦	願	○	◎		
113	駅	夫	エキ	フ	昔	虞	○		○	◎
114	劇	評	ゲキ	ヒョウ	昔	庚		◎		
115	劇	変	ゲキ	ヘン	昔	線	○	◎		
116	尺	八	シヤク	ハチ	昔	黠	○	◎		
117	积	放	シヤク	ホウ	昔	漾	○	◎		
118	惜	敗	セキ	ハイ	昔	夬	○	◎	○	
119	瘠	薄	セキ	ハク	昔	鐸	◎			
120	石	版	セキ	バン	昔	潛	○	◎		
121	赤	飯	セキ	ハン	昔	願	○	◎	○	
122	石	碑	セキ	ヒ	昔	支	○	◎		
123	石	筆	セキ	ヒツ	昔	質		◎		
124	赤	貧	セキ	ヒン	昔	真	○	◎	○	
125	石	斧	セキ	フ	昔	麌	○			◎
126	積	弊	セキ	ヘイ	昔	祭	○		○	◎
127	赤	壁	セキ	ヘキ	昔	錫				◎
128	適	否	テキ	ヒ	昔	旨	○	◎	○	
129	適	評	テキ	ヒョウ	昔	庚		◎		
130	碧	雰	ヘキ	フン	昔	文	◎			
131	撃	破	ゲキ	ハ	錫	過	○	◎	○	
132	激	発	ゲキ	ハツ	錫	月	○			◎
133	激	憤	ゲキ	フン	錫	吻			○	◎
134	激	変	ゲキ	ヘン	錫	線	○	◎	○	
135	曆	法	レキ	ホウ	錫	乏		◎		
136	歴	訪	レキ	ホウ	錫	漾	○	◎	○	
137	極	浦	キョク	ホ	職	姥	○			◎
138	極	秘	ゴク	ヒ	職	至	○	◎	○	
139	極	貧	ゴク	ヒン	職	真		◎	○	
140	式	服	シキ	フク	職	屋		◎		
141	直	筆	ジキ	ヒツ	職	質	○	◎	○	
142	食	費	ショク	ヒ	職	未		◎		

No.	漢語		よみ		韻目		辞書			
	上字	下字	上字	下字	上字	下字	新字源	新選 漢和	学研	広辞苑
143	食	品	シヨク	ヒン	職	寢			○	
144	拭	払	シヨク	フツ	職	物	◎			
145	職	分	シヨク	ブン	職	文	○			◎
146	食	俸	シヨク	ホウ	職	用	○		○	◎
147	職	俸	シヨク	ホウ	職	用			○	◎
148	側	背	ソク	ハイ	職	隊		◎		
149	即	発	ソク	ハツ	職	月	○			◎
150	勅	版	チヨク	ハン	職	潜		◎		
151	直	筆	チヨク	ヒツ	職	質	○	◎	○	
152	逼	迫	ヒツ	パク	職	陌	◎			
153	黒	白	コク	ビヤク	徳	陌	○	◎	○	
154	刻	薄	コク	ハク	徳	鐸	○			◎
155	黒	髮	コク	ハツ	徳	月		◎		
156	黒	板	コク	バン	徳	潜	○	◎		
157	国	費	コク	ヒ	徳	未	○	◎		
158	国	賓	コク	ヒン	徳	真	○	◎		
159	国	府	コク	フ	徳	麌	○		○	◎
160	国	富	コク	フ	徳	宥	○			◎
161	国	風	コク	フウ	徳	東		◎		
162	克	服	コク	フク	徳	屋		◎		
163	克	復	コク	フク	徳	屋	○		○	◎
164	国	柄	コク	ヘイ	徳	映	○		○	◎
165	国	宝	コク	ホウ	徳	皓	○	◎	○	
166	特	派	トク	ハ	徳	卦		◎		
167	特	筆	トク	ヒツ	徳	質	○		○	◎
168	得	票	トク	ヒョウ	徳	笑		◎		
169	北	風	ホク	フウ	徳	東		◎		
170	黙	秘	モク	ヒ	徳	至		◎	○	

第5章 表(1)～(4)に掲げた漢字 (254字) (慣用音の五十音順)

亜

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	オウ(アフ)	ア	エ
漢音	ア・オウ(アフ)	ア	ア
慣用音	アツ	—	—

圧

p.149

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン	—	ヨウ(エフ)
漢音	エン・オウ(アフ)	オウ(アフ)	オウ(アフ)
慣用音	アツ	アツ	アツ

院

p.186

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン(エン)	—	エン(エン)
漢音	カン(クワン)	エン(エン)・ カン(クワン)	エン(エン)
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

員

p.185

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エン(エン)	—	エン(エン)・ウン
漢音	エン(エン)・ウン	エン(エン)・ウン	エン(エン)・ イン(キン)
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

韻

p.186

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ウン
漢音	ウン	ウン	ウン
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キン	キン	ウン
漢音	キン・ウン	キン・ウン	ウン
慣用音	イン(キン)	イン(キン)	イン(キン)

和

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ワ	ワ	ワ
漢音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)
唐音	—	オ(ヲ)	オ(ヲ)
慣用音	オ(ヲ)	—	—

奥

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	サン	—	オウ(アウ)・ オク(ヲク)
漢音	オウ(アウ)・ イク(キク)・サン	オウ(アウ)・イク	オウ(アウ)・ イク(キク)
慣用音	オク	—	オク(ヲク)

乙

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	オチ	オチ	オツ・オチ
漢音	イツ	イツ	イツ
慣用音	オツ	オツ	—

佳

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ケ	ケ	ケ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	カ	カ	カ

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ケ	—	ケ(クエ)
漢音	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)
慣用音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)

渦

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	カ(クワ)	—	カ(クワ)・ワ
漢音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)・ワ
慣用音	カ(クワ)	—	カ(クワ)

偽

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ギ・ガ(グワ)	ギ	ガ(グワ)
漢音	ギ・ガ(グワ)	ギ・カ(クワ)	ガ(グワ)
慣用音	カ(クワ)	—	カ(クワ)

画

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エ(エ)	カク(クック)・エ(エ)	ガ(グワ)・エ(エ)・ ワク
漢音	カク(クック)・ カイ(クワイ)	カク(クック)・ カイ(クワイ)	カイ(クワイ)・ カク(クワク)
慣用音	ガ(グワ)	ガ(グワ)	—

街

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	ガイ	ガイ	ガイ

該

p.161

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	カイ
漢音	カイ	カイ	カイ
慣用音	ガイ	ガイ	ガイ

渴

p.110

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	カチ	カチ・ゲチ
漢音	ケツ・カツ	カツ・ケツ	カツ・ケツ
慣用音	カツ	カツ	カツ

合

p.83

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴウ(ゴフ)	ゴウ(ゴフ)	ゴウ(ゴフ)・ コウ(コフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	カッ・ガッ・ ゴウ(ガフ)	カッ・ガッ	カッ・ガッ・ ゴウ(ガフ)

月

p.93

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ガチ(グッチ)	ゴチ
漢音	ガツ(グッツ)	ゲツ	ゲツ(グエツ)
慣用音	ゲツ	ガツ(グッツ)	ガツ(グッツ)

甲

p.86

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	キョウ(ケフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	カン	カン・カツ	カン

含

p.97

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴン	ゴン	ゴン(ゴム)
漢音	カン	カン	カン(カム)
慣用音	ガン	ガン	ガン

危

p.169

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ギ	ギ(グキ)
漢音	—	ギ	ギ(グキ)
慣用音	キ	キ	キ

欺

p.120

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゴ	コ
漢音	キ	キ	キ
慣用音	ギ	ギ	ギ

戲

p.121

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゲ・キ	—	ク・キ(クキ)・ケ
漢音	キ	キ・コ	コ・キ(クキ)
慣用音	ギ	ギ・ゲ	ギ・ゲ

犧

p.159

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	キ
漢音	キ	キ	キ
慣用音	ギ	ギ	ギ

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	キヤク・ケ
漢音	ケキ	ケキ	ケキ・カイ
慣用音	キツ	キツ	キツ

競

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キョウ(キヤウ)	ギョウ(ギヤウ)
漢音	ケイ	ケイ	ケイ
慣用音	キョウ(キヤウ)	—	キョウ(キヤウ)

峽

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キョウ(ケフ)	ギョウ(ゲフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	キョウ(ケフ)	—	キョウ(ケフ)

狭

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キョウ(ケフ)	ギョウ(ゲフ)
漢音	コウ(カフ)	コウ(カフ)	コウ(カフ)
慣用音	キョウ(ケフ)	—	キョウ(ケフ)

曉

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)
漢音	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)	キョウ(ケウ)
慣用音	ギョウ(ゲウ)	ギョウ(ゲウ)	ギョウ(ゲウ)

訓

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	クン	クン	クン
漢音	クン	クン	クン
唐音	—	—	キン
慣用音	キン	キン	—

紅

p.135

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ・ク
漢音	コウ	コウ	コウ
慣用音	ク	ク	ク

救

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ク	ク	ク
漢音	キュウ(キウ)	キュウ(キウ)	キュウ(キウ)
慣用音	グ	グ	—

空

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ク	クウ	クウ
漢音	コウ	コウ	コウ
慣用音	クウ	—	—

偶

p.175

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	ゴウ	ゴウ	ゴウ
慣用音	グウ	グウ	グウ

遇

p.173

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	グ	グ	グ
慣用音	グウ	グウ	グウ

隅

p.174

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	グ	グ
漢音	グ	グ	グ
慣用音	グウ	グウ	グウ

宮

p.189

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ク	ク	ク・クウ
漢音	キュウ	キュウ(キウ)	キュウ
慣用音	グウ・クウ	グウ	グウ

軍

p.120

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	クン	クン	クン
漢音	クン	クン	クン
慣用音	グン	グン	グン

華

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゲ	ケ・ゲ	ケ(クエ)・ゲ(グエ)
漢音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)
慣用音	ゲ	—	—

茎

p.162

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ギョウ(ギヤウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(コウ)
慣用音	ケイ	ケイ	ケイ

掲

p.113

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ゲチ・ケ
漢音	ケイ・ケツ	ケツ・ケイ	ケツ・ケイ
慣用音	ケイ	ケイ	ケイ

劇

p.129

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ギャク	ギャク	ギャク
漢音	ケキ	ケキ	ケキ
慣用音	ゲキ	ゲキ	ゲキ

撃

p.129

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	キヤク	キヤク
漢音	ケキ	ケキ	ケキ
慣用音	ゲキ	ゲキ	ゲキ

欠

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	コン(コム)・ケチ
漢音	ケン・ケツ	ケツ	ケン(ケム)・ケツ
慣用音	ケツ	—	—

研

p.136

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゲン	ゲン
漢音	ゲン	ゲン	ゲン
慣用音	ケン	ケン	ケン

験

p.172

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゲン	ゲン	ゲン(ゲム)
漢音	ゲン	ゲン	ゲン(ゲム)
慣用音	ケン	ケン	ケン

身

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シン	シン	シン
漢音	シン	シン	シン
慣用音	ケン	ケン	—

顕

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ケン	ケン	ケン
漢音	ケン	ケン	ケン
慣用音	ゲン	—	—

減

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゲン	ゲン(ゲム)・ ケン(ケム)
漢音	カン	カン	カン(カム)
慣用音	ゲン	—	—

個

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	カ
漢音	カ	カ	カ
唐音	—	—	コ
慣用音	コ	コ	—

誇

p.161

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ(クエ)
漢音	カ(クワ)	カ(クワ)	カ(クワ)
慣用音	コ	コ	コ

後

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	グ	ゴ	グ
漢音	コウ	コウ	コウ
慣用音	ゴ	—	ゴ

碁

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゴ	ゴ・ギ
漢音	キ	キ	キ
慣用音	ゴ	—	—

拘

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ク	—	ク
漢音	ク・コウ	ク・コウ	ク・コウ
慣用音	コウ	コウ	—

格

p.90

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キヤク	キヤク	キヤク
漢音	カク・ラク	カク	カク
慣用音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)

仰

p.138

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)
漢音	ギョウ(ギャウ)	ギョウ(ギャウ)	ギョウ(ギャウ)
慣用音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)

郷

p.131

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
漢音	キョウ(キャウ)	キョウ(キャウ)	キョウ(キャウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

拷

p.132

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	コウ(カウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

剛

p.128

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
漢音	コウ(カウ)	コウ(カウ)	コウ(カウ)
慣用音	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)	ゴウ(ガウ)

可

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	カ・カク	カ	カ
漢音	カ・カク	カ	カ
慣用音	コク	コク	—

告

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	コウ・コク	ゴウ(ガウ)・コク	コク・コウ(カウ)
漢音	コウ(カウ)・キク	コウ(カウ)・コク	コク・コウ(カウ)
慣用音	コク	コク	—

石

p.178

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジャク	シャク	ジャク
漢音	セキ	セキ	セキ
慣用音	コク・シャク	コク	コク・シャク

近

p.136

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゴン・キ	ゴン	ゴン
漢音	キン・キ	キン・キ	キン
慣用音	コン	コン	コン

差

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シャ・シ・サ・サイ	シャ・シ・セ
漢音	サ・サイ	サ・シ・サイ	サ・シ・サイ
慣用音	サ	—	サ

酢

p.107

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソ	ソ・サク	シ・ザク
漢音	ソ・サク	ソ・サク	ソ・サク
慣用音	サク	サク	サク

搾

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	—
漢音	—	サ	—
慣用音	サク	サク	—

冊

p.177

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シヤク
漢音	サク	サク	サク
慣用音	サツ	サツ	サツ

早

p.87

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
漢音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
慣用音	サツ	サツ	サツ

雜

p.150

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゾウ(ザフ)	ゾウ(ザフ)	ゾウ(ゾフ)
漢音	ソウ(サフ)	ソウ(サフ)	ソウ(サフ)
慣用音	ザツ	ザツ	ザツ・ゾウ(ザフ)

惨

p.130

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	サン	サン	ソン(ソム)
漢音	サン	サン	サン(サム)
慣用音	ザン	ザン	ザン

祉

p.156

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	チ	—	チ
漢音	チ	チ	チ
慣用音	シ	シ	シ

次

p.179

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	—	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

滋

p.95

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	シ	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

璽

p.166

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シ	—	シ
漢音	シ	シ	シ
慣用音	ジ	ジ	ジ

除

p.181

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジョ(ヂョ)・ヨ	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)
漢音	チョ・ヨ	チョ・シヨ t	チョ
慣用音	ジ(ヂ)	ジ(ヂ)	ジ(ヂ)

執

p.149

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	シツ・シュ	シツ	シツ

湿

p.152

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)・ トウ(タフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	シツ	シツ	シツ

実

p.92

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ジチ	ジチ
漢音	シツ	シツ	シツ
慣用音	ジツ	ジツ	ジツ

十

p.85

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)
慣用音	ジッ	ジッ	ジッ

煮

p.158

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シヨ	シヨ
漢音	シヨ	シヨ	シヨ
慣用音	シヤ	シヤ	シヤ

入

p.143

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニユウ(ニフ)	ニユウ(ニフ)	ニユウ(ニフ)
漢音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)
慣用音	ジュ	ジュ	ジュ

宗

p.148

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュウ	ソ
漢音	ソウ	ソウ	ソウ
慣用音	シュウ	—	シュウ

充

p.117

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	シュウ	シュウ(シフ)	シュウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

銃

p.118

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	シュウ	シュウ	シュウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

従

p.95

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュ	ジュウ	ジュ・ジュウ・シュ
漢音	ショウ	ショウ	ショウ
慣用音	ジュウ	ジュ	ジュウ

縦

p.166

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	ショウ・ソウ	ショウ	ショウ
慣用音	ジュウ	ジュウ	ジュウ

獣

p.178

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュ	シュ
漢音	—	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)
慣用音	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)

汁

p.176

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	キョウ(ケフ)	—	シュウ(シフ)・ギョウ (ゲフ)・ジュウ(ジフ)
漢音	シュウ(シフ)・ キョウ(ケフ)	シュウ(シフ)	キョウ(ケフ)・ シュウ(シフ)
慣用音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)

澁

p.132

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュウ(シフ)	—	シュウ(シフ)
漢音	シュウ(シフ)	シュウ(シフ)	ソウ(ソフ)
慣用音	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)	ジュウ(ジフ)

住

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュ(ヂュ)	ジュウ(ヂウ)	ジュウ(ヂュウ)
漢音	チュ	チュウ(チウ)	チュウ
慣用音	ジュウ(ヂュウ)	—	—

重

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ジュウ(ヂウ)	ジュウ(ヂウ)
漢音	チョウ	チョウ・トウ	チョウ
慣用音	ジュウ(ヂュウ)	—	—

述

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ジュツ・ズチ
漢音	シュツ	シュツ	シュツ
慣用音	ジュツ	ジュツ	—

術

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ジュツ・ズチ・ズイ
漢音	シュツ	シュツ・スイ	シュツ・スイ
慣用音	ジュツ	ジュツ	—

准

p.125

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュン
漢音	シュン	シュン	シュン
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

準

p.124

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シュン	シュン・セチ
漢音	セツ	シュン・セツ	シュン・セツ
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

遵

p.126

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュン
漢音	シュン	シュン	シュン
慣用音	ジュン	ジュン	ジュン

且

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シャ・ソ	シャ・ソ	シャ・ソ
漢音	シャ・シヨ	シャ・シヨ・ソ	シャ・シヨ
慣用音	シヨ	—	—

助

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ジョ	ジョ
漢音	シヨ	シヨ	ソ
慣用音	ジョ	—	—

召

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ショウ(セウ)	ショウ(セウ)・ ジョウ(ゼウ)
漢音	—	ショウ(セウ)	ショウ(セウ)
慣用音	ショウ(セウ)	—	—

蒸

p.131

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シヨウ	シヨウ	シヨウ
漢音	シヨウ	シヨウ	シヨウ
慣用音	ジョウ	ジョウ	ジョウ

迅

p.125

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シン・シュン	シン	シン・シュン
漢音	シン・シュン	シン	シン・シュン
慣用音	ジン	ジン	ジン

手

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ	シュ	シュ・ス
漢音	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)
慣用音	ス	ス	—

寿

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジュ	ジュ	ジュ
漢音	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)	シュウ(シウ)
慣用音	ス	ス	—

推

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	スイ	スイ	スイ・タイ
漢音	タイ・スイ	スイ	スイ・タイ
唐音	—	—	ツイ
慣用音	スイ	—	—

髓

p.173

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	スイ	—	スイ
漢音	スイ	スイ	スイ
慣用音	ズイ	ズイ	ズイ

枢

p.144

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ス
漢音	シュ	シュ	シュ
慣用音	スウ	スウ	スウ

崇

p.147

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ス	—	ズウ
漢音	シュウ	シュウ	シュウ
慣用音	スウ	ス・スウ	スウ

数

p.145

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ・ソク	シュ・サク・ソク	シュ・サク・ソク
漢音	ス・サク・ソク	ス・サク・シヨク	ス・サク・ソク
慣用音	スウ	スウ	スウ

足

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソク	ソク・シュ	ソク・ス
漢音	シヨク・シュ	シヨク・シュ	シヨク・シュ
慣用音	スウ	スウ	—

寸

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	スン
漢音	ソン	ソン	ソン
慣用音	スン	スン	—

施

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	セ	セ・イ
漢音	シ・イ	シ・イ	シ・イ
慣用音	セ	—	—

税

p.123

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	セ・タチ
漢音	セイ・タツ・エツ	セイ・タツ・タイ・タ ン	セイ・タツ
慣用音	ゼイ・ダツ	ゼイ・ダツ	ゼイ・ダツ

説

p.122

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	セチ・ダツ	セチ・セ・エチ
漢音	セツ・エツ	セツ・エツ・セイ・タ ツ	セツ・セイ・エツ
慣用音	ゼイ	ゼイ	ゼイ・セツ

責

p.155

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シヤク	シヤク	シヤク・セ
漢音	サク・サイ	サク・サイ	サク・サイ
慣用音	セキ	セキ	セキ

撮

p.151

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)
漢音	ショウ(セフ)・ ジョウ(デフ)	ショウ(セフ)・デツ	ショウ(セフ)
慣用音	セツ	セツ	セツ

接

p.151

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)
漢音	ショウ(セフ)	ショウ(セフ)・ ソウ(サウ)	ショウ(セフ)
慣用音	セツ	セツ	セツ

舌

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゼチ	ゼツ・ゼチ
漢音	セツ	セツ	セツ
慣用音	ゼツ	ゼツ	—

絶

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ゼチ	ゼチ	ゼツ・ゼチ
漢音	セツ	セツ	セツ
慣用音	ゼツ	ゼツ	—

染

p.140

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ネン(ネム)
漢音	ゼン	ゼン	ゼン(ゼム)
慣用音	セン	セン	セン

想

p.141

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
漢音	—	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)
慣用音	ソ	ソ	ソ

障

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)
漢音	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)
慣用音	ソウ(サウ)	—	—

搜

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	シュ
漢音	シュウ(シウ)・ ソウ(サウ)	シュウ(シウ)	ソウ(サウ)
慣用音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	—

増

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ソウ	ゾウ	ソウ
漢音	ソウ	ソウ	ソウ
慣用音	ゾウ	—	ゾウ

憎

p.175

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ソウ
漢音	—	ソウ	ソウ
慣用音	ゾウ	ゾウ	ゾウ

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)・ ソウ(サウ)
漢音	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)
慣用音	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)	ゾウ(ザウ)

側

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ソク	シキ
漢音	シヨク	シヨク	ソク
慣用音	ソク	—	—

測

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	シキ	シキ
漢音	—	シヨク	ソク
慣用音	ソク	ソク	—

帥

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	スイ	スイ	スイ・ソチ・シュチ・ シュツ
漢音	シュツ・スイ	シュツ・スイ	スイ・ソツ
慣用音	ソツ	ソツ	—

卒

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ソチ・シュチ
漢音	ソツ・シュツ	ソツ・シュツ	ソツ・シュツ
慣用音	ソツ	—	ソツ

率

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	スイ	スイ・リチ	リチ・ソチ・シュチ・ スイ
漢音	スイ・リツ・ シュツ・セツ	シュツ・スイ・リツ	リツ・ソツ・スイ
慣用音	ソツ	ソツ	—

打

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	チョウ(チャウ)	チョウ(チャウ)	チョウ(チャウ)
漢音	テイ	テイ	テイ
唐音	—	—	ダ
慣用音	ダ	ダ	—

妥

p.128

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	タ
漢音	タ	タ	タ
慣用音	ダ	ダ	ダ

蛇

p.165

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジャ・イ	ジャ	タ・ジャ・イ
漢音	タ・ジャ・イ	シャ・タ・イ	タ・シャ・イ
慣用音	ダ	ダ	ダ

耐

p.138

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ナイ・ノウ	ノウ	ナイ・ノウ・ノ
漢音	ダイ・ドウ	ダイ・ドウ	ダイ・ドウ
慣用音	タイ	タイ	タイ

滞

p.163

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ダイ
漢音	テイ	テイ	テイ
慣用音	タイ	タイ	タイ

台

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ダイ・イ・タイ	ダイ	ダイ・タイ・イ
漢音	タイ・イ	タイ	タイ・イ
慣用音	ダイ	—	—

濁

p.119

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジョク(ヂョク)	ジョク(ヂョク)	ダク
漢音	タク	タク	ジョク(ヂョク)
慣用音	ダク	ダク	ダク

脱

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	エツ	ダチ・ダツ	ダツ・ダチ・タチ・ タイ
漢音	タツ・タイ・エツ	タツ・タイ	タツ・タイ
慣用音	ダツ	—	—

奪

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ダチ	ダツ・ダチ
漢音	—	タツ	タツ
慣用音	ダツ	ダツ	—

堪

p.154

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	カン	コン(コム)
漢音	カン	カン	カン(カム)
慣用音	タン	タン	タン

反

p.182

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	タン・ヘン	タン	タン・ヘン

茶

p.192

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ダ	ダ	ジャ(ヂャ)
漢音	サ・タ	タ	タ
唐音	サ	サ	サ
慣用音	チャ	チャ	チャ

注

p.171

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ・チュ	—	ス
漢音	シュ・チュ	シュ	シュ
慣用音	チュウ	チュウ(チウ)	チュウ

柱

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ジュ(ヂユ)・チュ	ジュウ(ヂウ)・ チュウ(チウ)
漢音	チュ	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)
慣用音	チュウ	—	—

駐

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	チュ	—	チュウ(チウ)
漢音	チュ	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)
慣用音	チュウ	—	—

鑄

p.184

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ス
漢音	シュ・シュウ(シウ)	シュ	シュ
慣用音	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)	チュウ(チウ)

緒

p.164

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ジョ
漢音	シヨ	シヨ	シヨ
慣用音	チヨ	チヨ	チヨ

停

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ジョウ(ヂョウ)	—	ジョウ(ヂャウ)
漢音	テイ	テイ	テイ
慣用音	チョウ(チャウ)	—	チョウ(チャウ)

賃

p.137

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ニン	ニン(ニム)
漢音	ジン(ヂン)	ジン(ヂン)	ジン(ヂム)
慣用音	チン	チン	チン

通

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ツ	ツウ	ツウ
漢音	トウ	トウ	ツ・トウ
慣用音	ツウ	ツ	—

痛

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ツウ	ツウ
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ツウ	—	—

弟

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ダイ	ダイ・デ	ダイ
漢音	テイ	テイ	テイ
慣用音	デ	—	デ

適

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	チャク	シヤク・チャク	シヤク・ ジャク(ヂャク)
漢音	セキ・テキ・タク	セキ・テキ・タク	セキ・テキ
慣用音	テキ	—	テキ

斗

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ト	ツ
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ト	—	ト

頭

p.141

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ズ(ヅ)	ズ(ヅ)	ズ(ヅ)
漢音	トウ	トウ	トウ
唐音	—	チュウ(チウ)	ジュウ(ヂュウ)
慣用音	ト	ト	ト

登

p.142

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	トウ	トウ	トウ
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ト	ト	ト

土

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ド	ツ
漢音	ト	ト	ト
慣用音	ド	—	ド

同

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ドウ	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	—	ドウ

洞

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ドウ	ヅウ(ヅウ)・ ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	—	ドウ

胴

p.99

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	ドウ	ドウ

銅

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ドウ	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	—	ドウ

動

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ドウ	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	—	ドウ

童

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ドウ	ズウ(ヅウ)
漢音	トウ	トウ	トウ
慣用音	ドウ	—	ドウ

匱

p.183

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ノク	—	ジョク(ヂョク)・ ニョク・トク
漢音	ジョク(ヂョク)	ジョク(ヂョク)・トク	ジョク(ヂョク)・ ニョク・トク
慣用音	トク	トク	トク

南

p.153

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ナン	ナン	ナン(ナム)
漢音	ダン	ダン	ダン(ダム)
慣用音	ナ	ナ	ナ

納

p.84

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ノウ(ナフ)	ノウ(ナフ)	ノウ(ナフ)(ノフ)
漢音	ドウ(ダフ)	ドウ(ダフ)	ドウ(ダフ)
唐音	—	—	ナ
慣用音	ナ・ナン・ トウ(タフ)	ナ・ナッ・ナン・ トウ(タフ)	ナッ・ナン・トウ(タ フ)

軟

p.192

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ネン	ネン	ネン
漢音	ゼン	ゼン	ゼン
慣用音	ナン	ナン	ナン

仁

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニン	ニン	ニ・ニン
漢音	ジン	ジン	ジン
慣用音	ニ	ニ	—

乳

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニユ	ニユウ(ニフ)	ニユウ(ニフ)
漢音	ジュ	ジュ	ジュ
慣用音	ニユウ	—	—

柔

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ニュウ(ニウ)	ニュウ(ニウ)
漢音	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)	ジュウ(ジウ)
慣用音	ニュウ(ニウ)	—	—

女

p.143

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニョ	ニョ	ニョ
漢音	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)	ジョ(ヂョ)
慣用音	ニョウ	ニョウ	ニョウ

寧

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ニョウ(ニャウ)	ニョウ(ニャウ)	ニョウ(ニャウ)
漢音	—	デイ	ネイ
慣用音	ネイ	ネイ	—

熱

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ネチ	ネチ	ネツ・ネチ
漢音	ゼツ	ゼツ	ゼツ
慣用音	ネツ	ネツ	—

農

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ノウ	ノウ・ノ
漢音	ドウ	ドウ	ドウ
慣用音	ノウ	—	—

濃

p.167

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ニユウ
漢音	ジョウ(ヂョウ)	ジョウ(ヂョウ)	ジョウ(ヂョウ)
慣用音	ノウ	ノウ	ノウ

派

p.191

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ヘ
漢音	ハイ	ハイ	ハイ
慣用音	ハ	ハ	ハ

培

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	バイ・ベ・ブ
漢音	ハイ・ホウ	ハイ・ホウ	ハイ・ホウ
慣用音	バイ	バイ	—

陪

p.94

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ベ
漢音	ハイ	ハイ	ハイ
慣用音	バイ	バイ	バイ

博

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ハク	ハク
漢音	ハク	バク	ハク
慣用音	バク	—	バク

暴

p.180

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ボク・ボウ(バウ)	ボウ・ボク	ボウ・ボク
漢音	ホク	ホウ・ホク	ホウ・ホク
慣用音	バク	バク	バク

爆

p.168

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ホウ(ハウ)・ハク	ヒョウ(ヘウ)・ホク
漢音	ホウ(ハウ)・ハク	ホウ(ハウ)・ハク	ホウ(ハウ)・ハク
慣用音	バク	バク	バク

拔

p.100

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハイ	—	バチ
漢音	ハイ・ハツ	ハツ・ハイ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ

閥

p.114

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ボチ
漢音	ハツ	ハツ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ

罰

p.94

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バチ	バチ	ボチ
漢音	ハツ	ハツ	ハツ
慣用音	バツ	バツ	バツ・バチ

般

p.115

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バン・ハン	ハチ	バン・ヘン
漢音	ハン・ハツ	ハン・ハツ	ハン
慣用音	ハン	ハン	ハン

判

p.190

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハン	ハン	ハン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	バン	バン・ホウ(ハウ)	バン

板

p.189

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハン	ハン	ヘン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	バン	バン	バン

番

p.101

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	バン・バ	—	ホン・ボン・ハ・バ・ バン
漢音	ハン・ハ	ハン・ハ	ハン・ハ
慣用音	バン	バン	バン

否

p.103

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フ・ヒ	フ・ビ
漢音	フ・ヒ	フ・ヒ	フウ・ヒ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

批

p.158

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ヘイ・ビ	—	ハイ
漢音	ヘイ・ヒ	ヘイ	ヘイ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

罷

p.106

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ビ・ベ・ヒ
漢音	ハイ・ハ・ヒ	ハイ・ヒ	ハイ・ヒ
慣用音	ヒ	ヒ	ヒ

匹

p.153

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ヒチ
漢音	ヒツ	ヒツ	ヒツ
慣用音	ヒキ	ヒキ	ヒキ

拍

p.91

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ハク	ヒヤク
漢音	ハク	ハク	ハク
慣用音	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)

平

p.139

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ビョウ(ビャウ)・ ベン	ビョウ(ビャウ)・ベン	ビョウ(ビャウ)・ベン
漢音	ヘイ	ヘイ・ヘン	ヘイ・ヘン
慣用音	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)	ヒョウ(ヒャウ)

評

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ヒョウ(ヒャウ)	ビョウ(ビャウ)
漢音	へイ	へイ	へイ
慣用音	ヒョウ(ヒャウ)	—	ヒョウ(ヒャウ)

便

p.193

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ベン	ベン	ベン
漢音	へん	へん	へん
慣用音	ビン	ビン	ビン

不

p.133

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フ	ホチ・フ
漢音	フツ・フウ・ヒ	フ・フウ	フツ・フウ・フ
慣用音	フ・ブ	ブ	フ・ブ

豊

p.118

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フウ	フ
漢音	ホウ・フウ	ホウ	ホウ
慣用音	ブ	ブ	ブ

夫

p.89

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ・ブ	ブ	フ・ブ
漢音	フ	フ	フ
慣用音	フウ	フウ	フウ

富

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フ	フ
漢音	—	フ	フウ
慣用音	フウ	フウ	—

封

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	フウ	フウ
漢音	ホウ	ホウ	ホウ
慣用音	フウ	—	—

覆

p.111

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フク	フク・フ	フク・フ・ブ
漢音	フク・フ	フク・フ	フク・フウ
慣用音	フウ	フウ	フク

復

p.105

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	ブク・ブ	ブク・ブ
漢音	フク・フ	フク・フウ	フク・フウ
慣用音	フク	フク	フク

副

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フク	フク	フ・フク・ヒキ
漢音	フク・フ	フク	フウ・フク・ヒョク
慣用音	フク	—	フク

沸

p.170

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ヒ・フツ	—	ヒ・ホチ
漢音	ヒ・フツ	ヒ・フツ	ヒ・フツ
慣用音	フツ	フツ	フツ

仏

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ブツ	ブツ・ブチ・ホチ・ ビチ
漢音	フツ・ホツ・ヒツ	フツ・ヒツ・ホツ	フツ・ヒツ
慣用音	ブツ	ボツ	—

噴

p.163

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ホン	ホン	ホン
慣用音	フン	フン	フン

別

p.92

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ベチ	ベチ	ベチ
漢音	—	ヘツ	ヘツ
慣用音	ベツ	ベツ	ベツ

返

p.108

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホン	ホン	ホン
漢音	ハン	ハン	ハン
慣用音	ヘン	ヘン	ヘン

保

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ホウ・ホ	ホ・ホウ
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ	ホウ
慣用音	ホ	—	—

畝

p.194

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ム・モ
漢音	ボウ	ボウ	ボウ
慣用音	ホ	ホ	ホ

父

p.187

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	ブ	ブ・フ
漢音	フ	フ	フ
慣用音	ホ	ホ	ホ

母

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	モ	モ	モ・ム
漢音	ボウ	ボ	ボウ
慣用音	ボ	—	ボ

簿

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ブ・ハク	ボ	ブ・バク
漢音	ホ・ハク	ホ・ハク	ホ・ハク
慣用音	ボ	—	ボ

剖

p.134

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	フ	—	フ
漢音	ホウ	ホウ	ホウ
慣用音	ボウ	ボウ	ボウ

紡

p.127

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホウ(ハウ)	—	ホウ(ハウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)

膨

p.99

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ビョウ(ビャウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)

朴

p.156

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ハク	—	ホク
漢音	ハク・ホク	ハク・ホク	ハク
慣用音	ボク	ボク	ボク

撲

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ボク	ホク
漢音	ハク・ホク	ホク	ホク
慣用音	ボク	—	ボク

発

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホチ	ホチ	ホツ・ホチ・ハチ
漢音	ハツ	ハツ	ハツ
慣用音	ホツ	ホツ	—

法

p.86

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ホウ(ホフ)	ホウ(ホフ)	ホウ(ホフ)
漢音	ホウ(ハフ)	ホウ(ハフ)	ホウ(ハフ)
慣用音	ホッ・ハッ	ホッ・ハッ	ホッ・ハッ

坊

p.88

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)・ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)・ボウ(バウ)
漢音	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)	ホウ(ハウ)
慣用音	ボッ	ボッ	ボウ(バウ)・ボッ

麻

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	マ	メ
漢音	バ	バ	バ
唐音	—	—	マ
慣用音	マ	—	—

壳

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	マイ	メ
漢音	バイ	バイ	バイ
唐音	—	—	マイ
慣用音	マイ	—	—

末

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	マツ・マチ
漢音	バツ	バツ	バツ
慣用音	マツ	マツ	—

抹

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	マチ	マツ・マチ
漢音	—	バツ	バツ
唐音	—	—	モ
慣用音	マツ	マツ	—

密

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ミチ	ミツ・ミチ
漢音	ビツ	ビツ	ビツ
慣用音	ミツ	ミツ	—

米

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	マイ	マイ	マイ
漢音	ベイ	ベイ	ベイ
慣用音	メ	メ	—

迷

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	メイ	マイ
漢音	ベイ	ベイ	ベイ
慣用音	メイ	—	メイ

命

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	ベイ	ベイ	メイ
慣用音	メイ	メイ	—

名

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	ベイ	ベイ	メイ
慣用音	メイ	メイ	—

銘

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	ベイ	ベイ	メイ
慣用音	メイ	メイ	—

鳴

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	—	ベイ	メイ
慣用音	メイ	メイ	—

明

p.102

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	—	ベイ	メイ
唐音	ミン	ミン	ミン
慣用音	メイ	メイ	—

盟

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ミョウ(ミャウ)
漢音	ベイ	メイ・ボウ(バウ)	メイ・モウ(マウ)
慣用音	メイ・モウ(マウ)	モウ(マウ)	—

滅

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	メチ	メツ・メチ
漢音	ベツ	ベツ	ベツ
慣用音	メツ	メツ	—

毛

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	モウ	モウ	モウ
漢音	ボウ(バウ)	ボウ	ボウ
慣用音	モウ(マウ)	—	モ

耗

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	モウ(マウ)	モウ	コウ(カウ)・ モウ(マウ)
漢音	コウ(カウ)・ ボウ(バウ)	コウ(カウ)・ボウ(バ ウ)	コウ(カウ)・ ボウ(バウ)
慣用音	モウ(マウ)	—	モウ

盲

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	モウ(マウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	モウ(マウ)
慣用音	モウ(マウ)	—	—

猛

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ミョウ(ミャウ)	ミョウ(ミャウ)
漢音	ボウ(バウ)	ボウ(バウ)	モウ(マウ)
慣用音	モウ(マウ)	モウ(マウ)	—

没

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	モチ	モチ・モツ
漢音	ボツ	ボツ	ボツ
慣用音	モツ	モツ	—

物

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	モチ	モチ	モツ・モチ
漢音	ブツ	ブツ	ブツ
慣用音	モツ	モツ	—

輸

p.157

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	シュ	シュ	ス
漢音	シュ	シュ	シュ
慣用音	ユ	ユ	ユ

由

p.194

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ユ	ユ	ユ
漢音	ユウ(イウ)	ユウ(イウ)	ユウ(イウ)
慣用音	ユイ	ユイ	ユイ

裕

p.146

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ユ	—	ユ
漢音	ユ	ユ	ユ
慣用音	ユウ	ユウ	ユウ

立

p.148

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)
漢音	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)	リュウ(リフ)
慣用音	リツ	リツ	リツ

竜

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	リュウ(リウ)	リュウ
漢音	リョウ・ロウ・ ボウ(バウ)	リョウ・ロウ・ ボウ(バウ)	リョウ
慣用音	リュウ	—	ロウ

虜

p.171

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ロ	—	ル
漢音	ロ	ロ	ロ
慣用音	リョ	リョ	リョ

漁

p.180

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	ゴ	ゴ
漢音	ギョ	ギョ	ギョ
慣用音	リョウ(レフ)	リョウ(レフ)	リョウ(レフ)

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	ロ	ロ	ル
漢音	ロ	ロ	ロ
慣用音	ロウ	ロウ	ロウ

糧

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)	ロウ(ラウ)
漢音	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)
慣用音	ロウ(ラウ)	—	—

話

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	エ(エ)
漢音	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)	カ(クワ)・ カイ(クワイ)
唐音	—	—	ワ
慣用音	ワ	ワ	—

賄

	『角川新字源』	『新選漢和辞典』	『学研新漢和大字典』
呉音	—	—	ケ(クエ)
漢音	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)	カイ(クワイ)
慣用音	ワイ	ワイ	ワイ

謝 辞

本論文は、筆者が聖徳大学大学院 言語文化研究科 日本文化専攻 博士課程に在籍中の研究成果をまとめ、学位を請求したものである。

主査を担当して下さった聖徳大学 林史典教授には、在学中は指導教官として本研究の実施の機会を与えていただき、その遂行にあたって終始、熱心なご指導をいただいた。本論文の完成には、少なくともあと数年は必要だったが、期限内に完成させることができたのは、林教授のご指導ご鞭撻の賜物である。ここに深謝の意を表する。

副査を担当して下さった文教大学 蔣垂東教授には、学部時代から指導教官として厳しくも優しいご指導をいただいた。修士課程修了後、林教授のもとで学ぶ機会を与えてくださり、博士課程へ進学してからも変わらぬご指導を賜った。本論文でも貴重なアドバイスを沢山いただいた。ここに深謝の意を表する。

副査を担当して下さった聖徳大学 中野沙恵教授には、院生生活や学会など様々な場面でいつも気にかけていただいた。本論文では専門分野が異なるにもかかわらず、貴重なアドバイスをいただいた。ここに深謝の意を表する。

聖徳大学大学院 言語文化研究科の先生方や先輩方には、学内でお目にかかるとう激励のお言葉をいただき、研究に励むことができた。また、本論文の公開発表の際、貴重なご意見をいただいた。ここに深謝の意を表する。

聖徳大学 教育支援課の皆様には、院生生活から本論文提出まで、格別のご配慮とご支援を賜った。ここに深謝の意を表する。

そして、家族や友人には、常日頃から叱咤激励していただき、ここまで支えていただいた。ここに深謝の意を表する。

2016年9月